千葉市越川戸遺跡

2004

例　　言

1. 本書は，千葉市緑区平山町1584他所在の越川戸遺跡（遺跡番号：緑区76）の発掘調査報告書である。
2. 調査は，千葉市による斎園建設事業に係わる運動場整備事業に伴い，千葉市教育委員会生涯学習部文化課の指導のもと，財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査及び整理作業の期間，及び担当者・調査面積は以下の通りである。

   確認調査　平成14年２月15日～同年３月29日　　担当者：古谷　渉　調査面積：847㎡/8,071㎡

   本調査　　平成14年４月１日～同年６月26日　　担当者：白根義久・長原　亘

   調査面積:4,900㎡

   整理作業　平成15年４月１日～同年10月31日　　担当者：長原　亘
4. 本書の編集及び執筆は，長原　亘が行った。
5. 石器は株式会社アルカ池谷勝典氏・高橋哲氏，貝類の同定等は東京芸術大学植月学氏の助言をもとに長原が成稿した。また，鉄器の保存処理を川鉄テクノリサーチ㈱に委託した。
6. 遺構の写真撮影は発掘調査担当者，遺物は長原及び青柳すみ江が行い，フィルム及びデジタルカメラで撮影したものを使用している。
7. 出土資料及び調査記録などは，千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
8. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々から御教示・御協力いただいた。記して謝意にかえさせていただきたい。千葉県教育庁教育振興部文化財課，千葉市教育委員会生涯学習部文化課，千葉市保健衛生部斎園建設室，㈱アルカ，川鉄テクノリサーチ㈱，池谷勝典，冨井　眞，池田敏宏，植月　学，高橋　哲，建石　徹，冨永樹之，内藤　亮，半澤幹雄，藤本　誠，石津輝真，倉田義広，森本　剛

   （順不同・敬称略）

凡　　例

1. 図中では，以下のような略号を使用している。
   住居跡：「住」，土坑：「土」，土壙：「壙」，竪穴状遺構：「竪」，掘立柱建物跡：「掘」，
   溝状遺構：「溝」貝充填柱穴：「柱」
2. 遺構図中の標高は海抜高（ＴＰ），方位は真北を示している。
3. 遺構実測図の縮尺は，以下の通りである。
   1/150･1/100：溝状遺構，1/80：掘立柱建物跡，1/60：住居跡・竪穴状遺構，1/40：土壙・土坑
   1/30：土坑・カマド・炉跡
   1/４：土器・鉄製品・土製品，1/３：鉄製品，1/１･2/３：石器
   一部異なるものもあり，図中スケールに適宜縮尺を記載している。
4. 遺構の番号は，調査段階とは異なっており，新旧の対応関係は，各遺構の一覧表中に記載している。
5. 第１図は，国土地理院発行「蘇我」（Ｓ=1/25,000）と財団法人日本地図センター発行「第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖－複製版－676（千葉縣下總千葉郡野田村及平山村・明治15年測図）」を元図として使用している。
   第２図は，千葉市基本図「Ｋ－８」「Ｋ－９」Ｓ=1/2,500）を元図として使用している。
   第３図は，平山町地籍図「誉田地籍図」（製作年不明）を元図にトレースしたものを使用している。
6. 図版中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

遺構実測図　カマド構築材　粘土　貝
焼土　炭化材　硬化面
地山　● 土器・その他遺物

遺物実測図　灰釉　煤又は炭化物　赤彩
黒彩又は黒色処理

目　次

例言・凡例・目次
Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査の方法 …… 8
Ⅳ　確認調査の方法と成果 …… 8
Ⅴ　検出された遺構と遺物 …… 10
1　縄文時代
a　竪穴住居跡 …… 13
b　竪穴状遺構 …… 14
c　土壙 …… 15
d　縄文時代遺物の出土傾向 …… 23
2　古墳時代以降
a　竪穴住居跡 …… 26
竪穴住居跡出土遺物 …… 40
彩色土器について …… 42
雁股鏃について …… 48
b　掘立柱建物跡 …… 56
15･20 号掘立柱建物跡 …… 66
c　土坑 …… 90
土坑出土遺物について …… 93
d　溝状遺構 …… 95
e　柱穴・柱穴群 …… 102
f　貝充填柱穴 …… 103
5　遺構外出土遺物 …… 103
Ⅵ　まとめ …… 109
a　仏教関連遺物について …… 110
b　市内出土の瓦塔・瓦堂について …… 113

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図……　3
第２図　越川戸遺跡と周辺遺跡位置図……　4
第３図　遺跡周辺字切図……　5
第４図　確認調査グリッド配置図……　9
第５図　遺構配置図……　11
第６図　１・２号住居跡・１号竪穴状遺構……　16
第７図　２・３号竪穴状遺構・１・２号土壙 ……　17
第８図　縄文時代遺物（１）〔土器〕……　18
第９図　縄文時代遺物（２）〔土器・土製品〕 ……　19
第10図　縄文時代遺物（３）〔石器〕……　20
第11図　縄文時代遺物（４）〔石器〕……　21
第12図　縄文時代遺物（５）〔石器〕……　22
第13図　縄文時代遺物分布図……　25
第14図　３号住居跡……　27
第15図　3･4号住居跡カマド･4号住居跡掘方 …　28
第16図　４号住居跡……　29
第17図　５号住居跡……　30
第18図　５号住居跡カマド･6号住居跡……　31
第19図　７号住居跡……　32
第20図　８・９号住居跡・１号溝状遺構……　33
第21図　10･11号住居跡……　34
第22図　11～13号住居跡……　35
第23図　14･15号住居跡･16号住居跡カマド……　36
第24図　16･17号住居跡 ……　37
第25図　18･19号住居跡 ……　38
第26図　20･21号住居跡……　39
第27図　22号住居跡……　40
第28図　３号住居跡遺物……　41
第29図　４号住居跡遺物……　42
第30図　５・６号住居跡遺物……　43
第31図　７・９･10号住居跡遺物……　44
第32図　11～13号住居跡遺物……　45
第33図　14～17号住居跡遺物……　46
第34図　19･20号住居跡遺物……　47
第35図　21･22号住居跡遺物……　48
第36図　１・２号掘立柱建物跡……　58
第37図　３～５号掘立柱建物跡･柵列……　59
第38図　６・７号掘立柱建物跡……　60
第39図　８・９号掘立柱建物跡……　61
第40図　10･11号掘立柱建物跡……　62
第41図　12･13号掘立柱建物跡……　63
第42図　14･16号掘立柱建物跡……　64
第43図　17～19号掘立柱建物跡……　65
第44図　15･20号掘立柱建物跡……　67
第45図　柱穴検出時切り合い関係図……　68
第46図　15号掘立柱建物跡柱穴土層図（１）……　69
第47図　15号掘立柱建物跡柱穴土層図（２）……　70
第48図　20号掘立柱建物跡柱穴土層図……　71
第49図　15号掘立柱建物跡－１……　72
第50図　15号掘立柱建物跡－２……　73
第51図　15号掘立柱建物跡－３……　74
第52図　15号掘立柱建物跡－４・５……　75
第53図　20号掘立柱建物跡－１・２……　76
第54図　20号掘立柱建物跡－３・４……　77
第55図　20号掘立柱建物跡周辺遺物出土状況…　78
第56図　掘立柱建物跡・溝状遺構遺物……　79
第57図　瓦塔（１）……　80
第58図　瓦塔（２）……　81
第59図　瓦塔（３）……　82
第60図　瓦塔（４）……　83
第61図　瓦堂……　84
第62図　１号土坑及び遺物……　90
第63図　２～９号土坑……　91
第64図　10～15号土坑……　92
第65図　16～19号土坑……　93
第66図　１号溝状遺構及び周辺遺構群（１）……　96
第67図　１号溝状遺構及び周辺遺構群（２）……　97
第68図　２号溝状遺構及び周辺遺構群（１）……　98
第69図　２号溝状遺構及び周辺遺構群（２）……　99
第70図　3～5号溝状遺構及び周辺遺構群（１）…　100

第71図　３～５号溝状遺構及び周辺遺構群（２）
６号溝状遺構…… 101
第72図　貝充填柱穴…… 102
第73図　遺構外遺物（１）…… 103
第74図　遺構外遺物（２）…… 104
第75図　瓦塔・瓦堂復元図…… 110
第76図　瓦塔・瓦堂分布範囲…… 111
第77図　市内出土の瓦塔・瓦堂（１）…… 114
第78図　市内出土の瓦塔・瓦堂（２）…… 115

表目次

第１表　石器一覧表
第２表　古墳時代以降竪穴住居跡一覧
第３表　３号住居跡遺物一覧
第４表　４号住居跡遺物一覧
第５表　５号住居跡遺物一覧
第６表　６号住居跡遺物一覧
第７表　７号住居跡遺物一覧
第８表　９号住居跡遺物一覧
第９表　10号住居跡遺物一覧
第10表　11号住居跡遺物一覧
第11表　12号住居跡遺物一覧
第12表　13号住居跡遺物一覧
第13表　14号住居跡遺物一覧
第14表　15号住居跡遺物一覧
第15表　16号住居跡遺物一覧
第16表　17号住居跡遺物一覧
第17表　19号住居跡遺物一覧
第18表　20号住居跡遺物一覧
第19表　21号住居跡遺物一覧
第20表　22号住居跡遺物一覧
第21表　掘立柱建物跡一覧
第22表　掘立柱建物跡遺物一覧
第23表　溝状遺構遺物一覧
第24表　瓦塔・瓦堂片一覧
第25表　土坑一覧
第26表　土坑遺物一覧
第27表　出土貝類組成一覧
第28表　遺構外遺物一覧
第29表　瓦塔・瓦堂図化分計測値一覧
第30表　市域出土瓦塔・瓦堂一覧

写真目次

図版１　遺跡周辺の航空写真，調査区航空写真
図版２　全景，1・２号住居跡，1号竪穴状遺構・遺物出土状況
図版３　２号竪穴状遺構・遺物出土状況，3号竪穴状遺構・遺物出土状況，1号土壙，2号土壙・遺物出土状況
図版４　３号住居跡・遺物出土状況
図版５　４～７号住居跡
図版６　７～10号住居跡
図版７　11～13号住居跡
図版８　13～16号住居跡
図版９　16～21号住居跡
図版10　22号住居跡，1～５号掘立柱建物跡
図版11　６～14号掘立柱建物跡

図版12　15～18号掘立柱建物跡，調査区航空写真（北から）
図版13　15号掘立柱建物跡柱穴土層・切り合い関係①
図版14　15号掘立柱建物跡柱穴土層・切り合い関係②
図版15　15号掘立柱建物跡柱穴土層・切り合い関係③，20号掘立柱建物跡
図版16　20号掘立柱建物跡柱穴土層・切り合い関係，1～６号土坑
図版17　７～15号土坑
図版18　16～18号土坑，1～５号溝状遺構，貝充填柱穴
図版19　瓦塔（須恵質）①〔屋蓋部〕
図版20　瓦塔（須恵質）②〔屋蓋部・軸部〕
図版21　瓦塔（土師質）①〔九輪・水煙・屋蓋部〕
図版22　瓦塔（土師質）②〔屋蓋部〕
図版23　瓦塔（土師質）③〔屋蓋部・軸部・開口部〕
図版24　瓦塔（土師質）④〔基壇部〕，瓦堂〔屋蓋部・軸部・基壇部〕
図版25　３・４号住居跡出土遺物
図版26　４・５号住居跡出土遺物
図版27　６・７・９号住居跡出土遺物
図版28　10～13号住居跡出土遺物
図版29　14～16・19・20号住居跡出土遺物
図版30　20～22号住居跡出土遺物，掘立柱建物跡出土遺物
図版31　溝状遺構出土遺物，遺構外出土遺物①
図版32　遺構外出遺物②
図版33　縄文時代遺物①〔土器〕
図版34　縄文時代遺物②〔土器〕
図版35　石器①〔スクレーパー・尖頭器・掻器・石鏃・尖頭掻器・ミニチュア石匙・ドリル・石製垂飾〕
図版36　石器②〔石斧・敲石・磨石〕

グラフ

グラフ１　縄文時代時期別遺物個数……　24

Ⅰ　調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は，千葉市による斎園建設事業に係わる地元環境整備事業の一環として，運動広場整備が計画されたことに伴い実施された。平成14年１月９日付で千葉市長から千葉市緑区平山町1584他の事業予定地内について千葉市教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書（13千保斎第71号）が提出された。市教育委員会文化課が現地踏査を行い，照会地が越川戸遺跡として周知される範囲に含まれることを確認の上，「遺跡の所在する旨」，平成14年１月15日付の13千教文（埋）第220号で回答した。これを受けて文化課と千葉市保健衛生部斎園建設室との間で遺跡の取り扱いについて協議した結果，照会地8,071㎡について遺構の分布範囲を把握するための確認調査を実施することとなった。調査の結果，事業予定地内全域に古代の集落跡が展開していることが判明した。これを受けた再協議の結果，埋蔵文化財への影響が及ぶと考えられる4,900㎡について発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。この結果を受け，平成14年４月１日から平成14年６月26日の期間，千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターに委託して発掘調査を実施した。（文化課）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

千葉市は，房総半島の北半に広がる下総台地の南西部に位置する。市域の大部分が下総台地で占められており，各時代の多くの遺跡が台地上に展開している。大規模な河川は無いものの，市域北部には印旛沼に注ぐ鹿島川があり，東京湾に流入する村田川・都川・浜野川などとこれらに合流する生実川・支川都川・葭川・坂月川などの支流が樹枝状に展開し，東京湾岸の河口付近に小規模な沖積平野・海岸低地を形成している。

遺跡は，それらの河川の内，都川と合流する支川都川上流域の台地上に立地する。最寄り駅であるJR外房線鎌取駅からほぼ真北に1.5㎞程の位置である。

支川都川は，現在のおゆみ野地区に源を発する。平山町域で平山町谷地奥を水源とする支流と合流し，京葉道路下の丹後堰で都川本流と合流している。その支川都川（通称：辺田支谷）と平山町谷地（通称：平山支谷）に挟まれた標高約40mを測る舌状台地上平坦部に遺跡は展開している。

この台地周辺は比較的開発が進んでいなかったことから，明治15年測図の迅速図で観察できる地形をよく残している。遺跡周辺を迅速図でみると，調査範囲が茶畑として開墾され，その周りは松林であることがわかる。調査開始段階では，平地化した畑地と松などの林地に周囲を囲われた環境にあった。遺跡の南西側に位置する中世城郭の立堀城跡(5)や北側の集落・神明社は中世以来続いているといわれ，台地上が大規模に耕作されはじめた時期を示唆している可能性も考えられる。なお，同一台地上には，台畑遺跡(2)・平山台畑古墳群(3)・高有遺跡(4)・廻り房遺跡(6)といった遺跡があり，調査が実施されているのは立堀城跡と高有遺跡だけである。

次に，周辺に展開している遺跡を時代別に概説することにする。また，調査が実施されているものは，本遺跡と関わり合いがあるものについて略説する。なお，第１図に掲載した遺跡は，本遺跡と時代的に少なからず関わりがあるもののみを列挙した。

旧石器時代：同一台地上で確認された遺跡はない。平山町谷地の北岸で清水台南遺跡(11)が知られているが，発掘調査は実施されていないので実態は不明である。菱名台遺跡(21)は，平成２年度の調査

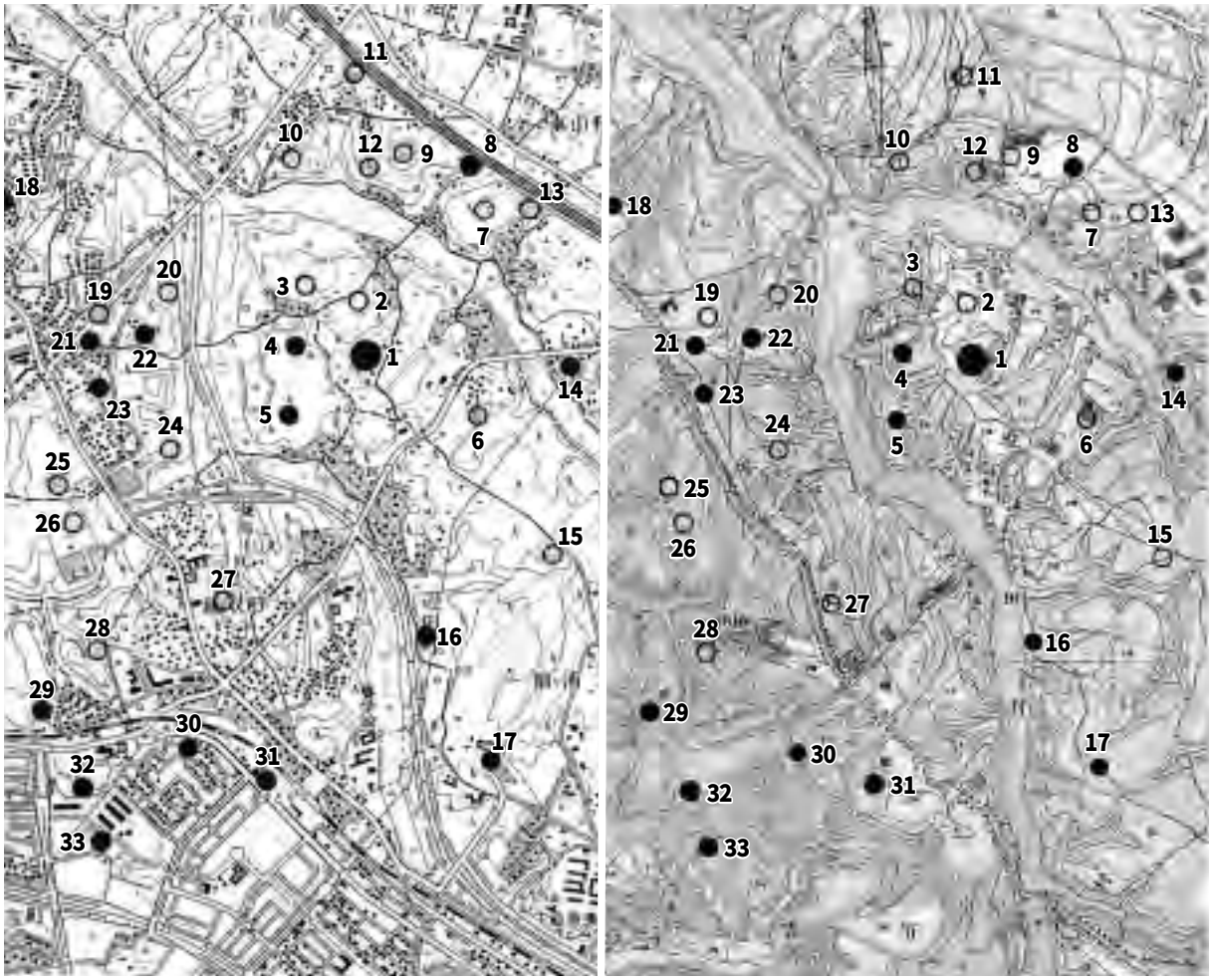
で石核・剥片が出土し，平成４年度の調査で石器の集中区が２箇所検出されている。高沢遺跡(30)は，昭和54～58年に発掘調査が実施され，村田川へ開口する有吉谷津側に属すると考えられる遺跡である。

縄文時代：同一台地上にある台畑貝塚(2)は，越川戸遺跡の北西側約300m程の場所に位置する。現況では，調査区に隣接する林向こうとなり直接視認することはできない。貝塚の現状は畑地で，約10～20m前後の破砕貝が分布する場所が点在している。1969年（昭和44年）に加曽利貝塚博物館により存在が認知され，中期の阿玉台式・加曽利Ｅ式・堀之内式・加曽利Ｂ式・安行１式の土器，ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・オキシジミなどの貝類が現況で確認されている。過去に発掘調査が実施されたことはないが，表層の貝の破砕具合は激しいものの過去のボーリング調査などにより表土下に良好な貝層が残存する可能性が高いと考えられている。越川戸遺跡で阿玉台式の土器と遺構が検出されており，台地平坦部に広く当該期の遺構が展開していると予想される。また，立堀城跡(5)・高有遺跡(6)の調査でも阿玉台式の土器片が出土しており，このことも上記の予想を支持するものといえよう。

築地台貝塚(8)は，1949・50年（昭和24・25年）の立正大学・久保常晴，1977年（昭和52年）に（財）千葉県文化財センターによる東金有料道路建設に伴う調査，（財）千葉市文化財調査協会によって1999年（平成11年）に確認調査，2000年（平成12年）１月に本調査が実施されている。1949・50年の調査では，馬蹄形に分布する径10～30m程の四箇所の貝層集中域の一地点に調査区を設け，調査区内の貝層の約七割ほどを調査している。貝層は，イボキサゴを主体とする海水性のもので，貝層下から住居跡床面が検出されたことなどの成果が報告されている。土器は，加曽利Ｅ式～安行式期までみられ，堀之内式が多かったようである。1977年の調査では，貝層は四箇所ではなく第２図にあるような東西方向に弧を描く貝層が馬蹄形に南北に並んでいるように確認されている。（久保氏の調査は，南側貝層の西北部分であったようだが，正確な位置の特定はされていない。）調査区は，北側の貝層の縁をかすめるように設定され，中期末葉の住居跡２軒，後期の生活跡（住居跡ではない）１基，晩期初頭の住居跡１軒，土壙15基が検出され，中期末葉から晩期の遺物が多量に出土している。2000年の調査は，北側貝層の東南側に隣接する地点の調査であった。218㎡という狭小な範囲の調査であったが，竪穴住居跡17軒以上，土壙８基，柱穴多数，円墳周溝１条，竪穴状遺構１基と土偶・土製品・石棒・多量の土器が検出された。これらは後期（加曽利Ｂ式・安行１・２式期）から晩期初頭（安行３式期）の時期に比定される。包含層内には微量の破砕貝片が混ざっていたが，貝塚の縁辺部なので混在したようである。貝層下で後期・堀之内式期，北側貝層北辺で中期末葉，北側貝層の南東側貝層縁辺部で後期・加曽利Ｂ式期から晩期初頭・安行３式期の遺構が検出されていることは，貝層の形成期間が長く，時期によって集落の立地に変化がみられる可能性が予測される。

新山遺跡(14)は，1977年（昭和52年）に調査が実施されている。縄文時代の遺構は検出されなかったが，早期から後期終末までの土器片が少量，阿玉台式期の土器も若干出土している。

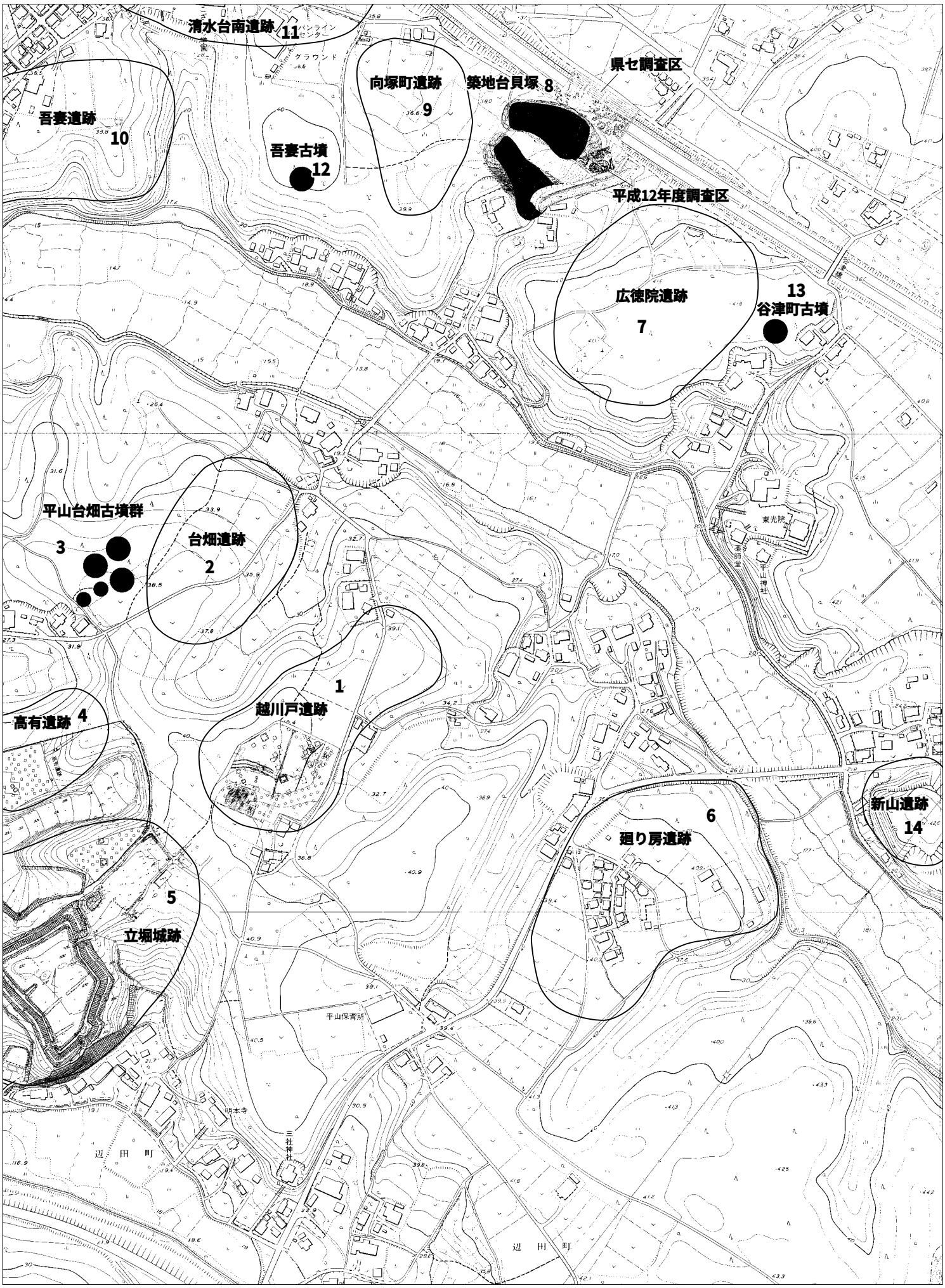
菱名貝塚(22)は，1967年（昭和42年）に加曽利貝塚博物館・千葉市立高等学校によって調査が実施されている。越川戸遺跡のある台地と支川都川本流支谷（通称：辺田支谷）を挟んだ台地上に位置する。測量調査の結果，径約90mの円形に３箇所の大型貝層堆積群とそれらの間に点在する小型貝層で構成され，中央に約55m程のやや凹んだ貝層の空白部分があることがわかっている。調査区は，６箇所のトレンチを設置し，4箇所で計７軒の住居跡が検出され，全て加曽利ＥⅠ式期に比定されている。



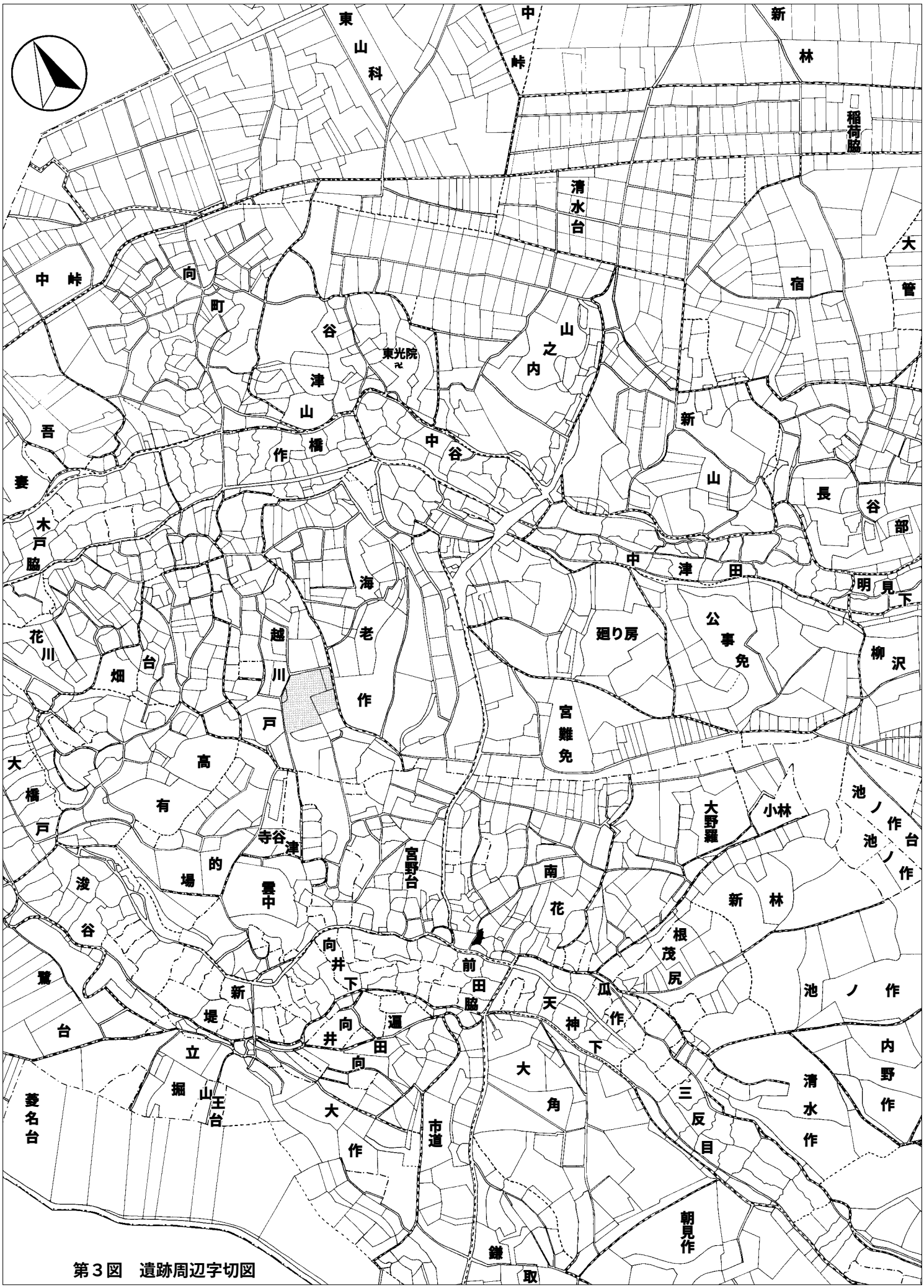
第１図　周辺遺跡分布図（Ｓ=1/25,000）

№	遺跡名	台帳№	時　代・特　徴	調査年度	№	遺跡名	台帳№	時　代・特　徴	調査年度
1	越川戸遺跡	緑76	縄(中・後・晩)・古(後)・奈・平	H14	18	ウツギ遺跡	中央97	縄(中)・古(後)	S60
2	台畑遺跡	緑73	縄(中・後)・古(後)・奈・平〔貝塚〕		19	菱名台古墳群	緑78	古(後)　〔円墳2〕	
3	平山台畑古墳群	緑81	古(後)　〔円墳5〕		20	菱名古墳群	緑79	古(後)　〔円墳4〕	
4	高有遺跡	緑69	縄(前・中・後)・奈・平	H7	21	菱名台遺跡	緑68	旧・縄(中・後)・古(後)　〔円墳〕	H2・3・15
5	立堀城跡	緑105	縄(早・前・中・後)・奈・平・中世〔城館〕	H7	22	菱名貝塚	緑72	縄(中)・平	S43
6	廻り房遺跡	緑82	縄(中)・平		23	菱名台南古墳群	緑77	縄(中)・古・奈・平	S60・H2・4
7	広徳院遺跡	緑87	奈・平　〔寺院〕		24	立堀遺跡	緑106	縄(後)・古	
8	築地台貝塚	緑83	縄(中・後・晩)・古・奈・平・中世〔貝塚〕	S49・50・52・H11・12	25	大作台古墳群	中央100	古(後)　〔円墳2〕	
9	向塚町遺跡	緑74	縄(中・後)		26	清水台古墳	中央101	古	
10	吾妻遺跡	緑75	縄(前・中・後)・古(後)〔円墳2・貝塚〕		27	大作遺跡	緑109	平	
11	清水台南遺跡	若葉188	旧・縄(中・後)・平		28	鎌取遺跡	緑６	縄(中)・古(後)	
12	吾妻古墳	緑80	古(後)　〔円墳1〕		29	生浜古墳群	中央134	古(後)	S50・51
13	谷津町古墳	緑86	古(後)　〔円墳1〕		30	高沢遺跡	緑１	旧・縄(早・前・中)・古(前・中・後)・奈・平〔貝塚〕	S54～58
14	新山遺跡	緑67	縄(早・前・中・後)・古(後)・平	S52	31	鎌取遺跡	緑４	縄	
15	大野羅古墳群	緑113	古・中近世		32	鎌取場台遺跡	緑５	旧・縄(中)・古(中)・奈・平〔貝塚〕	H2
16	清水作遺跡	緑110	縄(後・晩)・古(中)・平	S52	33	有吉北貝塚	緑11	旧・縄(早・前・中・後)・古(後)・平・中世〔貝塚〕	S58～62
17	物見塚古墳	緑101	古						

※「台帳№」は、財団法人千葉県文化財センター刊行・千葉県埋蔵文化財分布地図(3)(改訂版)　1999に準じている。
※ 図中の白抜き○は未調査の遺跡。



第２図　越川戸遺跡と周辺遺跡位置図


東山科
中峠
新林
稲荷脇
清水台
大管
宿
中峠
向町
谷
東光院
山之内
津山
吾妻
橋作
中谷
新山
長谷部
木戸脇
中津田
明見下
海老作
廻り房
公事免
柳沢
花川台
越川戸
畑
宮難免
大橋戸
高有的場
寺谷津
宮野台
大野羅
小林
池ノ作台
池ノ作
浚谷
雲中
南花
新林
根茂尻
向井下
前田脇
瓜作
天神下
池ノ作
鷺台
新堤
向井田
遍
内野作
立掘山王台
向
大角
清水作
菱名台
大作
市道
三反目
朝見作
鎌取

第３図　遺跡周辺字切図

これらの住居跡内に貝層が形成されることが明らかとなり，点在する小型貝層が住居跡の凹みに廃棄されたものであることが判明している。この他に，同期の人骨や犬の埋葬施設も確認されている。遺物は，阿玉台式・勝坂式・加曽利ＥⅠ・Ⅱ式期の土器と石器・貝・骨格器・土製品が出土した。

高沢遺跡は，1979～83年（昭和54～58年）に（財）千葉県文化財センターにより調査が行われ，阿玉台式期の遺物が出土しているが，遺構は検出されていない。

有吉北貝塚(33)は，1983～88年（昭和58～62年）に，（財）千葉県文化財センターにより調査が行われている。阿玉台Ⅰ・Ⅱ式期から貝塚を含めた遺構群が形成されはじめることがわかっている。

これらの他に，向塚町遺跡(9)・吾妻遺跡(10)・清水台南遺跡(11)・ウツギ遺跡(18)・菱名台遺跡(21)・菱名台南古墳群(23)・鎌取遺跡(31)・鎌取場台遺跡(32)でも縄文時代の遺物が確認されているが，未調査か調査が行われていても微量の遺物が出土する程度である。

第２図の範囲外ではあるが，平山支谷の最奥部に立地する長谷部貝塚でも阿玉台式期の遺構と遺物が検出されている。

弥生時代：支川都川を含む都川流域の台地縁辺部に遺跡は存在するが，越川戸遺跡近辺で確認された弥生時代の遺跡はない。（財）千葉県文化財センターによって実施された鎌取駅周辺・おゆみ野地区の調査において，バクチ穴遺跡や有吉遺跡などで若干の遺構・遺物が検出されているにすぎない。

古墳時代：弥生時代に比べ，古墳時代前期・中期の遺跡は増加傾向にあるが，急増するのは後期からである。周辺では，高沢遺跡(30)で前・中期，鎌取場台遺跡(32)・鎌取遺跡(28)で中期の遺構と遺物が検出されている。清水作遺跡(16)では中期の遺物が確認されている。鎌取駅以南の新興住宅地であるおゆみ野地区の調査は開発規模が大きかったので比較的多くの成果が確認されている。

後期では，立堀城跡(5)で住居跡２軒，築地台貝塚(8)で円墳１基，吾妻遺跡(10)で円墳２基，吾妻古墳(12)で円墳１基，谷津町古墳(13)で円墳１基，新山遺跡(14)で住居跡８軒，物見塚古墳(17)，ウツギ遺跡(18)で円墳１基，菱名台古墳群(21)で円墳２基，菱名古墳(22)で円墳４基，菱名台南古墳(23)で円墳，大作台古墳群(25)で円墳２基，清水台古墳(26)，鎌取遺跡(28)で住居跡２軒，高沢遺跡(30)では集落域全域が調査され，141軒の住居跡が検出されている。また，有吉北貝塚(33)でも94軒の住居跡が検出されている。これらはまとまった集落の情報として古墳時代後期以降の集落・土器編年研究等に大きく寄与する遺跡となっている。

第２図の範囲外であるが，平山支谷の奥部に塚原古墳群と中原古墳群といった前方古円墳を含む中規模の古墳群がある。中原古墳群は，1960年（昭和35年）早稲田大学により調査がされており，前方後円墳３基を含む，計９基の後期群集墳であることが確認されている。この内，Ⅰ～Ⅴ号墳で調査が実施され，鉄鏃・鉄刀・刀子・耳環・鉄鎌などの鉄製品が主体部から出土した。主体部は，木棺直葬と軟質砂岩製の横穴式石室が検出されている。造営年代は６～７世紀と推定され，古墳時代後半から終末にかけての地域首長の古墳群と考えられている。

奈良・平安時代：周辺では，高有遺跡(4)で住居跡２軒，新山遺跡(14)で住居跡２軒と掘立柱建物跡10棟，高沢遺跡(30)で多数，有吉北貝塚(33)で５軒の住居跡が検出されている。廻り房遺跡(6)・広徳院遺跡(7)・築地台貝塚(8)・清水台南遺跡(11)・菱名貝塚(22)・菱名台南古墳群(23)・大作遺跡(27)でも確認されているが，土器片だけの出土か未調査なため不明な点が多い。

８世紀代の集落は，高沢遺跡と有吉北貝塚の例では一定の規模の集落として成立しているようだが，９世紀以降集落規模が極端に小型化，または数軒単位の小規模集落へと分散する傾向が伺える。

広徳院遺跡(7)は，未調査であるが千葉市史（以下，市史と表記）において古代瓦が表採できる遺跡として，「旧東光院址」として確認されていた遺跡と考えられる。ここで，表採された布目瓦と同様の瓦が隣接する築地台貝塚で（財）千葉県文化財センター（1977年）と（財）千葉市文化財調査協会（2000年）の調査において出土している。遺構からの出土はなく，表土層または表土層直下からの出土であり，その状況から近隣から運ばれて廃棄されたと推定されている。なお，築地台貝塚から南東約200mの山林中に「旧東光院址」と推定される土壇状の高まりがあり，散布された古瓦を確認できたようだが，2000年の調査ではそれらを確認することはできなかった。

出土した瓦は，須田勉氏によって８世紀第２四半期に位置づけられている。また，千葉寺出土の瓦も同時期のもので細部の製作技法・整形技法に明らかな差異が見られ，これら二寺院跡は近距離に建立された同時期の寺院だが直接的な繋がりがなかったと推定している。

須田氏は「旧東光院址」のある場所が下総国千葉郡池田郷の範囲である根拠として，市史での武田宗久氏による郷域の推定範囲に関する分析結果を参考に論を展開させている。文中で「池田郷は北を旧都川本流，南を村田川，西を東京湾，東を平山町付近まで」を範囲として記しているが，武田氏は「北は葭川の屈曲部（旧都川本流）を限り，南は両総の境をなす村田川に至り，東は市内鎌取町付近まで，西は東京湾の海浜」までとしており，東の推定郷域を拡大解釈しているように見受けられる。

鎌取町域は，「旧東光院址」のある地点から平山支谷と辺田支谷の二つの支谷を越えた場所であり，直線距離でも1.5㎞ 程離れている。武田氏が「東は市内鎌取町付近」としたのは，支川都川（辺田支谷）の西岸までのラインを郷境と想定していたようである。つまり，池田郷の北辺を旧都川本流（現在の葭川の屈曲部・千葉神社の北側）とし，猪鼻・生実・椎名の地域を含む都川・支川都川の南岸，辺田支谷の西岸の範囲と捉え，鎌取町付近としたものと推定される。しかし，「旧東光院址」のある地点はその範囲外となり，池田郷ではないともいえる。しかし，武田氏は糟[illegible]郷に関して「旧東光院址」のある平山町付近を糟[illegible]郷ともしておらず，どちらの郷に含まれるかは曖昧にしている。

もし，「旧東光院址」が池田郷内であるとするならば，千葉寺と同郷内となり「一郷内に複数の寺院」という構造となるが，先の推定郷域の解釈によっては，「旧東光院址」は糟[illegible]郷の範囲内とも考えられる。今まで，武田氏の分析以外に具体的な郷域の検討は行われていないことから，たとえ須田氏の解釈がやや誇張されたものであっても，一つの解釈として成立しうると考えられる。現状では，「旧東光院址」の所属する郷を確定するための検討が不十分であり，郷域の解釈論を再検討することが重要な課題であるといえよう。

越川戸遺跡は，「旧東光院址」から南南西に約600m程の位置である。「旧東光院址」が８世紀第２四半期前後に創建され，越川戸遺跡の遺構群が８世紀後半以降に集落の盛期をむかえることは，地域的な継続性を表しているとも考えられる。近隣の中原古墳群が前方後円墳を含む古墳群であり，この支谷筋を掌握する有力者の墓域である可能性があり，奈良時代に「旧東光院址」を造営した有力者と直接的な関係があったならば，古来からの地縁的な繋がりがあったために当地に寺院が営まれ，その寺院を基盤に支谷周辺地域へ文化的要素が拡散したと捉えることもできよう。

Ⅲ　調査の方法

本調査を行う前に確認調査を実施したのは，例言にあるとおりである。確認調査時には，千葉市建設局土木部工務課により工事用に設定されていた基準杭が存在していた。それらは，調査区割のＧライン，「１G-a」杭（公共旧国土座標系第Ⅸ軸Ｘ=-47.313,362・Ｙ=31.834,624）から南に10m毎，「11G-a」杭（同X=-47.404,191・Y=31.792,790）までの計11本（110m分）が相当した。この軸線から，東側に60m，西側に50mの計110m分を直角に設定し，一辺110mの方形区割りを設定した。

この区割りは，北東角の「１A- ａ」杭を基準に東西方向へアルファベットのＡ～Ｋ，南北に１～11の各ライン名を付し，10mメッシュのグリッドとした。さらに，その各小区画内を５m角に四等分し北東角の杭をａ区，東側へｂ区，ａ区南側をｃ区，その東側をｄ区として細分化している。なお，グリッドは工事用に地形・地割に準じて杭を設定していたため，真北から22°東に軸線が振っている。

標高は，工事用に移動された標高点から，9G-a杭に移設されたＬ=40.000mを基準としている。この点から幾つか任意の点を更に移設して調査区全域を網羅した。

Ⅳ　確認調査の方法と成果

千葉市における確認調査では，旧来より先に記した10m方眼の調査区メッシュに準じ，10m角の中にａ杭とｄ杭もしくはｂ杭とｃ杭を北西角とし，千鳥方式に短辺２m，長辺2.5mの長方形グリッドを設定していた（第４図参照）。表土除去も重機を使用しつつもソフトローム層上面もしくはその一層上層の堆積層中にて掘削を終了し，人力によって詳細な遺構確認を実施していた。

今回の確認調査では，東西１～４ラインまでの30m幅の区域を10m角中に四箇所のグリッドを配置し，更に重機による掘削をハードローム層内まで行った。平面的なグリッド配置は密を極めていたので確認できた遺構は多かったが，攪乱が及ばない深さまで重機によって掘削したことが柱穴などの浅い遺構の多くを破壊することとなり，結果的に遺構を確認するという目的を阻害する行為となってしまった。また，途中で４ライン以南は従来のグリッド配置にしたが，掘削の深さを変更しなかったために全グリッドで同様の傾向になってしまった。

終了時に検出されたのは，縄文時代の陥穴１基・土壙２基，奈良・平安時代の竪穴住居跡25軒，掘立柱建物跡15棟，土坑５基，溝状遺構１条，柱穴28基である。遺物は，縄文土器（中・後・晩期）・土師器・須恵器の他，瓦塔片９片が出土している。なお，本調査範囲とされた範囲は確認調査時の対象面積と比べひとまわり小規模となっており，南北Ｊ・Ｋライン以東と東西９～11ライン以南は本調査を実施していない。その未調査部分で確認された遺構は，竪穴住居跡８軒，土坑２基，柱穴２基である。竪穴住居跡の内６軒が北東隅に集中しており，10・16・17号住居跡と同一の一群を形成していると思われる。なお，２Ｊ区で住居跡の重複が看られるが，5号住居跡のような大型の住居跡である可能性も考えられる。９Ｂ区の２軒の重複も同様の可能性を考えてよい。２Ｊ区で確認された柱穴は，掘立柱建物跡群がさらに広がる可能性を示唆しているのであろう。

本調査では確認調査における成果の多くが追認されたが，検出位置に誤差が生じたり，確認されるべき遺構が認識できていなかった例なども幾つかみられた。前者は，4H- ｄ区で検出された９号住居跡の位置や８G- ｂ区の５号土坑などが顕著な例で，確認調査時のグリッド痕跡が顕著だったので遺構の再検出はできた。これらは，図面上でのグリッド配置図と実際の設定杭の間に位置関係的な誤差

が生じた結果と考えられる。本調査も確認調査も南北Ｇラインを全ての基準としており，誤差が生じた要因は特定できていない。後者は，5Ｆ-ｄ区の１号溝状遺構，15号掘立柱建物跡周辺の柱穴群，３Ｅ-ｄ区の21号住居跡などであるが，浅い遺構の掘方よりも深くグリッドを掘った結果なのであろう。

基本層序は，第45図の６Ｆ-ｄグリッド東壁の土層図の堆積状況が基準である。

Ⅰ層：表土層

Ⅱa層：7.5ＹＲ３/２黒褐色土の包含層。しまり良く，粘性が弱い。φ1～2㎜のローム粒・焼土粒が少々入る。遺構内の覆土や遺構に絡む状態で残存する。

Ⅱb層：7.5ＹＲ３/３暗褐色土の包含層。しまり良く，粘性が弱い。φ1～2㎜のローム粒が少々入る。

Ⅱc層：7.5ＹＲ４/３褐色土の漸移層。しまり良く，粘性が強い。φ1～5㎜のローム粒が少々入る。

Ⅲ層：ソフトローム層

Ⅳ層：ハードローム層

なお，第４図の斜線トーンの範囲は，Ⅱ’層（谷頭肩部の緩斜面に堆積した自然堆積層？）である。また，Ⅱａ・ｂ層は調査範囲に普遍的な層ではなく，土質・色調・厚みなどが地点によって異なる。

第４図　確認グリッド配置図（1/ 800）

Ⅴ　検出された遺構と遺物

今回の調査では，縄文時代中期前葉から平安時代にかけての遺構と時期不明の遺構が幾つか検出され，縄文時代早期条痕文期から近世までの遺物が出土している。

縄文時代の遺構は，竪穴住居跡が２軒・竪穴状遺構が３基・土壙が２基である。１号土壙以外の遺構は，中期前葉の阿玉台式期に比定できる。後述するが，調査区全域における縄文土器の出土傾向から阿玉台式期に該当する遺物の占める割合が非常に高いことがわかった。遺物量に対して検出された遺構数が少ないことから，検出しきれなかった遺構が多く存在していた可能性があると思われる。

竪穴状遺構は，遺構内に炉跡が検出されなかったために住居跡と区別して分類した遺構である。遺構の検出状況や遺物の出土具合は，住居跡と差は見いだせなかった。また，阿玉台式期の遺構群は，総じて掘方が浅い傾向が伺えたことから，遺構の構築時にソフトローム層よりも上層の自然堆積土中で掘削が完了していたため，ローム層上面近くまで表土除去した場合，検出できない構造を持つ遺構だったのではないかと想像する。また，不規則な柱穴群の中にも本期と思われる遺構が混在しており，柱穴のみがソフトローム層まで掘削され，ハードローム層まで掘りこむような「竪穴」は残存しにくい程の浅い遺構だったのかもしれない。

１号土壙は，遺物の出土がないので時期の明確な比定はできないが，長楕円形の平面形で床面に柱穴がある所謂「陥穴」と構造的に極めて酷似していることから縄文時代の遺構として扱った。

古墳時代の遺構は，6世紀前半の竪穴住居跡２軒と６世紀末から７世紀初頭頃の竪穴住居跡３軒である。これら二時期の間には，間断期があると考えられる。

前者は，3･４号住居跡が該当する。遺物の形態的特徴やカマドが東壁側で，南東隅に貯蔵穴が敷設されているといった遺構の構造的な特徴が近似している。

後者は，5～７号住居跡が該当する。遺物からは，三遺構から出土した坏が黒色処理や器壁を極めて細かく丁寧に磨き上げるといった点，長脚高坏の特徴がよく似ることなどから同時期あるいは極めて短期間に継続してつくられたと推測できる。５・６号住居跡は，大きさと間仕切りの有無などの点で相違はあるが，検出位置が隣接し，カマドが北壁に敷設され，軸方位も近似していることから同時期に併存していた可能性が高いと考えられる。７号住居跡は，検出位置がやや離れており，坏の形態的な特徴が５・６号住居跡の坏に比べ若干新しい傾向が伺える。これら三遺構が継続的に営まれたのか，廃棄時期に差があったのかはわからないが，前後関係が存在する可能性も十分考えられよう。

奈良時代の遺構は，8世紀後半の竪穴住居跡２軒（８・９号住居跡）と土坑２基である。

８号住居跡は，遺構北半分は未調査であり，時期を比定する遺物は出土していない。しかし，9世紀代に比定できる12号住居跡に切られていることと，この住居跡内に覆土中に床面を有する小型の住居跡（８′号住居跡）が断面で確認できたことから造営時期を推定逆算して８世紀代と考えた。

９号住居跡も遺物が少なかったが，8世紀後半頃の所産と考えられる平底の坏が出土していることから奈良時代の遺構とした。

平安時代の遺構は，9世紀代の竪穴住居跡９軒と10世紀代の竪穴住居跡３軒・土坑４基である。

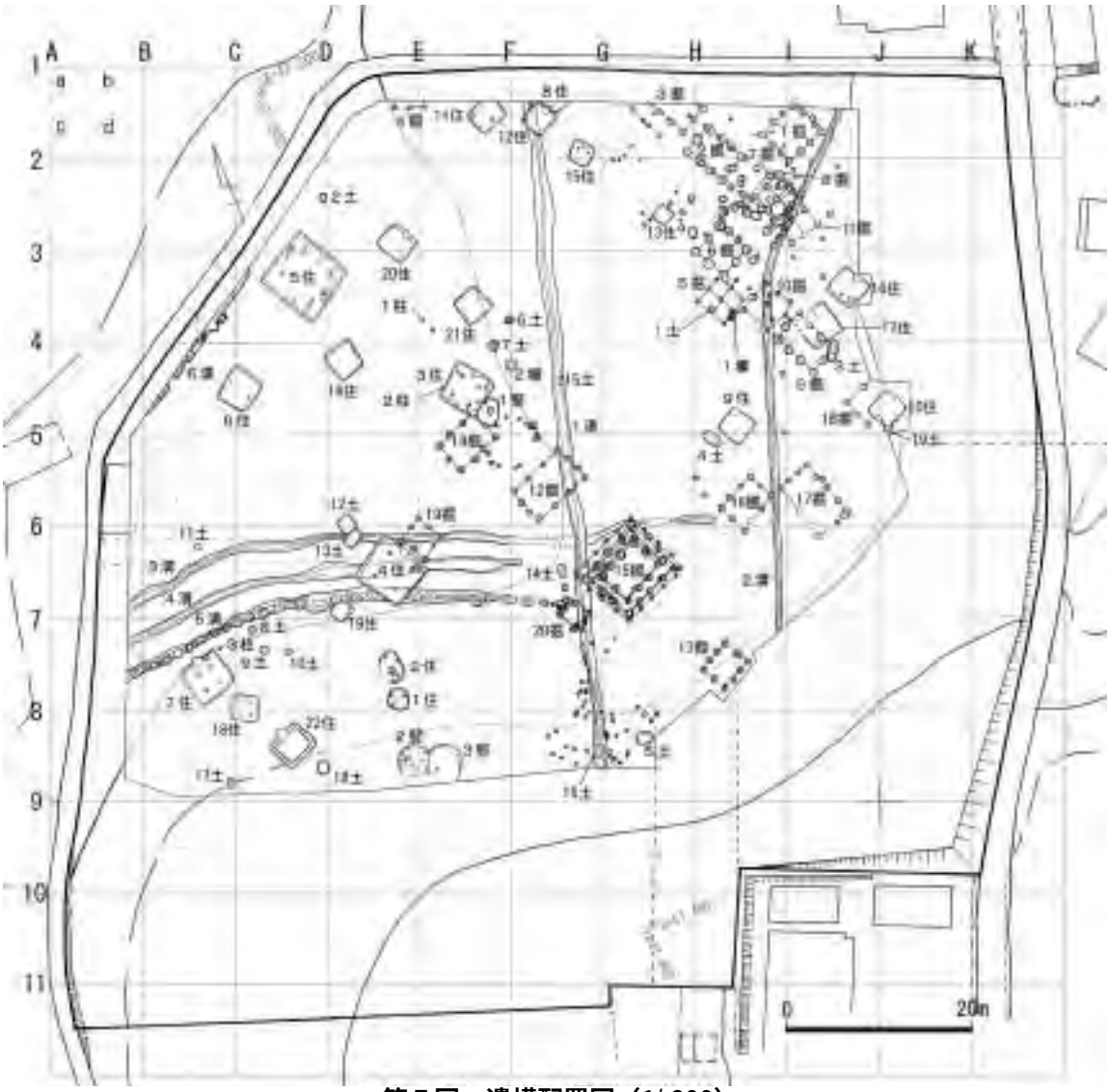
９世紀代の竪穴住居跡は，11～19号住居跡が該当する。遺構数は当該期が最も多く検出されている。18号住居跡以外は，軸線が方位に則って造営されている。

11号・16号の旧住居跡・17号住居跡は北壁にカマドを敷設する。11号住居跡は９世紀中頃，16号住居跡は北カマドから東カマドに推移しており，古くは９世紀中頃，新しくは10世紀前半頃と考えられる。17号住居跡は，覆土除去後に９号掘立柱建物跡の柱穴２・３が確認された。また，掘方が浅く，カマドも攪乱で破壊されており，遺物は９世紀末から10世紀代位に比定できる。

12・14・15・16号の新住居跡は，東壁にカマドを敷設する。12号住居跡は，9世紀代の遺構の中では最も古く９世紀前半と考えられる。14号住居跡は，9世紀中頃から後半の遺構で，壁溝や貯蔵穴はなく簡素なつくりである。15･16号住居跡は，9世紀中頃に比定できる。これらの遺構の中で，柱穴を有するのは15号住居跡だけである。12号は北西隅・16号は南東隅に貯蔵穴が敷設されている。

13･19号住居跡は，小型で南東隅にカマドが敷設されている。両方とも遺物量は少ないものの，「武蔵型甕」が出土しており，9世紀後半頃に比定できる。

18号住居跡は，位置的に他の住居跡と離れている上，軸方位がやや東に傾いている。掘方は浅く，



第５図　遺構配置図（1/ 800）

柱穴があり，遺物が極端少なかった。浅く，柱穴があるという点で15号住居跡とよく似ている。遺物は破片ばかりだが９世紀代と考えられる。

10世紀代の遺構は，20～22号の竪穴住居跡と１・11号土坑である。

20・21号住居跡は東壁カマド，22号住居跡は北壁カマドで，前者と後者は分布位置が異なる。３軒とも掘方は浅く，柱穴もない。22号住居跡は拡張をおこなったようである。

１号土坑は，第62図に図示した遺物以外にも多くの破片が出土しており，その状況から祭祀などの特殊な行為に伴う遺構ではなく，単なる廃棄用の土坑と考えられる。

竪穴住居跡は13・16・19号住居跡を除いて皆掘方が浅く，遺物量が少ない。また，18・22号住居跡以外は，調査区の北半に立地している。

掘立柱建物跡は，20棟検出された。時代は奈良時代（８世紀中頃）から平安時代初頭頃（９世紀前半）の遺構と考えられる。なお，調査区北東部隅の一群は耕作による攪乱が特に激しく，掘立柱建物跡の柱穴として平面的に認識できなかったものも多い。実際の棟数は増加するものと考えられるが，棟としての対応関係が調査段階で認識できたものに限り建物としてカウントした。

建物群は，北東隅と中央部の二箇所に大別できる。

中央部のものは，15・20号掘立柱建物跡を中心建物とし，12～14号と南北線上に並んでいる。これらの遺構が併存していたかという明確な根拠はないが，12・14・15(2)・15(3)号の軸方位値が極めて近似していることから，併存していた可能性が考えられる。15・20号は東西に並列し，15号が四回，20号が三回の建て替えをおこなっていたことが柱穴の前後関係から判明しており，相互に強く関連した遺構であるといえよう。これらは１号溝状遺構に破壊されており，溝状遺構の覆土内から多くの仏教関連遺物（瓦塔・瓦堂・灯明皿などの破片）が出土している。また，建物の検出面よりも上層からも同様の遺物は出土しているが，耕作などによる旧遺構面の破壊により広範囲に拡散している状況が看られた。しかし，溝状遺構内の遺物の集中具合からこれらの遺物が15・20号の遺構範囲内に濃く存在していたと想像できる。また，20号側に片寄る傾向があり，瓦塔・瓦堂・灯明皿などが安置されていたのは20号であった可能性が高い。なお，20号周辺では，版築や盛土などをおこなった形跡もなかったことから，平地型の上屋建物であったと想像される。

15号は，四回の建て直しを含め，五棟の建物が建っていたことがわかり，同所が永きにわたり重要な施設であったことを物語っている。建て替えの内,(2)･(3)は，四面に廂をもつ所謂「四面廂建物」であった。(1)と(2)･(3)と(4)･(5)は平面形がそれぞれ近似している。

16・17号周辺も攪乱が激しく，これらの他に建物が存在していた可能性が考えられる（特に16号と13・15号の間の地域)。16号の南辺と17号の北辺の柱穴列が同一線上にあることから，これらが関係の深い遺構であったと想像される

北東部の建物群は，1･３号のように遺構が北側にのびるものがあり，現地形的に平坦部分がつづくといった状況から，調査区外の北東側へ遺構群が更に展開すると予想される。検出された遺構群はその遺構群の南西部分の一角にすぎないのであろう。

１・３号は明確な関係は不明だが，位置関係と検出時の柱穴覆土の状況がよく似ていたことから併存していた可能性が強い。

２・６・７号は，2・７号が南北，6・７号が東西に並ぶ「逆Ｌ字」型の配置関係が考えられる。また，2号は同所に二回の建て替えを伴う三棟の建物が建っていたことがわかっているが，遺物や柱穴規模などに際だった特徴はない。

９・10・18号は南北に並び，5・11号は並びから関係のある建物を見出すことはできない。

これらの建物の柱穴内から出土した遺物は極めて少ない。第56図にあるとおり，1・７・15・16・20号から遺物が出土している。北東部は攪乱がひどく，確実に柱穴覆土内出土であるとできるものは図示できたものだけである。

１号出土の遺物は，11が８世紀後半の須恵器杯蓋，12も同期の杯身であることから，1・３号は８世紀後半以降の遺構であると推定できる。16号の９・10は，前後関係が想定できるが，およそ８世紀末から９世紀前半の範疇で捉えている。７号は，6のロクロ土師器皿が９世紀代である。２・６号も位置関係から７号に準ずると考えられる。15号は，2の土師器が９世紀中頃までの時期と考えられ，15(4)と15(5)号の柱穴10のどちらかに伴うものである。このことから前後関係が最も新しい15(4)・(5)の建物は，古くても９世紀半ばに成立したと推定できる。

溝状遺構は，6条検出された。これらは他の遺構を破壊する関係にあり検出された遺構の中では新しい遺構であると考えられる。

１・２号は調査区の北東方向から南西方向に抜けるように走る。現道が調査区のすぐ東側に同じ方向に並行していることから現道に対応する旧道である可能性もある。

３～５号は東西方向にやや弧を描くように並行している。３・４号は覆土中に硬化する部分があり，道として利用されていたようである。５号は，遺構内に土坑が並んでおり，覆土のしまりはよい。４号住居跡内になる溝内土坑から「佛佛」と記された墨書土器（須恵器灯明皿転用杯・第56図-37）が出土した。ほぼ完形であることから２次的な攪乱で紛れ込んだものではないようである。８世紀中頃に比定できる。また，14号土坑は，形状的に溝内土坑とよく似ており，溝内土坑28から直角に曲がって納まるように看取できる。４号も14号土坑直前で溝としての形状を損なっており，4・５号溝状遺構が15・20号掘立柱建物跡の手前で完結している様子である。つまり，4・５号溝状遺構は15・20号掘立柱建物跡手前で造作を停止し，掘立柱建物跡に連結するような状況となっておいることから建物と何らかの関連がある遺構で大きな時期差がないとも考えられる。３号は，15(2)・(3)号掘立柱建物跡の柱穴11上に硬化面を形成し，東に抜けることから建物よりも新しい遺構であることは間違いない。

６号は，現農道と並行している。遺物は，古代以前のものが多い。

遺跡周辺の現微地形は，平山町谷地奥を水源とする支流側に開口する小支谷があり，その小支谷の谷頭部先端の微傾斜が南と南東方向に広がっている。

３～５号溝状遺構がその谷頭の肩部分に等高線に沿ってつくられている。

18・22号住居跡は５号溝状遺構の南側，微傾斜が徐々にきつくなる前の平坦面にあり，それ以外の住居跡は３号溝状遺構よりも北側の台地平坦部に立地している。１Ｊ・２Ｊ・３Ｊ区で検出された住居跡群は住居跡以外の遺構（特に柱穴群）が検出されておらず，北東部隅の掘立柱建物跡群と分布域を明瞭に分かつ状況を想定できる。住居跡群の時期比定はできないが，掘立柱建物跡群と時期的に並行するものも含まれている可能性がある。

第４図にあるとおり，調査区の南側にある谷頭部微傾斜部分の凹みに台地平坦部では確認されなかった暗褐色土の自然堆積層があり，その推定堆積範囲内では住居跡は確認されていない。

９Ｂ区内にある住居跡は，18・22号住居跡と何らかの関連があると推定される。

１　縄文時代（第６～13図）

ａ　竪穴住居跡（第６図）

１号住居跡（旧33号住居跡）：７Ｄ-ｄ区で検出された。２住の南隣に位置する。長軸3.36m，短軸2.02m，深さ0.1mの規模を持つ。平面形はやや楕円形を呈し，中央やや南西寄りに炉が検出された。炉の規模は，0.74m×0.64m×0.16mで，灰・焼土・炭化物を含む覆土である。中央に浅い凹みが柱穴状に見られる。柱穴は壁側に３穴ある。遺物は，細片や特徴の不明瞭なものが多く図示したものはないが，阿玉台式期の遺物のみが出土した。

２号住居跡（旧34号住居跡）：７Ｄ-ｂ・ｄ区で検出された。１住の北隣に位置する。長軸3.78m，短軸2.4m，深さ0.12mの規模を持つ。平面形は，不整楕円形を呈する。中央やや南寄りに炉が検出された。炉の規模は，0.8m×0.66m×0.14mで，若干の焼土を含む覆土である。柱穴は，壁際に５穴ある。遺物は，第８図－１～３であるが，これらも阿玉台式期の土器である。

ｂ　竪穴状遺構（第６・７図）

１号竪穴状遺構（旧31号住居跡）：４Ｅ-ｄ区で検出された。３住と14掘の柱穴２に切られている。長軸2.9m，短軸2.2m，深さ0.14mの規模を持つ。北よりの壁際に柱穴が１穴ある。中央やや北寄りに土壙状の穴があり，その中から阿玉台式期の深鉢がまとまって出土した（第８図－４・５・６）。５は，口縁部から底部までの部位が確認され，耕作によりかなり砕片化した部分もあるものの，口縁部を下側に埋められた鉢である。４・６は５とは明らかに別固体で５の破片と混在していたが，この破片と接合する他の破片が少ないことから廃棄された時点で破片化していたものと思われる。

２号竪穴状遺構（旧35号住居跡）：８Ｄ-ｄ区を中心に検出された。３竪の西隣に接するが，お互いの前後関係は把握できなかった。長軸3.78m，短軸2.4m，深さ0.12mの規模を持つ。中央に炉状の円形の凹みを有するが，焼土・炭化物・灰などが全く検出されなかったことから，炉とは考えられない。この凹みの周りに不規則に柱穴がみられる。また，壁際に柱穴が６穴ある。遺物は，細片が広く遺構外にも分布しているが，接合するものは僅かで近接するものに限られている。７・８は阿玉台式期の破片である。第10図－46・47の石鏃も出土している。46はチャートで先がつままれるように仕上げられる点で東北南部地域に特有な特徴をもつ石鏃である。

３号竪穴状遺構（旧32号住居跡）：８Ｅ-ｃ区で検出された。２竪の東隣に接する。長軸3.7m，短軸は調査区域外になるので不明，深さ0.12mの規模を持つ。中央に柱穴が１穴ある。遺物は多いが，2竪同様に接合するものは僅かで図化した土器はない。第10図－48の頁岩の石鏃が出土している。

ｃ　土壙（第７図）

１号土壙（旧６号土壙）：３Ｈ-ｃ区で検出された。５掘の柱穴４と重複していた。長軸1.4m，短軸0.5m，深さ1.2mの規模を持つ。長軸方位はN-69°Ｅで，平面形は隅丸長方形（長楕円形？）で，断面形は長短軸とも逆台形を呈する。床面に２穴あり，床面からの深さは西側が0.38mで東側が0.28mである。遺物は全く出土していないが，その形状から縄文時代の「陥穴」であると考えられる。

２号土壙（旧９号土壙）：４Ｆ-ｂ区を主体に検出された。長軸1.63m，短軸1.75m，深さ0.35mの規模を持つ。平面形は円形だが，東端が攪乱で壊されていた。断面形が浅い皿状を呈する。遺物は，第８図－９の深鉢が口縁部を下方に伏せ，安定した状態で検出された。底部と考えられるものはなく，廃棄段階ですでになかった可能性が高い。

ｄ　柱穴（第71図）

この柱穴は，5号溝状遺構のＰ27とＰ28の間で検出され，周囲に対応する柱穴はなく単独であった。覆土中から第10図-3の凸型掻器が出土した。扇形に開く刃部と柄部は厚みがあり，アーモンド型横断面を呈する。石材は黒曜石である。柄部は，摩耗が顕著で整形時の剥離痕が不明瞭である。長期間，使用されたために風化したものであろうか。平面形状的に，東北地方南部に近似するものが出土することがあるようだが，チャート製のものが主流であるという。

ｅ　遺物（第８～12図）

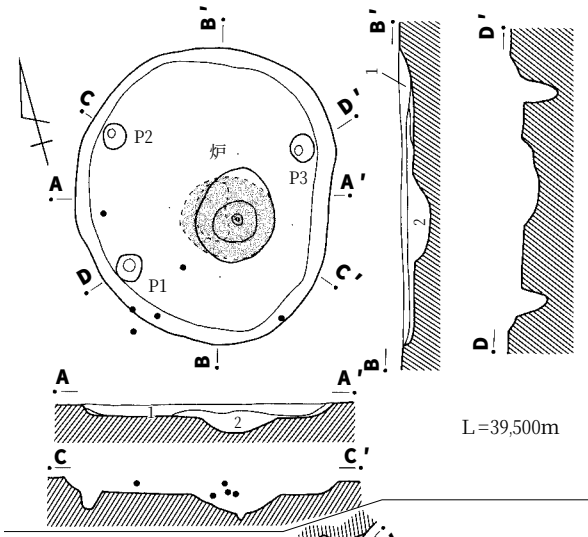
第８図は，遺構出土分である。１～３まで２号住居跡出土である。１は口縁部文様帯直下にあたる頸部から胴部上半の破片である。隆起線による横位の楕円形区画文で，区画上部の隆起線にヒダ状圧痕がみられる。また，区画の下には一条の弧状に連続する結節沈線が付随する。２は，口縁部で楕円形区画文の垂下する隆起線の区切り部分である。隆起線区画内に一条の結節沈線があり，平縁で口唇部に波状の沈線が一条みられる。３は，口縁部で垂下する隆帯部分と隆起線区画内に二条の結節沈線がみられ，これらは渦巻状に展開すると予想される。西村正衛氏の研究成果に準拠すると（以下，も同様），阿玉台Ⅱ式の要素が強いと考えられる。

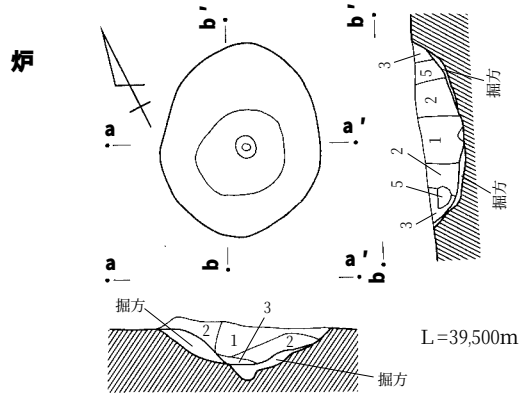
４～７は，1号竪穴状遺構出土である。４は，波状口縁で波頂部から垂下する隆起線がみられ，結節沈線で区画された楕円形区画がみられる。他の土器に比べ雲母が目立たず，質感も砂っぽい。５は，口縁部から底部まで細片化して残存するが，復元は不可能であった。口唇部に棒状工具による押圧がある扇状の把手を有し，口縁部文様帯を隆起線によって楕円形に区画している。区画内には一条の角押文が廻る。口縁部文様帯直下に波状の沈線が一条ある。胴部上半に無紋帯がみられその直下に結節沈線が一条全周する。その下に，把手部分の真下に当たる付近に隆起線による楕円形区画がみられ，内側に一条の結節沈線がみられる。この区画は連続せず，四単位と思われる把手直下部分以外はヒダ状圧痕が一条廻っている。器形は口縁部が最大径だが，口縁部と胴部とのくびれは弱く，口縁部は内彎して納まり，最大径は胴部上位になると思われる。頸部から底部まではやや直線的である。底部には網代痕がみられる。阿玉台Ｉｂ式と考えられる。６は，口縁部で平縁である。内部に明瞭な稜が形成される。結節沈線による連続弧状線が一条みられ，直下に波状沈線が一条廻る。阿玉台Ｉｂ式と考えられる。７は底部で網代痕がみられる。網代痕は撫で消されかけている。

８は，2号竪穴状遺構出土の橋状把手である。先端部が一部欠損するが，口唇部に沿って二条の結節沈線がみられる。橋状部端部には爪形文の刻みがはいる。阿玉台Ⅱ式と考えられる。

９は，2号土壙出土で，胴部中位から口縁部まで約１/４程残存する深鉢形土器である。波状口縁で，口唇部に押圧がある扇状突起があり，直下に隆帯が垂下する。波頂部間の波底部にも垂下する隆帯があり，各隆帯間に楕円形区画がみられる。区画内には一条の角押文がめぐる。区画の直下には波状沈線が一条めぐる。この沈線と胴部文様帯最上部にある波状沈線の間は無文である。沈線直下にヒダ状

１号居住跡

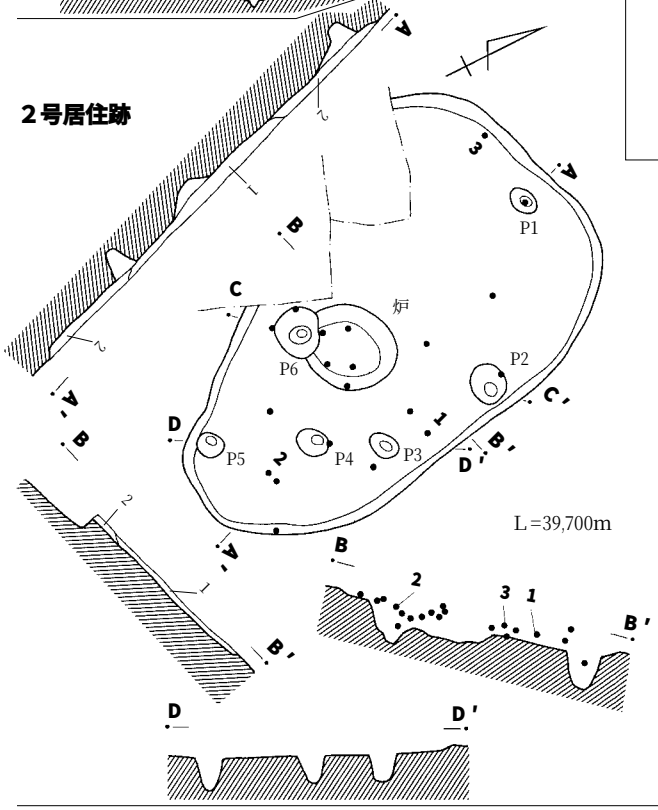


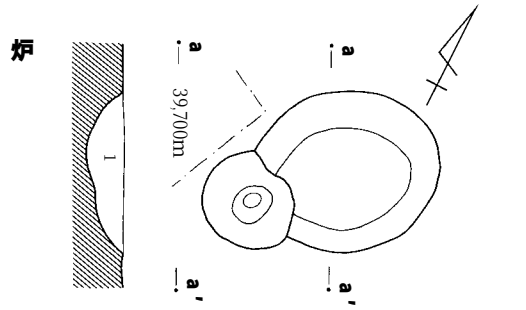


1　7.5ＹＲ　4/4　褐　ローム粒・ロームブロック60%　若干の焼土粒・焼土ブロック・炭化粒を含む　粘性やや有　しまり有
2　7.5ＹＲ　3/4　暗褐　ローム粒･ローム小ブロック30%　焼土粒･焼土小ブロック･炭化粒･灰を含む　粘性・しまり有　部分的にもろい

(炉)
1　５ＹＲ　4/4　にぶい赤褐　灰・粘性粒・焼かれたロームブロック・炭化粒を含む　粘性弱　固いがボロボロ
2　7.5ＹＲ　4/4　褐　焼土粒・炭化粒・灰を含むローム層　粘性弱　しまり有
3　10ＹＲ　4/6　褐　焼土粒・炭化粒を含む灰黄　粘性・しまり有
4　５ＹＲ　4/3　褐　３層によく似ている　焼土粒・炭化粒・ローム粒を含む灰層　粘性・しまり有
5　7.5ＹＲ　3/4　暗褐　炭化粒を多量に含む　粘性弱　しまり有

２号居住跡

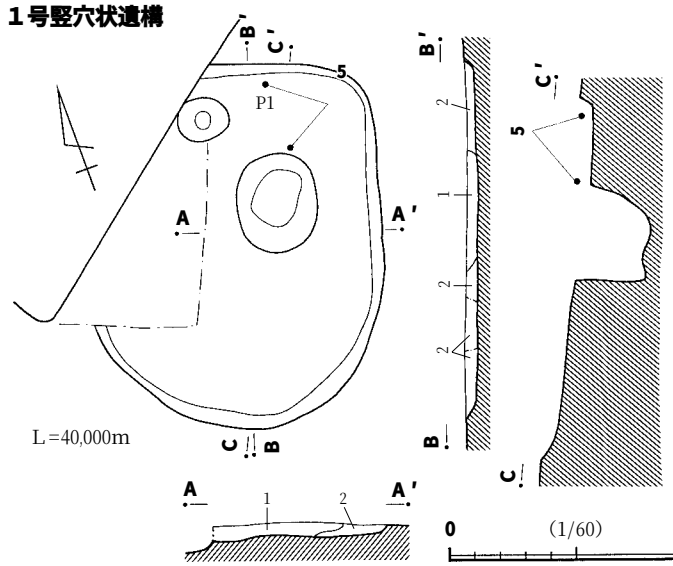




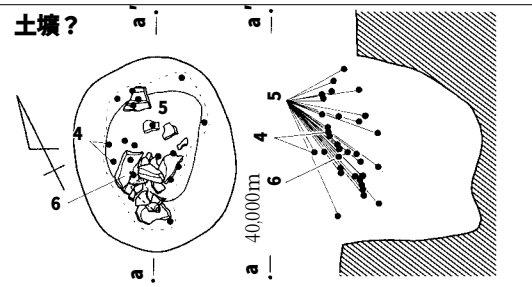
1　7.5ＹＲ　3/3　暗褐　ローム粒10%含む
2　7.5ＹＲ　3/4　暗褐　ローム粒20%含む　しまり良
床・ソフトローム中ところどころに踏み固めあり

(炉)
1　7.5ＹＲ　3/4　暗褐　ローム粒20%含む　しまり良

１号竪穴状遺構



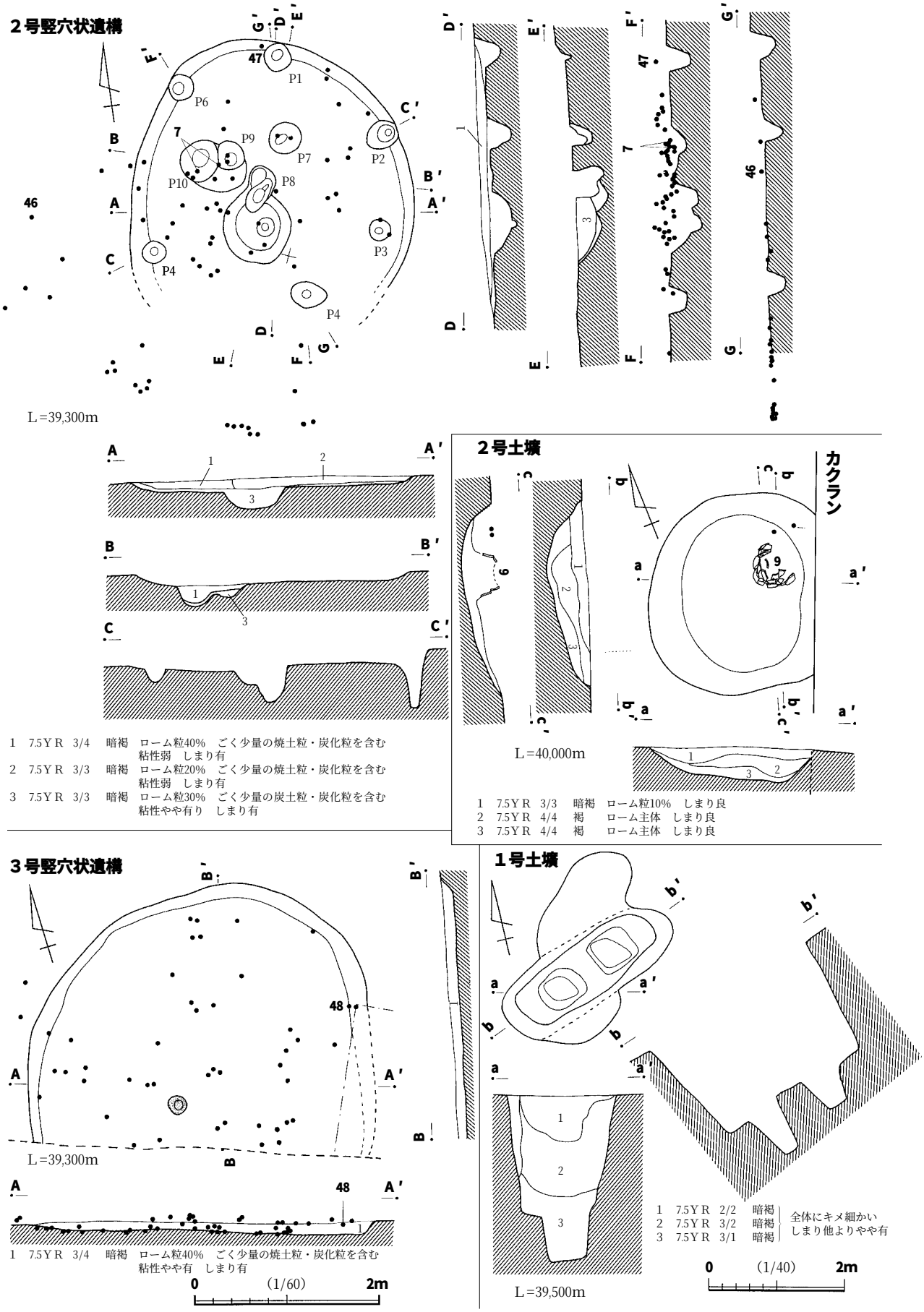
土壙？



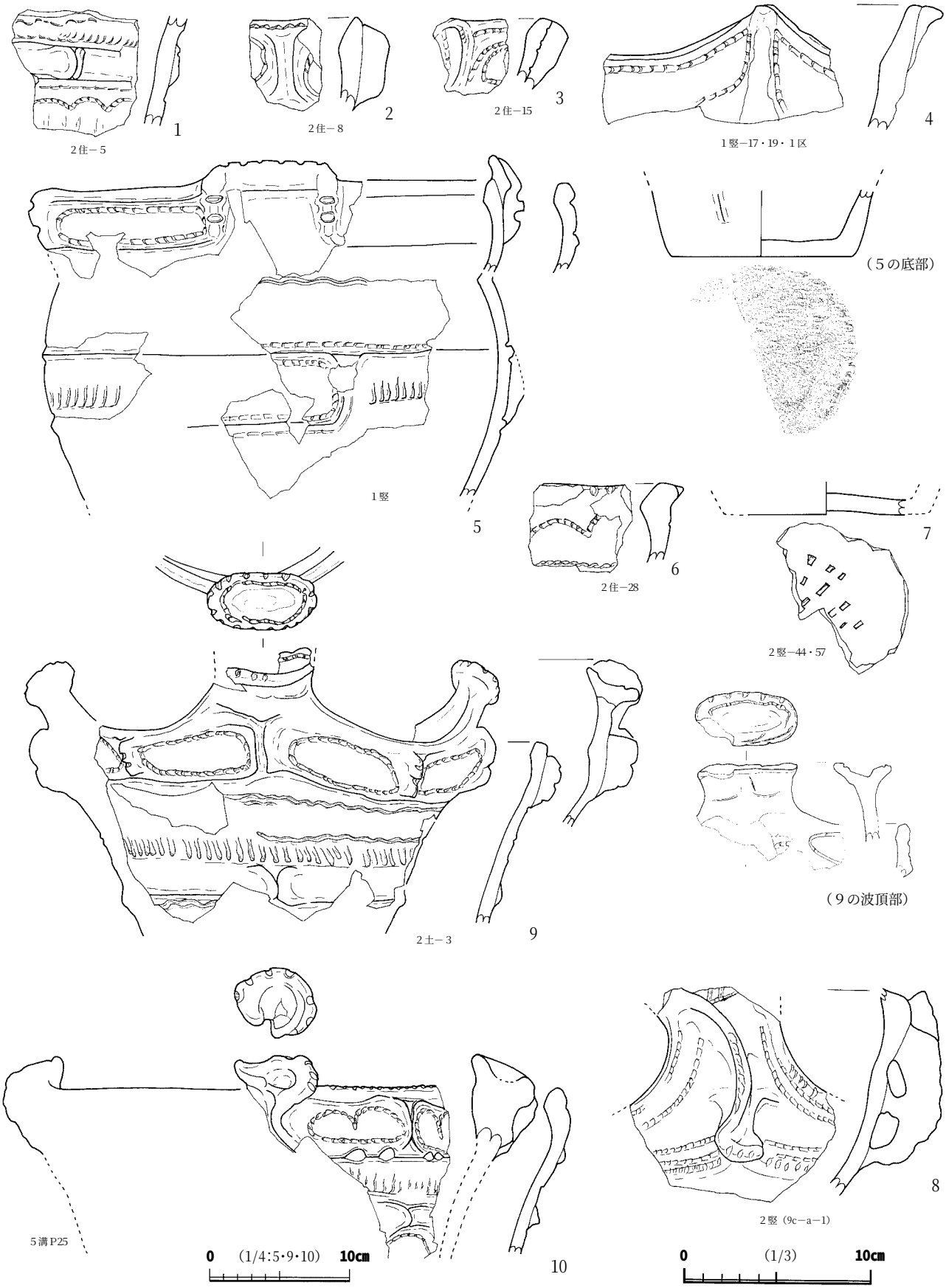
1　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　暗褐色土ブロック20%含む　ややしまる
2　7.5ＹＲ　3/3　暗褐　暗褐色土ブロック20%含む　ややしまる

0　(1/30)　1m

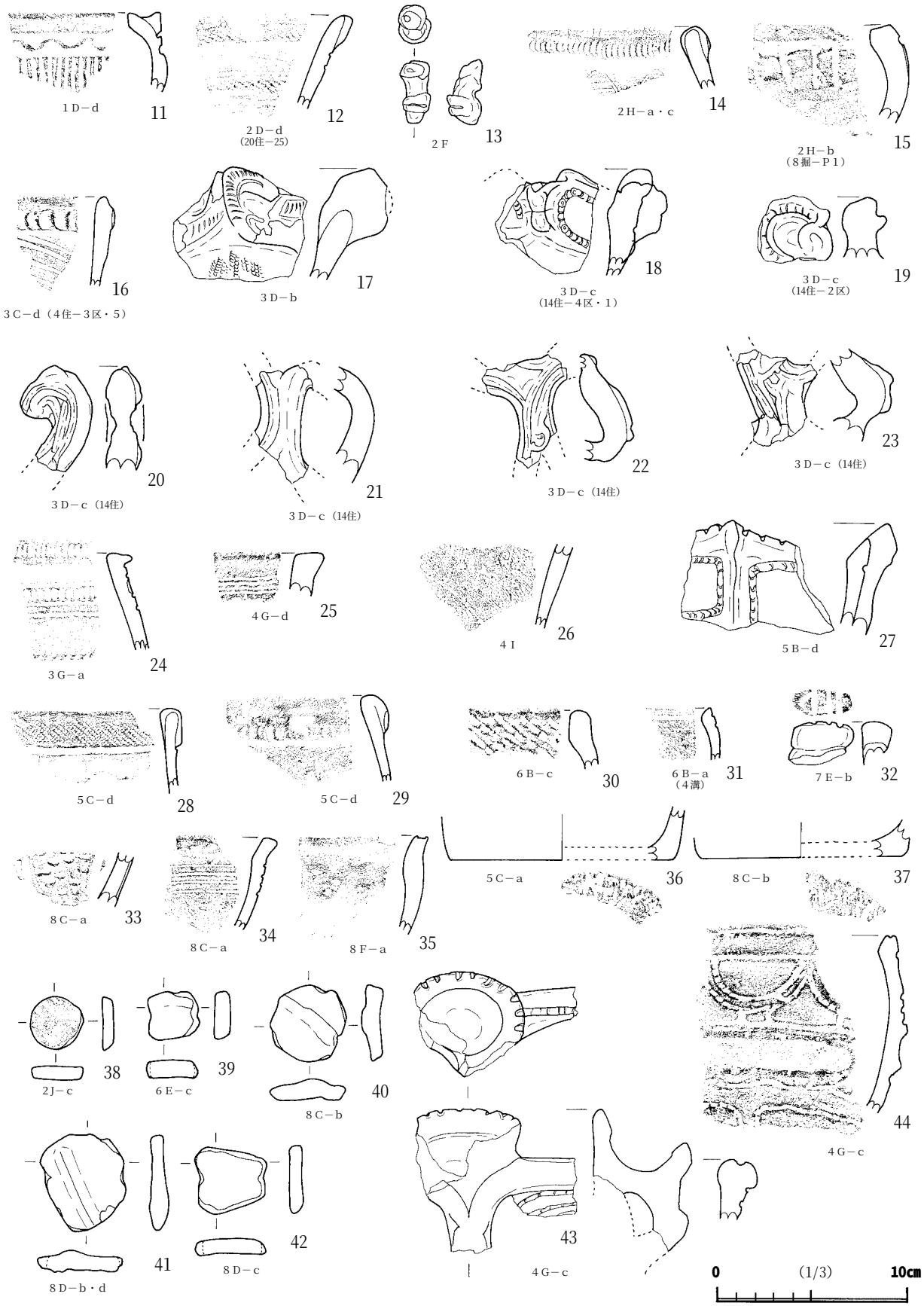
第６図　１・２号住居跡・１号竪穴状遺構



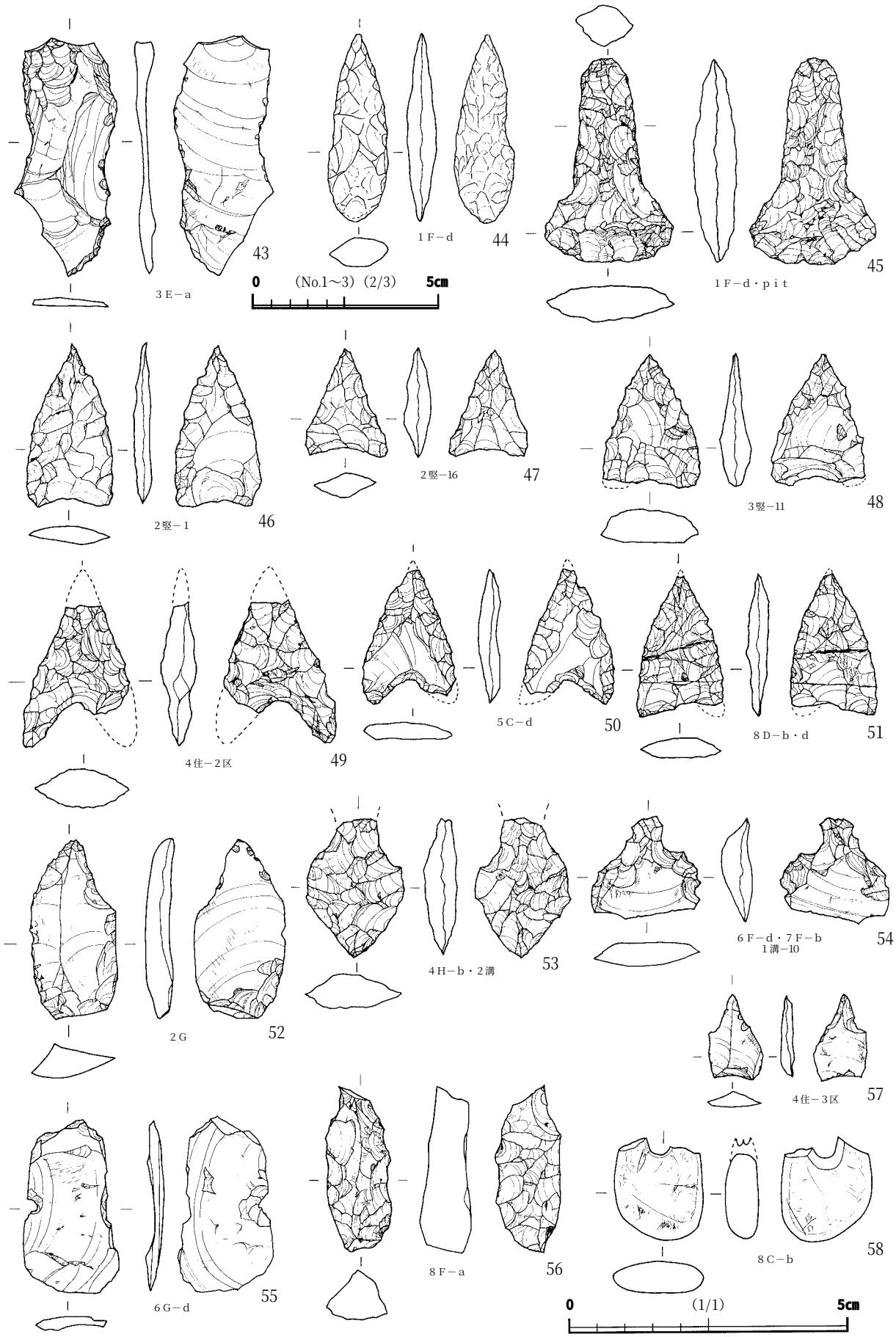
第７図　２・３号竪穴状遺構，１・２号土壙



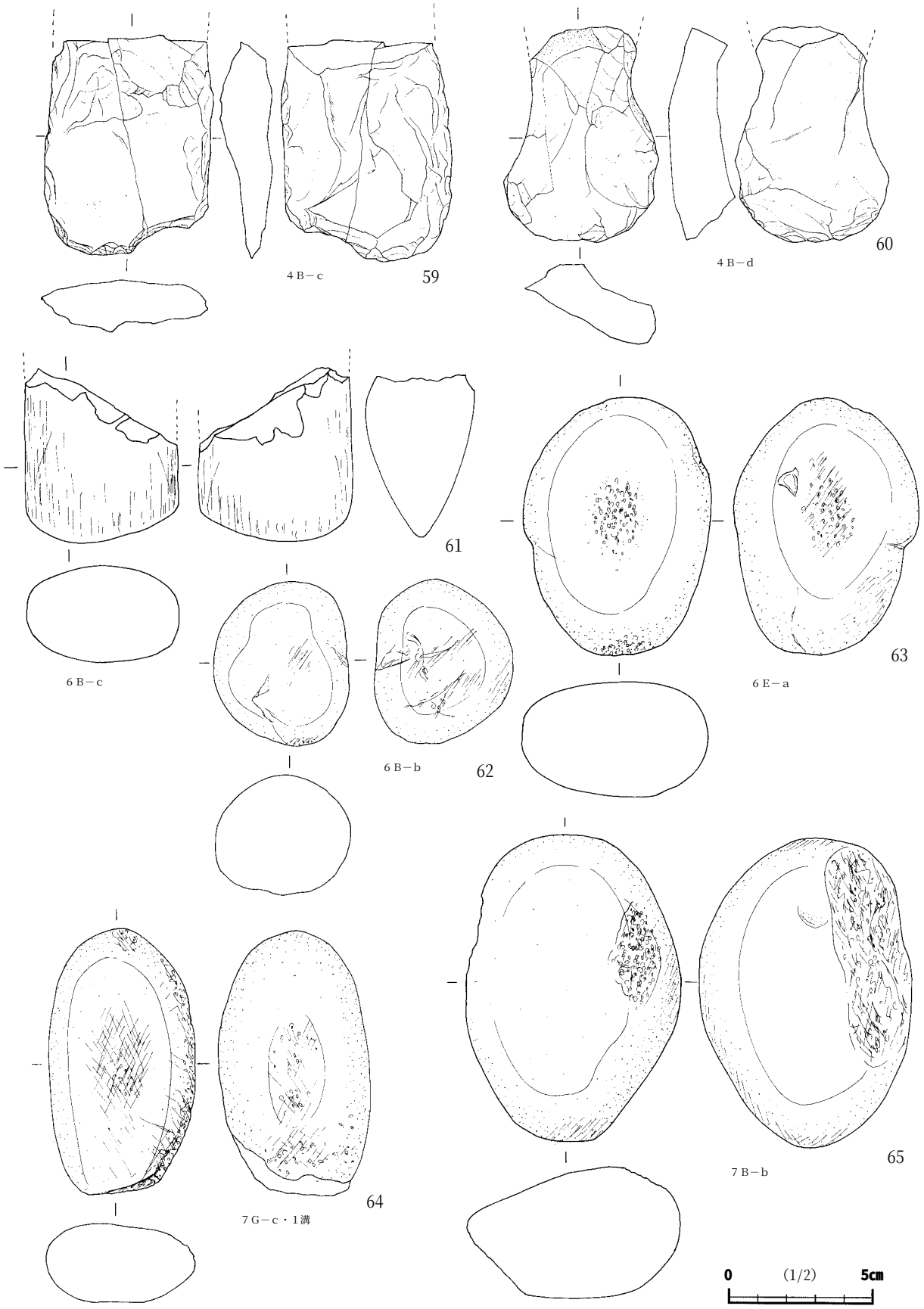
第８図　縄文時代遺物（1）〔土器〕



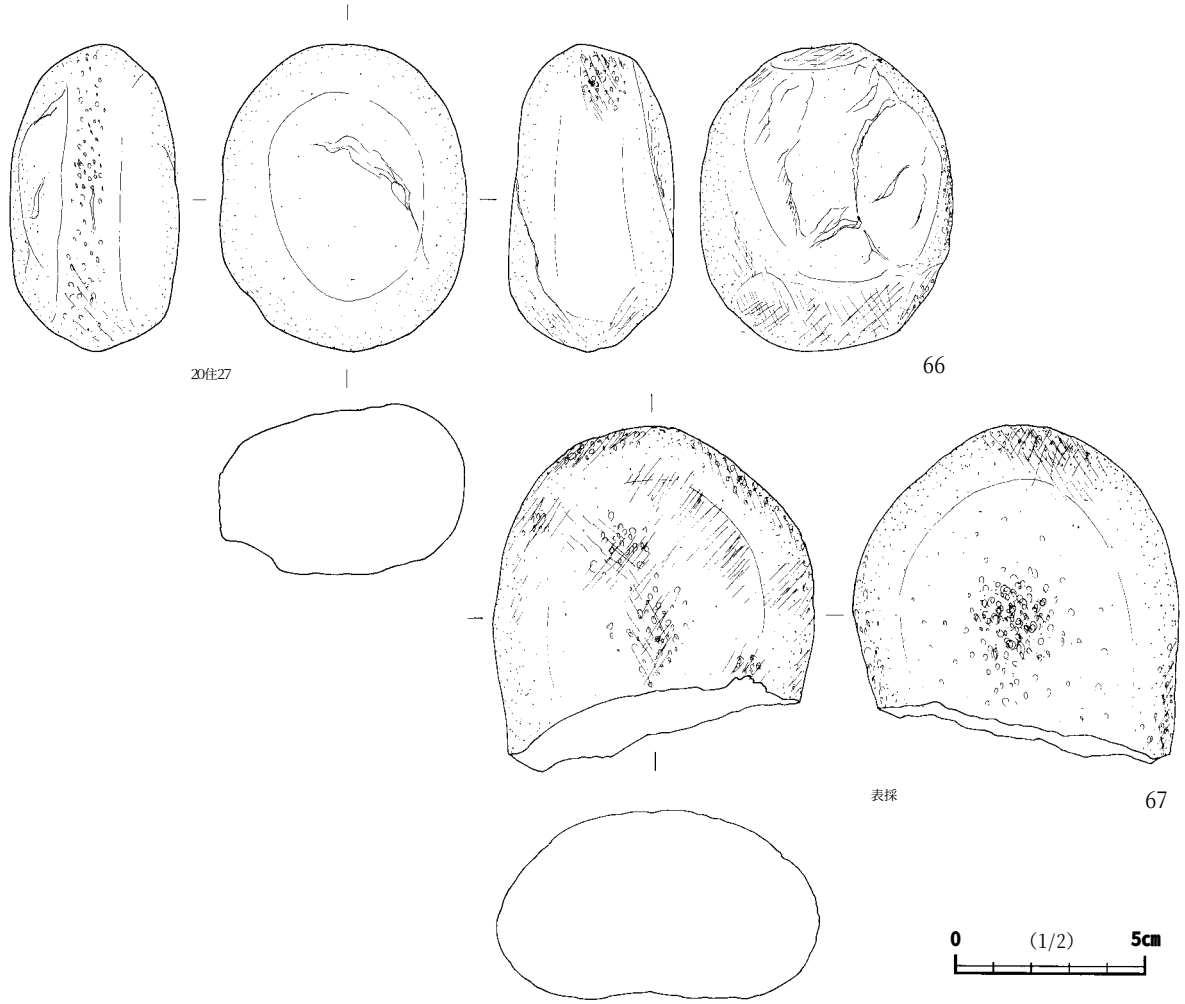
第９図　縄文時代遺物（2）〔土器・土製品〕



第10図　縄文時代遺物（3）〔石器〕



第11図　縄文時代遺物（4）〔石器〕



第12図　縄文時代遺物（5）〔石器〕

第１表　石器一覧表

№	出土遺構・地区	種類	石材	法量（cm・g）				形状・整形の特徴など	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
43	3E-a	スクレーパー	黒曜石	6.5	2.6	0.5	7.8		旧石器？
44	1F- d	尖頭器	頁岩	5.1	1.6	0.8	6.6	木葉形　　表面の風化が激しい	
45	6F- d　ピット内	凸型掻器	黒曜石	5.6	3.5	1.2	17.8	表面観察では、使用痕と使用による風化が激しい	東北南部地域の影響が伺える
46	２号竪穴状遺構１	石鏃	チャート	2.9	1.6	0.3	1.5	凹基無茎鏃・抉りは浅い 刃部先端を摘み上げるように整形している	東北南部地域の影響が伺える
47	２号竪穴状遺構16	石鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.6	2.3	凹基無茎鏃・抉りは浅い	
48	３号竪穴状遺構	石鏃	頁岩	2.0	1.5	0.5	0.8	凹基無茎鏃・抉りは浅い　小型	
49	４号住居跡２区	石鏃	黒曜石	2.6	1.8	0.7	2.7	凹基無茎鏃・抉りは深い	先端と下端を欠損しているので長さと重さは暫定値
50	5C- d	石鏃	チャート	2.5	1.3	0.3	1.3	凹基無茎鏃・抉りは深い	先端と下端を欠損しているので長さと重さは暫定値
51	8D- b・d	石鏃	黒曜石	2.6	1.6	0.4	1.7	凹基無茎鏃・抉りは浅い	下端を欠損しているので重さは暫定値
52	2G	尖頭掻器	黒曜石	3.3	1.5	0.7	2.8		
53	２号溝状遺構（4H- b）	ミニチュア石匙	黒曜石	2.6	1.8	0.6	2.4		上端を欠損しているので長さと重さは暫定値
54	１号溝状遺構（6F-d・7F-b）	ミニチュア石匙	黒曜石	2.0	1.9	0.5	1.3		
55	6G- d	不明石製品	黒曜石	3.2	1.7	0.3	2.0	側縁中央に人為的抉りがある	箆状石器？
56	8F-a	ドリル？	黒曜石	3.0	1.1	0.9	3.4		
57	４号住居跡３区	ドリル	黒曜石	1.6	1.0	0.3	0.3		
58	8C- b	石製垂飾	翡翠	1.8	1.6	0.6	3.0		上端を欠損しているので長さと重さは暫定値
59	4B- c	打製石斧	砂岩	8.0	5.8	1.7	113.7	短冊形	上半部を欠損しているので長さと重さは暫定値
60	4B- d	打製石斧	砂岩（変成）	7.6	5.4	1.7	99.4	分銅形	上半部を欠損しているので長さと重さは暫定値
61	6B- c	磨製石斧	安山岩	6.1	5.3	3.8	163.6		上半部を欠損しているので長さと重さは暫定値
62	6C- b	敲石素材		5.8	4.8	4.3	182.3		
63	6E-a	敲石・磨石	泥岩	9.0	6.6	4.1	374.4		
64	１号溝状遺構（7G- c）	敲石・磨石	砂岩	9.5	5.2	2.8	212.5		
65	7B- b	摩耗礫	安山岩	10.9	7.5	4.6	513.4		敲石の素材か？
66	20号住居跡27	敲石	砂岩？	8.2	6.5	4.5	365.6		
67	表採	敲石・磨石	石英安山岩	8.9	8.5	4.9	554.1		半分欠損しているので長さと重さは暫定値

圧痕がめぐり，その下部の波頂部直下位置にＸ字状の隆帯がみられる。阿玉台Ｉｂ式と考えられる。

10は，平縁に渦巻状突起を有する深鉢形土器である。口唇部に刻みが入り，Ｘ字状の隆帯に区画される楕円形区画が突起間に２個ずつ配置されている。区画内には上半が弧状をなす結節沈線が一条めぐる。区画下部の隆帯に２個一組の押圧がみられる。区画直下にヒダ状圧痕がめぐり，その下に隆帯がみられる。阿玉台Ｉｂ式と考えられる。

11は，口唇部に凹面を有する平縁の口縁部である。波状の貼り付け文があり，その直下に縦位の細かい並行沈線がみられる。阿玉台１ａ式と考えられる。12・14・16・28・29・32は，安行式である。

13は，環状把手の一部と考えられる。17～19は勝坂式である。19～23は大木８a式と考えられる。15・25～27は阿玉台式期である。30・31・34～37までも阿玉台式期である。33は，加曽利ＥⅣ式と考えてよい。38～42は土器片錘で阿玉台式期である。

石器に関しては，第１表にあるとおりであるが，若干補足を行っておく。

43のスクレーパーは，地区一括遺物中に包含されており，ローム層中の出土ではない。他に出土がないことから，攪乱（トレンチャー）による巻き上げで上層まで移動したものと推定される。

44は頁岩製の尖頭器だが，表面の風化が著しく，叩打痕などの調整が不明瞭である。

45の掻器は黒曜石製で，表面の肉眼観察から使用痕が激しいことが観察できる。長期間の反復使用が想定される。刃部は末広がりの箆状を呈する。第71図の５号溝状遺構内土坑のＰ27と28の間にある穴から単独で出土した。周辺に縄文時代の遺構は無いが，この地区の包含層から阿玉台式期の土器が多く出土したことから当該期の遺物である蓋然性が高い。

石鏃は，46～48・51が微凹基，49・50の凹基のものがあり，全て無茎である。46のチャート製のものは，先端部を微妙に摘み上げるように仕上げる点で東北南部地域にその特徴を求めることができる。

53と54はミニチュアの石匙である。54の刃部には使用痕と思われる削痕や刃こぼれがみられる。

55の黒曜石の板状製品は，中央部に明瞭な抉りをつけている。

ｄ　縄文時代遺物の出土傾向

縄文時代の遺物として確実に把握できるのは土器である。本遺跡では石器も出土しているが，地区毎の一括遺物として出土しているものが多く，時期の比定が困難なことから実数には含めていない。

土器の中で最も出土量が多かったのは，中期前葉の阿玉台式期である。総破片数3217破片の内，2680破片・約83%を占めている。西村正衛氏の型式編年観に照らすとＩｂ式・Ⅱ式・Ⅲ式のもので構成される。細片の中には，Ｉａ式やⅣ式と考えられそうなものも含まれるが，大方Ｉｂ～Ⅲ式期で納まるものと思われる。第13図上の図面は，当該期の遺物の出土分布傾向を表したものである。本調査範囲と事業対象範囲（確認調査時の成果）のほぼ全域に遺物が出土していることが伺える。その中でも特に１号竪穴状遺構のある４Ｅ区，1・２号住居跡と２・３号竪穴状遺構のある７Ｄ・８Ｃ～Ｅ区に特に集中していることがわかる。確認調査での成果だが，9C・９Ｅ区でも一定量の当該期の遺物が出土し，南側に遺物の拡散する傾向がみられることから，調査区の南側に接する谷頭部緩斜面に遺構が展開していた可能性が考えられる。全体的に本調査区域の東側に遺物が多いことがわかり，同一台地上の北西方向に位置する台畑遺跡（貝塚含む）でも当該期の遺物が表採できることから台地平坦部に広く遺構が展開していた可能性が高いと予想される。細片に関しては，当該期の詳細な時期差を把握

するには至らなかったことから時期的な偏りが有るか否かは不明である。

第13図下の図面は，阿玉台式期を除いて型式名が明確なものの分布を表している。勝坂式と大木８a式期の土器は出土量は少ないものの，3D-ｃ・４D-ａ区で地区的に重複して出土している。これらの地区出土の阿玉台式土器の詳細は検討できなかった。阿玉台式Ⅳ式期の遺物は確認することができなかった。大木８ａ式期の土器は14号住居跡の覆土中一括として取り上げられたものの中に含まれており，この周辺に大木８ａ式期の遺構が存在していた蓋然性が高い。加曽利Ｅ式Ｉ式期の土器は全く出土していないことから，加曽利Ｅ１式期の土器とは共伴しない勝坂式最終末の土器と大木８ａ式期の土器の供伴の可能性を示しているにすぎず，阿玉台Ⅳ式期の土器との関係も不明瞭である。また，５Ｂ区でも勝坂式の土器が出土しているが，微量であり遺構があった可能性は薄い。

加曽利Ｅ式は，Ⅱ～Ⅳ式期のものが確認されており，Ⅲ・Ⅳ期のものが主体を占める。型式不明の中期土器片の中には，相当数の当該期の遺物が包含されると思われる。本調査区域では，広く分布するが，まとまっている傾向はみられない。広く薄い遺物の分布であるが，北東側の未調査区域でも当該期の遺物が表採できることから，遺物・遺構の分布は調査区域外が主体である可能性もあろう。

後期の土器片は僅かである。堀之内式は１点のみで，分布を語るに至らない。安行式は28点あったが，本調査区域全域に散在していた。台地の完全に平坦を呈する地区から出土しており，北側の平坦部に遺構は展開していたのであろうか。

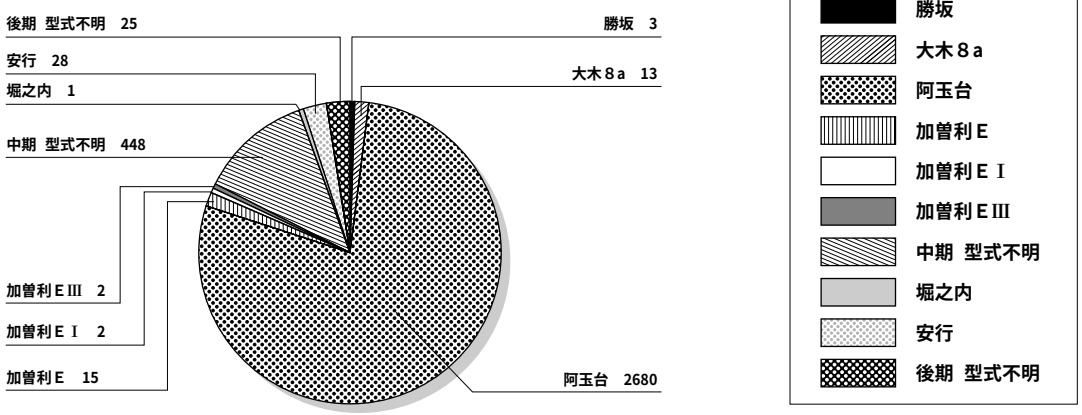
全体的に後期よりも中期，中期の中でも前半の土器が多く出土したことが理解できよう。調査範囲の南西の畑地では，後期・加曽利Ｂ式期の土器を含む後期の土器片が広く表採できたことから，後期の遺構群は南西部の谷頭最奥部の緩斜面に展開しているのであろうか。

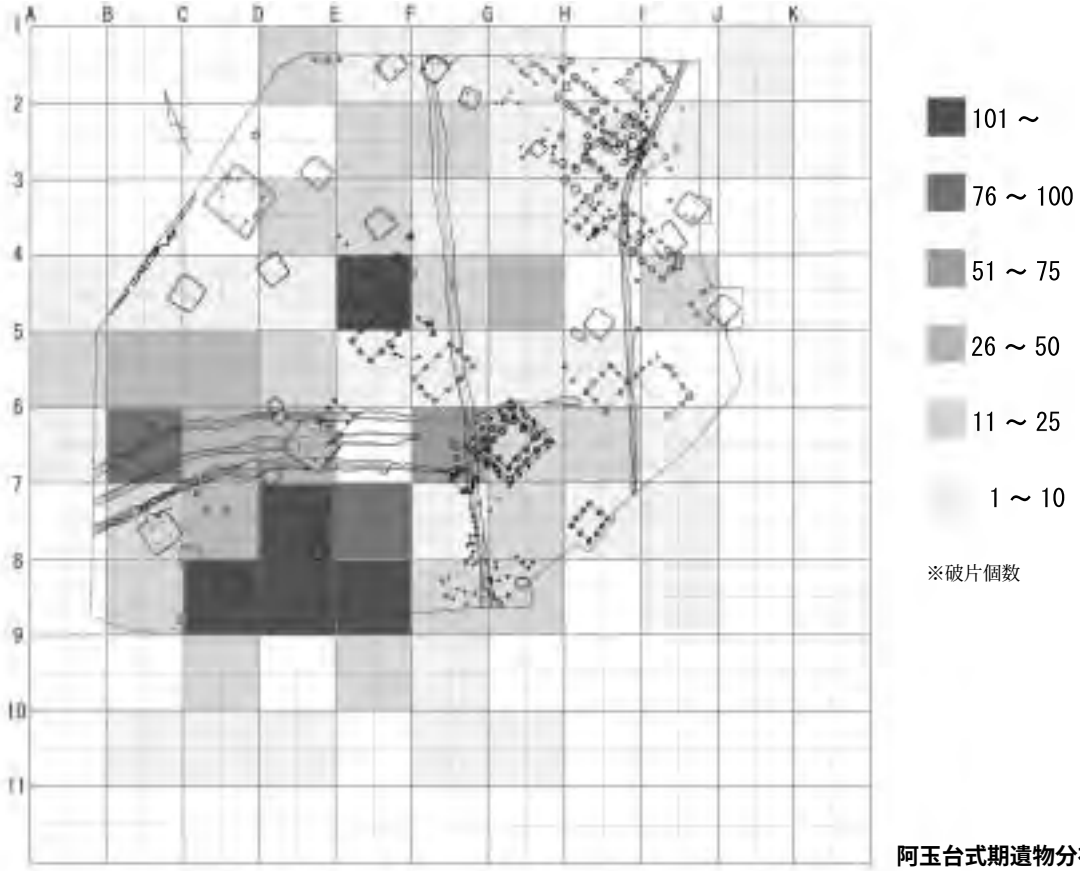
《参考文献》

西村正衛　「石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－」早稲田大学出版部　1984
山田貴久他「千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代）－（財）千葉県文化財センター　1998
大川清他編『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社　1996

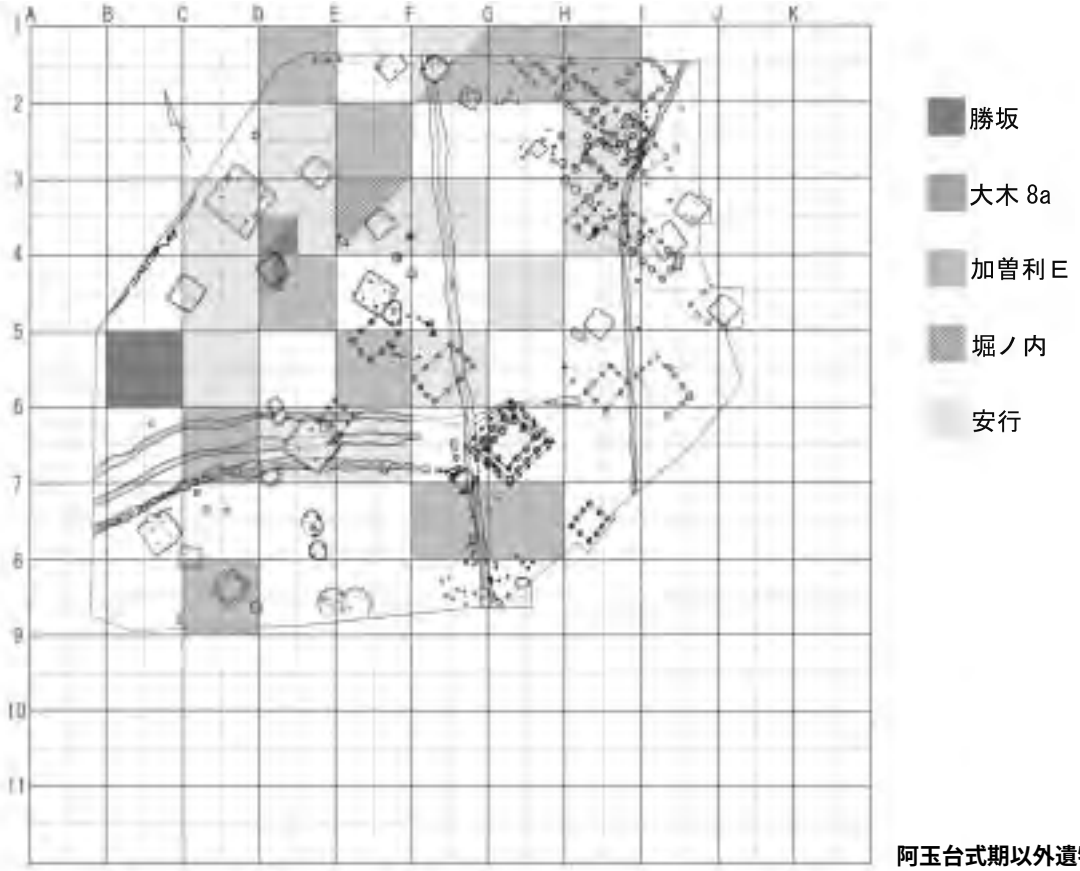
中　期							後　期			合　計
勝坂	大木8a	阿玉台	加曽利E	加曽利EⅠ	加曽利EⅢ	中　期 型式不明	堀之内	安行	後　期 型式不明	
3	13	2680	15	2	2	448	1	28	25	3217

グラフ１　縄文時代遺物個数





阿玉台式期遺物分布図



阿玉台式期以外遺物分布図

第13図　縄文時代遺物分布図

2　古墳時代以降

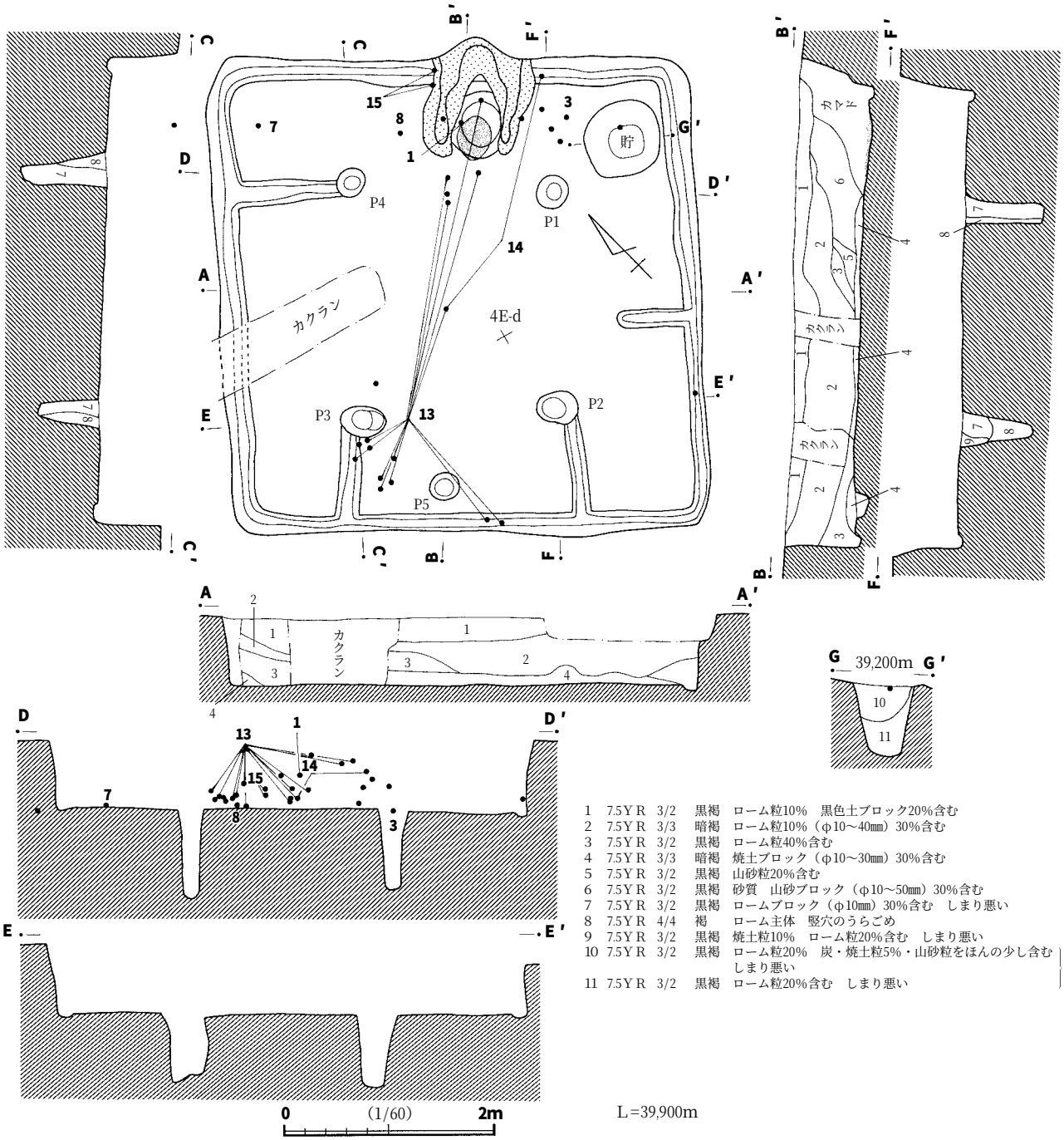
a　竪穴住居跡（第14～35図）

古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡は20軒検出された。法量などの計測値や特徴などの詳細は下記の一覧表（第２表）に記載しており，一覧に付記できなかった留意点については，当章の冒頭に記している。

第２表　古墳時代以降竪穴住居跡一覧

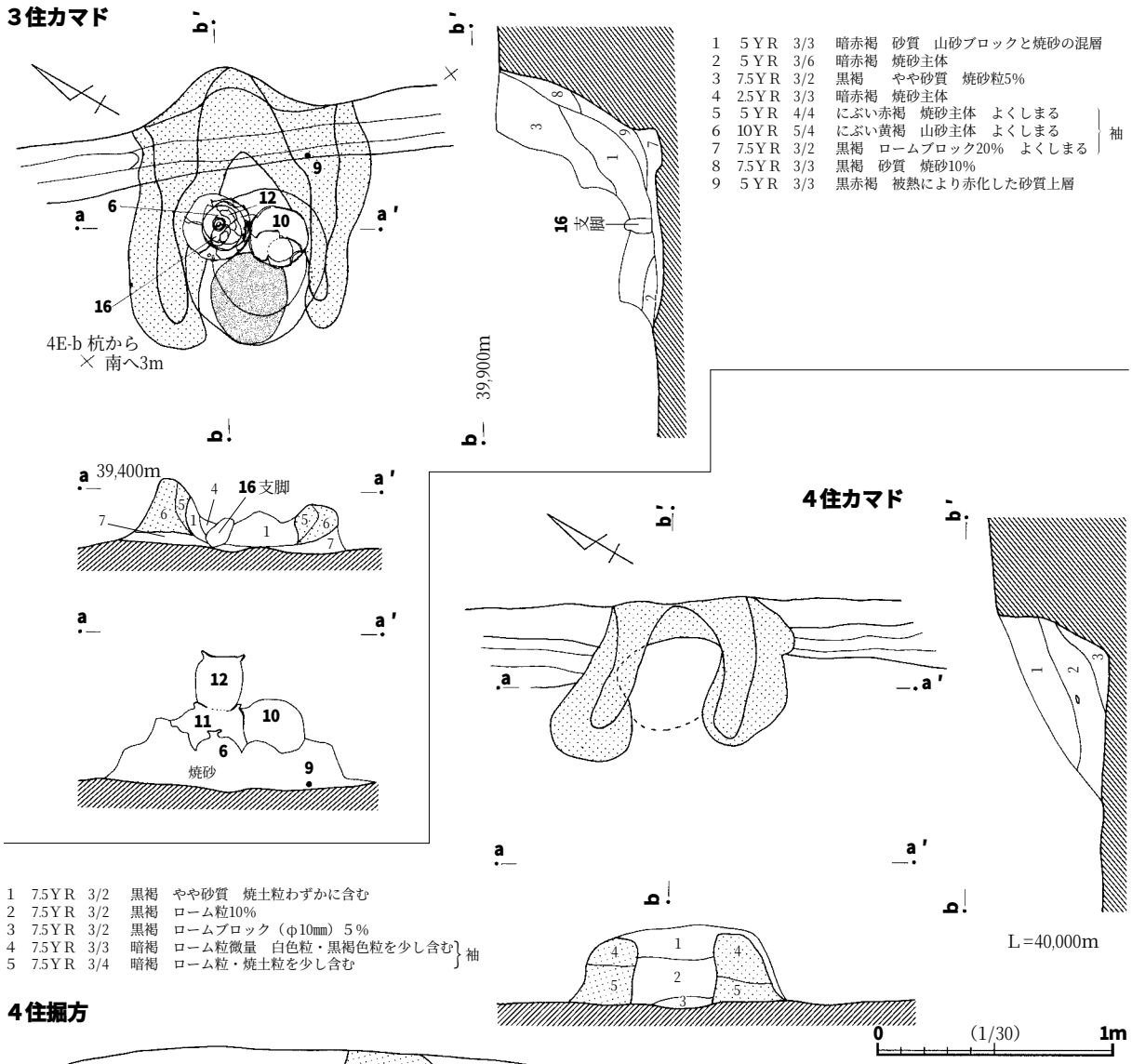
遺構番号	旧番号	方位	規模（m）			カマド	柱穴	階段ピット	貯蔵穴	壁溝	間仕切	貼床	硬化面	時代	備考
			長軸	短軸	壁残存高										
３号住居跡	11号住居跡	N-53°-E	4.62	4.54	0.64	北東壁中央	4	有	東角	全周	有	無	無	古墳時代後期（６世紀前半）	
						柱穴の平面形は小さめで，深さがある。カマドに土器が据えられた状態で出土。									
４号住居跡	18号住居跡	N-64°-E	6.2	5.6	0.5	北東壁中央	4	無	東角	全周	無	無	無	古墳時代後期（６世紀前半）	
						床面に焼土・炭化物が出土したことから、焼失家屋と考えられる。掘方では、間仕切りがある。									
５号住居跡	４号住居跡	N-28°-W	7.42	7.3	0.68	北壁中央	4	有	カマド東脇	全周	有	無	有	古墳時代後期（６世紀末から７世紀初頭）	
						階段ピットを廻る溝あり。やや上層から出土した遺物は奈良時代のものが含まれ、古い住居範囲内に納まる小型の遺構（土坑・住居跡など）があった可能性がある。									
６号住居跡	６号住居跡	N-64°-W	3.86	3.8	0.6	北西壁中央	無	有	無	全周	無	無	有	古墳時代後期（６世紀末から７世紀初頭）	
７号住居跡	15号住居跡	N-16°-W	4.54	4.5	0.44	北壁中央	4	無	カマド東脇	無	無	無	無	古墳時代後期（６世紀末から７世紀初頭）	
						貯蔵穴内と柱穴３から遺物が出土。柱穴３出土の甕は抜き取り後に据え置かれた可能性が高い。									
８号住居跡	12号住居跡	N-？°-E	－	－	0.46	－	無？	有	－	全周？	無	有	無	奈良時代（８世紀末から９世紀初頭）	地山ローム層まで達しない住居掘方をセクション中で確認。８′号住居跡とする。
						遺構の北半分は調査区域外で未調査。１溝・12住・８′住よりも古い住居跡。									
９号住居跡	13号住居跡	N-30°-W	3.2	3.1	0.5	北角	無	無	無	全周	無	無	無	奈良時代（８世紀末から９世紀初頭）	
10号住居跡	20号住居跡	N-58°-E	3.4	3.2	0.48	南西壁中央	無	無	無	全周	無	無	無	奈良時代（８世紀末から９世紀初頭）	
						19土よりも古い遺構。									
11号住居跡	２号住居跡	N-30°-W	1.66	1.5	0.06	北壁中央	1	有	無	全周	無	無	有	平安時代（９世紀）	
						拡張されている。旧い住居跡のカマドは東壁側か。									
12号住居跡	３号住居跡	N-65°-E	3.14	2.7	0.2	東壁中央	無	無	北西角	全周	無	無	無	平安時代（９世紀）	
13号住居跡	５号住居跡	N-70°-E	2.02	2.02	0.34	東角	無	無	無	無	無	無	無	平安時代（９世紀）	
14号住居跡	７号住居跡	N-56°-E	3.3	3.2	0.12	東壁中央	無	無	無	全周	無	無	無	平安時代（９世紀）	
15号住居跡	８号住居跡	N-50°-E	2.44	2.44	0.18	北東壁中央	４？	無	無	全周	無	無	無	平安時代（９世紀）	
						柱穴は南側の二穴が攪乱により不明。									
16号住居跡	９号住居跡	N-62°-E	3.8	3.32	0.5	東壁中央	無	有	南東角	西壁側のみ	無	無	無	平安時代（９世紀）	
						旧カマドの痕跡が北壁中央部にあり。									
17号住居跡	10号住居跡	N-15°-W	3.86	3.7	0.26	北壁中央	無	無	無	全周	無	有？	無	平安時代（９世紀）	
						カマドは確認調査時に破壊。									
18号住居跡	16号住居跡	N-22°-E	2.94	2.88	0.14	北東壁中央	４？	無？	無	無	無	無	無	平安時代（９世紀）	
						柱穴３と階段ピットは確認調査グリッドで破壊。									
19号住居跡	19号住居跡	N-55°-E	2.04	1.94	0.36	東角	無	無	無	北西・南西壁のみ	無	無	無	平安時代（９世紀）	
20号住居跡	１号住居跡	N-64°-E	3.4	3.24	0.16	東壁中央	無	無	無	全周	無	無	無	平安時代（10世紀）	
						焼土・炭化物あり。カマド側にテラス状の平坦部あり。									
21号住居跡	14号住居跡	N-62°-E	3.3	3.2	0.1	東壁中央	無	無	無	全周	無	無	無	平安時代（10世紀）	
22号住居跡	17号住居跡	N-25°-W	3.86	3.68	0.28	北壁中央	無	無	無	全周	無	無	有	平安時代（10世紀）	
						北東角と東側にテラス状の平坦部あり。拡張ではない。									

※　1. 方位の軸線はカマドを中心に磁北から算出
※　2. 壁残存高は検出面（主にソフトローム層上面）からの値
※　3. 階段ピットは基本的にカマドの対面にあるのが通例だが，異なる場合は方位を掲載



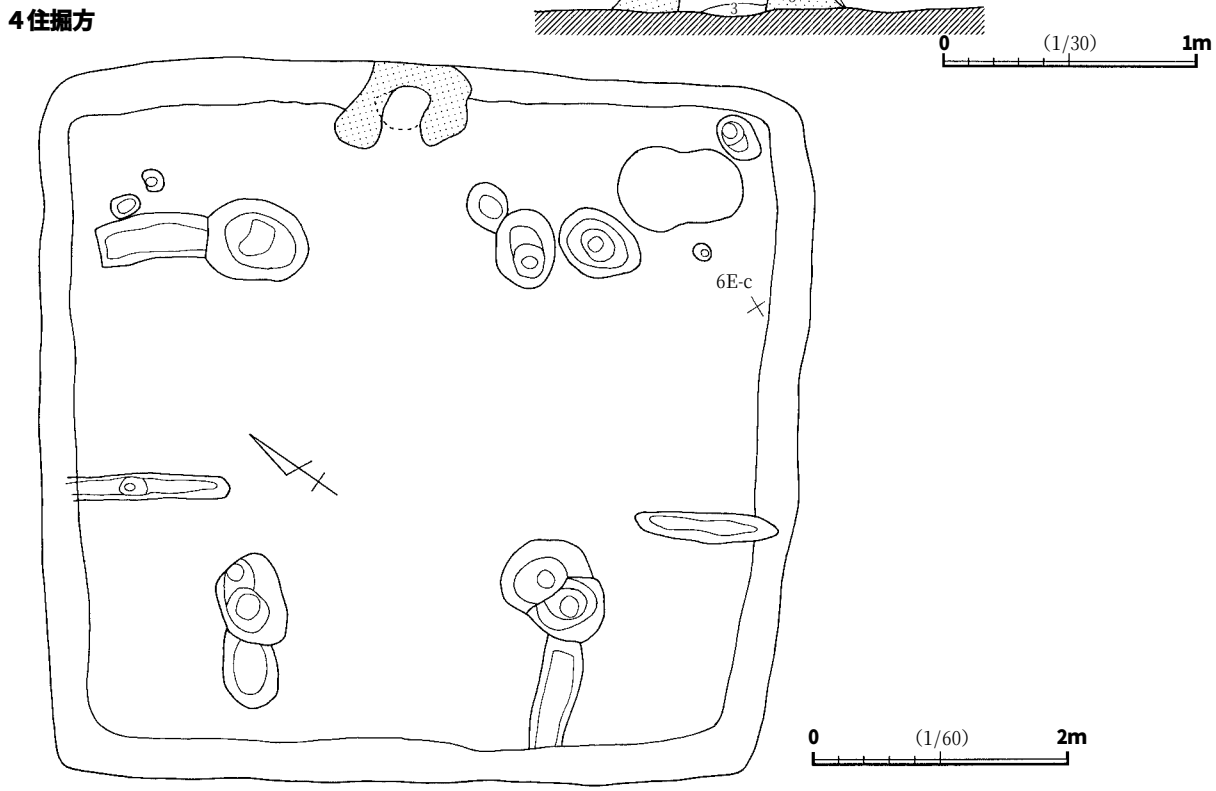
1　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒10%　黒色土ブロック20%含む
2　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒10%（φ10～40㎜）30%含む
3　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒40%含む
4　7.5YR　3/3　暗褐　焼土ブロック（φ10～30㎜）30%含む
5　7.5YR　3/2　黒褐　山砂粒20%含む
6　7.5YR　3/2　黒褐　砂質　山砂ブロック（φ10～50㎜）30%含む
7　7.5YR　3/2　黒褐　ロームブロック（φ10㎜）30%含む　しまり悪い
8　7.5YR　4/4　褐　ローム主体　竪穴のうらごめ
9　7.5YR　3/2　黒褐　焼土粒10%　ローム粒20%含む　しまり悪い
10　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒20%　炭・焼土粒5%・山砂粒をほんの少し含む　しまり悪い　貯蔵穴
11　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒20%含む　しまり悪い　貯蔵穴

第14図　３号住居跡

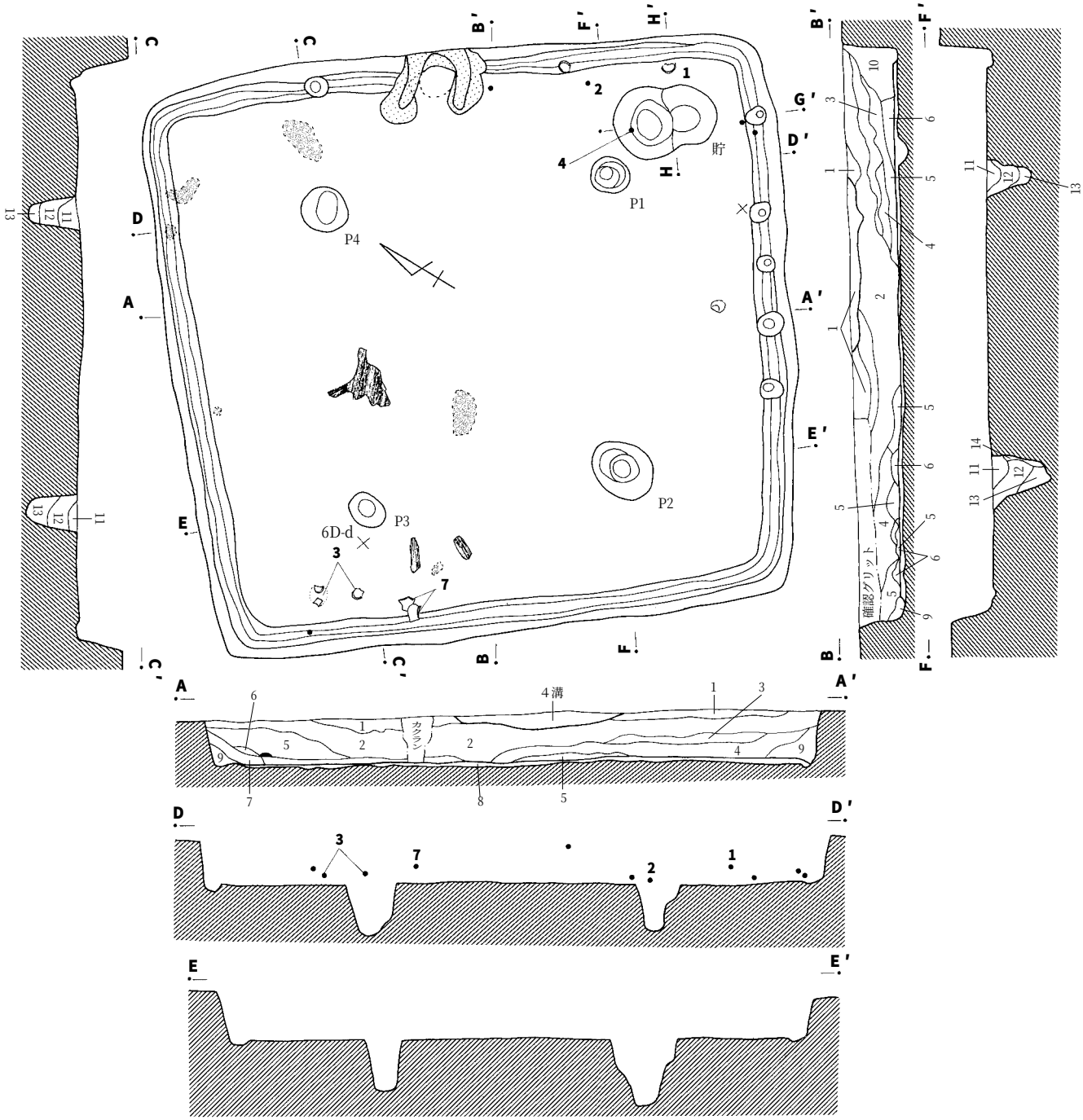


1 5YR 3/3 暗赤褐 砂質 山砂ブロックと焼砂の混層
2 5YR 3/6 暗赤褐 焼砂主体
3 7.5YR 3/2 黒褐 やや砂質 焼砂粒5%
4 2.5YR 3/3 暗赤褐 焼砂主体
5 5YR 4/4 にぶい赤褐 焼砂主体 よくしまる
6 10YR 5/4 にぶい黄褐 山砂主体 よくしまる
7 7.5YR 3/2 黒褐 ロームブロック20% よくしまる
} 袖
8 7.5YR 3/3 黒褐 砂質 焼砂10%
9 5YR 3/3 黒赤褐 被熱により赤化した砂質上層

1 7.5YR 3/2 黒褐 やや砂質 焼土粒わずかに含む
2 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒10%
3 7.5YR 3/2 黒褐 ロームブロック（φ10㎜）5%
4 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒微量 白色粒・黒褐色粒を少し含む
5 7.5YR 3/4 暗褐 ローム粒・焼土粒を少し含む
} 袖

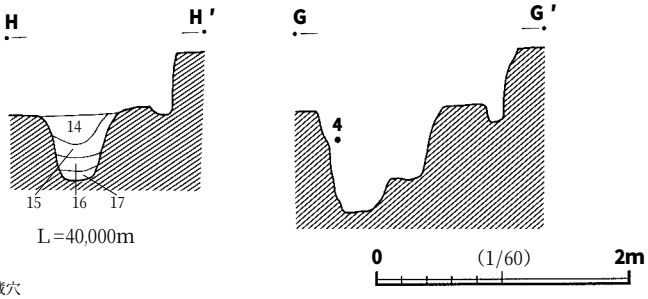


第15図　3・4号住居跡カマド・4号住居跡掘方

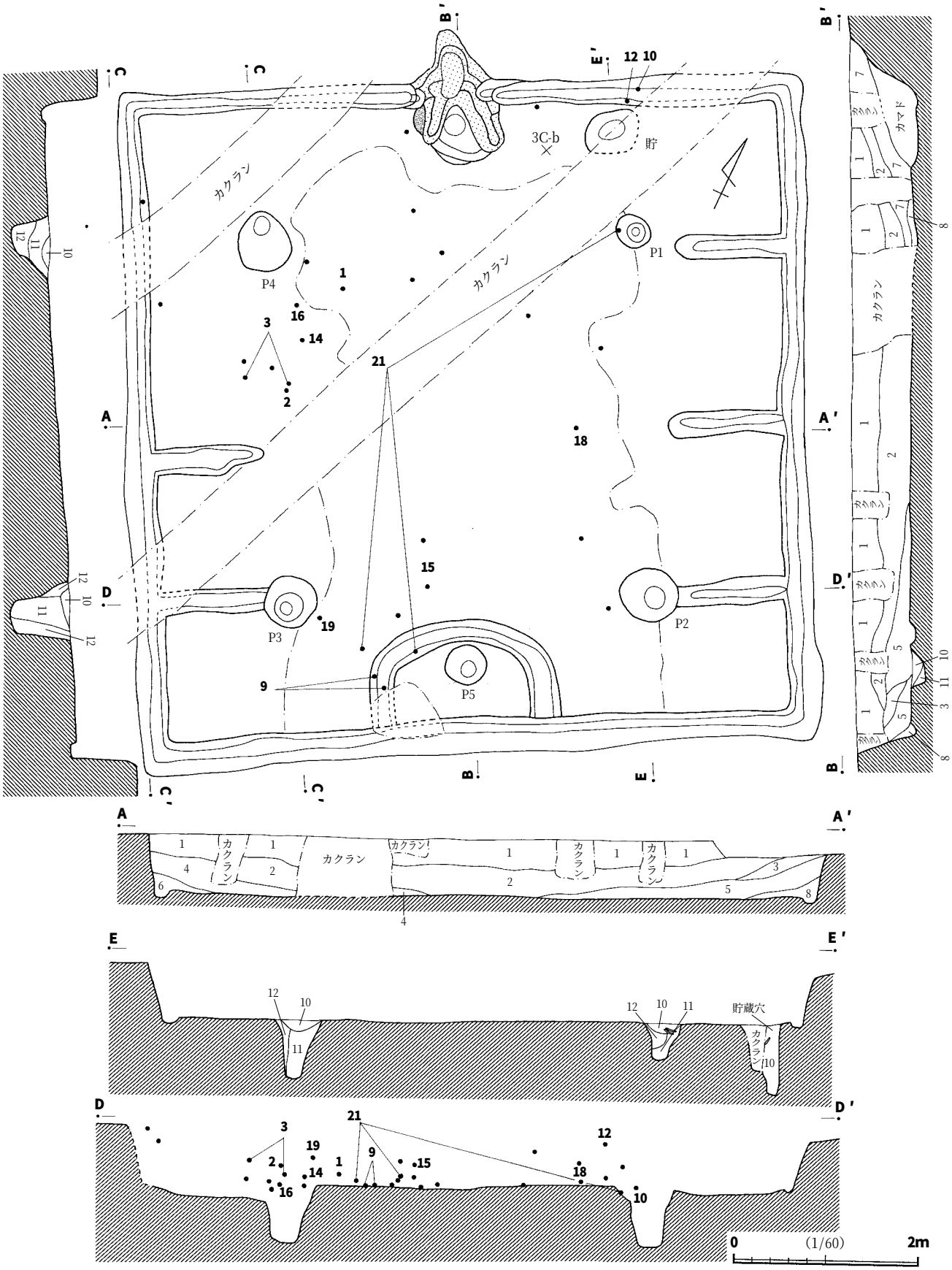


1	7.5YR	3/3	暗褐	しまりやや有
2	7.5YR	2/3	極暗褐	ローム粒微量に含む　しまりやや有
3	7.5YR	3/1	黒褐	ローム粒・小ブロック（φ5～10㎜）やや多く全体に含む
4	7.5YR	3/2	黒褐	３層と似るが　しまり悪く
5	7.5YR	3/2	暗赤褐	ローム粒・小ブロック（φ5～20㎜）を含む　しまりやや有
6	7.5YR	3/4	暗赤褐	貼床　しまり有
7	7.5YR	3/2	暗赤褐	ローム粒・小ブロック（φ10㎜）含む　キメが細かい
8	7.5YR	3/1	黒褐	ロームを多く含む　しまり有
9	7.5YR	4/3	にぶい赤褐	ローム粒・山砂粒少し含む
10	7.5YR	3/1	黒褐	ロ山砂粒・ローム粒を多く含む　カマドの砂のまじりか？
11	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒・炭・焼土５％含む
12	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒20％含む
13	7.5YR	3/4	暗褐	ローム粒20％含む　しまり悪
14	7.5YR	3/2	黒褐	やや砂質　ローム粒10％含む　焼土粒をわずかに含む
15	7.5YR	3/2	黒褐	焼土粒20％含む
16	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒10％含む
17	7.5YR	3/4	暗褐	ローム粒10％含む　粘性やや有

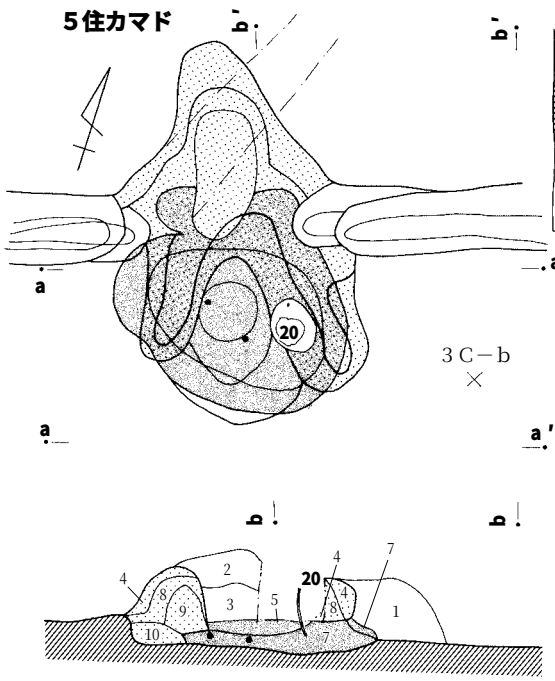
貯蔵穴

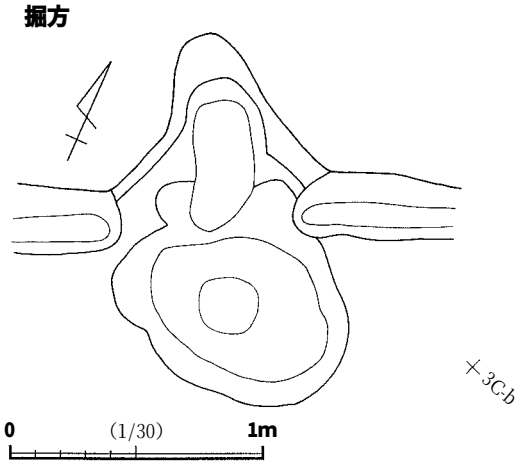


第16図　４号住居跡



第17図　５号住居跡



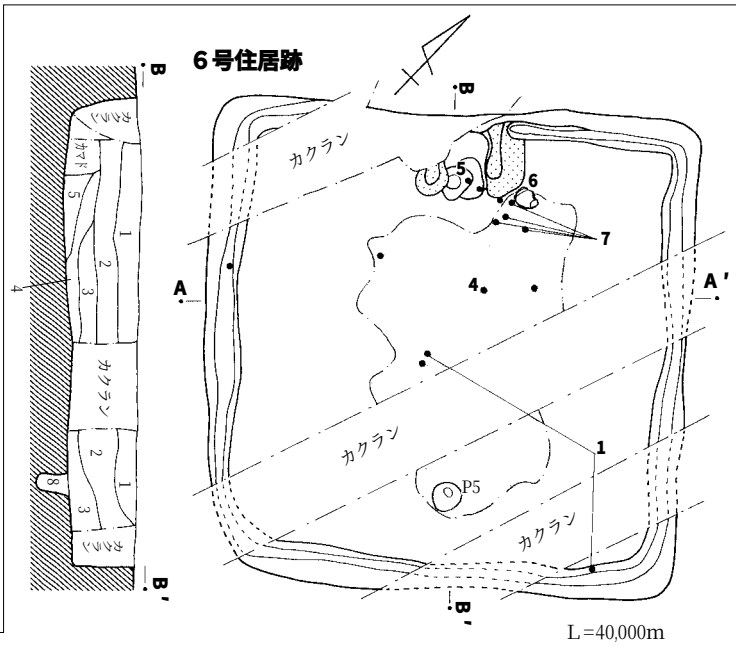


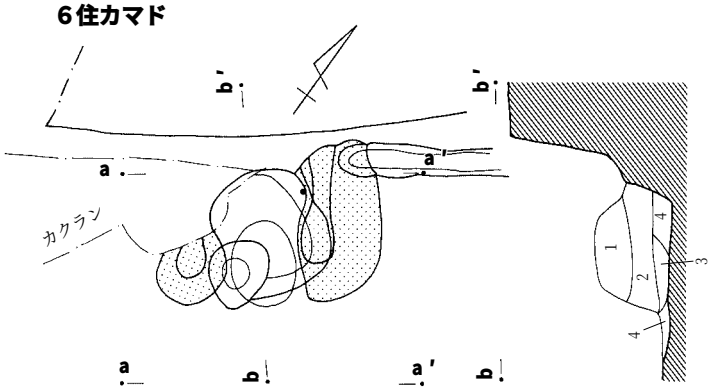
5号住居跡

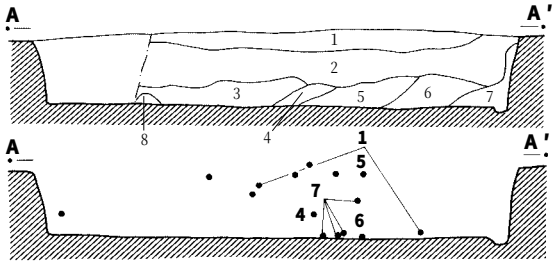
1	7.5YR 2/2	黒褐	暗褐色土ブロック（φ10～20㎜）40%	粘性弱　しまり有
2	7.5YR 2/2	黒褐	ローム粒10%	粘性弱　しまり有り
3	7.5YR 3/2	黒褐	ローム粒・焼砂ブロック（φ10㎜）10%	粘性弱　しまり有
4	7.5YR 3/4	暗褐	ローム粒30%	粘性弱　しまり有
5	7.5YR 3/3	暗褐	ローム粒10%	粘性弱　しまり有
6	7.5YR 3/2	黒褐	ローム粒20%	粘性弱　しまり有
7	7.5YR 3/2	黒褐	やや砂質	粘性無　しまり有
8	7.5YR 4/3	褐	砂主体	粘性無　しまり良
9	7.5YR 3/3	暗褐	ローム粒20%	粘性無　しまりやや弱
10	7.5YR 2/2	黒褐	若干のローム粒・ローム小ブロック（5㎜）を含む ごく少量の炭化粒・焼土粒を含む	粘性・しまり弱
11	7.5YR 3/4	暗褐	多量のローム粒・ロームブロックを含む	粘性ややあり　しまり有
12	7.5YR 4/6	褐	若干の暗褐色土を含むローム粒・ロームブロックの層	粘性・しまり有
13	7.5YR 4/4	褐	よく固められたローム粒・ロームブロック層	粘性・しまり有

（カマド）

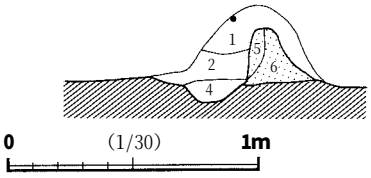
1	7.5YR 3/4	暗褐	多量のローム粒・ローム小ブロック（5～10㎜）・若干の焼土粒・ 炭化粒を含む砂まじりの層	粘性やや有　しまり有
2	7.5YR 4/4	褐	若干のローム粒・炭化粒・焼土粒を含む砂まじりの層	粘性・しまり弱
3	7.5YR 4/4	褐	多量の焼土・砂ブロック及び若干の炭化粒・ローム粒を含む	粘性・しまり有
4	7.5YR 5/4	にぶい褐	若干の焼土粒・炭化粒を含む砂層	粘性・しまり強
5	7.5YR 2/4	極暗赤褐	多量の焼土粒・焼土小ブロック・炭化粒を含む砂層	粘性・しまり弱
6	7.5YR 3/4	暗褐	若干のローム粒・焼土粒・炭化粒・砂を含む	粘性弱　しまりやや有
7	5YR 3/4	暗赤褐	焼かれたロームブロック・焼土粒・炭化粒を含む	粘性弱
8	7.5YR 4/4	褐	若干の焼土粒・炭化粒を含む粘土で固められた砂層	粘性有　しまり強
9	5YR 3/6	暗赤褐	多量の焼土粒・焼土ブロック・炭化粒を含む砂層	粘性・しまり有
10	7.5YR 4/4	褐	若干の焼土粒・ローム小ブロック（10～20㎜）・粘土粒を含む砂層	粘性有　しまり強



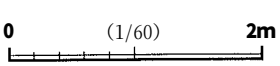




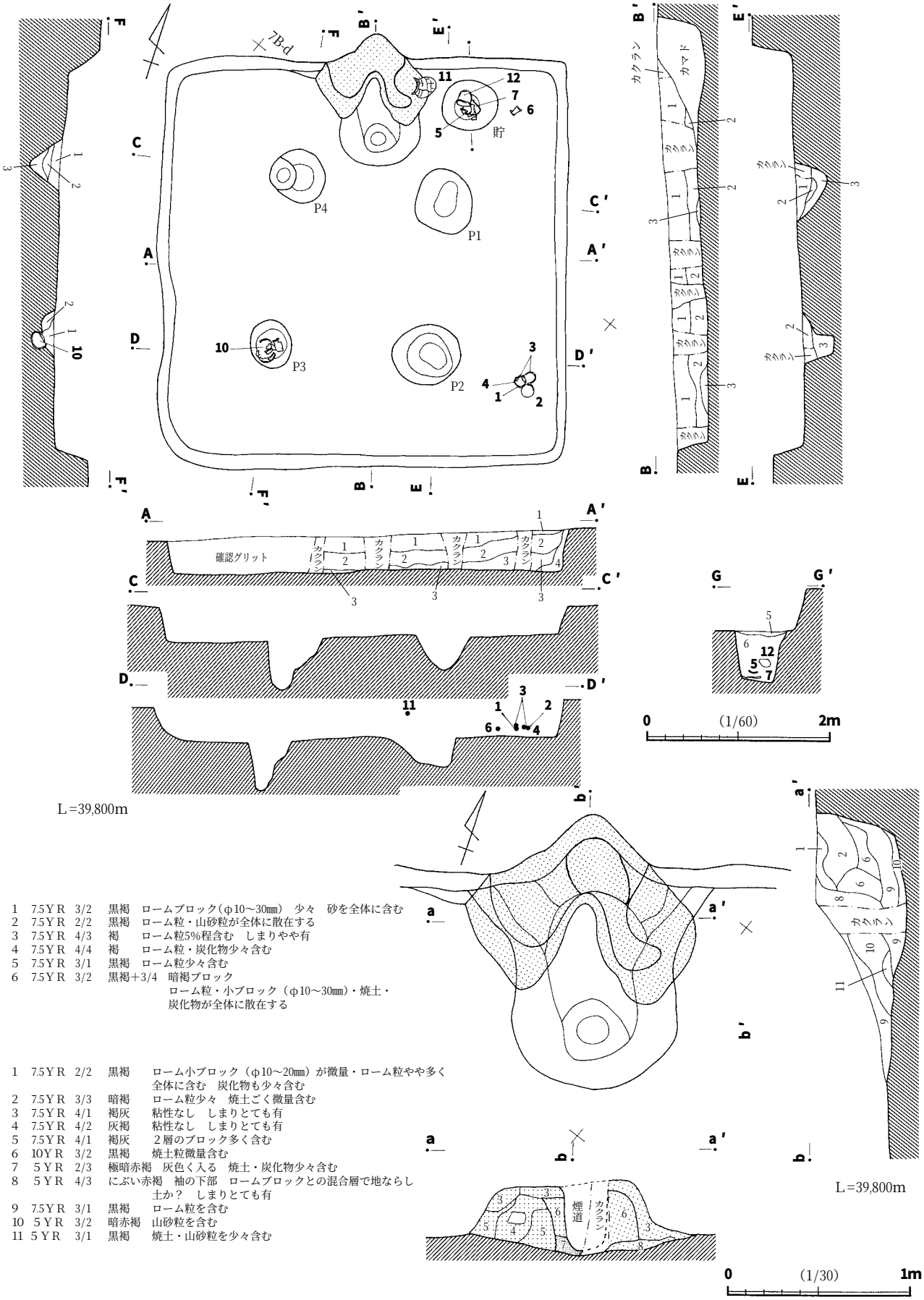
1	7.5YR 2/2	黒褐		粘性弱　しまり有
2	7.5YR 2/2	黒褐	ローム粒10%	粘性弱　しまり有
3	7.5YR 3/2	黒褐	やや砂質	粘性無　しまり有
4	7.5YR 3/2	黒褐	黄灰色砂40%	粘性無　しまり有
5	7.5YR 3/2	黒褐	ローム粒15%	粘性弱　しまり有
6	7.5YR 3/3	暗褐	ローム粒20%	粘性弱　しまり有
7	7.5YR 3/2	黒褐	ローム粒10%	粘性弱　しまりやや弱
8	7.5YR 3/2	黒褐	ローム粒20%	粘性弱　しまり有



1	7.5YR 3/3	暗褐	砂質　ローム粒10%	粘性弱　しまり有
2	5YR 3/2	暗赤褐	砂質　焼土粒10%	粘性弱　しまり有
3	7.5YR 3/3	暗褐	焼土粒30%　火床部	粘性弱　しまり有
4	7.5YR 3/2	黒褐	ローム粒10%	粘性弱　しまり有
5	5YR 3/3	暗赤褐	焼砂主体	粘性無　しまり有
6	10YR 3/2	黒褐	砂主体	粘性無　しまり良



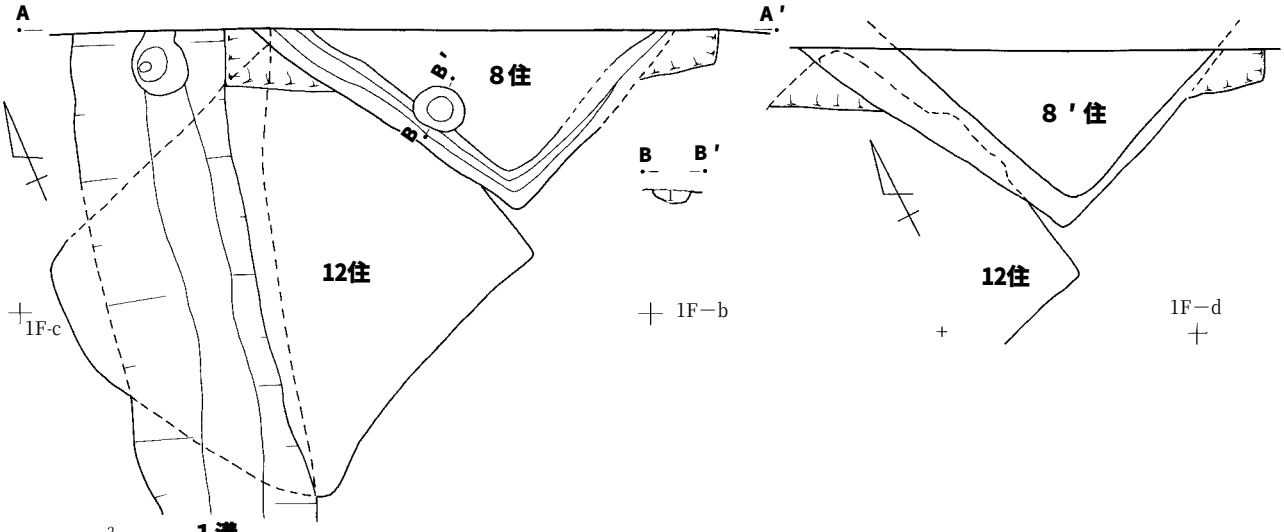
第18図　５号住居跡カマド・６号住居跡



1　7.5YR　3/2　黒褐　ロームブロック（φ10～30㎜）少々　砂を全体に含む
2　7.5YR　2/2　黒褐　ローム粒・山砂粒が全体に散在する
3　7.5YR　4/3　褐　ローム粒5%程含む　しまりやや有
4　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・炭化物少々含む
5　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒少々含む
6　7.5YR　3/2　黒褐＋3/4　暗褐ブロック
ローム粒・小ブロック（φ10～30㎜）・焼土・
炭化物が全体に散在する

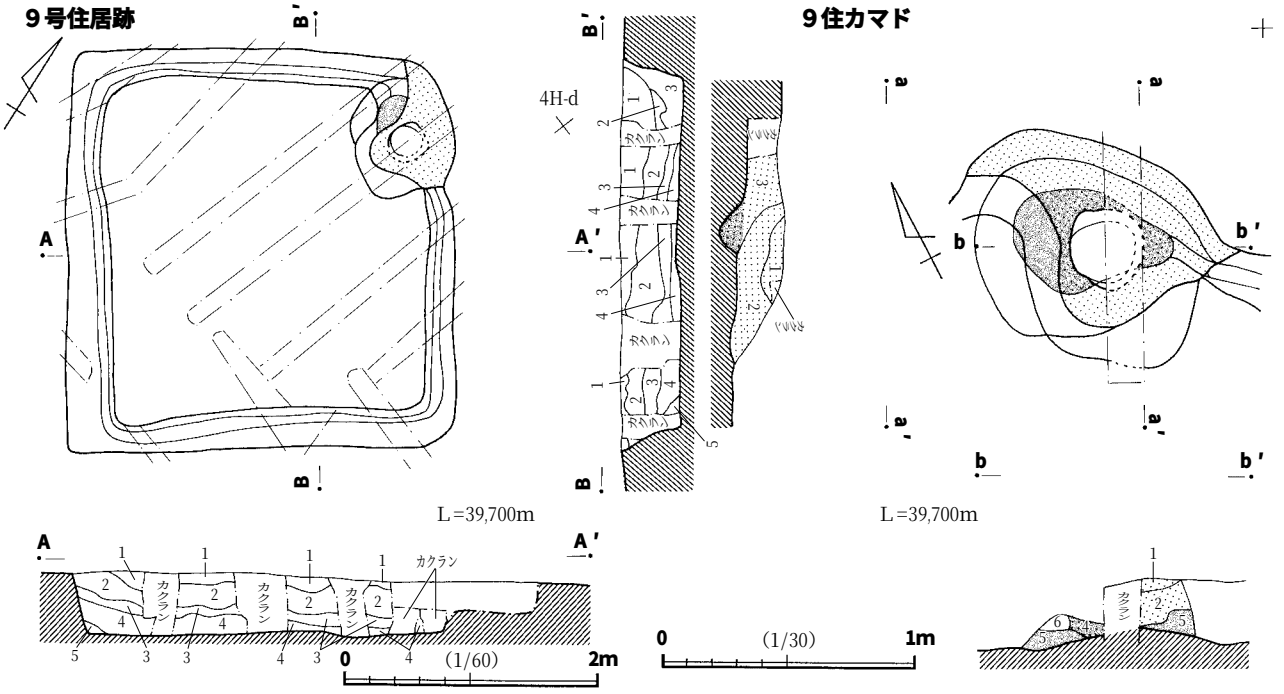
1　7.5YR　2/2　黒褐　ローム小ブロック（φ10～20㎜）が微量・ローム粒やや多く
全体に含む　炭化物も少々含む
2　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒少々　焼土ごく微量含む
3　7.5YR　4/1　褐灰　粘性なし　しまりとても有
4　7.5YR　4/2　灰褐　粘性なし　しまりとても有
5　7.5YR　4/1　褐灰　２層のブロック多く含む
6　10YR　3/2　黒褐　焼土粒微量含む
7　５YR　2/3　極暗赤褐　灰色く入る　焼土・炭化物少々含む
8　５YR　4/3　にぶい赤褐　袖の下部　ロームブロックとの混合層で地ならし
土か？　しまりとても有
9　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒を含む
10　５YR　3/2　暗赤褐　山砂粒を含む
11　５YR　3/1　黒褐　焼土・山砂粒を少々含む

第19図　７号住居跡



1 10YR 3/3 暗褐 しまりややなし 表土
2 10YR 3/2 黒褐 キメ細かい しまりやや有
3 10YR 3/3 暗褐 φ10mm大の土のブロックが多く入る 乾燥すると赤茶けてくる
4 10YR 4/1 灰褐 ローム粒少々含む
5 10YR 4/2 灰黄褐 ローム細粒を全体に含む
6 10YR 2/3 黒褐 ローム粒微量に入る しまりやや有
7 7.5YR 3/2 黒褐 ロームブロック・ソフトロームブロック入る
8 7.5YR 2/2 黒褐 ロームブロック少々入る
9 7.5YR 3/3 暗褐 ソフトロームブロック全体に入る
} 8住(新)
} 1溝の覆土

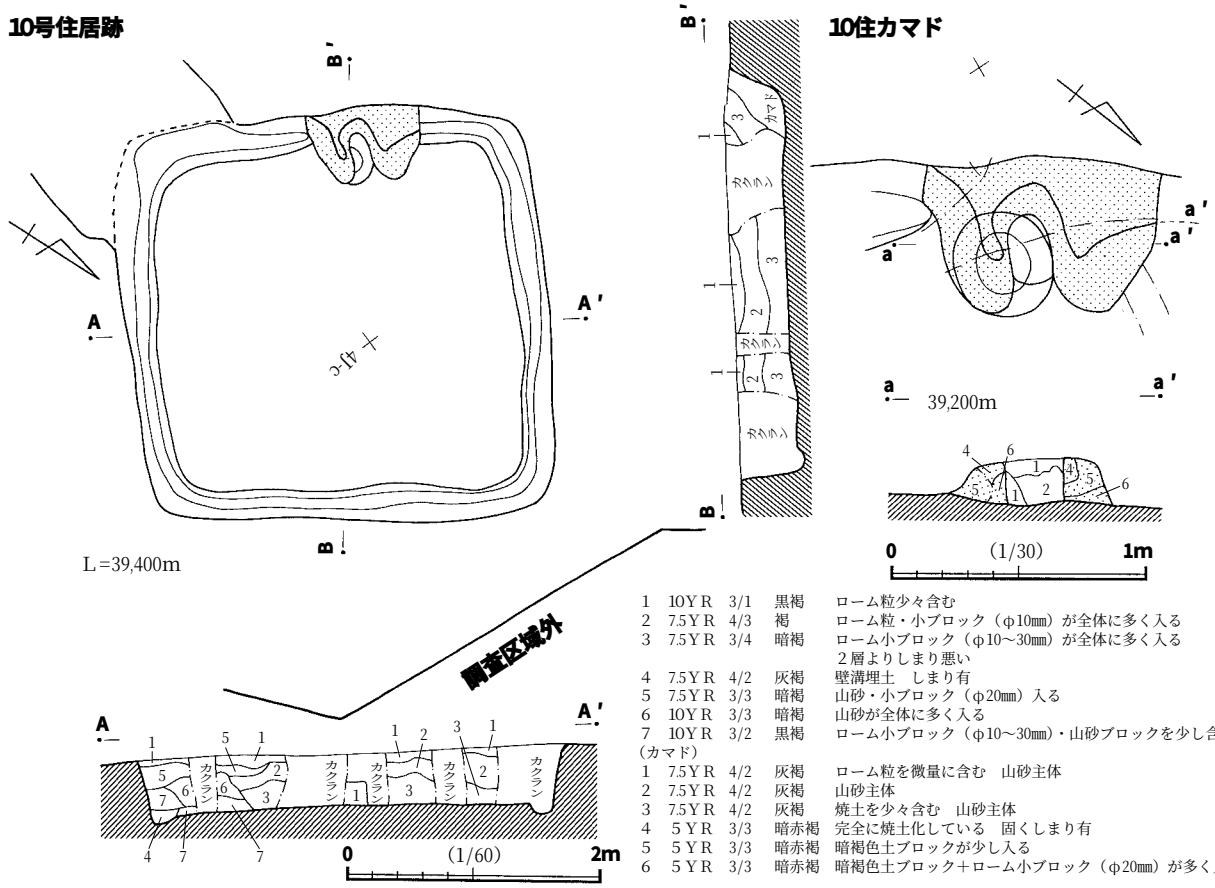
10 10YR 3/2 黒褐
11 10YR 3/3 暗褐
11' 〃 〃 〃 ローム粒含む しまり有
11" 〃 〃 〃 しまり有
12 10YR 4/2 灰黄褐
12' 〃 〃 〃 しまり有
13 10YR 3/1 黒褐 ローム小ブロック少々入る しまりやや有 貼床
14 10YR 3/3 暗褐 しまり有 貼床
15 7.5YR 3/3 暗褐
16 7.5YR 3/4 暗褐 しまりやや有
17 7.5YR 4/3 褐 ローム粒主体 粘性弱 しまり有
} 8住(旧)



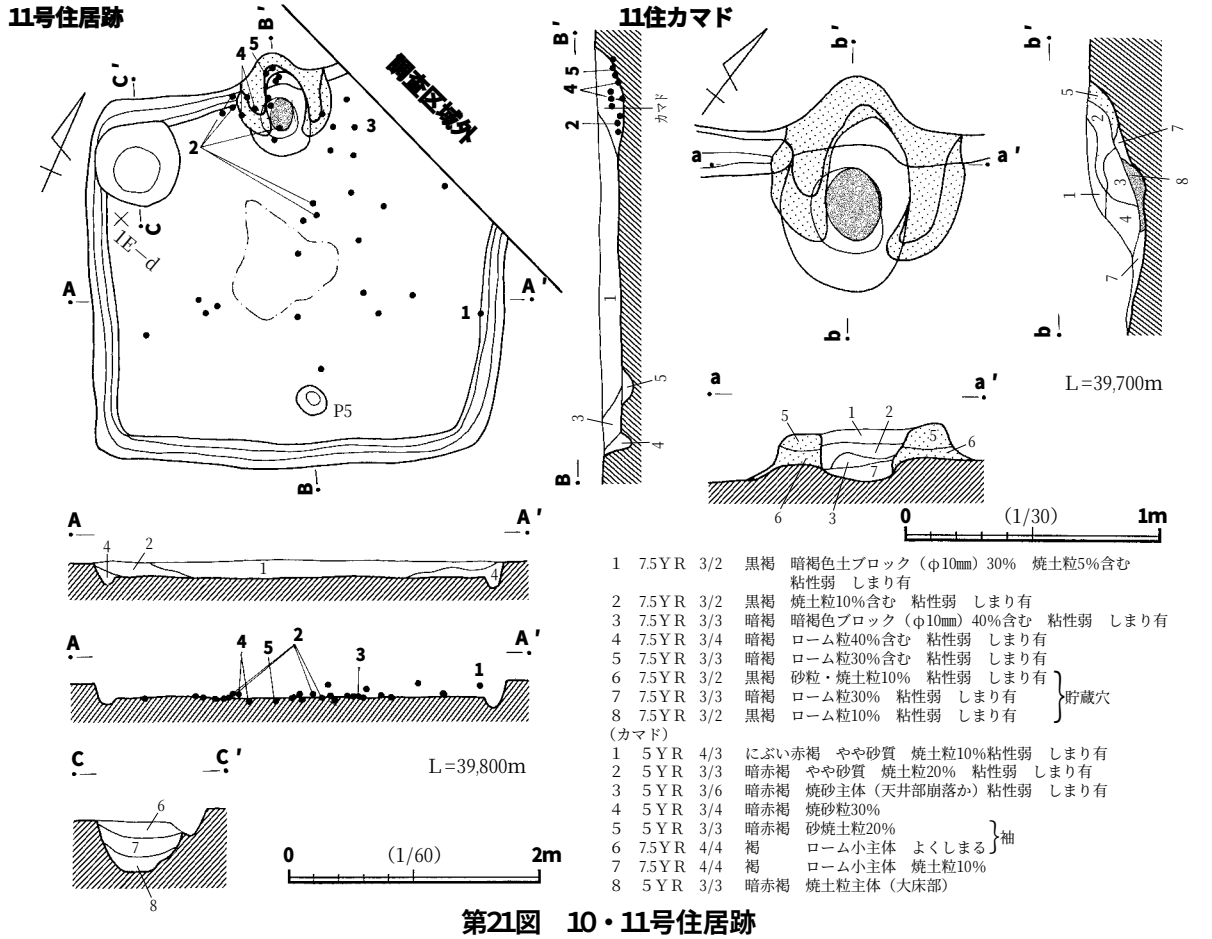
1 7.5YR 3/1 黒褐 ローム小ブロック少々入る しまりやや有
2 7.5YR 4/3 褐 ロームブロック（φ10～40mm）全体に入る しまりやや有
3 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒20%程全体に入る しまりやや有
4 7.5YR 3/3 暗褐 ローム小ブロック（φ50～80mm）しまりやや有
5 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒やや多く入る しまりやや有

1 5YR 3/2 黒褐＋5YR 4/1 灰褐 山砂主体 崩壊したカマド裾
2 5YR 3/3 暗赤褐 山砂粒（30%）・ローム粒・焼土粒を少々含む
3 5YR 4/2 灰褐 山砂・焼土・ローム小ブロック（φ10mm）多く含む
4 5YR 3/4 暗赤褐 山砂・焼土を含む
5 7.5YR 3/2 黒褐 山砂・炭化物を含む
6 7.5YR 2/2 黒褐 焼土・山砂ブロックをやや多く含む

第20図 8・9号住居跡・1号溝状遺構

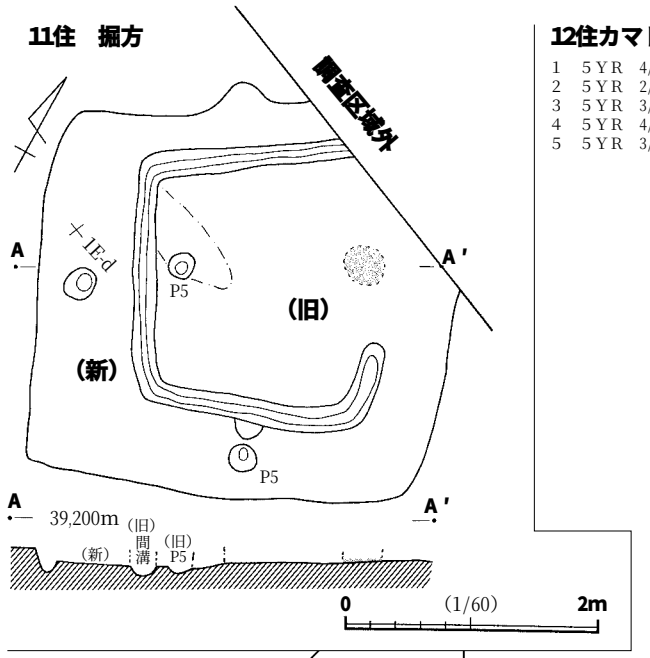


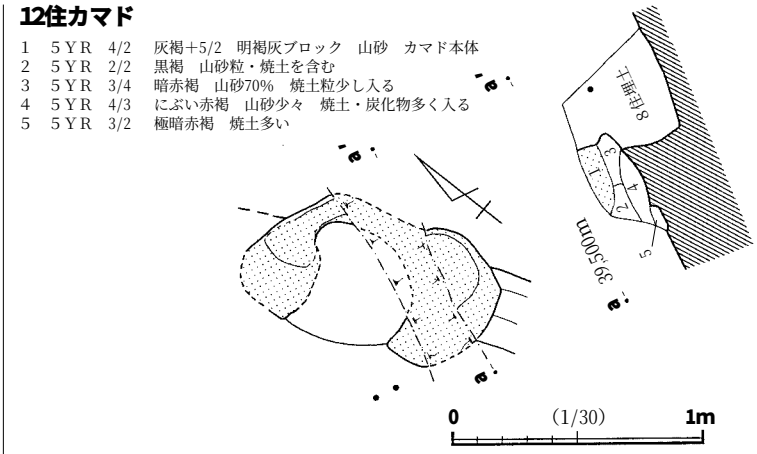
1　10YR　3/1　黒褐　ローム粒少々含む
2　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・小ブロック（φ10㎜）が全体に多く入る
3　7.5YR　3/4　暗褐　ローム小ブロック（φ10～30㎜）が全体に多く入る
２層よりしまり悪い
4　7.5YR　4/2　灰褐　壁溝埋土　しまり有
5　7.5YR　3/3　暗褐　山砂・小ブロック（φ20㎜）入る
6　10YR　3/3　暗褐　山砂が全体に多く入る
7　10YR　3/2　黒褐　ローム小ブロック（φ10～30㎜）・山砂ブロックを少し含む
（カマド）
1　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を微量に含む　山砂主体
2　7.5YR　4/2　灰褐　山砂主体
3　7.5YR　4/2　灰褐　焼土を少々含む　山砂主体
4　5YR　3/3　暗赤褐　完全に焼土化している　固くしまり有
5　5YR　3/3　暗赤褐　暗褐色土ブロックが少し入る
6　5YR　3/3　暗赤褐　暗褐色土ブロック＋ローム小ブロック（φ20㎜）が多く入る



1　7.5YR　3/2　黒褐　暗褐色土ブロック（φ10㎜）30%　焼土粒5%含む
粘性弱　しまり有
2　7.5YR　3/2　黒褐　焼土粒10%含む　粘性弱　しまり有
3　7.5YR　3/3　暗褐　暗褐色ブロック（φ10㎜）40%含む　粘性弱　しまり有
4　7.5YR　3/4　暗褐　ローム粒40%含む　粘性弱　しまり有
5　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒30%含む　粘性弱　しまり有
6　7.5YR　3/2　黒褐　砂粒・焼土粒10%　粘性弱　しまり有
7　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒30%　粘性弱　しまり有　}貯蔵穴
8　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒10%　粘性弱　しまり有
（カマド）
1　5YR　4/3　にぶい赤褐　やや砂質　焼土粒10%粘性弱　しまり有
2　5YR　3/3　暗赤褐　やや砂質　焼土粒20%　粘性弱　しまり有
3　5YR　3/6　暗赤褐　焼砂主体（天井部崩落か）粘性弱　しまり有
4　5YR　3/4　暗赤褐　焼砂粒30%
5　5YR　3/3　暗赤褐　砂焼土粒20%　}袖
6　7.5YR　4/4　褐　ローム小主体　よくしまる
7　7.5YR　4/4　褐　ローム小主体　焼土粒10%
8　5YR　3/3　暗赤褐　焼土粒主体（大床部）

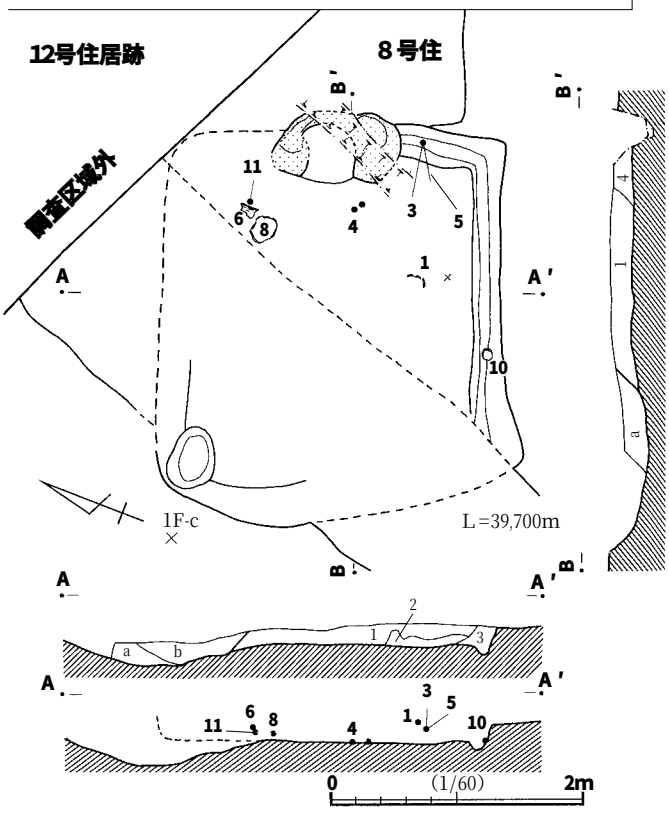
第21図　10・11号住居跡

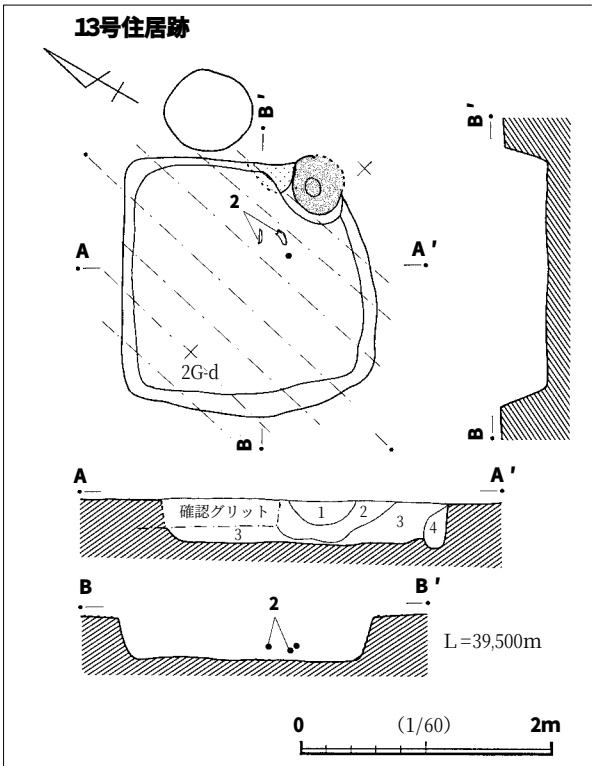




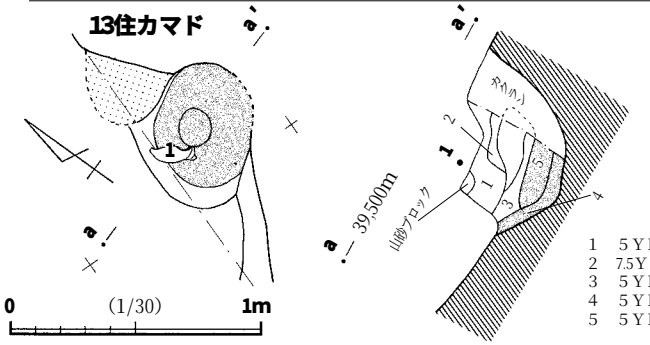
a　7.5YR　3/2　黒褐　暗褐色土ブロック（φ10～20㎜）10%　粘性弱　しまり有
b　7.5YR　3/3　暗褐　ロームブロック（φ10～20㎜）10%　粘性弱　しまり有　}1号溝

1　7.5YR　3/2　黒褐　暗褐色土ブロック（φ10㎜）10%　粘性弱　しまり有
2　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒10%　粘性弱　しまりやや悪い
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒10%　粘性弱　しまり有
4　7.5YR　3/2　黒褐　やや砂質　粘性弱　しまり有





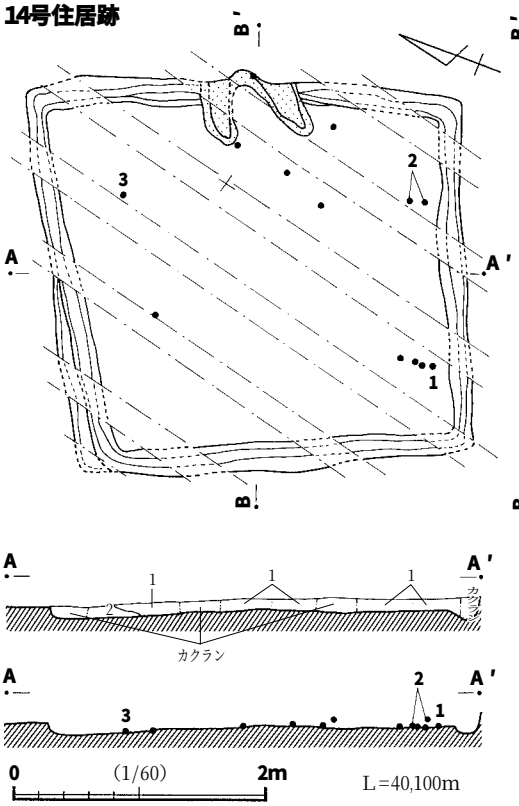
1　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒微量含む
2　7.5YR　3/1　黒褐+2.5GY　3/1　暗オリーブ灰のブロック・ローム粒・山砂小ブロック（φ10㎜）少々入る
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒10%程度全体に散在
4　7.5YR　2/2　黒褐　しまりややなし



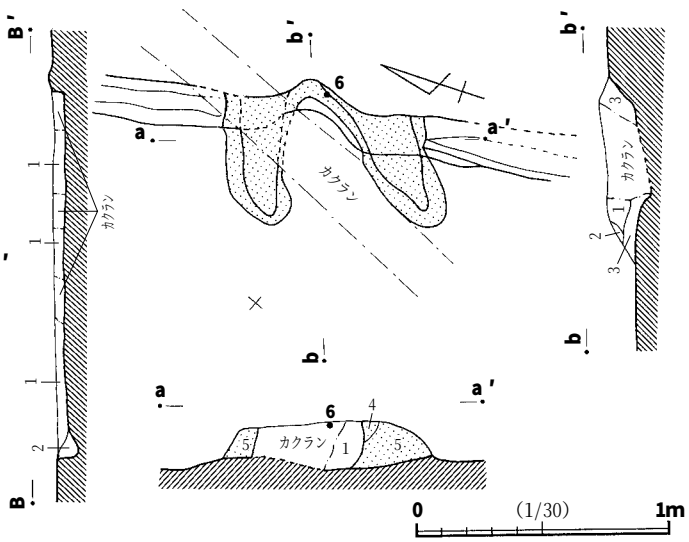
1　5YR　3/2　黒褐
2　7.5YR　3/2　黒褐　山砂15%程入る
3　5YR　3/3　暗赤褐　山砂40%程・焼土・灰・炭化物少々入る
4　5YR　3/3　暗赤褐　焼土主体　火床部
5　5YR　4/6　赤褐　焼砂主体　天井崩落部分

第22図　11～13号住居跡

14号住居跡

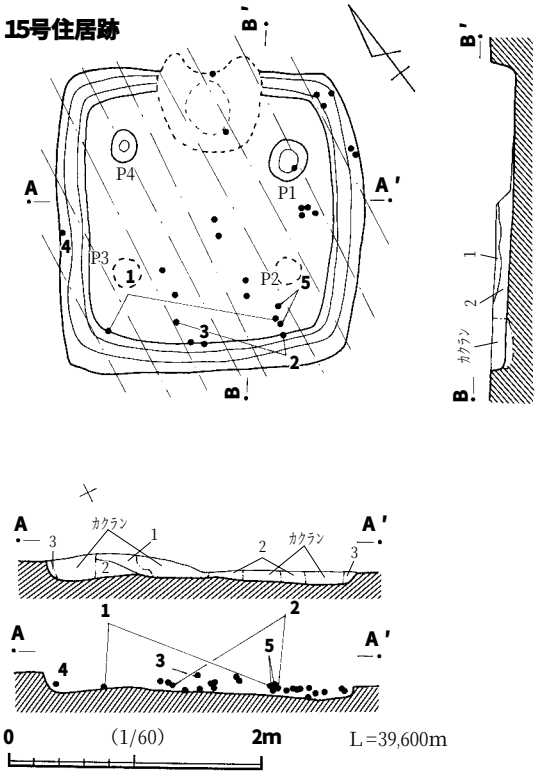


14住カマド



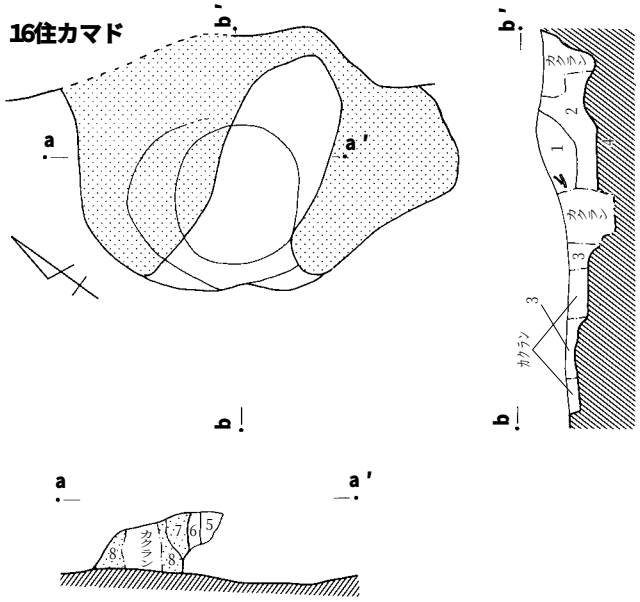
1　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　暗褐色土ブロック（φ10㎜）30%　粘性弱　しまり有
2　7.5ＹＲ　3/3　暗褐　暗褐色土ブロック（φ10㎜）10%　粘性弱　しまり有
（カマド）
1　7.5ＹＲ　4/3　褐　ローム主体　焼土粒10%　粘性弱　しまり有
2　５ＹＲ　5/3　にぶい赤褐　焼砂ブロック
3　7.5ＹＲ　3/4　暗褐　ローム粒10%　粘性弱　しまり有
4　５ＹＲ　3/3　暗赤褐　やや砂質　焼砂10%　粘性無　しまり有
5　7.5ＹＲ　4/3　褐　やや砂質　ローム粒10%　}袖

15号住居跡

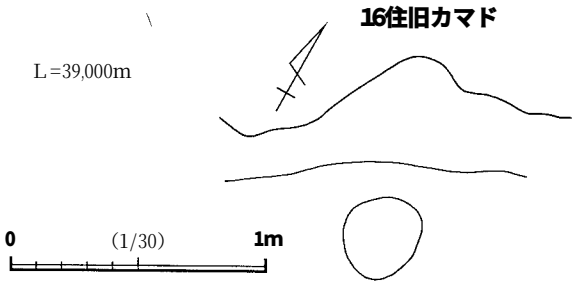


1　7.5ＹＲ　2/2　黒褐　ローム粒・山砂粒微量入る
2　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　山砂小ブロック少々含む
3　7.5ＹＲ　3/4　暗褐

16住カマド



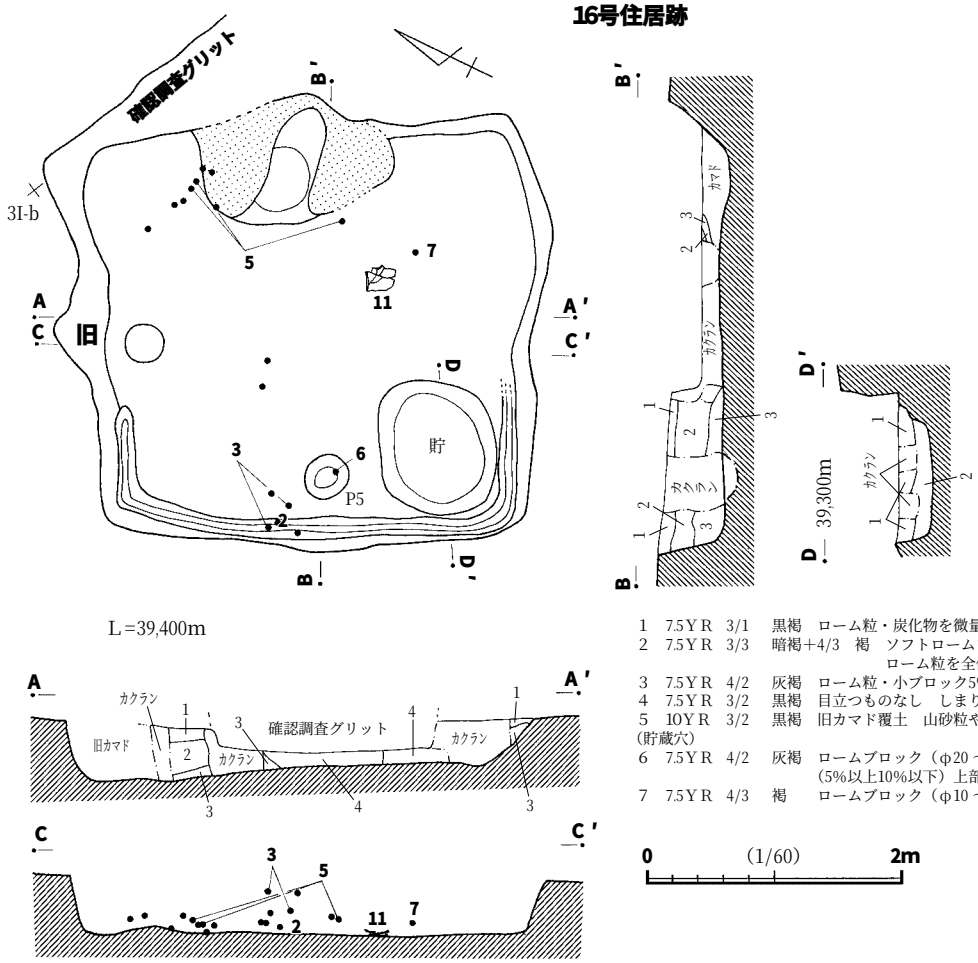
16住旧カマド



1　５ＹＲ　3/1　暗赤褐　山砂40%　焼土粒少々含む
2　５ＹＲ　4/2　灰褐～4/3　にぶい赤褐　山砂50%　焼土粒10%含む
3　５ＹＲ　4/1　褐灰　山砂70%　ローム粒少々入るがカマド本体ではなくブロックが多い
4　地山ロームが焼化してブロックになっている
5　５ＹＲ　3/2　暗赤褐　砂質　焼砂粒30%
6　５ＹＲ　3/6　暗赤褐　焼砂主体　天井部袖
7　５ＹＲ　3/2　暗赤褐　砂質　焼砂粒20%
8　10ＹＲ　3/2　黒褐　山砂ブロック20%　よくしまる

第23図　14・15号住居跡・16号住居跡カマド

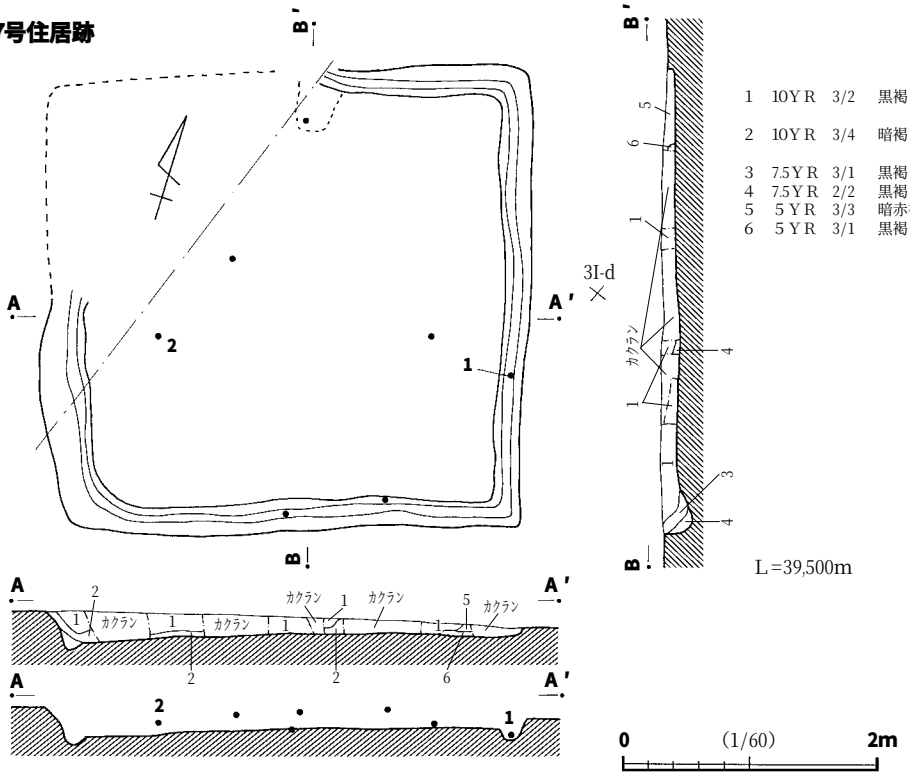
16号住居跡



1　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒・炭化物を微量含む
2　7.5YR　3/3　暗褐＋4/3　褐　ソフトロームブロック・ローム粒を全体に散在（5%以下）
3　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・小ブロック5%程含む
4　7.5YR　3/2　黒褐　目立つものなし　しまりやや有
5　10YR　3/2　黒褐　旧カマド覆土　山砂粒やや多い　しまりやや有
（貯蔵穴）
6　7.5YR　4/2　灰褐　ロームブロック（φ20～30㎜）と粒を多く含む（5%以上10%以下）上部はしまりやや有
7　7.5YR　4/3　褐　ロームブロック（φ10～50㎜）と粒をとても多く含む（10%位）

0　(1/60)　2m

17号住居跡

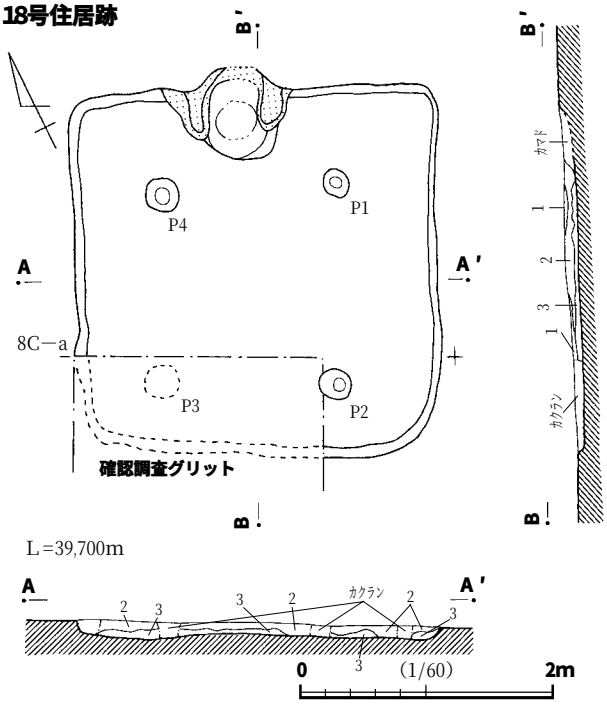


1　10YR　3/2　黒褐　ローム粒・ソフトローム小ブロック少々含む　１層よりローム粒多い
2　10YR　3/4　暗褐　ロームブロック（φ20～30㎜）多く含む（貼床？）しまり有
3　7.5YR　3/1　黒褐
4　7.5YR　2/2　黒褐
5　5YR　3/3　暗赤褐　山砂主体
6　5YR　3/1　黒褐　山砂・焼土を少し含む

0　(1/60)　2m

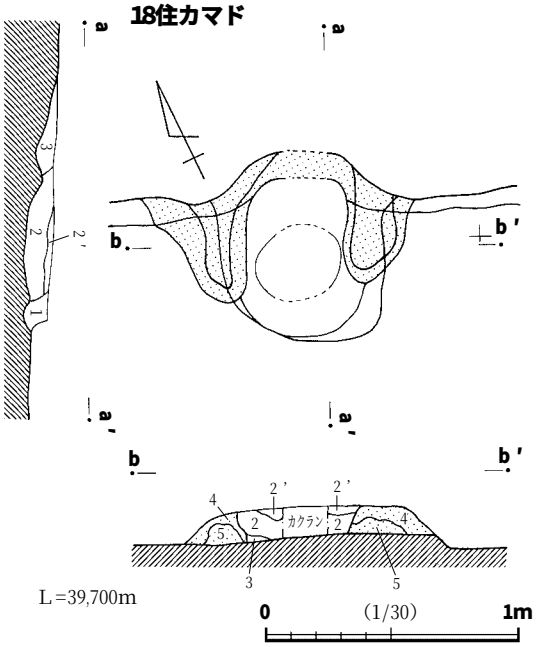
第24図　16・17号住居跡

18号住居跡



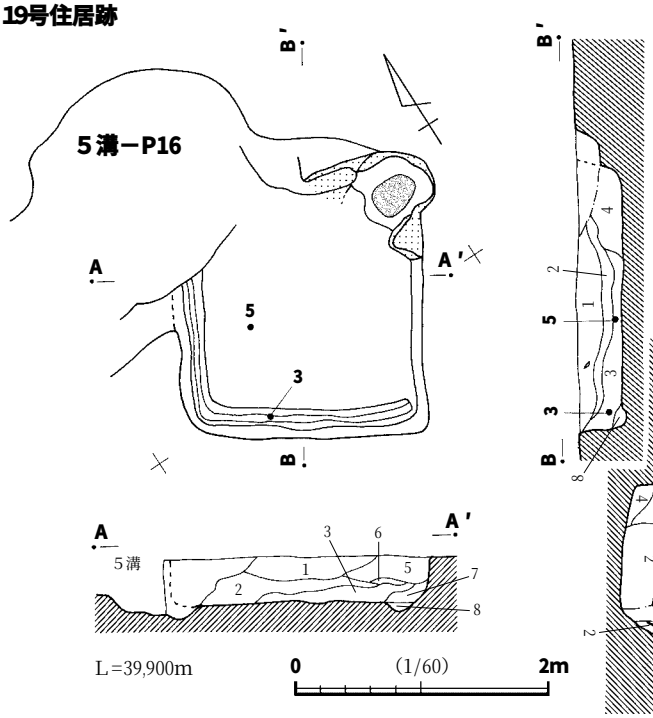
1　10YR　3/2　黒褐　ロームブロックやや多く含む　しまりやや有
2　10YR　3/1　黒褐　ローム粒・ソフトロームブロックやや多く含む
3　10YR　4/1　褐灰　ロームブロック（φ20～30㎜）が全体に散在　しまり有

18住カマド



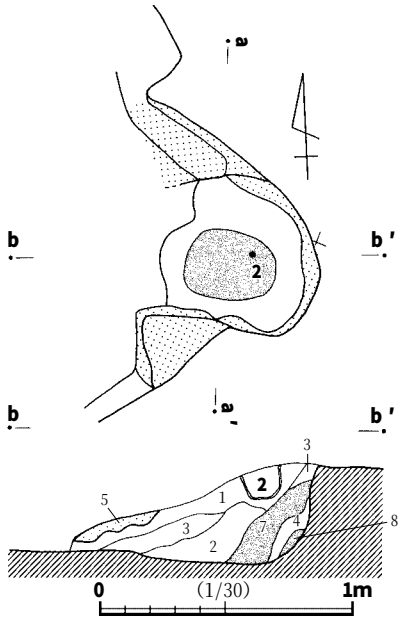
（カマド）
1　5YR　3/2　黒褐　焼土・ローム粒少々含む
2　5YR　4/2　灰褐　山砂主体　焼土・炭化物多く入る　天井壁の崩落土
3　5YR　4/1　褐灰　全体的に焼土が散る　粘性なし　ぼろぼろしている
4　7.5YR　4/1　褐灰　山砂で構成　内壁はやや焼土化している　袖
5　7.5YR　3/4　暗褐　ローム粒少々含む　袖

19号住居跡



19住カマド

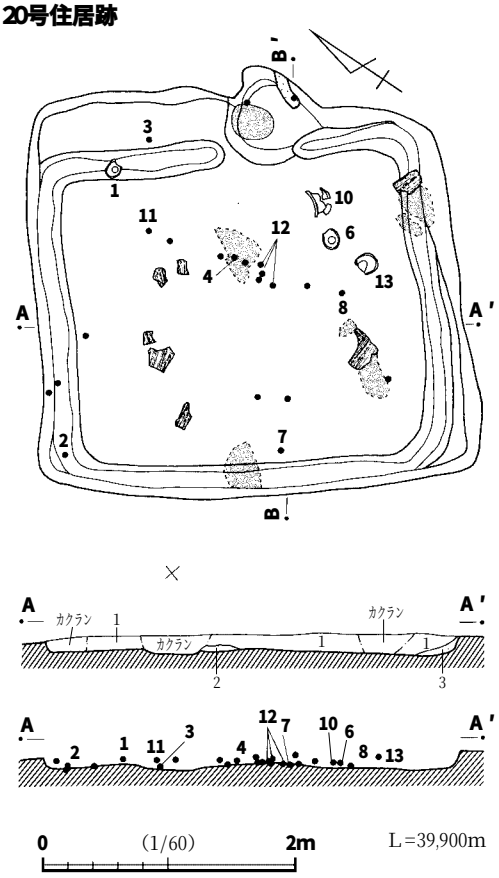
1　2.5YR　3/4　暗赤褐　山砂粒微量に含む
2　2.5YR　3/2　暗赤褐　山砂・焼土を多く含む
3　2.5YR　1/3　ローム・焼土多く含む　しまり有
4　2.5YR　3/4　暗赤褐　３層よりもっと細かい　焼土多い
5　10YR　4/3　にぶい黄褐　山砂で構成　袖及び天囲壁の崩落土ブロック　しまり有
6　7.5YR　5/3　にぶい褐　５層とよく似る　暗褐色土が多く混じる
7　5YR　3/2　ローム粒・焼土粒を多く含む
8　2.5YR　3/3　焼土で構成



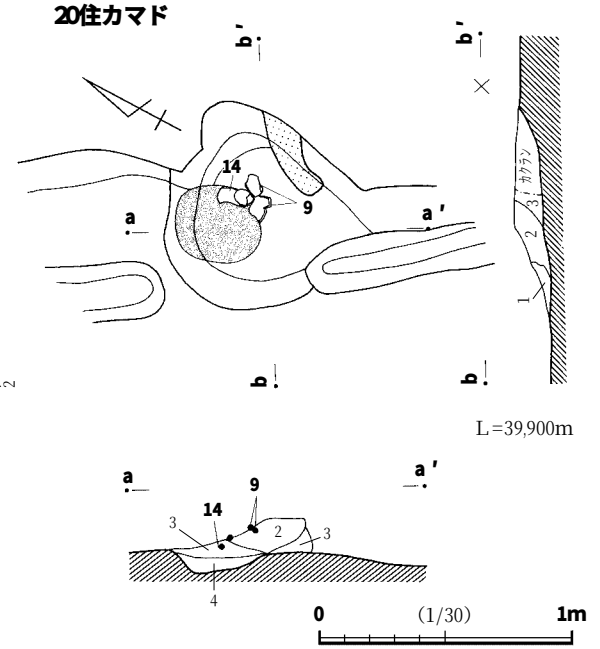
1　10YR　3/1　黒褐　ローム粒10%程全体に散在　山砂粒微量含む
2　7.5YR　4/2　黒褐　ローム粒少々含む
3　7.5YR　4/1　黒褐　ロームブロック（φ30～80㎜）とローム粒・山砂粒微量に含む
4　7.5YR　4/1　褐　ローム小ブロック少々含む
5　10YR　3/2　暗褐　ローム小ブロック（φ10～20㎜）を含む
6　10YR　3/6　黒褐　山砂粒少々含む
7　10YR　3/2　黒褐　ローム粒・黒褐色ブロック（φ10㎜）を含む
8　7.5YR　3/2　暗褐　ソフトローム・ローム粒主体

第25図　18・19号住居跡

20号住居跡

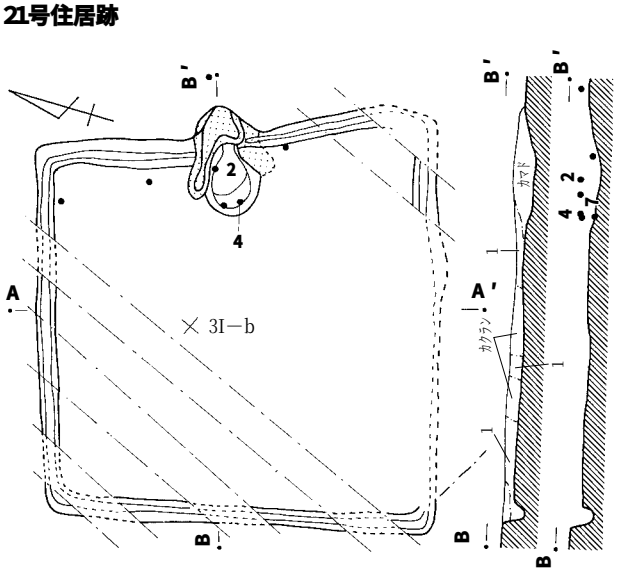


20住カマド

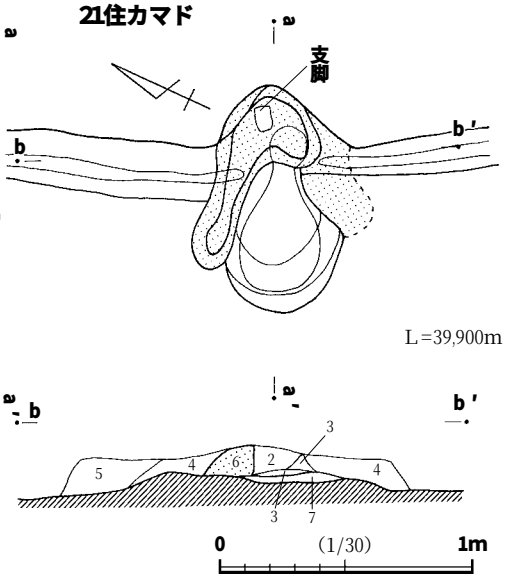


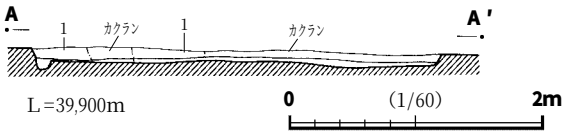
1　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　炭・焼土粒10%　粘性弱　しまり有
2　５ＹＲ　3/3　暗赤褐　焼土粒20%　粘性弱　しまり有
3　7.5ＹＲ　4/3　褐　ローム粒主体　粘性弱　しまり有
4　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　砂質　粘性弱　しまり有
（カマド）
1　7.5ＹＲ　2/2　黒褐　ローム粒・焼土粒・灰を各10%程含む　粘性弱　しまりやや有
2　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　やや砂質　粘性なし　しまりやや有り
3　５ＹＲ　3/3　暗赤褐　砂質　焼土粒10%含む　粘性無　しまり有
4　7.5ＹＲ　3/3　暗赤褐　少し焼けた土を主体　火床舞　粘性無　しまり有

21号住居跡



21住カマド

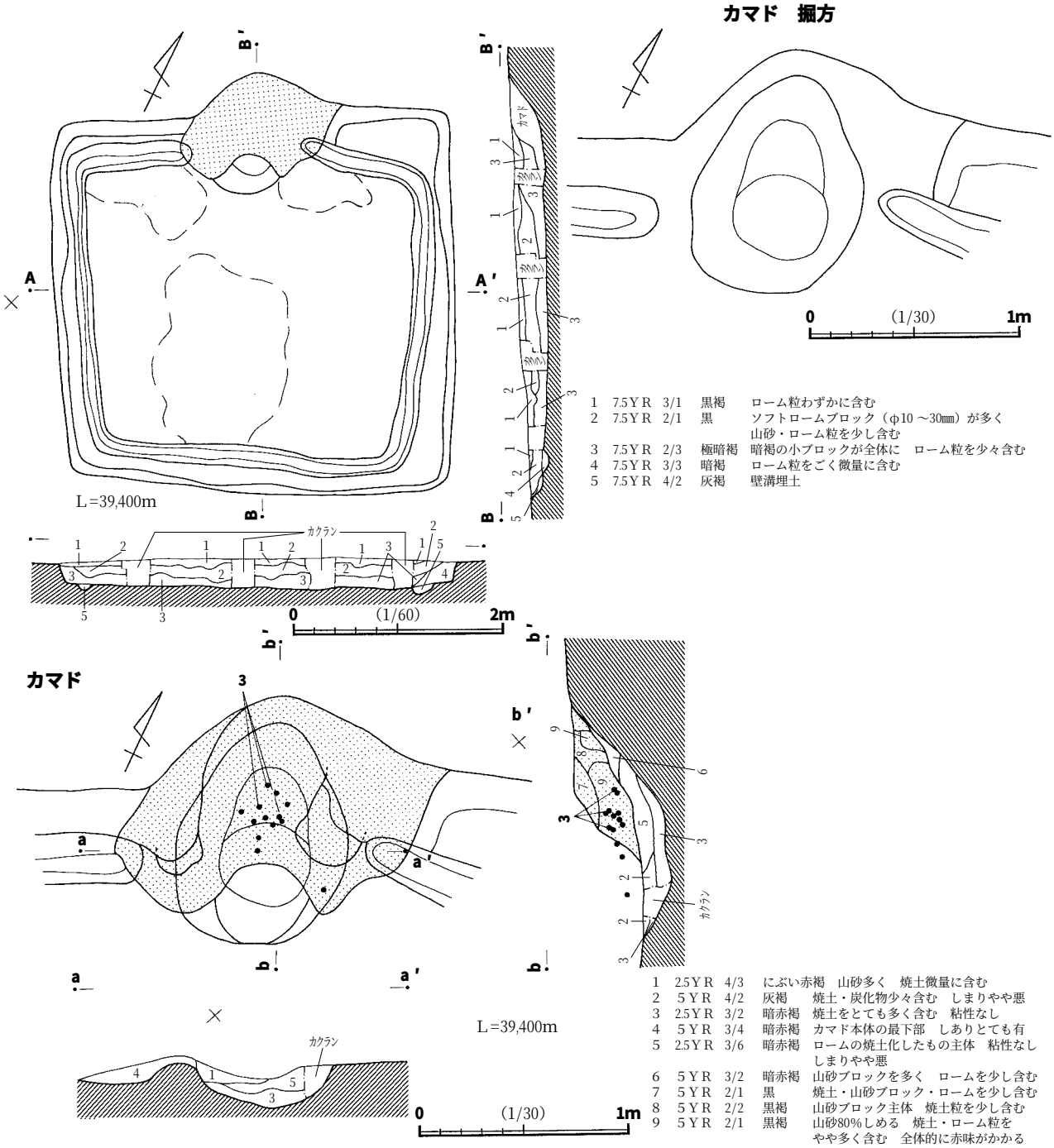




1　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　炭・焼土粒・ローム粒10%わずかに含む

（カマド）
1　7.5ＹＲ　2/2　黒褐　やや砂質　焼土粒5%
2　7.5ＹＲ　3/3　黒褐　やや砂質　ローム粒5%
3　7.5ＹＲ　3/3　暗褐　焼土粒5%
4　7.5ＹＲ　3/3　暗褐　やや砂質
5　7.5ＹＲ　3/2　黒褐　ローム粒5%
6　５ＹＲ　4/6　赤褐　粘土で固められた砂層　焼土粒・炭化物を含む　粘性・しまり有り　袖
7　7.5ＹＲ　4/4　褐　若干の焼土粒・炭化粒を含むロームと暗褐色土の層　粘性弱　しまり有

第26図　20・21号住居跡

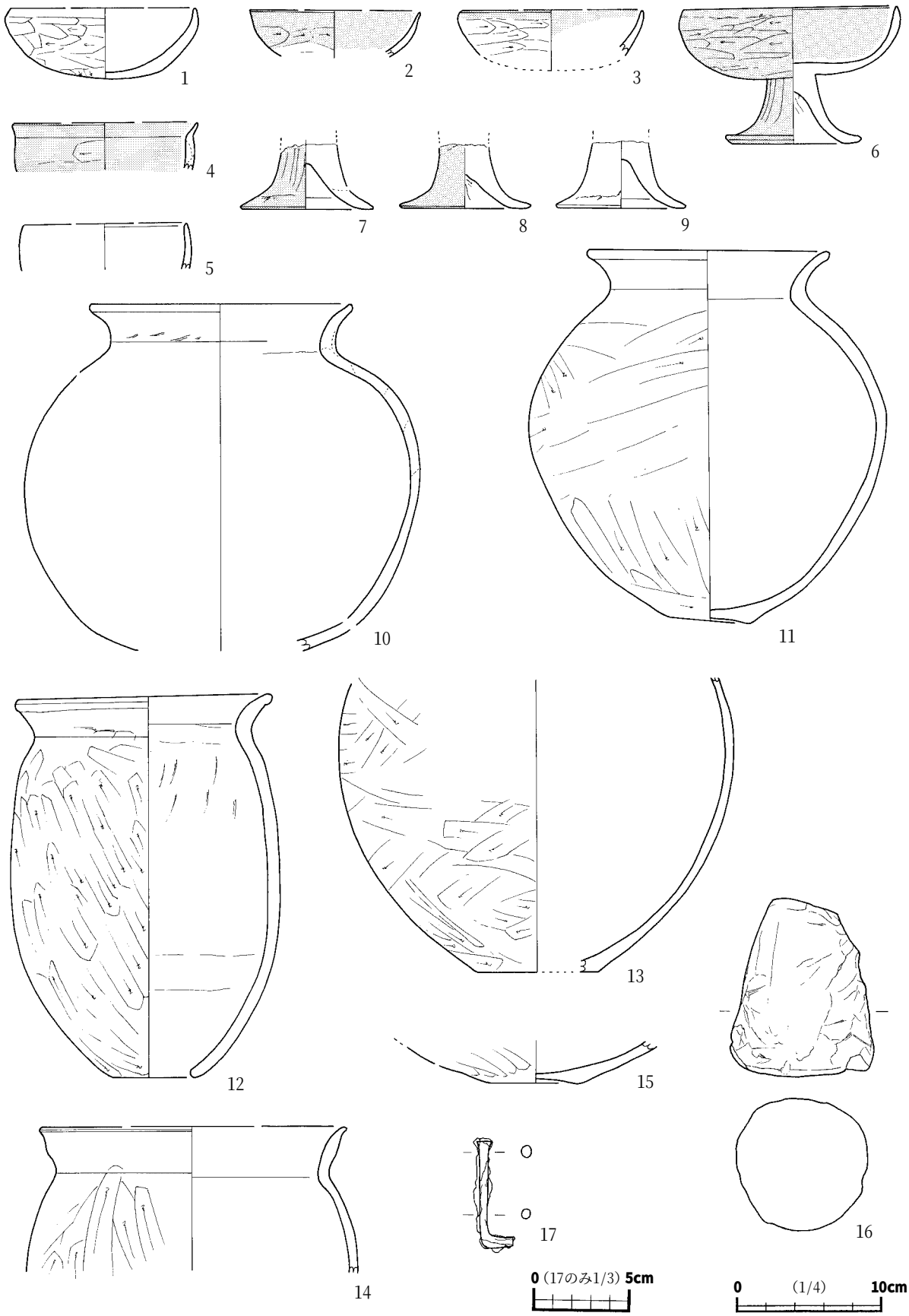


第27図　22号住居跡

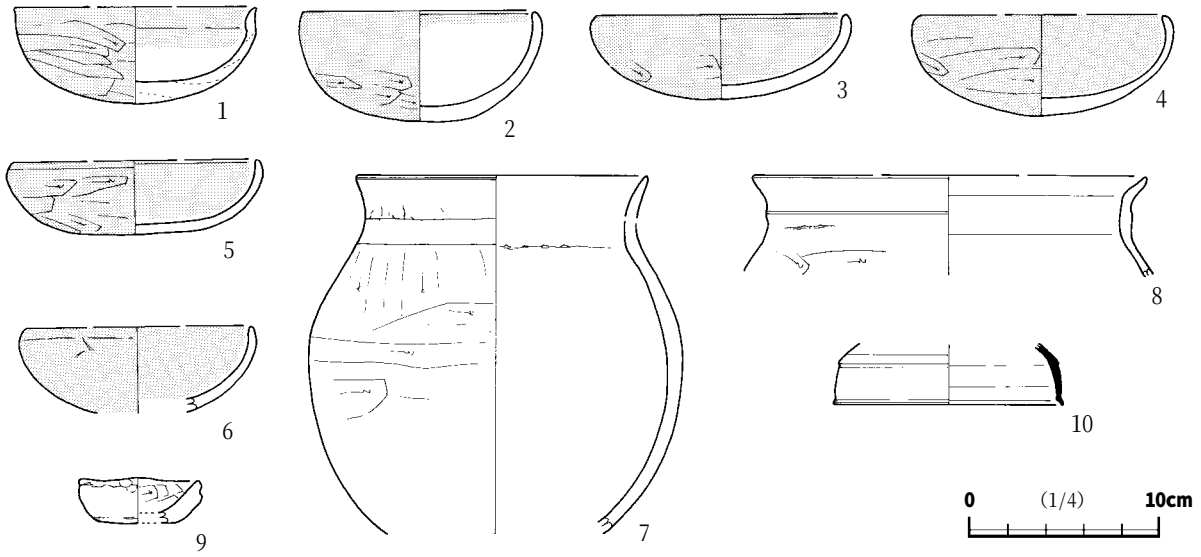
竪穴住居跡出土遺物

遺物の大半は，土器（土師器・須恵器）が占めている。鉄器は，3・12・16・21号住居跡から釘・刀子・小刀？・鉄鏃などが出土している。21号住居跡出土の雁股鏃は，茎部分の先端が欠損しているものの残存状態は比較的良好である。住居跡の廃棄に伴うと考えられる石器・石製品は出土していない。土製品は，3・11・20号住居跡から支脚，4号住居跡から手捏土器が出土している。

遺物の法量・特徴などの詳細は一覧表にあるとおりである。



第28図　３号住居跡遺物



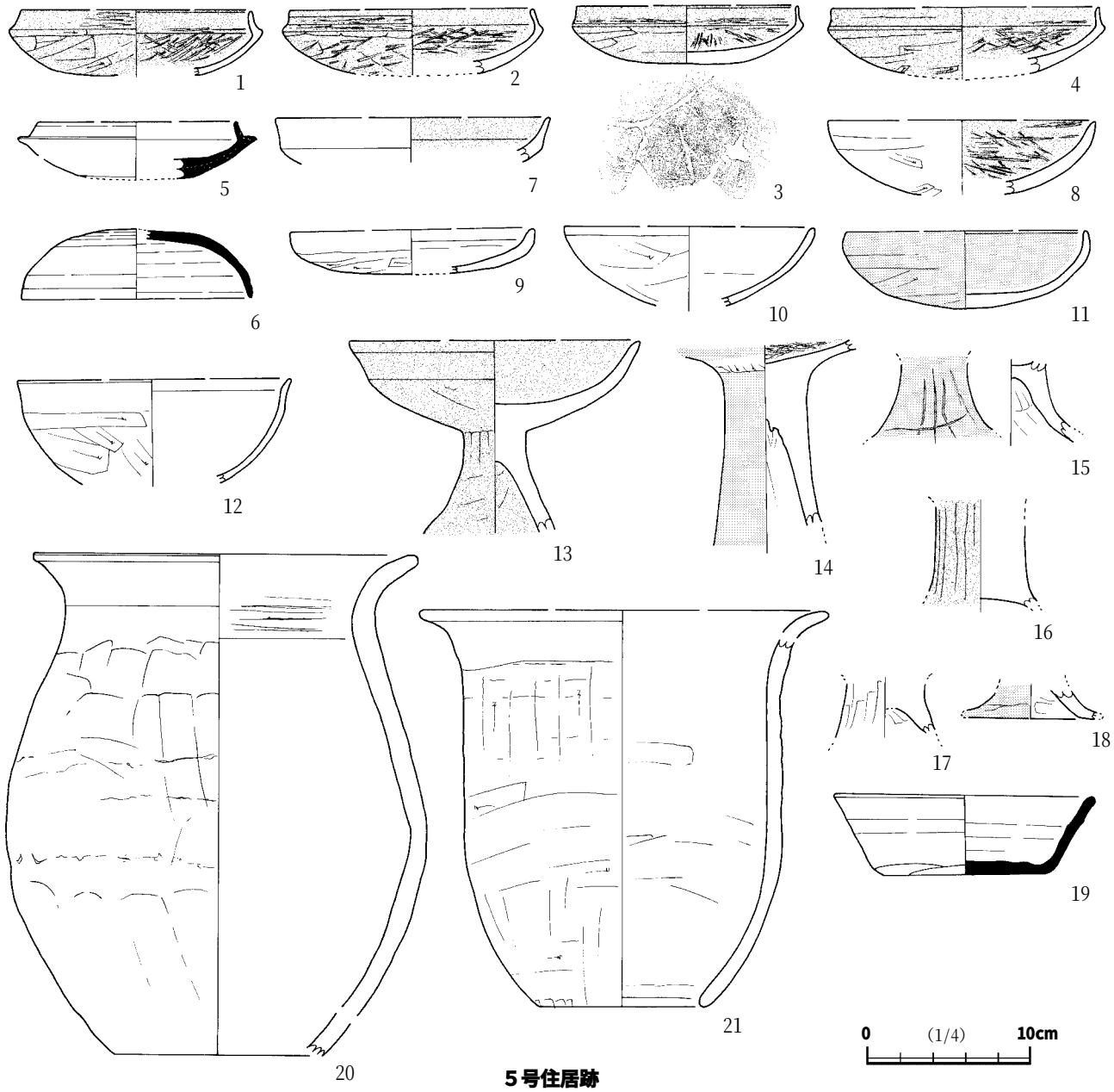
第29図　４号住居跡遺物

彩色土器について

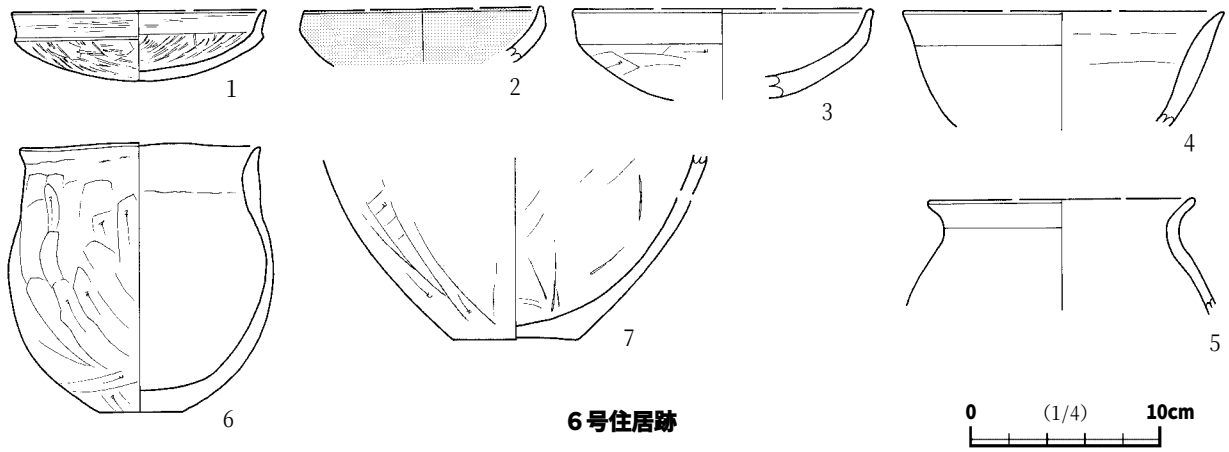
本報告書で使用した「彩色」とは，「赤彩」や「黒色処理」・「黒彩」・「内黒」・「漆塗り」といった土器の地に液体を塗布するか，炭素などを吸着させるような処理（吸炭）をした痕跡が見受けられるものに対しての総称として使用している。これらの内，以下の語彙を使用しているのでその目安を述べておくことにする。

「赤彩」：赤色塗彩の略である。丹彩・朱彩の両方を含み，表面を赤色に彩ることを「赤彩」とする。本遺跡では，内外面全面赤彩と外面及び内面部分赤彩のものがみられ，外面に「十」や「－」などの記号様のものを表現したものは出土していない。器形的には，坏と高坏が主体である。しかし，断面と外面の色調に大きな差が見られないにもかかわらず，器面に明確な塗布痕が見られる土器が幾つかみられた。一見，「水挽き」様の雰囲気に見えるが，調整をしたようには見えず，筆のようなもので何かを粗く塗布した観が強い。具体的に分析を実施したわけではないので何が塗布されているのかは不明だが，これを「赤彩」の範囲に含むのであればその数は増加する。なお，このような土器片が細片の場合，認知不能と考えられる。本遺跡では３～７号住居跡から出土しており，主に古墳時代後期の土器にみられる特徴である。

「黒色処理」:「黒彩（黒色塗彩)」のように色を塗ったり，「漆塗り」のように漆を塗布したりするのではなく，炭を吸着させたり，器壁を磨くことによって黒色化するような処理を施していることを指す。広義の意味では「内黒」も黒色処理の範疇に入るものと思われる。黒色処理を施す器形は，土師器の坏と高坏が主要なものである。また，多くが断面の色調と表面の色調が明確に異なっている上，処理後に丁寧にナデるかミガキを施していることから光沢感が強いものが多い。処理の仕方や使用目的・頻度などによって器面稜線の摩耗が進み，地の色調が確認できるものも多い。本遺跡では，5･７・９号住居跡から出土しており，主に古墳時代後期にみられる特徴である。しかし，3･４号住居跡のように赤彩土器（坏）が多い上に後期でも古めの遺構と共伴する場合はなく，やや新しい遺構では供伴がみられる。５号住居跡の高坏（第30図-14）は，外面は赤彩だが内面は「内黒」である。断面に黒色化した層が観察できるほど炭素を吸着させている。

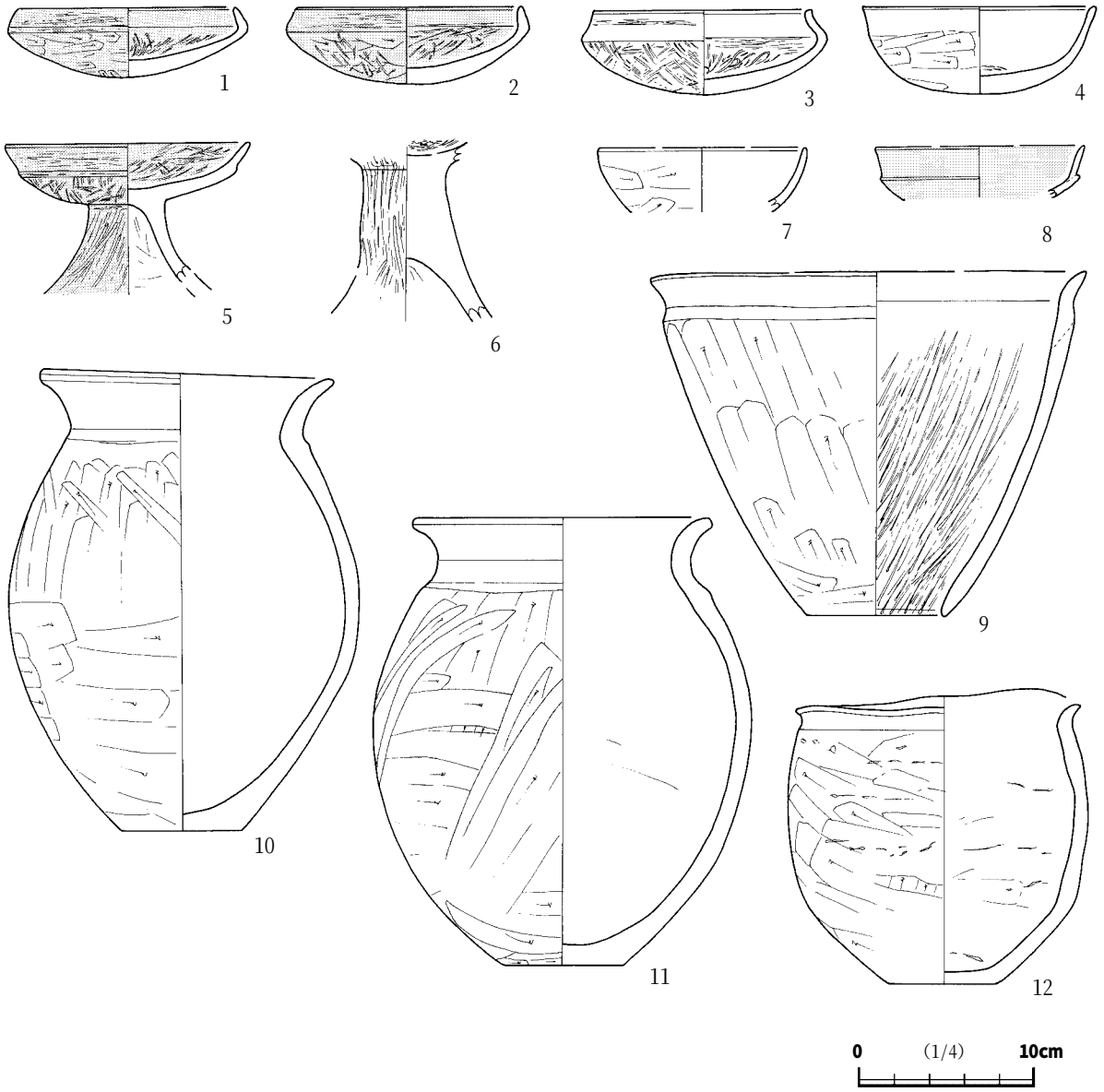


5号住居跡

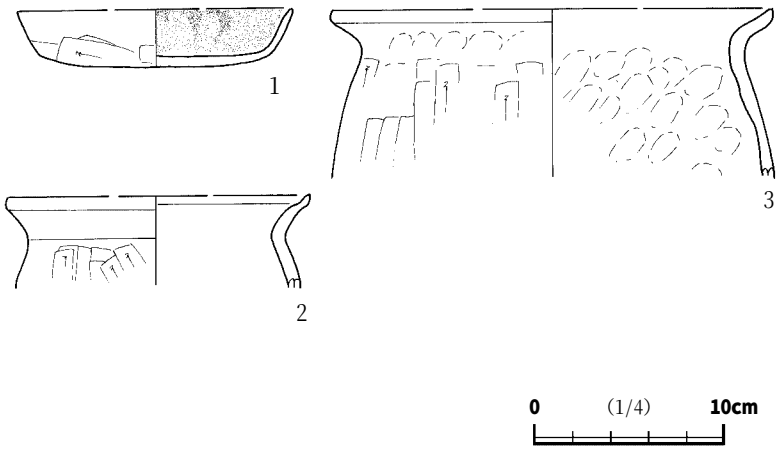


6号住居跡

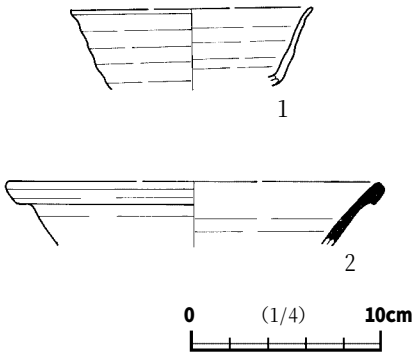
第30図　5・6号居住跡遺物



7号住居跡

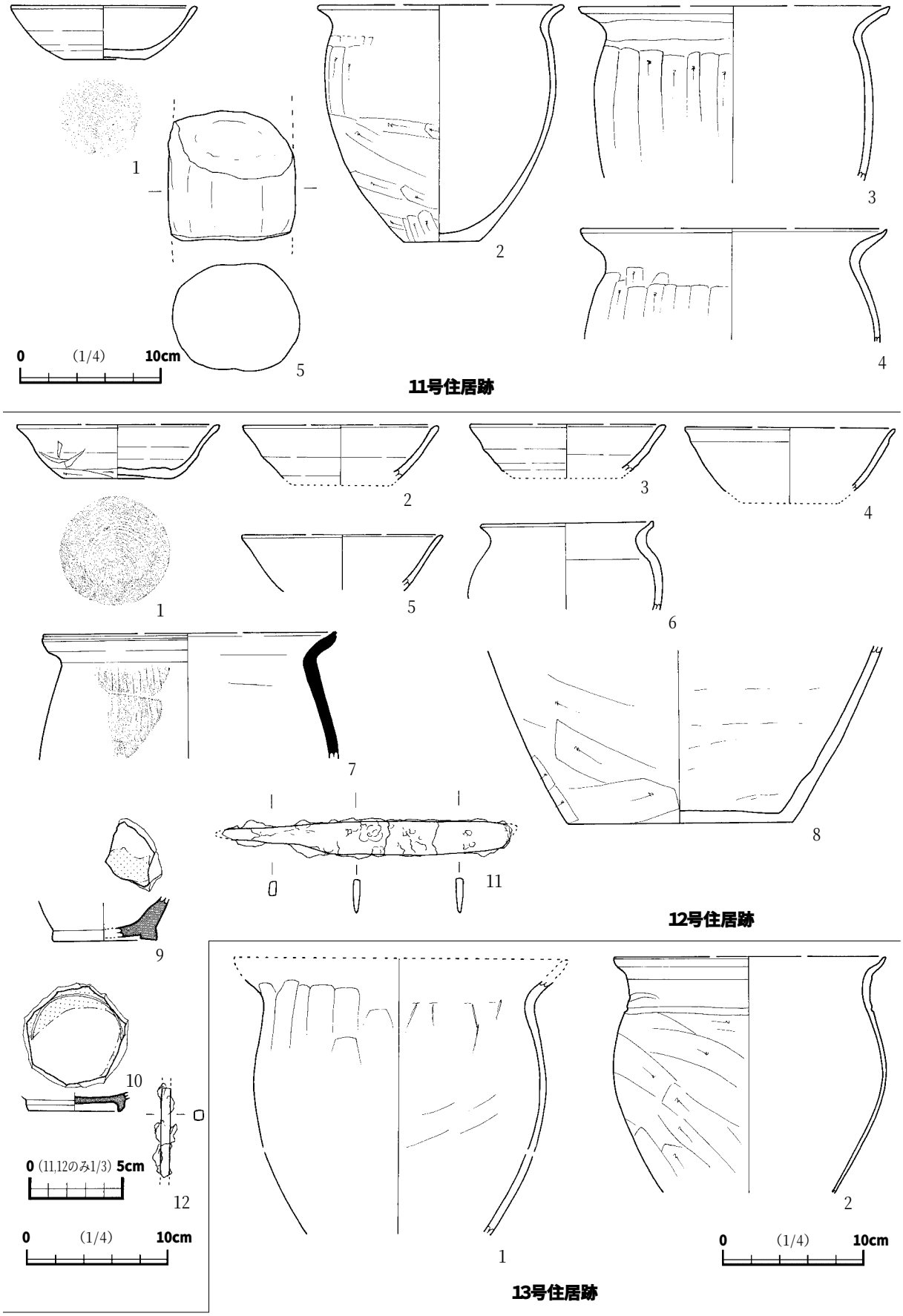


9号住居跡

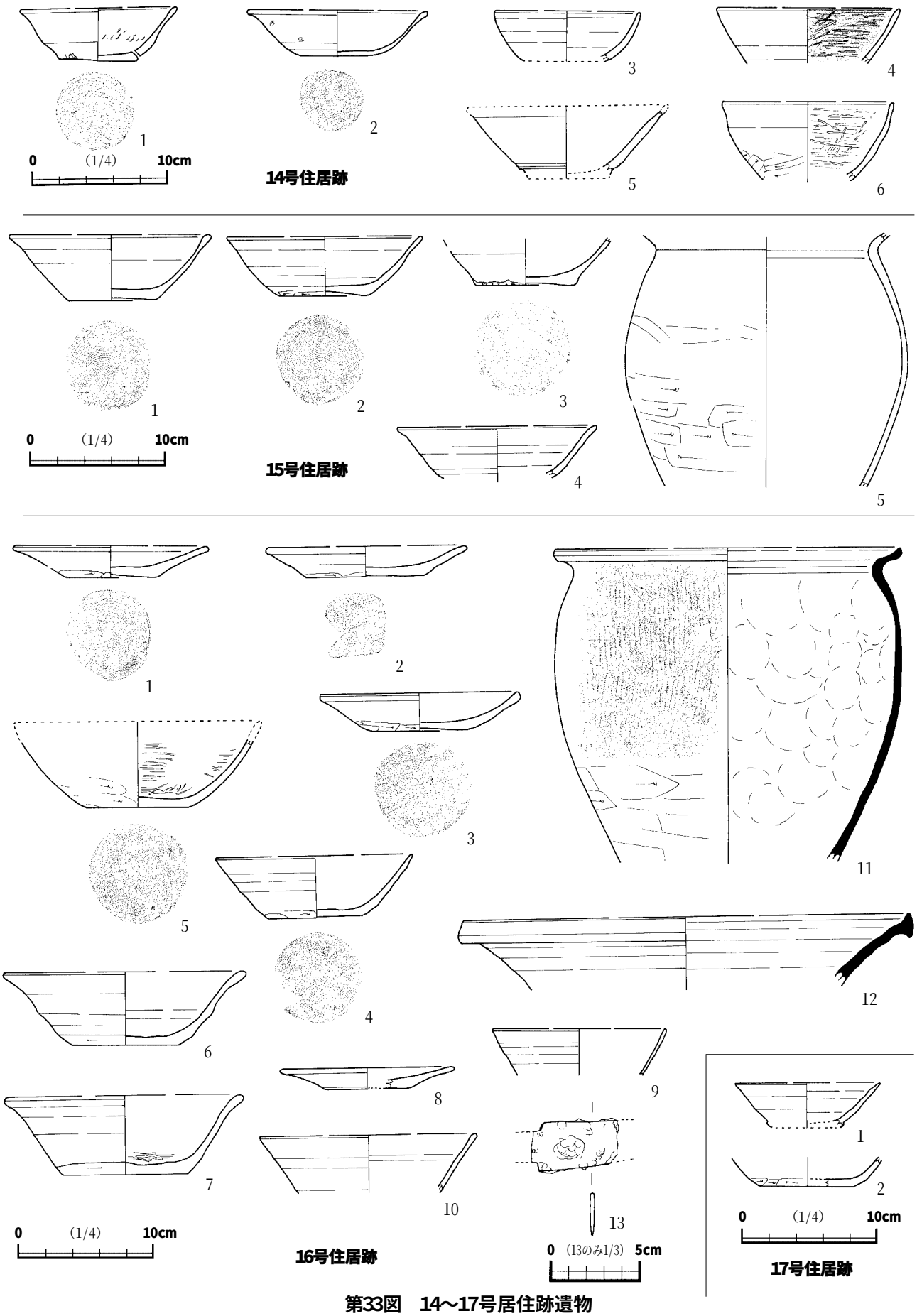


10号住居跡

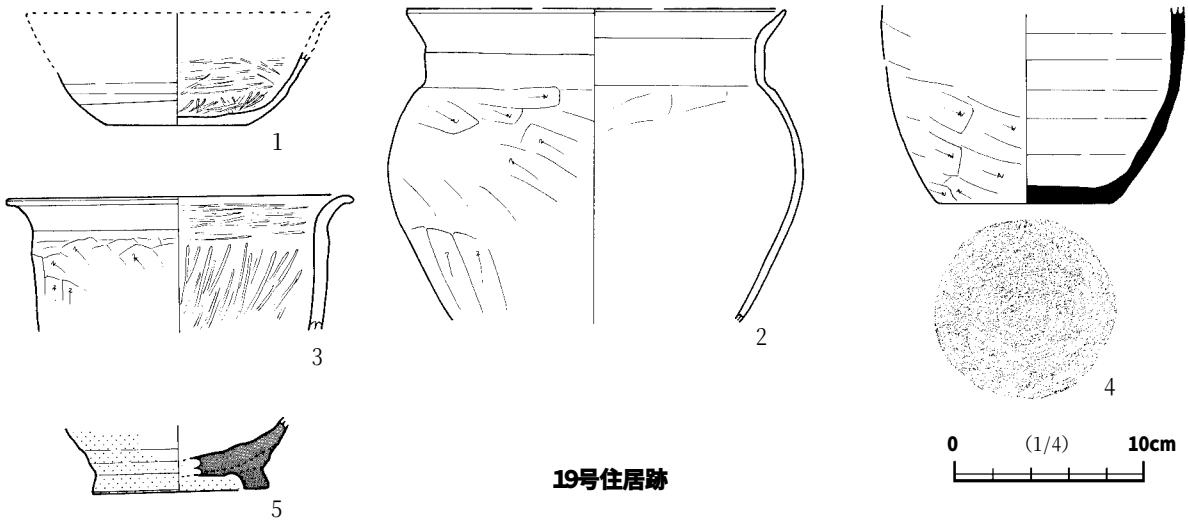
第31図　7・9・10号住居跡遺物

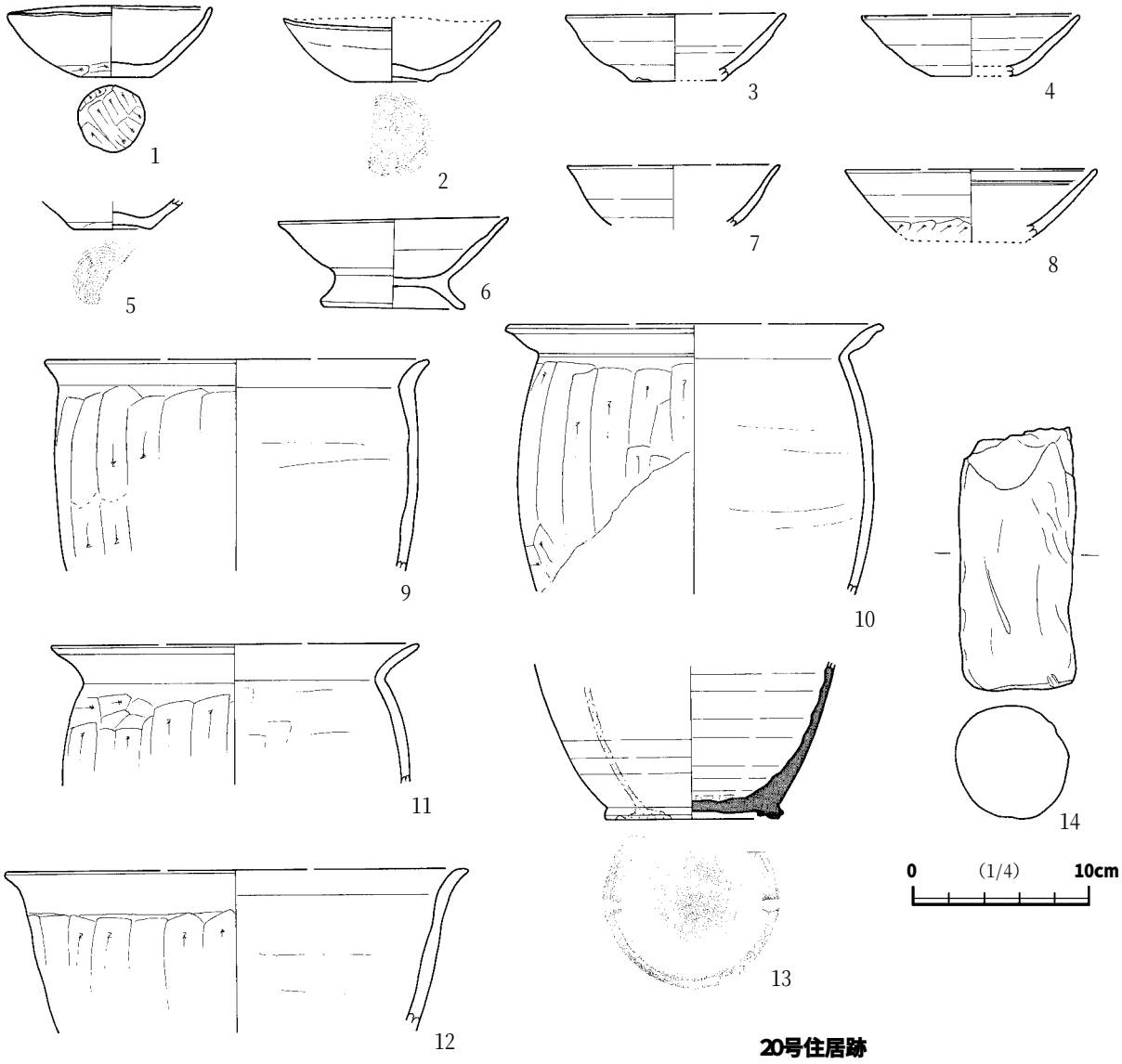


第32図　11～13号住居跡遺物

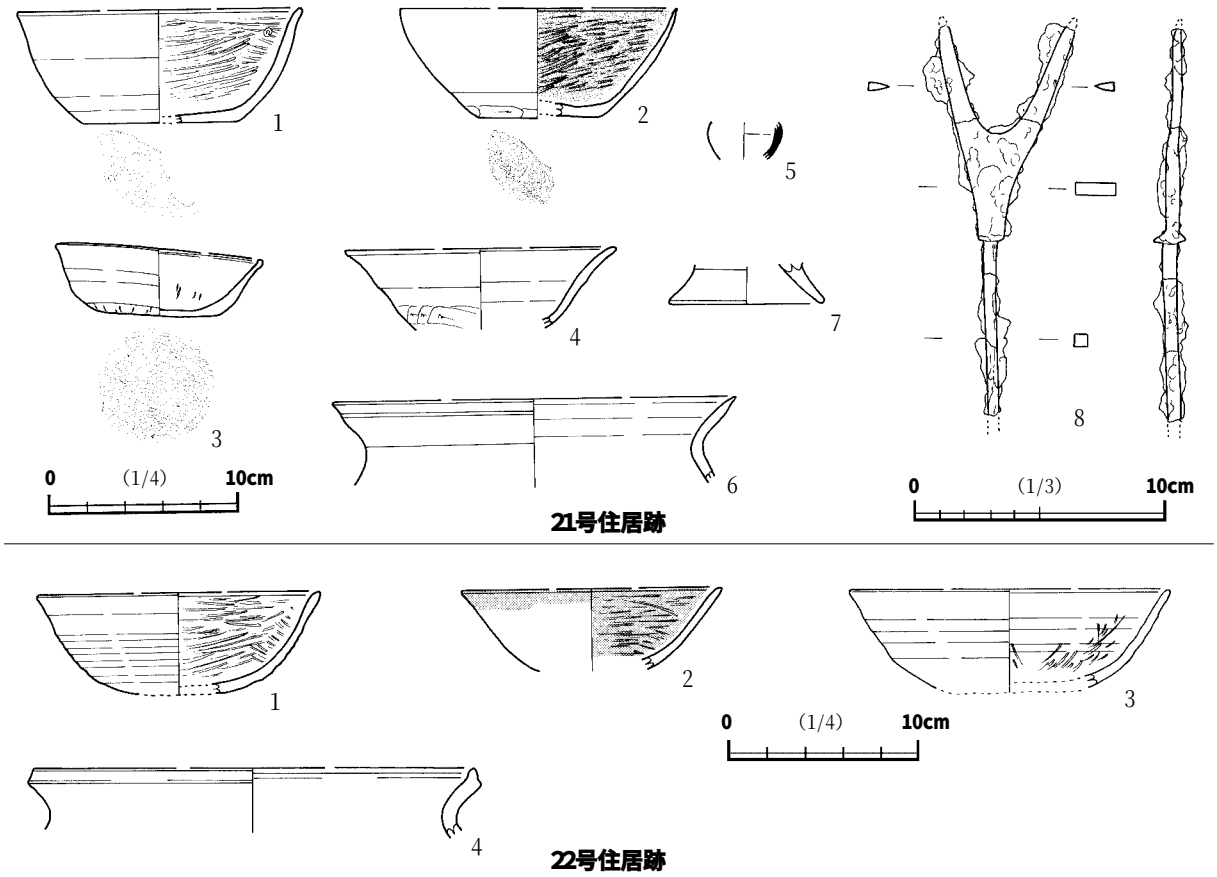


第33図　14～17号居住跡遺物





第34図　19・20号住居跡遺物



第35図　21・22号住居跡遺物

雁股鏃について

鏃の一種で中世には鏑矢として用いられる場合が多く，鏑をつけていない雁股鏃は「素雁股（すがりまた）」と呼ばれていたようである。また，箙（えびら）には，最も外側に雁股鏃，次に平根鏃，その後に通常使う矢を束ねて収納したことから，雁股鏃の別名は「上差矢（うわざしや）」とも呼ばれている。

この鏃が創られた上限は定かではないが，平安時代に献納されたとされる春日神社宝物の品や奈良時代のものとされる法隆寺献納御物の品が優品として現存し，古墳時代後期の遺物として稀に出土する場合もあることから意外に初源は古いものと推測される。

「かりまた」という呼称は，「東大寺献物帳」に「加理麻多」の名がみられることから，名の起こりは奈良時代に遡るとみられている。しかし，名称の由来は定かでなく，雁の水掻きの股に似ているとか蛙の股の形，鳥獣の翼や脚を射切るための「狩俣」が語源であるといった諸説が唱えられている。

千葉市内において雁股鏃が出土した遺跡・遺構は，砂子遺跡（Ｂ区）の６号住居跡，仁戸名遺跡の竪穴住居046，大北遺跡の018号住居跡などその数は少ない。

本遺跡出土のものは，茎部先端を欠損するが形状的によく本来的な姿を残している例といえる。鏃身部と茎部の境に受け状の突起が茎部を全周しいる。茎部は長く，受け部で鏃身部と明確に分離させており，通有の鏃の形状とは若干異なった雰囲気である。受け部の返りは鏃身部に木質部や鏑などが迫り出さないようにするためについたものであろうか。

第３表　３号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	中位	口径 13.0 最大径 13.5 器高 4.9	調整(外面):口縁部ヨコナデ,体部ヨコケズリ,底部不定方向ケズリ 調整(内面):不定方向ナデ？(彩色で不明瞭) 内彎形・丸底	胎土:白色粒(φ0.5～0.1cm),褐色粒(φ1.2～0.2cm)多く含む。雲母わずかに含む。 色調:2.5Y4/6赤褐色～5YR5/6明赤褐色 焼成:良好 彩色:内外面赤彩	3/4 口縁部の一部を欠損	11住24・35・4区一括・カマド一括	
2	土師器 坏		口径 (12.0) 残高 (3.1)	調整(外面):口縁部ヨコナデ,全体をケズリの後にナデている？口縁部と体部の境界は不明瞭 調整(内面):ナデ？ 弱く外反気味の口縁部	胎土:白色粒(φ0.1cm)が目立つ。雲母わずかに含む。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:10R5/6赤色の赤彩を内外面に施す。	1/4 口縁部の一部のみ	11住４区	
3	土師器 坏	床直	口径 (12.7) 最大径 (13.0) 残高 (3.2)	成形:内傾する輪積痕が観察できる 調整(外面):口縁部はヨコナデ,体部はケズリ 調整(内面):ナデ？ 内彎形	胎土:白色粒(φ0.1cm)が目立つ。雲母わずかに含む。 色調:5YR5/3にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:口縁端部内外面赤彩	1/4 口縁部の一部のみ	11住31	
4	土師器 坏		口径 (13.0) 残高 (3.4)	調整(外面):口縁部ヨコナデ,体部ケズリの後にナデ 調整(内面):口縁部ヨコナデ,体部もヨコナデ 楕形・口縁端部が短く外傾する	胎土:白色粒が少々入る。石英もやや目立つ。 色調:(彩色されているので地の色調は不明瞭。やや明るい赤褐色。) 焼成:良好 彩色:2.5YR6/6橙色の赤彩が内外面に施される。	1/5 口縁部の一部のみ	11住１区	
5	土師器 坏		口径 (11.4) 最大径 (12.0) 残高 (3.3)	調整(外面):口縁部ヨコナデ？体部はミガキに近い丁寧なナデ 調整(内面):彩色で不明瞭だが,ナデ？ 楕形・口縁部と体部の境は不明瞭	胎土:目立つもの無し。 色調:5YR5/3にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:内外面赤彩	1/5 口縁部の一部のみ	11住４区	外面に黒斑の後に磨かれたような形跡有り。赤彩したものか？また,内面には赤彩。
6	土師器 高坏	カマド	口径 14.8 最大径 15.3 坏部高 5.0 底径 9.5 基部径 3.3 器高 9.7	成形:坏部と脚部は別に作成後に接合。 調整(外面):坏口縁部はヨコナデ,体部はケズリ,脚部は縦位のケズリで端部はヨコナデ 調整(内面):坏口縁端部だけヨコナデ,その他は不定方向ナデ 坏部は内彎形 脚部は短脚。上半を内刳り中空形,下半端部を輪積で成形	胎土:白色粒(φ0.5～0.1cm)と雲母わずかに含む。 色調:(彩色されているので地の色調は不明瞭。明るい赤褐色。) 焼成:良好 彩色:10R4/6赤色の赤彩を脚部内面意外に施す。 ２次焼成:坏部内面底部と外面口縁部付近の表面は,被熱による劣化で脆くなっている。カマドの支脚としてさいりようされた結果か？	ほぼ完形 口縁の一部欠損	11住34・35・36	カマドの支脚として転用されていた。
7	土師器 高坏		底径 9.2 残高 (4.7)	成形:輪積成形後,内刳りで中空にしている 整形:輪積痕が未調整 調整(外面):ナデ 調整(内面):ナデ 脚部は短脚で,内刳り中空形。	胎土:目立つもの無し。キメが細かく地肌がなめらかな感じ。 色調:2.5YR7/8橙色 焼成:やや不良　器壁が柔らかく微細粒がつく。 彩色:不明だが,赤彩されていた可能性あり。	坏部は欠損し,脚部のみ残存	11住38	非在地系の土器　基部の剥離部分に若干の摩耗痕が見られることから,廃棄された段階で坏部は無かった可能性がある。
8	土師器 高坏		底径 9.3 残高 (4.6)	成形:内面に内刳りの痕跡が明瞭に確認できる。 調整(外面):不明瞭だが,縦位のケズリで端部をヨコナデか？ 調整(内面):ケズリの後にナデ 脚部は短脚で,内刳り中空形。やや脚柱部は中実気味ではある。	胎土:目立つもの無し。キメが細かく地肌がなめらかな感じ。 色調:2.5YR7/6橙色 焼成:やや不良　器壁が柔らかく微細粒がつく。 彩色:2.5YR6/6橙色の赤彩が外面に施される。	坏部は欠損し,脚部のみ残存	11住19	非在地系の土器　基部の剥離部分に若干の摩耗痕が見られることから,廃棄された段階で坏部は無かった可能性がある。
9	土師器 高坏	中位	底径 9.3 残高 (4.6)	成形:輪積成形後,内刳りで中空にしている 整形:輪積痕が未調整 調整(外面):縦位のケズリで端部をヨコナデ 調整(内面):ナデ 脚部は短脚で,内刳り中空形。	胎土:目立つもの無し。キメが細かく地肌がなめらかな感じ。 色調:7.5YR6/6赤褐色　底部付近は黒褐色に変色。 焼成:やや不良　器壁が柔らかく微細粒がつく。 彩色:10R6/6赤褐色の赤彩が外面に施される。	坏部は欠損し,脚部のみ残存(一部の端部欠損)	11住14	非在地系の土器だが,色調的には7・8とは異なるように感じられる。胎土の感触,輪積痕の未調整具合などは7に近似する。基部の剥離部分に若干の摩耗痕が見られることから,廃棄された段階で坏部は無かった可能性がある。
10	土師器 甕	カマド	口径 18.3 最大径 27.4 残高 (24.1)	成形:輪積成形 調整(外面):口縁部ヨコナデ,体部ナデ 調整(内面):ナデ 外面胴部下半に煤が付着。	胎土:白色粒(φ0.5～0.1cm)と石英・雲母が少々入る。 色調:7.5YR6/4にぶい橙色から10R5/6赤色　黒斑は7.5YR2/1黒色 焼成:良好	4/5 口縁部1/2と底部欠損	11住34	頸部外面にケズリ時に付いた工具の押しあて痕がある。内面に脱色系の斑紋が多く見られる。また,外面には二次焼成による黒斑がある。
11	土師器 甕	カマド	口径 16.8 最大径 24.8 底径 5.6 器高 26.0	成形:輪積成形 調整(外面):口縁部はヨコナデ,体部上半は横・斜位のケズリが基本だが,不定方向ケズリもしていて単位の稜線は不明瞭。下半は縦位のケズリ,底部は不定方向ケズリ 調整(内面):口縁部はヨコナデ,胴部はケズリの後に不定方向ナデ	胎土:白色粒(φ0.5～0.1cm)と雲母わずかに含む。 色調5YR5/6明赤褐色　2/1黒色 焼成:良好	完形	11住35・カマド一括	内面中位と外面中位から下半に脱色系の斑紋がある。
12	土師器 甑	カマド	口径 17.8 最大径 18.6 孔径 5.4 器高 26.7	成形:輪積成形 調整(外面):口縁部ヨコナデ,体部は縦位のケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ,体部は丁寧なヨコナデ	胎土:白色粒と石英が全体に目立つ。 色調:2.5YR5/6明赤褐色～6/4にぶい橙色　部分的に2/1黒色 焼成:良好	完形	11住33	外面全体に脱色系の斑紋がある。内面下端の穿孔部付近は二次的な要因により,明確に変色している。
13	土師器 甕		最大径 (8.0) 底径 (20.6) 残高 (26.9)	成形:輪積成形 調整(外面):斜位のケズリ(下から上方向が主体) 調整(内面):ケズリの後に不定方向ナデ(底部もケズリ)	胎土:φ0.5～0.3cm の小石が目立つ。石英が多い。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好	胴部下半の1/2残存	11住2・5・6・7・8・9・10・11・13・20・22・23・25・2区・3区	
14	土師器 甕		口径 (21.4) 最大径 (10.2) 残高 (23.0)	成形:輪積成形 調整(外面):口縁部ヨコナデ,胴部は縦位のケズリが主体,一部斜位ケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ,頸部よりも下はナデ	胎土:白色粒少々入る。 色調:7.5YR4/2灰褐色 焼成:良好	口縁部1/4　残存	11住13・27	
15	土師器 甕		底径 6.3 残高 (3.0)	調整(外面):縦位のケズリ 調整(内面):底部はナデ	胎土:白色粒(φ0.1cm)が目立つ。石英をわずかに含む。 色調:7.5YR5/3にぶい褐色 焼成:良好	底部のみ	11住16・17	
16	支脚	カマド	長さ 12.3 最大径 10.0 重量 870.4	尖端の尖らない円錐形を呈し,手捏ねで成形をおこなっている。底面端部は一応面取りをしている様子が伺えるが,カマド内に敷設されて,被熱しているので不明瞭である。際だった調整はおこなっていないようだが,成形時における微整形程度のようである。	胎土:混和剤と思われる小石が多く入る。 色調:赤褐色 焼成:良好でよく締まっているが,表面の劣化が激しい。	完形	11住37	
17	釘	覆土中	径 0.5 長さ 6.7 重量 7.4	上端に平坦面がある。断面形は円形で尖端は欠損している。尖端近くでＬ字に屈曲している。この屈曲は,2次的に曲げられたものと思われる。	表面は,錆で覆われており,原形は留めていない。	尖端欠損	11住４区	尖端はＬ字に屈曲している。

第４表　４号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	中位	口径 12.8 器高 5.1	成形:輪積は内傾する。口縁端部はわずかに外反し,内面に微彎曲する面を有する。底部の器壁が厚い。 調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部横位・斜位のケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　ナデ 楕形	胎土:白色砂粒・石英少々入る。 色調:7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:良好 彩色:10R4/6赤色 外面と内面口縁部付近赤彩	1/2　欠損	18住3	底部付近に回転ヘラ切り痕？あり
2	土師器 坏	床直	口径 12.3 最大径 12.7 器高 5.8	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部横位・斜位のケズリの後に丁寧なナデ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　ナデ 内彎形	胎土:白色砂粒・褐色粒少々入る。 色調:7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:良好 彩色:10R5/6赤色 外面と内面口縁部付近赤彩	完形	18住4・5	赤彩にしてはきれいな丹色ではないが,ヨコナデ状に何かを塗布している。
3	土師器 坏	下層	口径 13.3 最大径 13.7 器高 4.5	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリだが,稜線は不明瞭 調整(内面):口縁部ヨコナデ　ナデ？ 内彎形	胎土:φ0.2～0.3cm の小石が目立つ。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:7.5R4/6赤色 内外面赤彩	ほぼ完形(口縁部の一部欠損)	18住9・10	
4	土師器 坏	貯蔵穴・カマド	口径 (13.0) 最大径 (13.6) 器高 5.3	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリだが,稜線は不明瞭 調整(内面):口縁部ヨコナデ　ナデ？ 内彎形	胎土:白色砂粒・石英少々入る。 色調:7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:良好 彩色:2.5YR4/4にぶい赤褐色 内外面赤彩	1/2　欠損	18住12貯蔵穴カマド	内面底部が激しく劣化。
5	土師器 坏		口径 (13.0) 最大径 3.9 器高 13.5	成形:底部はやや平坦気味 調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　ナデ？ 内彎形	胎土:白色砂粒微量はいる。 色調:5YR5/3にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:10R4/4赤褐色 内外面赤彩	1/3　残存	18住1～3区	内面底部が二次被熱により激しく劣化。

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
6	土師器 坏		口径 最大径 残高	(12.0) (12.6) (4.6)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリだが,稜線は不明瞭 調整(内面):口縁部ヨコナデ　ナデ? 内彎形	胎土:白色砂粒・褐色粒少々入る。 色調:5YR5/3にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:2.5YR4/4にぶい赤褐色 内外面赤彩	1/3　残存	18住1～3区 5D-a・c・d	
7	土師器 甕		口径 最大径 頸部径 残高	(15.4) (19.8) (14.4) (19.0)	成形:口縁部内外面に接合痕 調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部上位タテケズリ・中位ヨコケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部ナデ 外面に煤による斑紋状のシミがある。(一次焼成時のものではない)	胎土:白色砂粒微量はいる。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好	上半 1/3　残存	18住8 3区	この土器は,5号溝状遺構内のピットに包含されていた遺物と考えられるが,取上番号が当遺構であったためここに掲載した。
8	土師器 甕		口径 残高	(21.0) 5.4	成形:頸部がほぼ垂直に立ち上がる。中位に凸部がある。 調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部ナデ	胎土:目立つものなし。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色　7.5YR5/4にぶい褐色(地色) 焼成:良好	口縁部 1/5　残存	18住2区	武蔵型甕 この土器は,5号溝状遺構内のピットに包含されていた遺物と考えられるが,取上番号が当遺構であったためここに掲載した。
9	土師器 手捏		口径 底径 器高	6.3 4.2 2.3	成形:手捏ね状態で器形はいびつ 整形:ほとんどおこなっていない 調整(外面):部分的にナデ 調整(内面):部分的にケズリ	胎土:φ0.1～0.5cm の白色粒入る。 色調:5RY5/4にぶい赤褐色 焼成:良好	4/5　残存	18住2区	底部中央部が欠損しているが,意図的な穿孔か? この土器は,5号溝状遺構内のピットに包含されていた遺物と考えられるが,取上番号が当遺構であったためここに掲載した。
10	須恵器 蓋	貯蔵穴	口径 残高	(12.2) (3.3)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　天井部回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ　部分的に不定方向ナデ	胎土:φ0.1cm の小石が混じる。 色調:2.5Y5/1黄灰色 焼成:良好 外面に自然釉が付着する。	口縁部 1/5　残存	18住貯蔵穴　2区 P2	東海系　貯蔵穴内とP2から出土しており,この住居が廃絶した時点ですでに破片であったことがわかる。

第５表　５号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	下層	口径 最大径 残高	(14.2) (13.5) (4.0)	成形:輪積は外傾　立ち上がり部と体部は別成形後に接合 調整(外面):口縁部はヨコナデの後にミガキ　体部はケズリ 調整(内面):口縁部はミガキ　体部は回転ナデの後に不定方向ミガキ 須恵器杯身模倣坏	胎土:白色粒少々入る。雲母微量はいる。 色調:[断面]10YR5/4にぶい黄褐色　[表面]7.5YR5/3にぶい褐色 焼成:良好 彩色:内外面に黒色処理　外面7.5YR3/2黒褐色	1/5　残存	４住8	内面に斑紋あり。
2	土師器 坏	中位	口径 最大径 残高	(14.8) (16.0) (4.0)	成形:口縁部は内傾 調整(外面):口縁部はヨコナデの後にミガキ　体部はケズリの後に部分的なナデ,不定方向ミガキ 調整(内面):口縁部はヨコナデの後にミガキ　体部は回転ナデの後にミガキ 須恵器杯身模倣坏	胎土:目立つものなし 色調:[断面]7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:良好 彩色:内外面に黒色処理　外面7.5YR3/3暗褐色 内外面共にミガキによる光沢がある。	1/3　残存	４住15・4区	内面に斑紋あり。
3	土師器 坏	中位	口径 残高	(13.6) (3.6)	成形:口縁部は内傾気味に上方に立ち上がる 調整(外面):口縁部はヨコナデの後にミガキ　体部はケズリの後に部分的なナデ,不定方向ミガキ 調整(内面):口縁部はヨコナデの後にミガキ　体部は回転ナデの後に不定方向ミガキ 須恵器杯身模倣坏	胎土:目立つものなし 色調:[断面]7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:良好 彩色:内外面に黒色処理　内外面5GY3/1暗オリーブ灰色 内外面共にミガキによる光沢がある。	1/2　残存	４住14・16・4区	外面底部に線刻あり。 外面に斑紋あり。
4	土師器 坏		口径 最大径 残高	(16.5) (18.1) (4.0)	成形:口縁部は内傾気味に上方に立ち上がる 調整(外面):口縁部はヨコナデの後にミガキ　体部はケズリの後に部分的なミガキ 調整(内面):口縁部はミガキ　体部は回転ナデの後に不定方向ミガキ 須恵器杯身模倣坏	胎土:石英・角閃石微量はいる。 色調:10YR5/3にぶい黄褐色 焼成:良好 彩色:内外面に黒色処理　内外面10YR5/3暗褐色 内外面共にミガキによる光沢がある。	1/3　残存	４住2・4区	
5	須恵器 杯身		口径 最大径 残高 たち上がり高	(12.2) (12.6) (3.4) (0.9)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　底部は回転ナデの後に約1/2程度ケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:緻密 色調:10Y7/1灰白色 焼成:良好・堅緻	1/5　残 存	４住３区	東海系
6	須恵器 杯蓋		口径 残高	(14.0) (4.4)	調整(外面):口縁部と天井部(稜から約２cmほど)は回転ナデ　以外は回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ 砂粒が目立ち,ナデによる砂粒の移動痕が顕著。	胎土:緻密・φ0.1～0.15cm の小石混ざる。 色調:[地]2.5GY7/1明オリーブ灰色　[変色部]7.5GY6/1緑灰色 焼成:須恵器にしては軟質	1/3　残存	４住1・2・4区	東海系
7	土師器 坏		口径 残高	(16.8) (2.8)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリの後に丁寧なナデ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部丁寧なナデと部分的なミガキ 須恵器杯蓋模倣坏	胎土:白色粒微量はいる。器壁には混入物は目立たない。 色調:[断面]10YR5/3にぶい黄褐色 焼成:良好 彩色:内面黒色処理　7.5YR3/3暗褐色	口縁部のみ1/2	４住４区	
8	土師器 坏		口径 残高	(16.6) (4.6)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリの後に丁寧なナデと部分的なミガキ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部丁寧なナデの後にミガキ	胎土:白色粒微量はいる。器壁には混入物は目立たない。 色調:[断面]7.5YR4/2灰褐色 焼成:良好 彩色:内面黒色処理　N2/0黒色	1/3　残存	４住1・2・3区	
9	土師器 坏	床直	口径 残高	(15.0) (2.9)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリの後に部分的に丁寧なナデ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部丁寧なナデ	胎土:白色粒微量はいる。器壁には混入物は目立たない。 色調:5YR4/3にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:内面を黒色処理しているようにも見えるが,1次焼成時の黒斑か?	1/3　残存	４住25・26	
10	土師器 坏	床直	口径 残高	(15.4) (4.9)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリだが,劣化が激しく不明瞭 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部ナデ	胎土:石英入る。 色調:5YR3/3暗赤褐色 焼成:良好	1/4　残存	４住２	
11	土師器 坏		口径 最大径 残高	(14.6) (15.3) (4.8)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリ? 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部ナデ 内外面共に全体を丁寧に赤彩しており,塗布時のナデ調整時で地の調整が極めて不明瞭	胎土:石英が断面中に目立つ。 色調:[断面]2.5YR4/4にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:内外面赤彩　10R4/4赤褐色	1/2　残存	４住３区	
12	土師器 鉢?	中位	口径 残高	(16.8) (2.9)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部ケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部ナデ 口縁部と体部の境は不明瞭だが,調整上ヨコナデを施された部分を口縁部とする。	胎土:白色粒入る。 色調:5YR4/3にぶい赤褐色 焼成:良好	1/5　残存	４住１・1区	
13	土師器 高坏		坏部口径 基部径 坏部高 残高	(18.0) 4.0 5.5 (11.9)	成形:脚部上端に坏部を接合した様子が伺える。脚部は中空形。長脚 整形:基部は接合後にナデ潰して痕跡を消そうとしている。 調整(外面):坏部口縁部ヨコナデ　体部は丁寧なナデ　脚部は縦位のケズリの後に丁寧なナデ 調整(内面):坏部口縁部ヨコナデ　体部ナデ　脚部は内刳りの後にナデ	胎土:目立つものないが,キメが細かい。 色調:[地]2.5YR5/3黄褐色 焼成:良好 彩色:黒色処理　10Y3/1オリーブ灰色	口縁部1/2 脚端部は欠損	４住20・28・2区	内外面に斑紋あり。
14	土師器 高坏	下層	残高 基部径	(13.0) 5.3	成形:脚部は内刳りで中空形。長脚 整形:脚部内面は内刳り後は未整形 調整(外面):坏基部はケズリ　脚部は縦位のケズリ 調整(内面):坏部はナデの後にミガキ　脚部は未調整	胎土:φ0.1cm の白色粒・石英が全体に入る。赤彩後にも目立つ。 色調:[地]7.5YR5/3にぶい褐色 焼成:良好 彩色:[外面]赤彩2.5YR4/6赤褐色　[坏部内面]N2/0黒色 坏部内面の黒色処理は極めて明瞭。	脚部のみ	４住18	
15	土師器 高坏	中位	残高 基部径	(5.0) 4.0	成形:脚部上端に坏部を接合した様子が伺える。脚部は内刳りで中空形。短脚 調整(外面):脚基部はヨコナデ　縦位のケズリの後にナデ 調整(内面):脚部上部は未調整　下半はあらいナデ 意味不明の線刻あり。この線刻は,赤彩前に線刻されたものと赤彩後にされたものが複合的に組み合わさっている	胎土:雲母と石英を微量含む。 色調:[地]7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:良好 彩色:外面赤彩　5YR4/4にぶい赤褐色	脚部のみ 端部は欠損	４住19	
16	土師器 高坏	床直	残高 基部径	(6.4) 5.5	成形:脚部上半棒状の中実形で直下する。下半は外反し,中空。短脚 調整(外面):縦位のケズリの後にナデ 調整(内面):指頭圧痕が見られることから,下半の中空状の脚部が棒状中実部分に後付で接合し,内面は指ナデなどのあらい調整をしている可能性が考えられる。	胎土:目立つ混入物なし。 色調:10YR4/2灰黄褐色　10Y3/1オリーブ黒色 焼成:良好 彩色:黒色処理ではないが,上記のオリーブ黒色が表面に散見できる。	脚部上半のみ	４住９	外面に斑紋あり。
17	土師器 高坏		残高 基部径	(4.1) 4.8	成形:脚部は内刳りで中空形。短脚 調整(外面):縦位のケズリ 調整(内面):上半は未調整　下半あらいナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:2.5YR4/3にぶい赤褐色 焼成:良好	脚部上半のみ	４住４	外面に斑紋あり。

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
18	土師器 高坏		残高 (2.0) 基部径 4.5	成形:輪積成形 整形:内面に輪積痕明瞭 調整(外面):ナデ 調整(内面):あらいナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:[地]7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:良好 彩色:外面赤彩 5YR4/4にぶい赤褐色	脚 部 上 半 のみ	4住29	
19	須恵器 杯	中位	口径 12.0 底径 7.3 器高 3.9	成形:口縁端部がわずかに外反 調整(外面):回転ナデ 底部付近は手持ちヘラケズリ 底部は回転ヘラ切り後ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:雲母・φ0.3～0.5cm の粘土粒・φ0.5～0.1cm の白色砂粒が混ざる。 色調:7.5YR5/4にぶい褐色 焼成:やや不良 表面の劣化が激しい。	ほぼ完形	4住24	巡回展 この土器は,遺構覆土中位で出土しており,住居廃絶後の凹みに後世に土器を廃棄したものか?
20	土師器 甕		口径 18.0 最大径 19.7 残高 (23.5)	成形:輪積痕が外面胴部中位に見られる。 整形:口縁部～頸部内面にヨコナデの細かい条線が明瞭に残存。 調整(外面):口縁部ヨコナデ 細かい縦位のケズリ 下半は稜線が不明瞭 調整(内面):口縁部ヨコナデ 体部ナデ	胎土:目立つものなし 色調:5YR6/4にぶい橙色 焼成:良好	底 部 の み 欠損	4住36	巡回展
21	土師器 甑	床直	口径 (25.2) 孔径 (10.2) 残高 (24.4)	成形:輪積成形 内傾 調整(外面):口縁部ヨコナデ 上半は縦位のケズリ,下半は横位のケズリの後にナデ 調整(内面):ケズリの後に器壁を潰すように丁寧にナデ 孔端は横位のナデ 外面は明瞭に輪積の痕跡が残る。内面の丁寧さと比べ杜撰さを感じる。	胎土:φ0.1cm の小石が散在する。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好	1/3 残存	4住22・23・33・1区	

第６表　６号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	床直	口径 (13.4) 器高 3.7	調整(外面):口縁回転ナデ 体部ケズリ後ミガキ 調整(内面):口縁回転ナデ 体部ケズリ後ミガキ 内,外共にミガキは密ではない。	胎土:目立つ混入物なし。 色調:5YR5/4にぶい赤褐(内) 7.5YR5/3にぶい褐(外) 焼成:良好 彩色 外面,光沢有り	1/2 残存	6住1・4	
2	土師器 坏	カマド	口径 (12.8) 最大径 (13.0) 残高 (3.0)	調整(外面):口縁回転ナデ 体部ナデ 調整(内面):口縁回転ナデ 体部ナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:2.5YR5/4にぶい赤褐色 焼成 彩色:赤彩内外 2.5YR3/4暗赤褐色	1/8 残存	6住 カマド	
3	土師器 坏	カマド	口径 (16.0) 残高 (4.8)	調整(外面):口縁回転ナデ 体部微かにケズリの痕跡有 後ナデ 調整(内面):口縁回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好 彩色:劣化の為不明	1/4 残存	6住 カマド	劣化激しい
4	土師器 坏	中位	口径 (17.0) 残高 (6.0)	調整(外面):口縁回転ナデ 体部ナデ 調整(内面):口縁回転ナデ 体部ナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:やや不良 彩色	1/5 残存	6住3	
5	土師器 甕	上層	口径 (14.2) 残高 (6.2)	調整(外面):劣化の為不明 調整(内面):劣化の為不明	胎土:φ0.1cm の小石混ざる 色調:2.5YR6/6橙 焼成:劣化の為不明 彩色	口 縁 ～ 頸 部 の1/3残存	6住 8・9・12 4区	被熱劣化激しい 一部発泡している
6	土師器 甕	床直	口径 (10.6) 最大径 (14.1) 底径 (4.4) 器高 14.3	調整(外面):口縁回転ナデ 体部縦方向のケズリ後ナデ 調整(内面):口縁回転ナデ 体部ナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成 彩色	1/2 残存	6住15	内面:斑文と黒斑 外面:口縁に煤
7	土師器 甕	床直	底部 6.4 残高 (9.7)	調整(外面):縦ケズリ 調整(内面):縦方向のヘラ痕多く残るがケズリではなく,ナデの様子	胎土:目立つ混入物なし。 色調:2.5YR4/4にぶい赤褐～1.7/1 赤黒 焼成 彩色	下部のみ	6住 11・12・13・14・16 カマド 4区	下部に炭化物付着 内面斑文有り

第７表　７号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	床直	口径 12.6 最大径 13.7 器高 4.0 立ち上がり高 1.1	調整(外面):口縁回転ナデ,部分的にミガキが見られる。体部ミガキ 調整(内面):口縁丁寧なナデ,体部回転ナデ,又は放射線ミガキか?	胎土:目立つ混入物なし。 色調:7.5YR6/4にぶい橙 2.5YR4/4にぶい赤褐 焼成:良好 彩色:内面赤彩 2.5YR4/6赤褐	ほぼ完形	15住・6 2区	口縁一部欠損 内面斑文有り 外体部,赤彩部分は磨かれた様に平滑で底部器壁はざらつく。
2	土師器 坏	床直	口径 12.8 最大径 13.9 器高 4.4 立ち上がり高 1.4	調整(外面):口縁回転ナデ 体部ケズリ後微かにミガキか? 調整(内面):口縁回転ナデ 体部微かにミガキか?	胎土:目立つ混入物なし。 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好 彩色:赤彩 2.5YR4/6赤褐色	完形	15住・5	外体部,赤彩部分は磨かれた様に平滑で底部器壁はざらつく。
3	土師器 坏	床直	口径 12.4 最大径 14.0 器高 4.8 立ち上がり高 1.5	調整(外面):口縁回転ナデ 体部ケズリ後ミガキ 調整(内面):口縁～体部回転ナデ 体部放射線のミガキ	胎土:石英全体に入る 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成: 彩色:黒彩5YR3/1黒褐色5YR4/2灰褐,赤彩もしているか?	ほぼ完形	15住 3・4・2区	
4	土師器 坏		口径 13.4 器高 5.0	調整(外面):口縁回転ナデ 体部横ケズリ 調整(内面):ナデ,口縁と体部の差なし,底部のミガキ逆時計廻り	胎土:φ0.2cm の褐色粒入る 色調:(内面)10YR5/2灰黄褐 (外面)7.5YR5/3にぶい褐 焼成: 彩色:黒彩5Y3/1,黒褐色,やや光沢有り	ほぼ完形	15住3・4区	内面斑文有り。 口縁外面の一部に煤?
5	土師器 高坏	柱穴 (3P) 貯蔵穴	口径 14.0 最大径 4.3 残高 (8.5) 坏高 3.5	調整 坏部(外面):口縁ナデ後ミガキ 体部ケズリ後ミガキ (内面):ナデ後ミガキ 脚部(外面):縦ケズリ後ミガキ (内面):ケズリ(回転させている)	胎土:白色粒混入 色調:2.5YR4/3にぶい赤褐 焼成:良好 彩色:赤彩10R3/6暗赤	9/10 残存	15住 P-3・9・1・3区	脚端部欠損,中空型,地の色は表面の色とともに違う。赤彩前に黒色処理をしているのか?
6	土師器 高坏	床直	基径部径 4.7 残高 (10.2)	調整(外面):縦ミガキ 坏部はケズリ 調整(内面):ヘラ荒いナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:7.5YR5/3にぶい褐 焼成:良好 彩色:赤彩	脚 上 部 の み	15住・2	中実型 内面の地の色よりも赤く見える。薄く,彩色あるのか?
7	土師器 坏	貯蔵穴	口径 (12.0) 残高 (3.2)	調整(外面):口縁回転ナデ 体部横のケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:雲母混入 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好 彩色:	1/5 残存	15住・10	
8	土師器 坏		口径 (12.0) 残高 (3.0) 立ち上がり高 1.7	調整(外面):口縁回転ナデ 体部ケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ 体部ケズリ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成: 彩色:赤彩2.5YR4/8赤彩	1/10 残存	15住4区	赤彩で調整は不明瞭
9	土師器 甑		口径 (25.0) 底径 8.0 器高 19.7	調整(外面):口縁回転ナデ 体部縦ケズリ,穿孔付近は横のケズリ,ケズリ後丁寧なナデ 調整(内面):口縁回転ナデ 体部丁寧な縦ミガキ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:5YR5/4にぶい赤褐,部分的に5YR6/7黒も有り 焼成:良好 彩色:	2/3 残存	15住4区 7B-d-1	口縁1/2欠損 内面下部に斑文有り。外面は総体的に上部ほど,下部よりも劣化が激しい。
10	土師器 甕	貯蔵穴	口径 16.8 最大径 21.8 底径 6.6 器高 25.7	調整(外面):口縁回転ナデ 体部上半縦ケズリ,下端横ケズリ,後前後に大きく斜位のケズリ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:5YR5/3にぶい赤褐 焼成:良好 彩色:	口縁の一部欠損	15住・7	内面に斑文,特に中位に多い。中位上部に煤付着
11	土師器 甕	上層	口径 16.8 最大径 20.0 底径 6.8 器高 26.5	調整(外面):口縁回転ナデ 体上部縦ケズリ,下半横ケズリ後荒いナデ 調整(内面):口縁回転ナデ	胎土:白色針状物質目立つ,石英も混入 色調:5YR4/3にぶい赤褐～5YR2/1黒褐 焼成:良好 彩色:	ほぼ完形	15住・1	体部一部欠損 胎土の質感がきめ細かく,ややざらついている。
12	土師器 甕	貯蔵穴	口径 16.3 最大径 17.2 底径 6.3 器高 16.9	成形:輪積み 調整(外面):口縁回転ナデ 体部横ケズリ,底部付近ナデ 調整(内面):口縁回転ナデ 体部ナデ,一部ケズリ	胎土:針状物質少し入る 色調:2.5YR5/4にぶい赤褐～5YR6/4にぶい褐,5YR4/1褐灰 焼成:良好 彩色:	完形	15住・8	外側中位より上に煤付着内側口縁付近に斑文下部1/3までは,有機物と思われる物付着

第８表　９号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏 (灯明皿)		口径 底径 器高	(14.4) (9.8) 3.0	調整(外面):口縁回転ナデ　体下部～底部は手持ちヘラケズリ 調整(内面):すべて回転ナデ	胎土:キメ細かい 色調:(外面)10YR6/3にぶい黄褐　(内面)N2/0黒 焼成:良好 彩色:内黒	1/4　残存	13住・1区	口縁部に油煙痕
2	土師器 甕		口径 残高	(16.0) (5.0)	調整(外面):口縁回転ナデ　一部指頭圧痕残る。体部縦ケズリ 調整(内部):口縁回転ナデ　ナデだが指頭圧痕多く残る。	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR4/2灰黄褐 焼成:良好	口縁～体部上半の1/3残存	13住3区	内面の色調が全体的に白く脱色している。2次被熱, 斑文有り。
3	土師器 甕		口径 器高	(23.0) (9.0)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部縦, 斜めのケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　体部ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR4/3黄褐 焼成:良好	口縁～体部上半の1/4残存	13住3区	口縁端部を少しつまみ上げている。

第９表　10 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏		口径 器高	(12.8) 4.2	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5Y6/4にぶい黄 焼成:良好 彩色:5Y3/1オリーブ黒(くすべ)	1/2　残存 底部完全に欠損	20住1区	
2	須恵器 甕		口径 残高	(19.4) 3.4	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:石英, 角閃石等無機質鉱物目立つ 色調:2.5Y5/2暗灰黄 焼成:良好(須恵にしては悪い)	口縁の1/7残存	20住1区	

第 10 表　11 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	床直	口径 底部 器高	(13.2) 6.0 3.8	成形:回転糸切り 調整(外面):ケズリ後ナデ 調整(内面):ケズリ後ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/2　残存	2住-5	ロクロ土師器 内外に斑文
2	土師器 甕	床直	口径 底部 器高	(17.5) (5.2) 16.9	調整(外面):口縁回転ナデ　体部上半縦ケズリ, 下半横ケズリ 調整(内縁):口縁回転ナデ　体部ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR3/4暗褐 焼成:良好	口縁～底部の1/3	2住 12・17・18・19・29	内面下部劣化が激しい。
3	土師器 甕	床直	口径 残高	(22.2) (12.4)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部縦ケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　体部ナデ	胎土:φ4mm の小石 色調:5YR4/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁～体部の1/3残存	2住27・4区	
4	土師器 甕	床直	口径 残高	(22.0) (8.2)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部縦ケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　体部ナデ	胎土:φ1mm の白色粒と小石入る 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁の1/4残存	2住	内外面斑文有り。
5	支脚	カマド	最大径 残長 重量	9.0 (9.1) 500.3	調整:縦ケズリ		一部のみ		

第 11 表　12 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	下層	口径 底径 器高	14.6 7.8 3.9	調整(外面):回転ナデ　下端～底部外周ヘラケズリ, 底部回転糸切り後ヘラ調整 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR4/3褐色 焼成:良好 彩色:(黒っぽい10YR3/1黒褐～2/1黒)	ほぼ完形	3住-5	口縁の一部欠損 質感は須恵 刻書？有り 内外斑文
2	土師器 坏		口径 残高	(14.0) (3.9)	調整(外苑):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/5　残存	3住・1区	
3	土師器 坏	下層	口径 残高	(14.0) (3.5)	調整(外苑):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/3にぶい赤褐 焼成:良好	1/3　残存	3住・4・3区	
4	土師器 坏	床直	口径 残高	(15.0) (4.6)	調整(外苑):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10R4/4赤褐 焼成:良好	1/7　残存	3住・7	
5	土師器 坏	下層	口径 残高	(14.5) (4.0)	調整(外苑):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ？ 調整(内面):回転ナデ	胎土:キメ細かく表面滑らか 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/5　残存	3住・4	
6	土師器 甕	床直	口径 最大径 残高	12.3 13.9 (6.3)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部横ナデ 調整(内部):口縁回転ナデ　体部横ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/2灰褐 焼成:良好	上半のみ 1/2　残存	3住・2 4区 1溝・1F-a	内面に成形時のしわ有り。 ケズリ痕は全くない。 須恵に近い。
7	須恵器 甕		口径 残高	(20.8) (9.0)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部平行タタキ 調整(内面):口縁回転ナデ　体部ケズリ後ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR6/3にぶい黄褐 焼成:不良	口縁のみ 1/4　残存	1F-a 1溝	タタキだが須恵の様な質感は全くない。
8	須恵器 甕	床直	底径 残高	(16.0) (12.5)	調整(外面):下端の斜・横のケズリ以外はナデ 調整(内面):ナデ　表面の剥離がひどい。	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/3にぶい褐 焼成:不良 彩色:全体に黒い　10YR3/2黒褐	底部のみ	3住-3	タタキは見られない。 土の質感は土師に近い。
9	灰釉陶器 長頸壺	床直	底径 残高	(7.4) (3.1)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ　自然釉がかかっている	胎土:緻密 色調:10YR6/1褐灰 焼成:良好	底部の1/4残存	1溝 (2F-a)	東海系 自然釉
10	灰釉陶器 皿	床直 (壁溝内)	底径 残高	6.6 (1.4)	調整(外面)回転ナデ　底部回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:緻密φ1～2mm の小石入る 色調:10YR6/2灰黄褐 焼成:良好　堅緻	底部と高台のみ	3住-6	印毛塗り, 灰釉, かさね痕 いわゆる三ヶ月高台ではない。 K-90
11	鉄器 刀子	床直	長さ 幅 厚み 重量	15.5 2.2 0.4 30.4	刃部先端を欠損 厚みは比較的厚い		ほぼ完形	3住-1	3ヶ所で折れて破損している。
12	鉄器 釘？		長さ 厚み 重量	5.1 0.5 1.3	断面は方形		下端欠損	3住・2区	

第 12 表　13 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 甕	下層	口径 (19.4) 頸径 (17.0) 最大径 (19.4) 残高 (16.8)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部ケズリ斜位だが上半分は下から上へ削っている。ケズリ後,肩部に一条の沈線をめぐる。 調整(内面):口縁回転ナデ　体部ナデ 煤べ土器	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好 彩色:(内面は黒く変色している。	上半のみ 1/5残存	5住-1	武蔵甕 内面に若干の煤付着 外面下半は2次焼成時の山砂の付着有り。
2	土師器 甕	下層	頸径 (19.4) 最大径 (21.0) 残高 (18.0)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部縦ケズリ後ナデ 調整(内部):口縁回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/2灰褐 焼成:良好	体部のみ 1/4残存	5住 2・3・2区	内面斑文有り

第 13 表　14 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	床直	口径 (11.8) 底径 5.8 器高 4.1	成形:底部回転糸切り,一ヶ所貫通した穴有り 調整(外面):回転ナデ 調整(内縁):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/6赤褐 焼成:良好	口縁 1/2欠損 底部は完形	7住・8	質感は須恵器に似る。 内面は斑文有り。
2	土師器 坏	床直	口径 (13.4) 底径 4.8 器高 3.4	成形:体部下端　回転ヘラケズリ 底部　回転糸切り後回転ヘラケズリ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/6明赤褐 焼成:良好	1/2　残存	7住6・7	質感は須恵器に似ている。内面に斑文
3	土師器 坏	床直	口径 (11.0) 底径 (6.0) 器高 3.7	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/8赤褐 焼成:良好	1/2　残存	7住・1 4区	他の土器よりも胎土が明るい色
4	土師器 坏		口径 (13.8) 残高 4.2	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ後ミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:(外面)10YR4/2灰黄褐 焼成:良好 彩色:(内面)黒彩　5B2/1青黒	1/5　残存	7住	
5	土師器 台付坏	カマド	口径 (14.6) 残高 (4.5)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	1/6　残存	7住 カマド1区	内・外斑文有り
6	土師器 坏		口径 (12.8) 残高 (5.9)	調整(外面):回転ナデ　下半静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ後ミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/3にぶい褐 焼成:良好	1/5　残存	7住	

第 14 表　15 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	床直	口径 (15.1) 底径 6.4 器高 4.9	成形:底部　回転糸切り 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/6明赤褐 焼成:良好	口縁一部 欠損	8住3・9	内外面斑文有り 質感は須恵
2	土師器 坏	下層	口径 (14.6) 底径 6.6 器高 4.4	成形:底部　回転糸切り後ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ後下端ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/6赤褐 焼成:良好	1/2　残存	8住1・3・2 区・3区	質感は須恵
3	土師器 坏	上層	口径 7.6 残高 3.5	成形:底部　回転糸切り 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/6明赤褐 焼成:良好	底部のみ	8住2・7	底部が少し突出する。
4	土師器 坏	中位	口径 (15.0) 残高 3.9	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/6明赤褐 焼成:良好	口縁の1/3 残存	8住25	質感は須恵
5	土師器 甕	下層	頸部径 (16.4) 最大径 (21.0) 残高 (18.7)	調整(外面):上半横ナデ 調整(内面):下半横のケズリ(左右の方向有り)	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/6明赤褐 焼成:良好	体部の1/3 残存	8住2・4	頸部の一部に煤付着

第 15 表　16 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 皿		口径 (14.6) 底径 6.7 器高 2.4	成形:底部　回転糸切り 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/6明赤褐 焼成:良好	1/3　残存	3I-b-2	内面に斑文
2	土師器 皿	下層	口径 (15.0) 底径 (8.6) 器高 2.3	成形:底部　回転糸切り 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:良好	1/4　残存	9住・15 旧カマド	
3	土師器 皿	床直	口径 14.9 底径 7.2 器高 2.8	成形:底部　回転糸切り後多方向のヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ,下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐と5YR3/1黒褐の斑 焼成:良好	口縁一部 欠損	9住・10	内面に斑文
4	土師器 坏		口径 (14.7) 底径 6.9 残高 (4.7)	成形:底部　多方向ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	口縁の1/5 底部完存	9住	2次被熱しており,内面が劣化した部分有り。
5	土師器 坏	下層	口径 (17.3) 底径 7.6 残高 (5.1)	成形:底部　回転糸切り後静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ後ヘラミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	1/3　残存	9住・4・ 13・17	
6	土師器 坏	下層	口径 13.4 底径 7.0 器高 (4.5)	成形:底部　回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ後見込み部のみにヘラミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:(外面)5YR6/6橙　(内面)5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	2/3　残存	9住・8	内面に部分的に煤付着
7	土師器 坏	下層	口径 13.8 底径 6.0 器高 4.2	成形:底部　回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙　(口縁)10R6/4 焼成:良好	1/2　残存	9住14	口縁の一部に煤付着
8	土師器 皿		口径 (13.0) 底径 (6.2) 器高 1.6	成形:底部　回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR5/1褐灰 焼成:良好	1/3　残存	3I-b-3	2次被熱により,全体が劣化
9	土師器 坏	貯蔵穴	口径 (16.0) 残高 (4.3)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:良好	1/5　残存	9住 貯蔵穴	

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
10	土師器 坏	貯蔵穴	口径 残高	(12.8) (3.5)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:良好	1/8　残存	9住 貯蔵穴	
11	須恵器 甕	床直	口径 頸径 最大径 残高	(25.7) (23.0) (25.8) 23.4	調整(外面):口縁回転ナデ 調整(内面):口縁回転ナデ　全体に指頭圧痕,上半タタキ,下半ヘラケズリ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:須恵にしては不良	1/5 底部欠損	9住・20 1区	質感は土師器
12	須恵器 甕		口径 残高	(33.4) 5.4	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:堅緻 色調:N4/0灰 焼成:良好	口縁の1/7	3I-b-1	大甕
13	鉄器 鎌?		残長 幅 厚み 重量	(4.8) 2.9 0.2 9.9		胎土: 色調: 焼成:	両端欠損		

第 16 表　17 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 台付坏	床直 (壁溝中)	口径 残高	(10.8) 3.4	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	1/5　残存	10住-5	表面は水引きの様なナデをしている所もある。
2	土師器 坏	下層	口径 残高	(6.8) 2.3	成形:底部　静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR2/1黒褐 焼成:良好 彩色:黒色処理?	下半の1/3 残存	10住・2	

第 17 表　19 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 鉢		底径 残高	7.4 (3.9)	成形　底部:回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ後ヘラミガキ	胎土:褐色粒φ2mm入る 色調:5YR5/6明赤褐 焼成:良好	下半～ 底部	19住3区 7D-a	
2	土師器 甕	カマド	口径 頸径 最大径 残高	(20.2) (18.0) (22.0) (16.5)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部上半横ケズリ,下半縦ケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　体部全体ナデ	胎土:角閃石がとても目立つ 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁～ 体部上半	19住・3・ カマド 1区	武蔵甕
3	土師器 甑	3層	口径 残高	(18.4) (7.0)	調整(外面):口縁回転ナデ　口縁近くは斜のケズリ,以下縦のケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　体部ナデ後ヘラミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好	口縁の1/4	19住・1・ 3区	
4	須恵器 壺?	カマド	底径 残高	9.0 10.6	調整(外面):横ケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10yr5/1褐灰 焼成:須恵にしては不良	底部下半 完存	19住 カマド	2次被熱の為表面劣化
5	灰釉陶器 長頸壺	3層	底径 残高	(9.2) (3.8)	調整(外面):回転ケズリ 調整(内面):ナデ　灰釉は内面にも一部付着	胎土:緻密 色調:(外)2.5Y6/1黄灰　(内)10YR6/2灰黄褐 焼成:良好　堅緻 彩色:灰釉　内外	底部の1/2	19住2	

第 18 表　20 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	床直	口径 底径 器高	11.8 4.0 4.1	成形　底部静止ヘラケズリ 整形　ゆがみ有り 調整(外面):不整方向のナデ　立ち上がりは静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/6橙　7.5YR4/2灰褐 焼成:良好	ほぼ完形	1住・1	口縁一部欠損 内外斑文有り ゆがみ有り
2	土師器 坏	床直	口径 底径 器高	(12.3) 4.8 3.6	成形　底部回転糸切り 調整(外面):回転ナデ　立ち上がりは全くケズリなし 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ1mm の小石少量入る 色調:5YR5/4にぶい赤褐,5YR3/1黒褐 焼成:良好	1/2　残存	1住・26	内外斑文(内側中心) 口縁の一部に油煙付着
3	土師器 坏	床直	口径 底径 器高	(12.6) (5.4) 3.8	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ2～5mm 褐色粒少し入る 色調:5YR4/3にぶい赤褐 焼成:良好	1/5　残存	1住・2 2区	内外斑文
4	土師器 坏	床直	口径 底径 器高	(12.4) (4.6) 3.5	成形　ヘラケズリ? 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5YR4/5にぶい赤褐 焼成:良好	1/5　残存	1住・9	口縁の一部に油煙付着
5	土師器 坏		底径 残高	(4.4) (1.8)	成形　底部回転糸切り 調整(外面):回転ナデ　下端部ケズリ 調整(内面):回転ナデ(ハケ目に似る)	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	底部～ 立ち上がり の1/2残存	1住・1区	
6	土師器 台付坏	床直	口径 底径 器高 基部径	13.2 8.0 5.3 6.5	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ2mm の褐色粒少し入る 色調:10YR5/4にぶい黄褐 焼成:良好	高台の一部欠損	1住16・ 1・2区	内外斑文
7	土師器 坏	床直	口径 残高	(12.0) (3.7)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/2灰褐 焼成:良好	1/7　残存	1住・22	内外斑文
8	土師器 坏	床直	口径 残高	(14.3) (3.8)	調整(外面):回転ナデ　下端ケズリ 調整(内面):回転ナデ　上半に沈線状の凹線2条入る	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/3にぶい赤褐 焼成:良好	1/5　残存	1住・2 2区	内外斑文
9	土師器 甕	床直 カマド	口径 残高	(22.0) (12.0)	調整(外面):口縁横ナデ　体部幅1.7cm 程の下から上への縦ケズリ 調整(内面):口縁横ナデ　体部回転ナデ後口縁から胴部上半にかけて丁寧な横ナデ施す。	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁～ 体部の1/6 残存	1住・28・ 29カマド	外面一部に灰?付着
10	土師器 甕	床直	口径 残高	(21.6) (12.4)	調整(外面):口縁回転ナデ　上半縦ケズリ　下半横ケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　6cm 単位の横位ナデ	胎土:φ5mm の褐色粒目立つ 色調:5YR5/3にぶい赤褐 焼成:良好	上半～ 口縁の1/3 残存	1住・17	内外斑文 外面一部煤付着

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
11	土師器 甕	床直	口径 残高	(21.0) (8.0)	調整(外面):口縁横ナデ　体部縦ケズリ(頸近くは横ケズリもある) 調整(内面):口縁横ナデ　体部木口状工具による横ナデ, 部分的に押しつけが強く凹を作る, ハケ目に似る。	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5YR5/6明赤褐 焼成:良好	上半の1/3残存	1住・6 3D-c	内外斑文
12	土師器 甑?	床直	口径 残高	(25.4) (9.2)	調整(外面):口縁横ナデ　体部縦ケズリ 調整(内面):口縁横ナデ　体部ナデ　内面はとても丁寧にナデている。	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/3にぶい赤褐～5YR2/1黒褐 焼成:良好	口縁の1/3残存	1住 12・13・14 1区	内側劣化が激しい。 不揃いの木口工具使用か? 沈線状の凹みが目立つ
13	灰釉 長頸壺	床直	底径 残高	10.0 (9.0)	成形:底部回転糸切り後付け高台 調整(外面):回転ケズリ後ナデ 調整(内面):回転ケズリ後ナデ	胎土:白色砂粒少々入る 色調:10YR6/1褐灰 焼成:良好	底部～体下部の2/3残存	1住18	内底に自然釉 外面にも灰釉の垂れ有り, 高台底部に棒状工具の凹み有り。
14	支脚	カマド	残長 直径 重量	(15.0) 6.5 662.4	調整　ケズリ後ナデ 上下幅均一である。 被熱により表面の劣化は激しい。	胎土:目立つ混入物なし 色調: 焼成:良好	ほぼ完存	1住	「×」印有り

第 19 表　21 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏		口径 底径 器高	(15.2) (8.0) 6.0	成形　底部回転糸切り 調整(外面):回転ナデ　下端はケズリ 調整(内面):回転ナデ後ミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/6明褐 焼成:良好	1/4　残存	14住	
2	土師器 坏	カマド	口径 底径 器高	(14.8) (6.1) 5.8	成形　底部静止糸切り 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ後ヘラミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR5/3にぶい黄褐色 焼成:良好 彩色:内黒　7.5YR1.7/1黒	1/4　残存	14住7	
3	土師器 坏		口径 底径 器高	(10.9) 6.2 3.8	成形　底部回転糸入り 調整(外面):上半回転ナデ　下半不整方向のナデ 調整(内面):上半回転ナデ　下半不整方向のナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/4にぶい赤褐 焼成:良好	4/5　残存	14寿 3E-d	口縁内側に入る
4	土師器 坏	カマド	口径 残高	(14.4) 4.3	調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR4/6褐色 焼成:良好	1/5　残存	14住5	
5	須恵器 小壺	カマド	最大径 残高	4.0 (2.0)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好 彩色:(内面)黒色処理　7.5YR2/1黒色	1/5　残存	カマド	外面上半に煤 超小型の壺?
6	土師器 甕		口径 残高	(21.6) (4.6)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ 口唇部を摘み上げるようにおさめる。	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/4にぶい赤褐色 焼成:良好	口縁のみ1/3残存	14住4区 3E-a	
7	土師器 台付坏	床直	残高 底径	(2.2) 8.4	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ 台付坏の高台部のみ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/8明褐色 焼成:良好	台部のみ	14住2	
8	鉄器 鉄鏃		長さ 茎部径 重さ	(15.6) 0.6 34.8	茎部先端は欠損 比較的よく残存している 雁股鏃		ほぼ完形	14住2区	

第 20 表　22 号住居跡遺物一覧

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏		口径 残高	(15.0) 5.4	成形　底部ケズリ? 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ後ヘラミガキ 内面細かくミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい橙 焼成:良好	1/5　残存	17住3区	
2	土師器 坏		口径 残高	(14.0) (4.4)	調整(外面):回転ナデ後上端のみヘラミガキ 調整(内面):回転ナデ後横のヘラミガキ 内黒	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好 彩色:内黒　7.5YR2/1黒	1/7　残存	17住1区・2区	
3	土師器 坏	カマド	口径 残高	(17.0) (5.2)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ後内面ヘラミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/2　残存 底部なし	17寿 6カマド 8カマド 12カマド	焼土化した山砂の魂 3ヶ所に付着
4	土師器 甕		口径 残高	(23.2) (3.6)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁のみ1/2残存	17住 1区 2区 3区 カマド	

b　掘立柱建物跡（第36～55図）

各建物の概略は下表の一覧及び当章の冒頭に記載しているので，各々の詳細は割愛するが，時期推定が可能なものに関して若干の補足を行っておく。

掘立柱建物跡が検出された範囲は極めて攪乱がひどく，破壊された柱穴が多く存在していた。遺物は，少量出土しているものの攪乱により破壊や移動を余儀なくされていた場合が多く，柱穴に伴う出土と認定できる遺物は限られてしまった（第56図）。遺物が出土したのは，1・７・15・16・20号掘立柱建物跡しかない（15・20号掘立柱建物跡は後述するのでここでは取り上げない）。

１号掘立柱建物跡は柱穴２・８・10から坏類の破片が出土している。柱穴２の須恵器杯蓋（第56図-11）は，つまみが欠損するが８世紀後葉に比定でき，柱穴８の須恵器杯も同時期と考えられる。

７号掘立柱建物跡は柱穴２・７から灯明皿と皿が出土している。皿は９世紀代のものである。

16号掘立柱建物跡は柱穴３から坏類が２点出土している。双方とも８世紀後半から９世紀初頭頃に比定できる。

これらのことから，掘立柱建物跡が８世紀後半から９世紀代に造られたものが多いと推測できる。

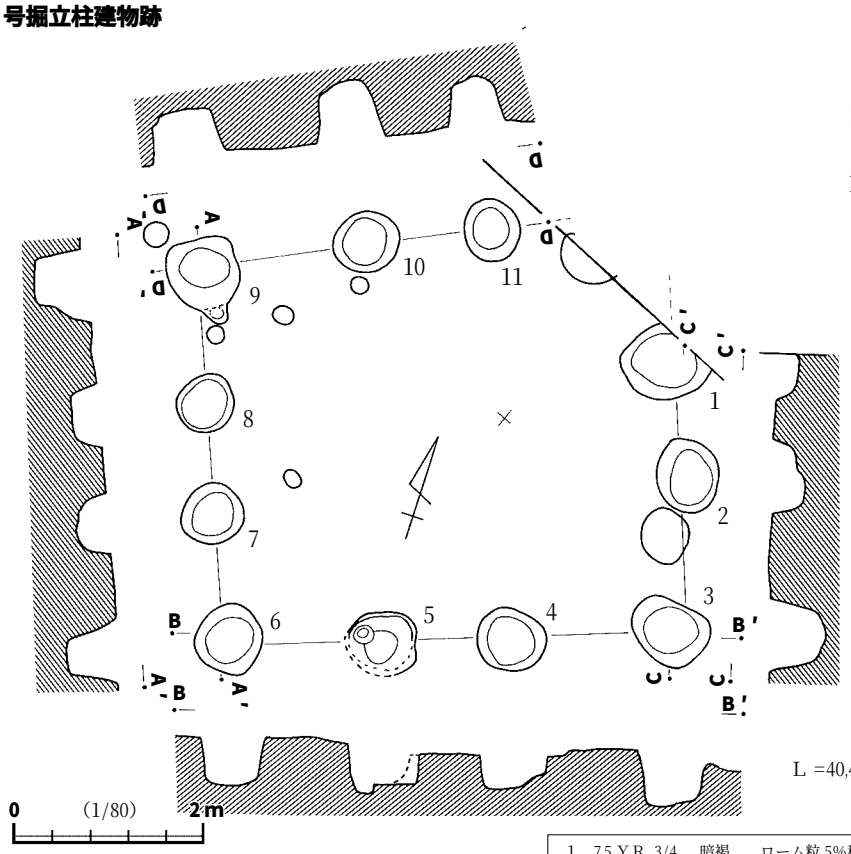
第 21 表　掘立柱建物跡一覧

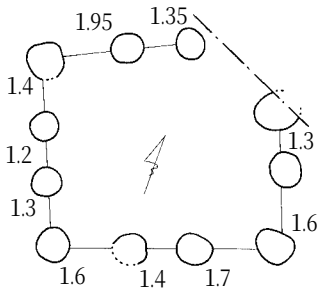
遺構番号	方位	平面形	規模		柱穴形態	特徴	図版番号	備考
			桁行	梁行				
１号掘立柱建物跡	N-20°-W	長方形	３間	３間	円筒形	攪乱による破壊が著しく、各柱穴の平面形は推定のものが多い。しかし、大方円筒形を呈する掘方であった。柱穴２から８世紀後半の須恵器杯蓋、柱穴８から８世紀後半の須恵器杯（第56図-12）、柱穴10から土師器坏が出土している。	第36図	北東角の柱穴は調査区域外
２号掘立柱建物跡	N-30°-W	長方形	３間	２間	平面円形 掘方半円形	同一箇所において３回の建て替えをおこなっていることが、各柱穴の切り合い関係から確認できた。	第36図	
３号掘立柱建物跡	N-27.5°-W	長方形？	？	？	不整円筒形	掘方は浅く、平面形が不整円形である。西側に軸並行の柱穴列が検出された。	第37図	北西側は調査区域外
４号掘立柱建物跡	N-21°-N	長方形？	？	？	平面円形 掘方半円形	攪乱による破壊が著しく、各柱穴の平面形は推定のものが多い。 軸方位と柱穴の平面形状的に他の建物との関連性が薄い印象を受ける。	第37図	北側は調査区域外
５号掘立柱建物跡	N-30°-W	方形総柱	２間	２間	円筒形	柱穴規模が他の建物よりも小さい。総柱の平屋建物か？１土が柱穴９を破壊し、柱穴４が１壙内にあったと推定した。柱穴６は確認調査時に破壊された。埋土は他の建物に比べ色調が濃く、しまりがないように感じられた。	第37図	
６号掘立柱建物跡	N-28°-W	方形	２間	２間	円筒形	柱穴１・２の底面には明瞭な柱痕による押圧箇所が見られたが、他の柱穴からは全く確認されなかった。また、柱穴１・３・９は掘方の形状から掘り直しまたは別建物の柱穴との重複が予想できるが、他の柱穴には見られなかった。建て替えであれば完全な重複である可能性がある。	第38図	東側柱列は３間
７号掘立柱建物跡	N-24°-W	方形	２間	２間	円筒形	８号建物跡と部分的に重複しており、建て替えの可能性も考えられる。この地区は、6・11号を含め、多くの柱穴が重複して分布しており、建物と認識できなかった柱穴も存在している。柱穴８は確認調査時に破壊された。柱穴３は２溝と攪乱により完全に破壊されていたので推定である。柱穴２から完形の土師器・灯明皿、柱穴７から９世紀中頃の土師器・皿が出土してる。	第38図	
８号掘立柱建物跡	N-24°-W	方形総柱	２間	２間	円筒形	７号建物跡同様に柱穴３が２溝により完全に破壊されている。この柱穴位置は７号とほぼ同位置であり、建て替えであればこの柱穴が基準と成っていると想像される。	第39図	
９号掘立柱建物跡	N-26°-W	長方形	３間	２間	円筒形	柱穴１・２は、確認調査時に上半を大規模に削平されたので下部が一部残存していたにすぎない。また、柱穴３は17住の床面精査後に検出されたことから本遺構が古い遺構であることがわかる。柱穴４は３土に破壊されていたことから３土よりも古い遺構であることがわかる。	第39図	17住は９世紀代後半の住居跡である。３土から土師質の瓦塔片（屋蓋部）が出土しているが、３土が破壊している土坑状の凹みから近世陶磁器片が出土していることから新しい遺構と考えられる。

遺構番号	方位	平面形	規模		柱穴形態	特徴	図版番号	備考
			桁行	梁行				
10号掘立柱建物跡	N-30°-W	長方形	2間	2間	平面円形 掘方半円形	２溝に柱穴１・５の上半が削平されている。柱穴８は柱穴が重複している。柱穴４は柱穴列軸から外れるが、埋土の雰囲気が柱穴１・２と近似し、配置的な妥当性から当遺構の柱穴とした。柱穴６は確認調査時に削平された。柱穴１・３・５・７は形状・深さなど近似しており、柱穴２・４がやや浅い点で似ることから深い四隅の柱穴に対しその間の柱穴は浅めになるといった特徴がある。	第40図	北東角の柱穴は調査区域外
11号掘立柱建物跡	N-17.5°-W	方形	2間	2間	平面円形 掘方半円形	柱穴１は７・８号建物の南東角の柱穴と近接していたようだが、攪乱と２溝による破壊で全くの推定位置となった。柱穴４は確認調査時に削平され、柱穴８は著しい攪乱で確認できなかった。場合によっては、１間×２間の建物かもしれない。	第40図	
12号掘立柱建物跡	N-21°-W	長方形	3間	3間	円筒形	柱穴１・２・５を１溝で一部削平されている。桁行と梁間は間数は同じだが、桁行の一間距離が長い。梁間の柱穴２・３・８・９は四隅の柱穴よりも若干浅い。	第41図	北西側は調査区域外
13号掘立柱建物跡	N-29.5°-W	長方形	3間	2間	平面円形 掘方半円形	柱穴２と６は、再掘削をおこなっていることがセクション上明瞭にわかる。しかし、その他の柱穴に関しては攪乱の影響もあるがそのような傾向は伺えない。各柱穴の平面・断面形状から大規模な建て替えを積極的に示唆するものはない。新しい柱穴に完全に旧柱穴が納まるのであれば建て替えの可能性は考えられる。その場合、回数は１回である。しかし、建て替えが柱穴２・６のみであった場合、上屋構造が簡易なもので一部柱のすげ替えが可能なものであったと想像できる。	第41図	北側は調査区域外
14号掘立柱建物跡	N-21.5°-W	長方形	3間	2間	円筒形	柱穴１は３住の覆土除去時に削平してしまった。しかし、本遺構の方が新しい遺構である。柱穴４・５は９・10に比べ柱間が短く、中央に寄っている。柱痕軸はやや不揃いである。	第42図	
15号掘立柱建物跡(1)	N-19.5°-W	長方形	3間	3間	円筒形	別記詳細	第44図～ 第47図 第49図～ 第52図	20号掘立柱建物跡と一連の建造物である。
15号掘立柱建物跡(2)	N-22°-W	長方形	3間	2間	円筒形	別記詳細		四面庇建物の内陣
	N-21°-W	（側柱）	5間	4間	平面円形 掘方半円形	別記詳細		四面庇建物の外陣
15号掘立柱建物跡(3)	N-22°-W	長方形	3間	2間	円筒形	別記詳細		四面庇建物の内陣
	N-21°-W	（側柱）	5間	4間	平面円形 掘方半円形	別記詳細		四面庇建物の外陣
15号掘立柱建物跡(4)	N-26°-W	長方形	4間	3間	円筒形	別記詳細		
15号掘立柱建物跡(5)	N-22°-W	長方形	4間	3間	円筒形	別記詳細		
16号掘立柱建物跡	N-27°-W	長方形	3間	2間	円筒形	柱穴８のみ重複しており、北側に張り出している軸にのらない掘方は、西側の柱穴列（柱穴６～８）の軸線から北側にのびる独立した柱穴二穴と関連があると考えられる。柱穴８の中央が攪乱により切り合い関係が不明なため新旧は不明である。これらの二穴がある地区は、極めて複雑に攪乱をうけており、これらに関連する柱穴が周囲に展開していた可能性は否定できない。柱穴５は攪乱により破壊されていた。	第42図	
17号掘立柱建物跡	N-9°-W	長方形	4間	3間	円筒形	本遺構周辺も極めて大規模に攪乱をうけており、柱穴７・９～11は完全に破壊されていた。柱穴２と５は重複しており、形状と規模の点で建て替えと考えるよりも別の建物が東側に展開している可能性が想定できる。	第43図	
18号掘立柱建物跡	N-23°-W	長方形？	？	？	円筒形	南東側に10住があり、東にのびる柱穴列は確認できなかった。10住を検出した際、覆土中に18掘の柱穴と考えられるものは全く確認できなかったことから10住よりも古い可能性は考えられる。しかし、柱間距離から想定できる柱穴が10住の東側には確認できず、柱穴１より南に柱穴がのびないことは明確であった。柱穴の規模や柱間距離などの点で16掘と近似することから建物と考えておきたい。しかし、10住の平面形に沿った柱穴の展開をしている点で、10住を囲う柱穴列の可能性もある。	第43図	東側は調査区域外
19号掘立柱建物跡	N-45.5°-W	方形総柱	2間	2間	円筒形	３溝に柱穴３・７の上半を削平されていた。柱穴２・６・８は四隅の柱穴に比べ浅い。	第43図	
20号掘立柱建物跡(1)	N-27.5°-W	方形	1間	1間	円筒形	別記詳細	第44図 第45図 第48図 第53図 第54図 第55図	
20号掘立柱建物跡(2)	N-27.5°-W	方形	2間	1間	円筒形	別記詳細		
20号掘立柱建物跡(3)	N-24°-W	方形	2間	1間	円筒形	別記詳細		
20号掘立柱建物跡(4)	N-28.5°-W	方形	2間	1間	平面円形 掘方半円形	別記詳細		

※方位は，南北の軸線に対しての値を示し，桁行・梁行に対しての値ではない。
※桁行は長軸，梁行は短軸を表す。

１号掘立柱建物跡



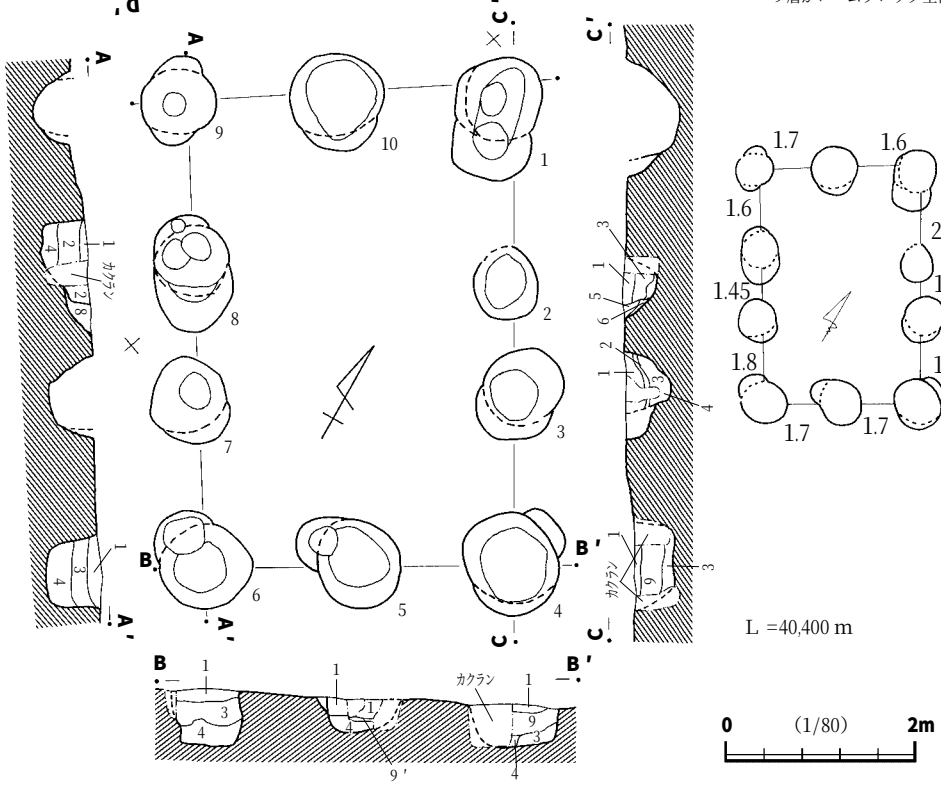


（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	(0.9)×0.82×0.24
2	0.80×0.64×0.32
3	0.82×0.68×0.34
4	0.74×0.66×0.28
5	(0.74)×0.68×0.54
6	0.74×0.70×0.50
7	0.64×0.64×0.34
8	0.62×0.62×0.28
9	(0.76)×0.74×0.50
10	0.70×0.60×0.60
11	0.66×0.58×0.48

２号掘立柱建物跡

1	7.5 Y R	3/4	暗褐	ローム粒 5%程度散在	しまり悪い 粘性少し有り
2	7.5 Y R	3/1	黒褐	ローム粒 5%以下散在　最も黒く有機物層に近い	
3	7.5 Y R	4/4	灰褐	ロームブロック 10%程散在	
4	10 Y R	3/2	黒褐	目立つものなし	
5	10 Y R	3/3	暗褐	ローム粒 10%混入　1～3P7 よりしまり有	
6	10 Y R	4/2	灰黄褐	５層よりしまり有	
7	10 Y R	3/2	黒褐	ローム粒を微量に含む	
8	7.5 Y R	3/1	黒褐＋3/2	黒褐ブロックの混合層　ローム粒・焼土・炭化物を微量含む	
9	7.5 Y R	4/3	褐	ローム粒・ブロック 10%程入る　炭化物が少々入る　しまりやや有 ９層がロームブロック主体となった層	

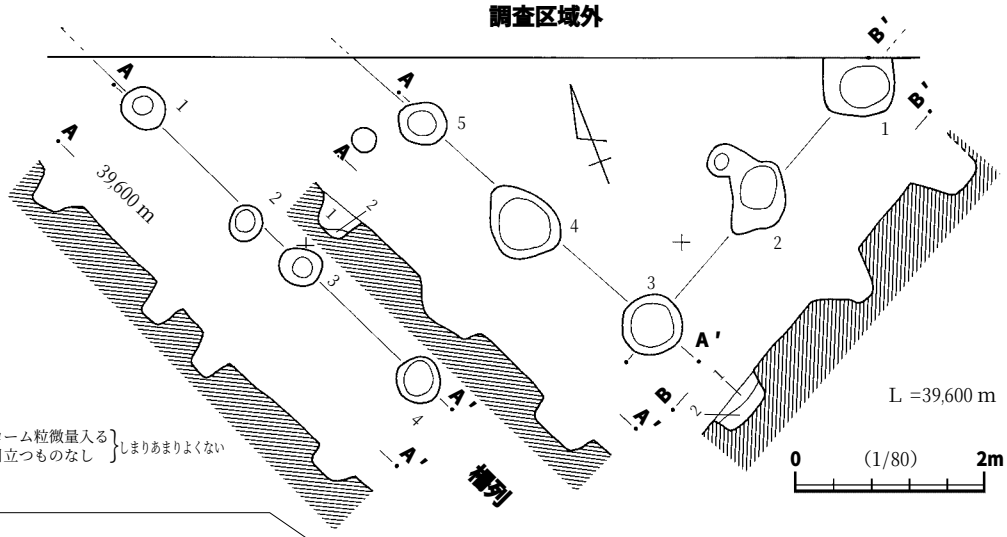


（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.70×(0.70)×0.60
2	(0.78)×0.64×0.36
3	(0.84)×0.78×0.48
4	(1.00)×1.00×0.46
5	(0.96)×0.88×0.38
6	0.90×(0.86)×0.60
7	0.84×(0.78)×0.45
8	0.80×(0.74)×0.50
9	0.80×(0.70)×0.40
10	1.00×(0.86)×0.30

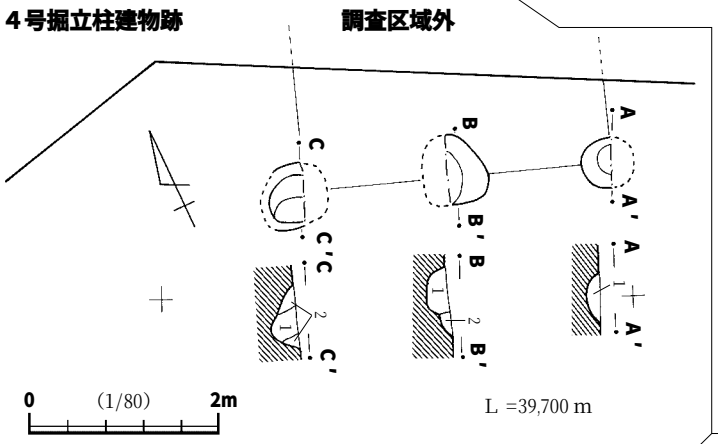
第36図　１・２号掘立柱建物跡

３号掘立柱建物跡

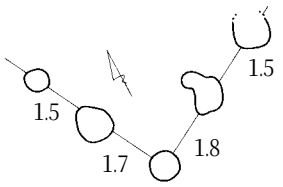


1　10ＹＲ 3/1　黒褐　ローム粒微量入る
2　10ＹＲ 3/3　暗褐　目立つものなし　しまりあまりよくない

４号掘立柱建物跡



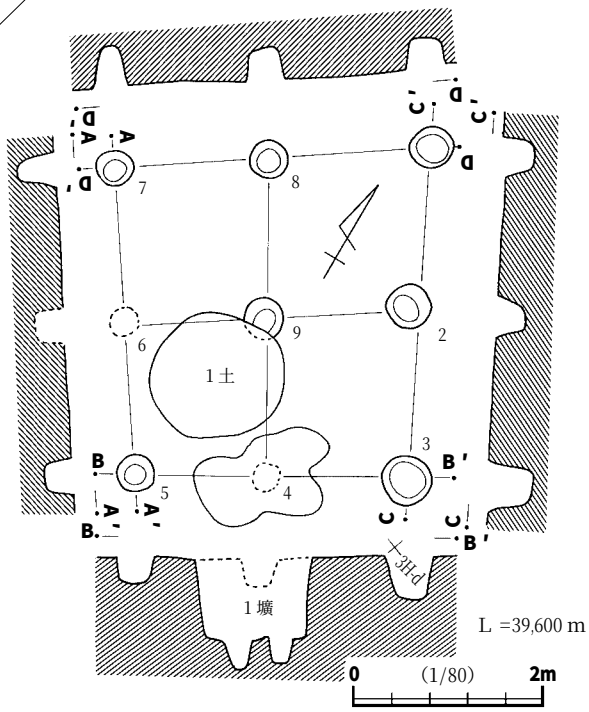
1　7.5ＹＲ 2/2　黒褐　暗褐色ブロック（φ 10㎜）20%含む　粘性弱　しまり有
2　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　暗褐色ブロック（φ 10㎜）30%含む　粘性弱　しまり有



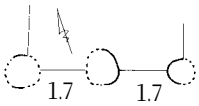
（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.76×(0.76)×0.50
2	0.84×0.70×0.50
3	0.66×0.66×0.28
4	0.90×0.70×0.26
5	0.50×0.48×0.30

５号掘立柱建物跡



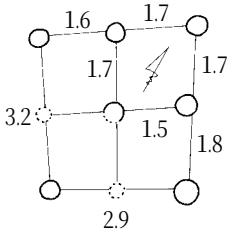
４掘



（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	(0.56)×0.42×0.14
2	0.74×(0.68)×0.22
3	0.50×(0.52)×0.28

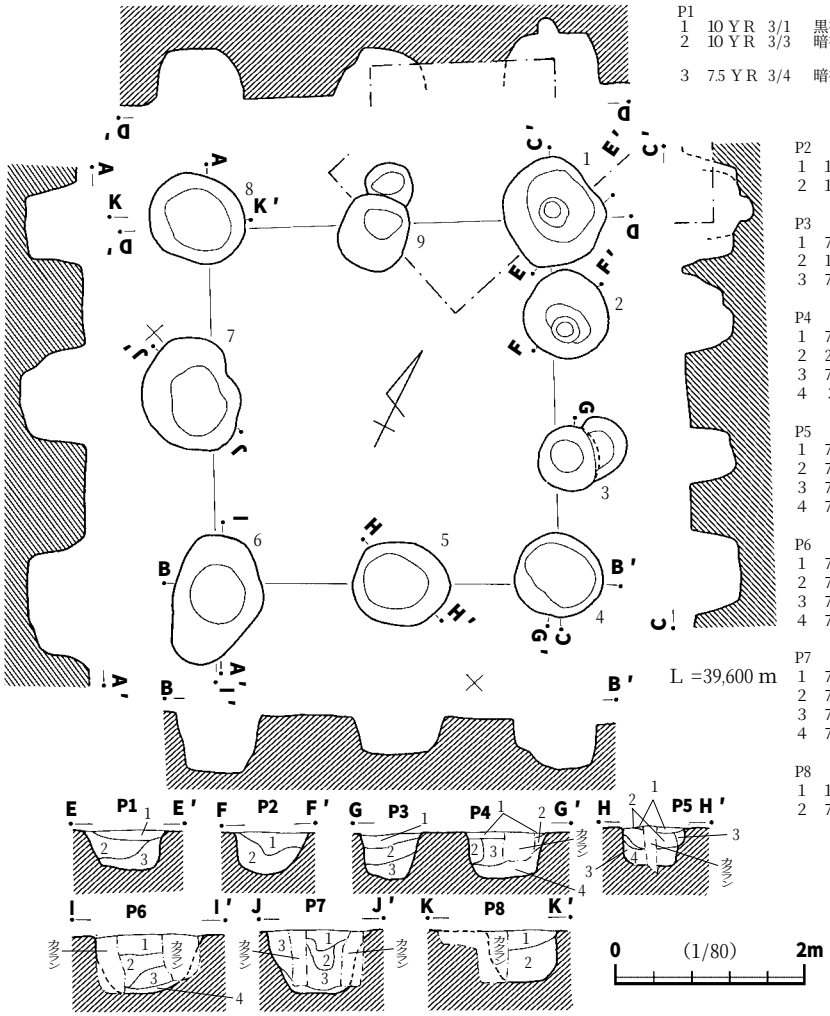
５掘



（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.48×0.42×0.30
2	0.46×0.46×0.30
3	0.50×0.50×0.50
4	―
5	0.40×0.40×0.30
6	―
7	0.40×0.34×0.40
8	0.40×0.40×0.34
9	0.42×(0.42)×―

第 37 図　３～５号掘立柱建物跡



P1
1 10ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒微量含む
2 10ＹＲ 3/3 暗褐 山炭化物微量含む
5G 3/1 暗緑灰土のブロックとロームブロックを含む
3 7.5ＹＲ 3/4 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ 50㎜）を少々含む
山砂粒砂小ブロックを僅かに散在

P2
1 10ＹＲ 3/2 黒褐 ローム粒 5%程・炭化物微量に入る
2 10ＹＲ 3/3 暗褐 ローム粒・山砂・粘土粒少々散在

P3
1 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒微量に含む
2 10ＹＲ 4/1 褐灰 ソフトローム小ブロック・ローム粒少々入る
3 7.5ＹＲ 4/3 暗褐

P4
1 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒微量に含む
2 2.5ＹＲ 3/1 暗オリーブ灰 ロームブロック粒・粘土小ブロック 5%程入る
3 7.5ＹＲ 4/2 灰褐 ローム粒・ブロック・炭化物・焼土粒 5%程入る
4 ３層＋５Ｇ 3/1 褐 暗緑灰ブロック入る

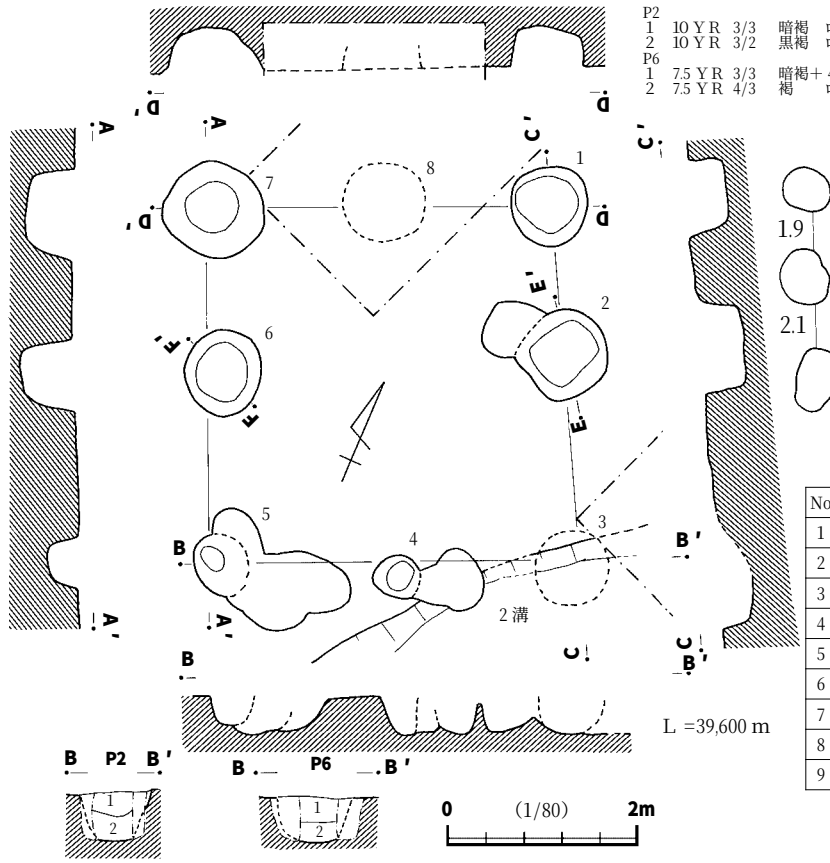
P5
1 7.5ＹＲ 4/1 褐灰 ロームブロック少々入る
2 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒 5%以下含む
3 7.5ＹＲ 5/3 にぶい褐 ソフトローム・ロームブロック主体
4 7.5ＹＲ 3/3 暗褐 φ 10㎜のローム小ブロック 10%程散在

P6
1 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒１と山砂小ブロック少々入る
2 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒が全体に 10%程入る
3 7.5ＹＲ 3/3 暗褐 ローム粒・小ブロック 15%程入る やや砂っぽい
4 7.5ＹＲ 2/3 極暗褐 ローム粒微量入る しまり有

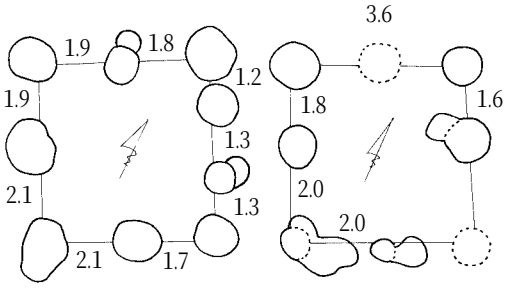
P7
1 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒と山砂小ブロック少々入る
2 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒が全体に 10%程入る
3 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ローム粒・小ブロック少々入る
4 7.5ＹＲ 2/3 極暗褐 ローム粒微量に入る しまり有

P8
1 10ＹＲ 3/1 黒褐 ローム粒 10%程全体に散在 山砂粒微量含む
2 7.5ＹＲ 4/2 黒褐 ローム粒少々含む

６号掘立柱建物跡



P2
1 10ＹＲ 3/3 暗褐 ロームブロックを 30%含む
2 10ＹＲ 3/2 黒褐 ロームブロック少々入る
P6
1 7.5ＹＲ 3/3 暗褐＋4/2 灰褐ブロック・ローム粒・小ブロック含む
2 7.5ＹＲ 4/3 褐 ロームブロック少々入る 地山ソフトと色は似るが少し汚れ



（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	1.16×1.10×0.80
2	0.95×0.90×0.48
3	0.70×(0.64)×0.50
4	0.90×0.90×0.66
5	0.52×0.48×0.38
6	1.40×0.96×0.64
7	0.70×1.04×0.66
8	1.00×0.92×0.56
9	0.80×0.52×0.52

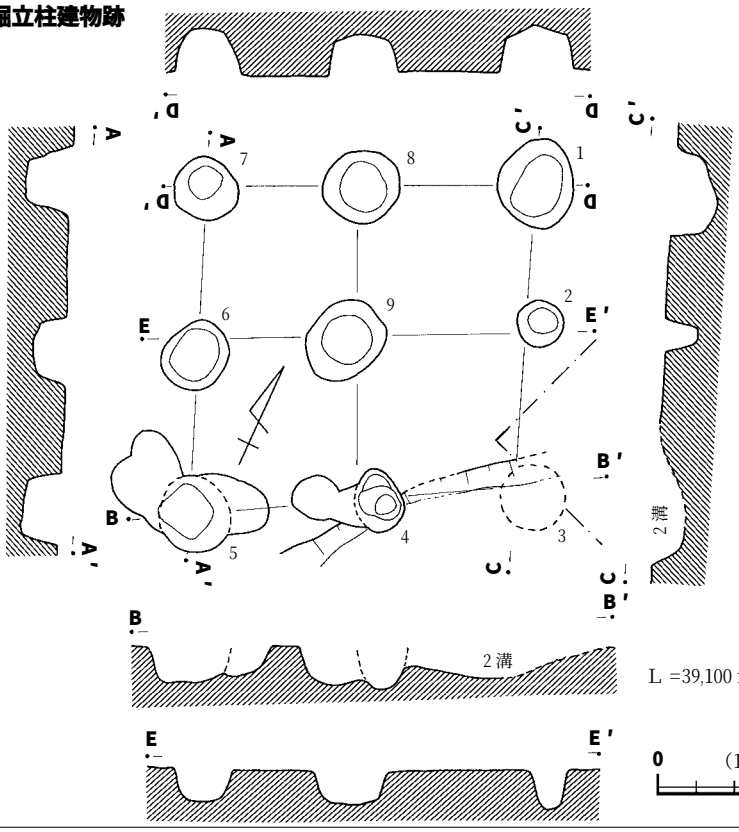
（単位m）

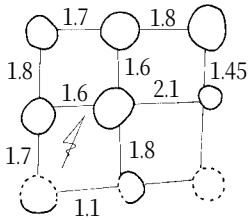
No	長径×短径×深さ
1	0.84×0.76×0.44
2	(0.90)×0.90×0.42
3	—
4	(0.50)×0.46×0.42
5	0.70×(0.60)×0.30
6	0.90×0.80×0.52
7	1.08×1.02×0.46
8	—

７号掘立柱建物跡

第38図 ６・７号掘立柱建物跡

８号掘立柱建物跡



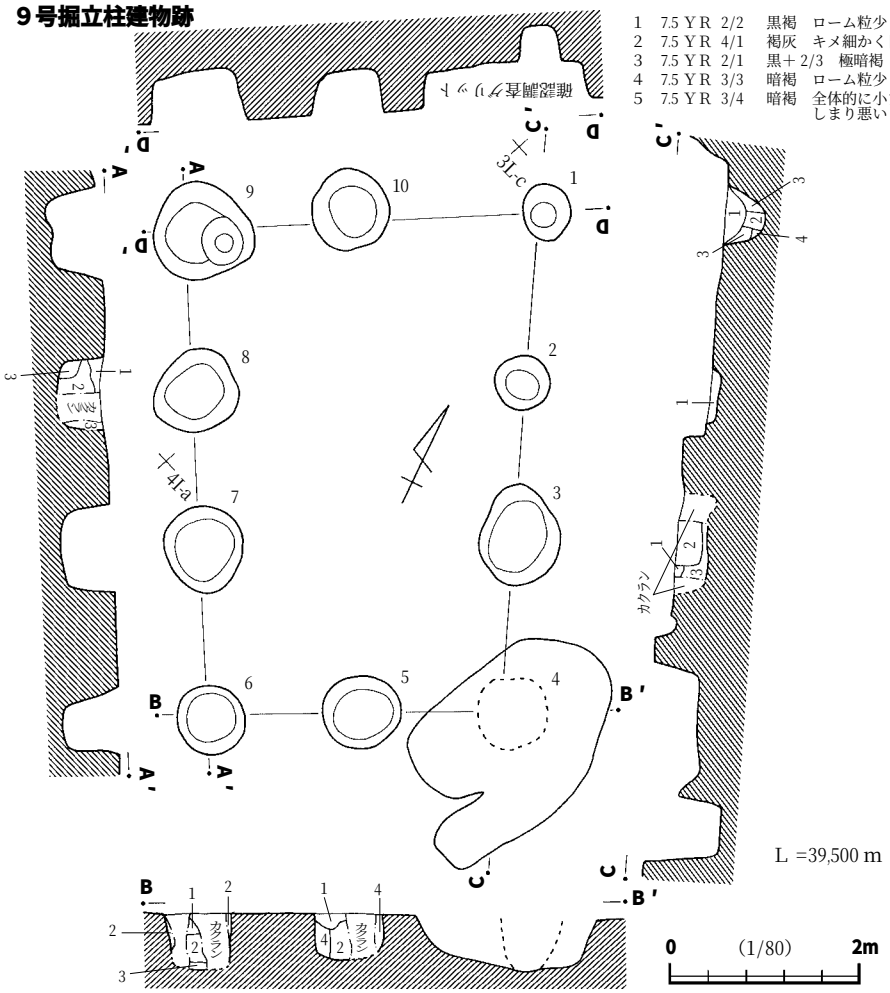


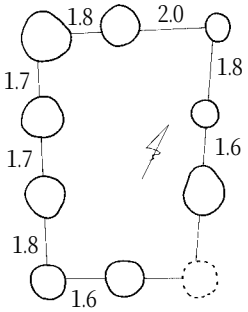
（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.90×0.80×0.50
2	0.50×0.48×0.34
3	—
4	0.68×(0.52)×0.46
5	0.80×(0.80)×0.36
6	0.74×0.74×0.34
7	0.68×0.68×0.48
8	0.80×0.78×0.36
9	0.90×0.74×0.38

９号掘立柱建物跡

1　7.5ＹＲ 2/2　黒褐　ローム粒少し入る　しまりやや悪い
2　7.5ＹＲ 4/1　褐灰　キメ細かく目立つものなし
3　7.5ＹＲ 2/1　黒＋2/3　極暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ 10 ～ 30㎜）が 多く入る
4　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒少し入る
5　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　全体的に小ブロック状　ロームブロック（φ 20 ～ 30㎜）含む
　　しまり悪い





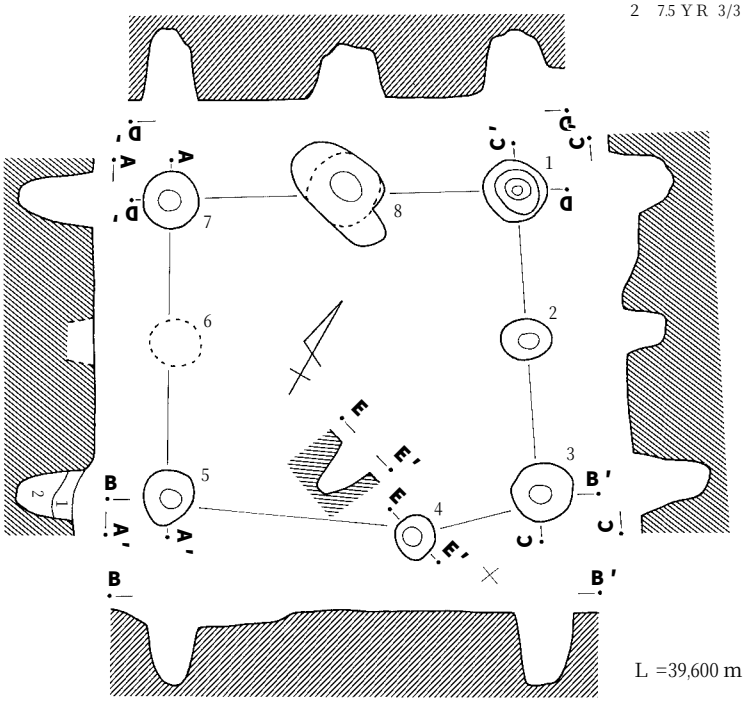
（単位m）

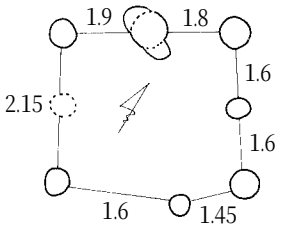
No	長径×短径×深さ
1	0.58×0.52×0.76
2	0.60×0.58×0.30
3	1.08×0.76×0.50
4	—
5	0.82×0.78×0.50
6	0.74×0.72×0.60
7	0.86×0.84×0.50
8	0.95×0.82×0.44
9	1.08×1.04×0.56
10	0.84×0.82×0.46

第39図　８・９号掘立柱建物跡

10号掘立柱建物跡

1　7.5ＹＲ 4/3　褐＋3/2　黒褐色土ブロック
　　ローム粒・小ブロック（φ10㎜）多く含む
2　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック（φ10㎜）多く含む　しまりやや有

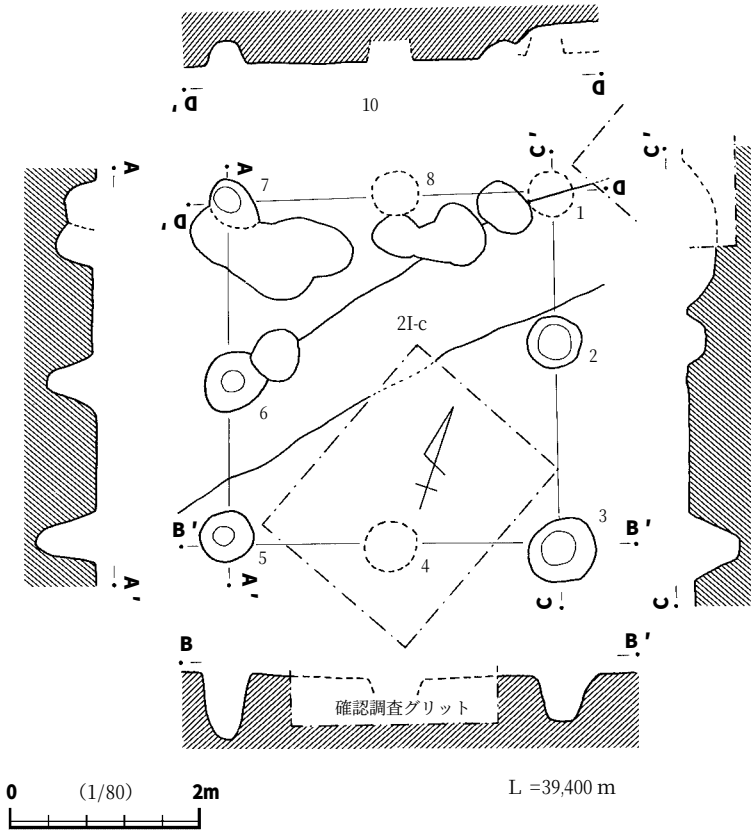


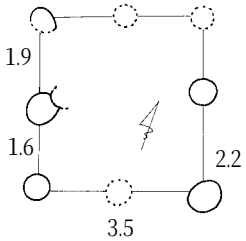


（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.66×0.66×0.68
2	0.56×0.42×0.44
3	0.66×0.60×0.84
4	0.46×0.40×0.54
5	0.60×0.52×0.64
6	—
7	0.60×0.58×0.78
8	(0.74)×0.70×0.70

11号掘立柱建物跡



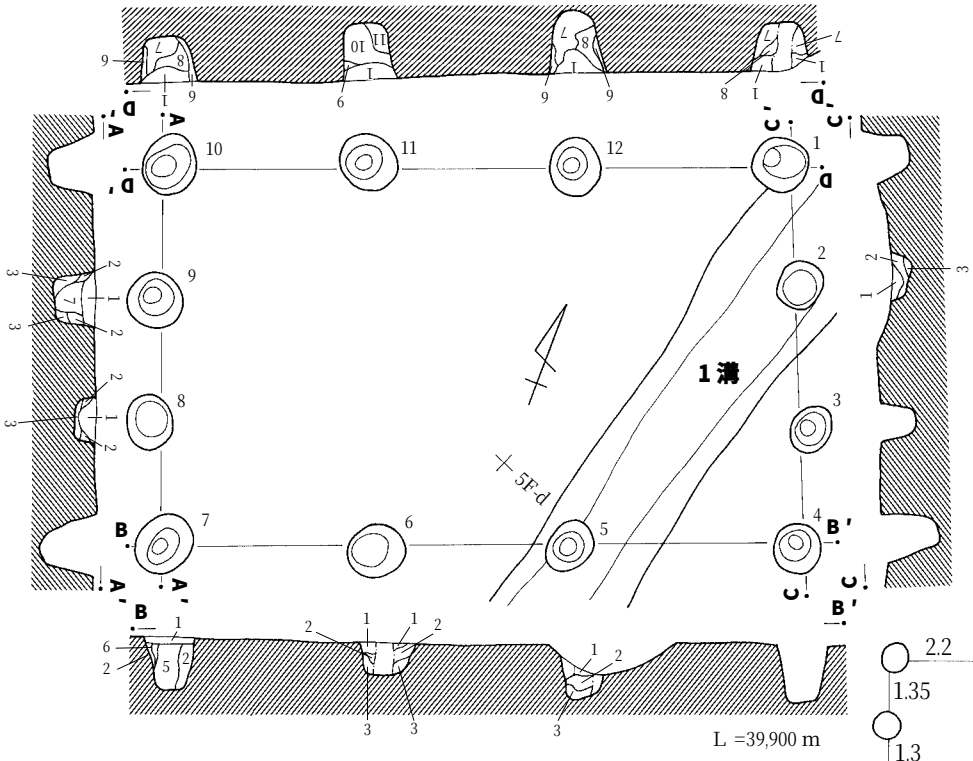


（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	—
2	0.58×0.54×0.18
3	0.70×0.68×0.50
4	—
5	0.58×0.54×0.72
6	(0.68)×0.60×0.50
7	0.60×(0.42)×0.24
8	—

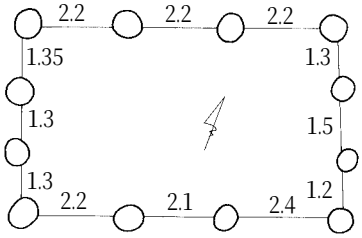
第40図　10・11号掘立柱建物跡

12号掘立柱建物跡



（単位m）

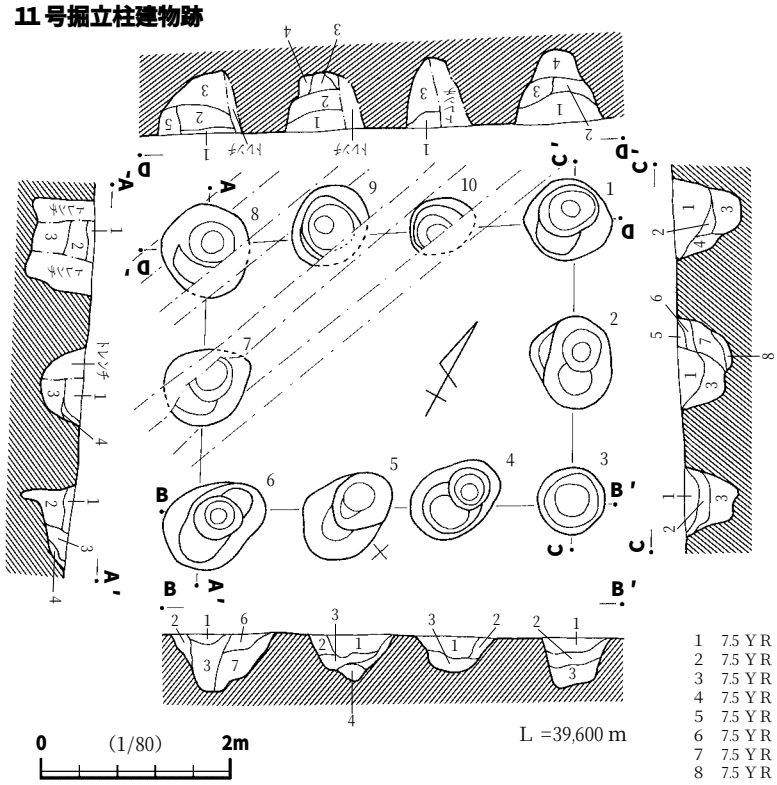
No	長径×短径×深さ
1	0.60×0.58×0.50
2	0.50×0.50×0.20
3	0.50×0.42×0.52
4	0.52×0.50×0.66
5	0.56×0.46×0.80
6	0.62×0.56×0.44
7	0.64×0.54×0.60
8	0.58×0.48×0.22
9	0.60×0.60×0.46
10	0.64×0.56×0.48
11	0.62×0.58×0.60
12	0.60×0.54×0.66

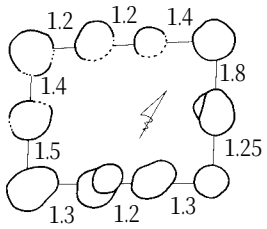


1　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒 10%含む
2　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒 10%含む
3　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　ローム粒 10%含む
4　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒 15%含む
5　7.5ＹＲ 4/3　褐　ロームブロック主体
6　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒 15%含む
7　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　ローム粒 20%含む
8　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　暗褐色土ブロック主体
9　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　暗褐色土ブロック（φ 10 ～ 20㎜）30%含む
10　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック（φ 10 ～ 20㎜）20%含む

0　(1/80)　2m

11号掘立柱建物跡





（単位m）

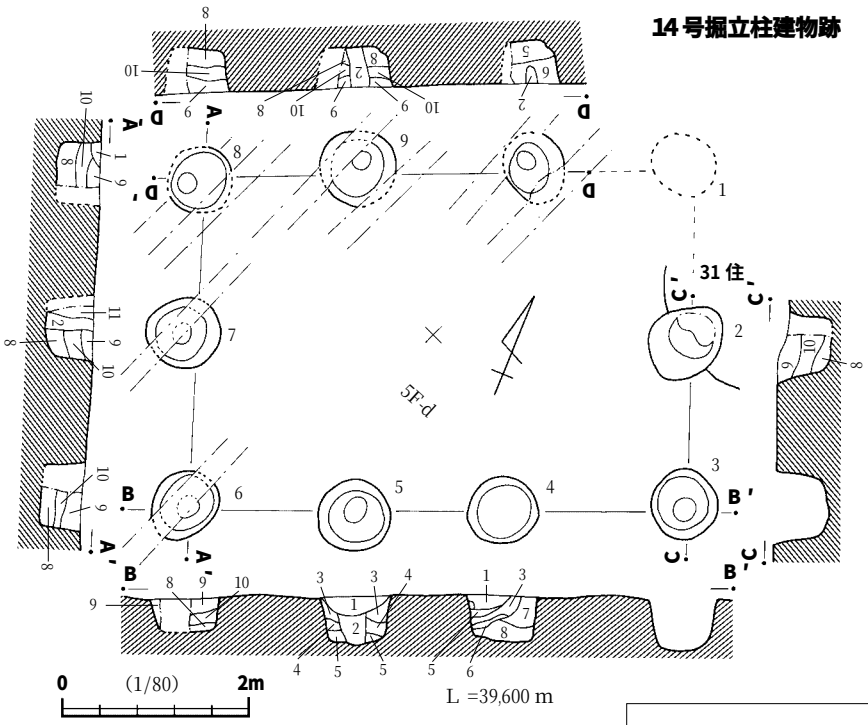
No	長径×短径×深さ
1	0.94×0.82×0.62
2	0.98×0.70×0.58
3	0.50×0.50×0.58
4	1.00×0.74×0.38
5	0.70×0.60×0.50
6	1.14×0.86×0.60
7	0.96×0.80×0.44
8	1.00×0.94×0.66
9	0.90×0.76×0.62
10	0.90×0.86×0.78

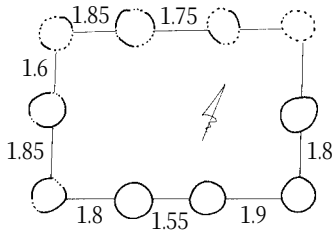
1　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒 15%含む
2　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒 10%含む
3　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ロームブロック（φ 10㎜）10%含む
4　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ロームブロック（φ 10 ～ 20㎜）10%含む
5　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒 5%含む
6　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒 10%含む
7　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ロームブロック（φ 10㎜）15%含む
8　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒 15%含む
9　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック（φ 10㎜）20%含む

0　(1/80)　2m

第41図　12・13号掘立柱建物跡

14号掘立柱建物跡

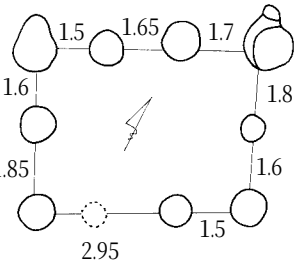




（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	—
2	0.90×0.72×0.56
3	0.74×0.68×0.58
4	0.78×0.70×0.50
5	0.76×0.76×0.48
6	0.76×0.74×0.34
7	0.76×0.76×0.52
8	0.72×(0.70)×0.48
9	0.80×(0.80)×0.42

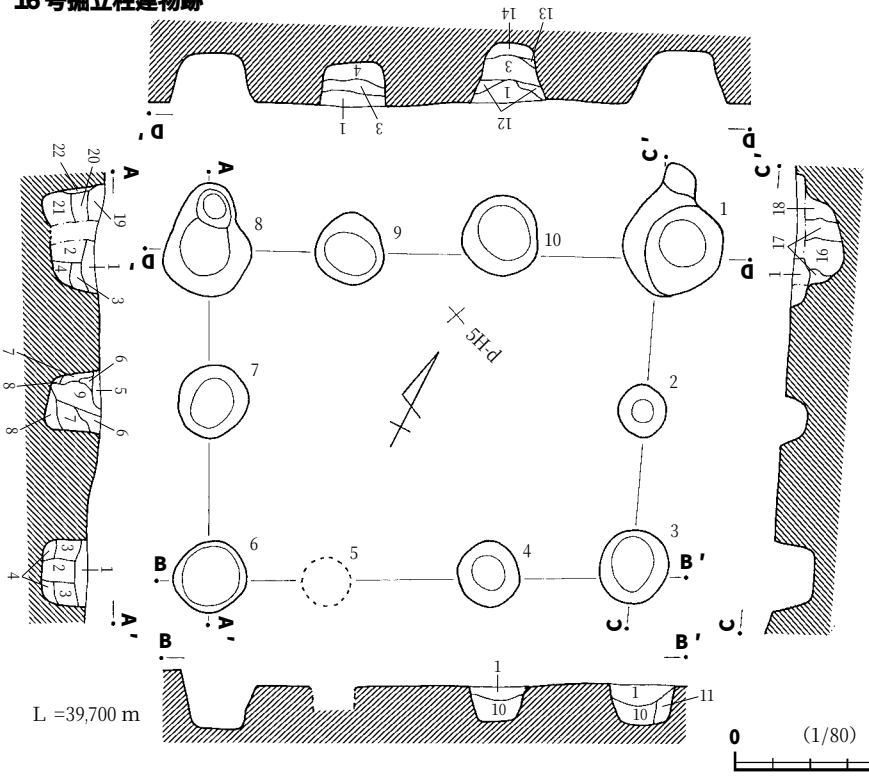
1 7.5ＹＲ 4/4 褐 ローム粒微量入る
2 10ＹＲ 4/2 灰黄褐 ローム粒少々入る 柱穴痕
3 7.5ＹＲ 5/2 灰褐 ローム粒少々入る 褐色土ブロックも全体に入る
4 7.5ＹＲ 5/3 にぶい褐 ローム小ブロック（10～30㎜）主体
5 7.5ＹＲ 3/1 黒褐 しまりやや黒
6 7.5ＹＲ 5/4 にぶい褐 ローム粒・小ブロック（φ 10㎜）が全体に入る
7 10ＹＲ 4/2 灰黄褐 褐色土が多く（20%程）入る
8 10ＹＲ 4/1 褐灰 ローム小ブロック（φ 20～30㎜）少々入る
9 7.5ＹＲ 3/4 暗褐＋4/2 灰褐 ローム粒・白色砂粒少々入る しまりやや有り
10 10ＹＲ 3/2 暗褐 ロームブ粒のブロック＋暗褐ブロックを全体的に多く入る
11 7.5ＹＲ 4/2 灰褐 ローム小ブロック（φ 10～40㎜）が 20%程入る



（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	—
2	0.56×0.50×0.26
3	0.78×0.76×0.42
4	0.72×0.64×0.36
5	—
6	0.76×0.76×0.60
7	0.78×0.74×0.60
8	1.20×0.94×0.64
9	0.78×0.74×0.48
10	0.84×0.80×0.62

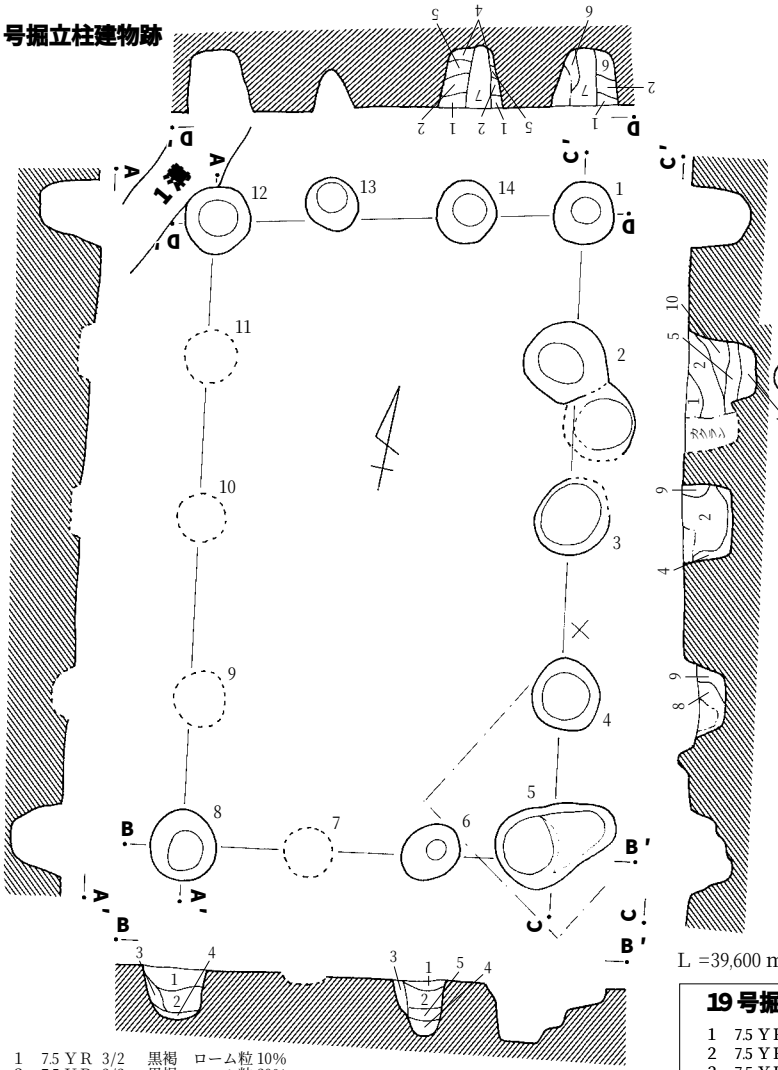
16号掘立柱建物跡



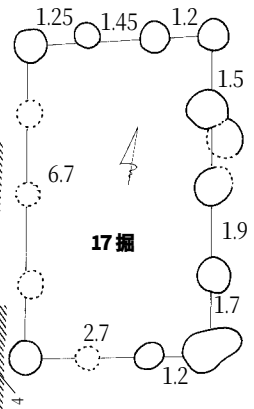
1 7.5ＹＲ 3/3 暗褐 ローム粒 10%含む
2 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ローム粒 10% しまりやや弱
3 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ローム粒 20% しまり良
4 7.5ＹＲ 3/3 暗褐 ローム粒 20% しまり良
5 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 黒褐色土ブロック 10%
6 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 暗褐色土ブロック 10% 炭を僅かに含む
7 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 暗褐色土ブロック 20%
8 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 暗褐色土ブロック 20% しまり良
9 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ローム粒 5% フカフカしている
10 7.5ＹＲ 3/4 暗褐 ローム小ブロック（20～30㎜）30%
11 7.5ＹＲ 4/4 褐 ローム主体
12 7.5ＹＲ 4/3 褐 ロームブロック主体
13 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ローム粒 10%
14 7.5ＹＲ 3/4 暗褐 ロームブロック 20% しまり良
15 7.5ＹＲ 3/3 暗褐 ロームブロック 20%
16 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ロームブロック 20% しまり良
17 7.5ＹＲ 2/2 黒褐 ロームブロック 10% しまり良
18 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ロームブロック 10%
19 7.5ＹＲ 3/2 黒褐 ロームブロック 10%
20 7.5ＹＲ 3/4 暗褐 ロームブロック 20%
21 7.5ＹＲ 3/3 暗褐 ロームブロック 10%
22 7.5ＹＲ 4/3 褐 ローム主体

第42図 14・16号掘立柱建物跡

17号掘立柱建物跡

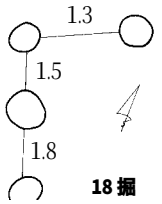


1 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒 10%
2 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒 20%
3 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒 20%
4 10YR 3/3 暗褐 ローム粒 20% しまり良
5 7.5YR 2/2 黒褐 ローム粒 10%
6 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒 10%
7 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒 10% しまりやや悪い
8 7.5YR 4/3 褐 ローム主体
9 7.5YR 4/3 褐 ロームブロック 20%
10 7.5YR 3/4 暗褐 ローム粒 20%



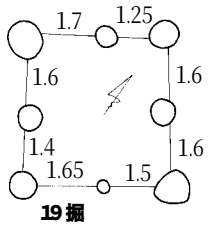
（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.64×0.64×0.66
2	0.88×0.86×0.74
3	(0.88)×0.78×0.54
4	0.76×0.70×0.4
5	1.70×0.84×0.60
6	0.64×0.54×0.60
7	—
8	0.74×0.70×0.56
9	—
10	—
11	—
12	0.72×0.70×0.64
13	0.56×0.54×0.40
14	0.68×0.64×0.68



（単位m）

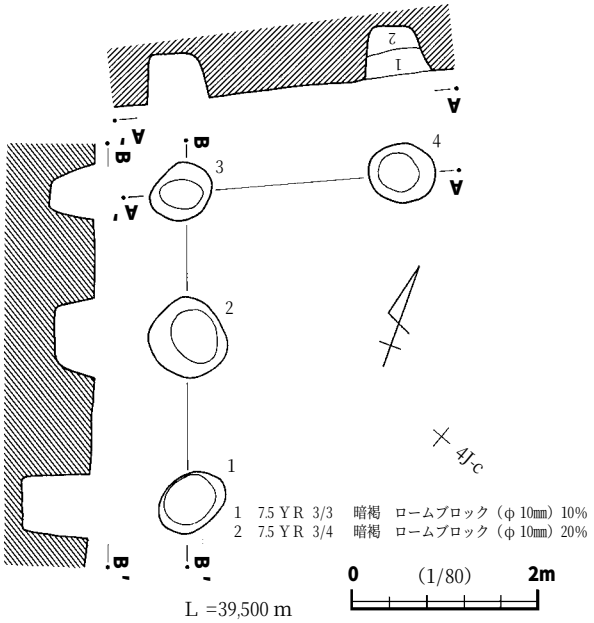
No	長径×短径×深さ
1	0.74×0.58×0.74
2	0.82×0.78×0.44
3	0.66×0.58×0.52
4	0.70×0.62×0.54



（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.64×0.56×0.44
2	0.54×0.52×0.16
3	0.80×0.72×0.40
4	0.28×0.26×0.66
5	0.60×0.58×0.50
6	0.52×0.50×0.46
7	0.84×0.72×0.52
8	0.50×0.40×0.20

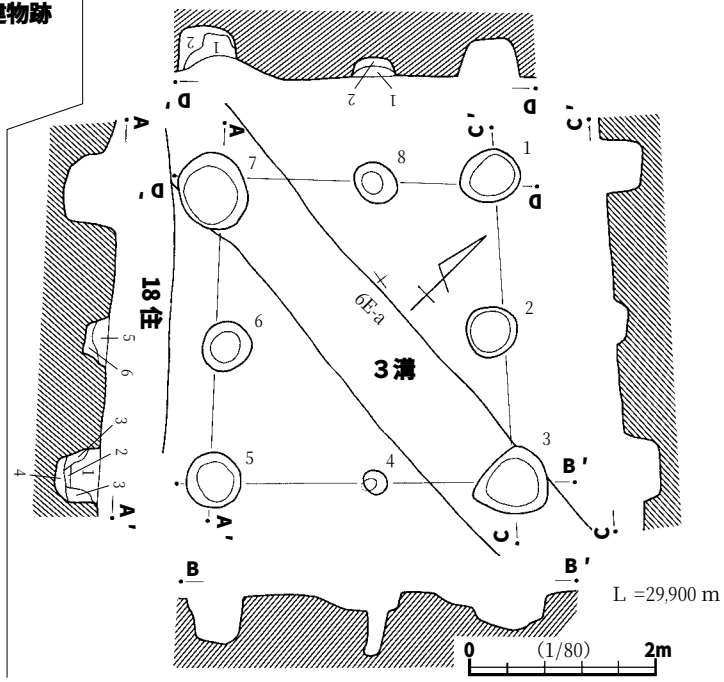
18号掘立柱建物跡



1 7.5YR 3/3 暗褐 ロームブロック（φ10㎜）10%
2 7.5YR 3/4 暗褐 ロームブロック（φ10㎜）20%

19号掘立柱建物跡

1 7.5YR 3/1 黒褐 ロームブロック（φ10～30㎜）・焼土粒が少し入る
2 7.5YR 4/3 褐 ローム粒主体 しまりややなし
3 7.5YR 2/2 黒褐 ロームブロック（φ20㎜）少し・ローム粒が入る しまりやや悪い
4 10YR 2/1 黒 キメ細かく固い しまりやや有り
5 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒少々入る
6 7.5YR 3/4 暗褐 ロームブロック主体



第43図 17～19号掘立柱建物跡

15・20号掘立柱建物跡（第44～55図）

これらの遺構は，検出された遺構の中で検出段階の様子が最も複雑であり，その形状から最も重要な遺構であると考えている。検出状況から，二棟の掘立柱建物として捉えたため個別の遺構番号を付しているが，これらが極めて密接な関係にある遺構であることが理解できた。以下，その要点を列記し，遺構の性格理解のために整理していくことにする。

15号掘立柱建物跡：柱穴の切り合い関係上，5期の建物が確認されている（以下，これらは建物１～５として略述する）。

建物１（第49図）は，桁行３間・梁行３間の桁行東西棟の単純な掘立柱構造の建物である。柱穴の切り合い関係上，最も古い建物となる。柱穴１（a-a´）・２（b-b′）・５（e-e′）・11（h-h′）・12（i-i′）で建物２・３に切られ，柱穴４（c-c′）でも建物２・３よりも古いことがわかる。柱穴８（O-O′）で建物４・５に切られている。建物３の柱穴１（A-A′）・22（第45図）が建物４・５にそれぞれ切られていることから，建物３が古く，４・５が新しいことがわかる。つまり，建物１が最も古く，５が最も新しいことが理解できる。

建物２（第50図）は，四面廂建物で内陣（入側柱）建物が桁行３間・梁行２間，外陣（側柱・廂部分）の長辺５間・短辺４間の桁行東西棟の建物である。建物と廂の柱間はほぼ対応する。当初は，建物３の側柱穴全てに切られる関係にあることから側柱が伴うとは考えていなかったが，柱穴12・21～23・25の完掘後，明らかに二本分の柱痕硬化部分が底面から検出され，第45図の検出直後の切り合い関係図を再検討した結果，建物３の側柱とほぼ同箇所に古い柱穴が重複していることが判明した。

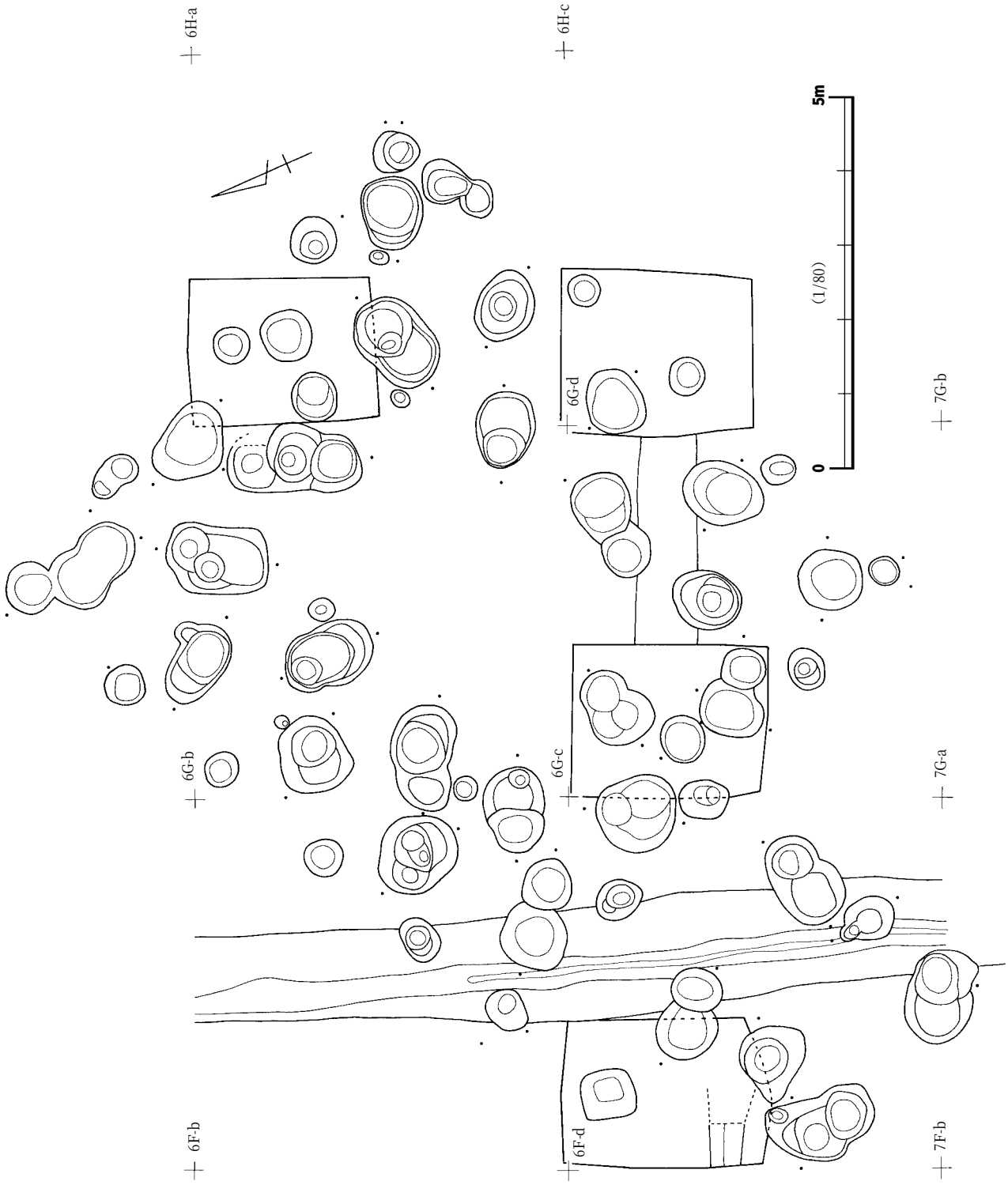
建物３（第51図）も建物２と同規模の建物である。第45図にあるとおり，側柱の15・26と柱穴１・２・９で検出段階に明瞭な山砂が充填された柱痕が検出された。柱穴断面図上でも，建物２に対応するものに山砂が確認できる。柱を引き抜いた痕に，意図的に山砂を充填したと考えられる。

建物４（第52図上）は，桁行４間・梁行３間の桁行東西棟の建物である。建物２・３のような四面廂の建物から単純な掘立柱構造へと変化している。

建物５（第52図下）も建物４と同規模の建物である。建物４・５共に柱穴11上部をを１号溝状遺構に破壊されていた。この建物だけの傾向ではないが，床面に際だった硬化面や版築基壇状の盛土などは全く確認できなかった。また，柱穴覆土上層のしまりなどの状況は，建て直し毎に柱穴を埋め戻して平坦化・整地したような印象を受けるものが多かった。

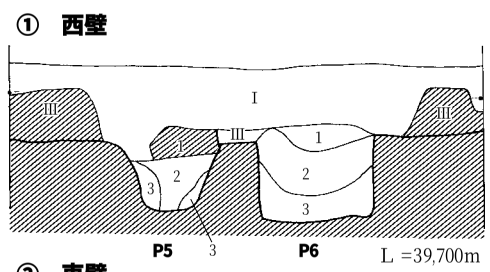
20号掘立柱建物跡：柱穴の切り合い関係上３期もしくは４期の建物が確認されている（以下，これらを建物１～４として略述する）。１号溝状遺構の覆土中から多くの仏教関連遺物が出土しており，溝状遺構以外の出土状況も鑑みての推定だが，本遺構に伴っていた遺物群であった可能性が高いと考えられる。柱穴覆土中からの出土は15号掘立柱建物跡でもあるが，平面精査中に本遺構建物内から出土したものが意外に多かったのである。床面に際だった硬化面・版築基壇状の盛土などは確認されなかったが，遺物が自然に凹みに流れ込んだ様な印象ではなく，踏み込みによって土中に刺さったような状態で出土する遺物が幾つかみられたことから，硬化面としては認識できない程度に人為的な踏み締めがあったと予想される。

建物１（第53図上）は，1間×１間の小規模な掘立柱建物跡である。柱穴３・４の切り合い関係から



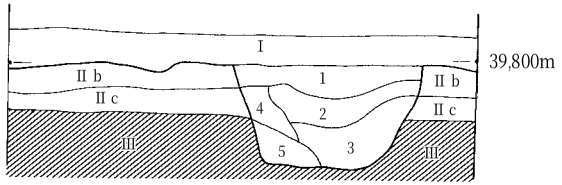
第44図　15・20号掘立柱建物跡

第45図　15・20号掘立柱建物跡　柱穴検出時切り合い関係図

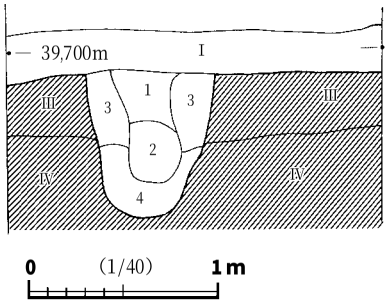


P5
1　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　φ１～5㎜のローム粒を少し　白色粘土粒を多く含む　粘性弱　しまり良
2　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　φ１～2㎜のローム粒を少し　白色粘土粒を多く含む　粘性弱　しまり有り
3　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　φ１～2㎜のローム粒と白色粘土粒を少し含む　粘性弱しまり良

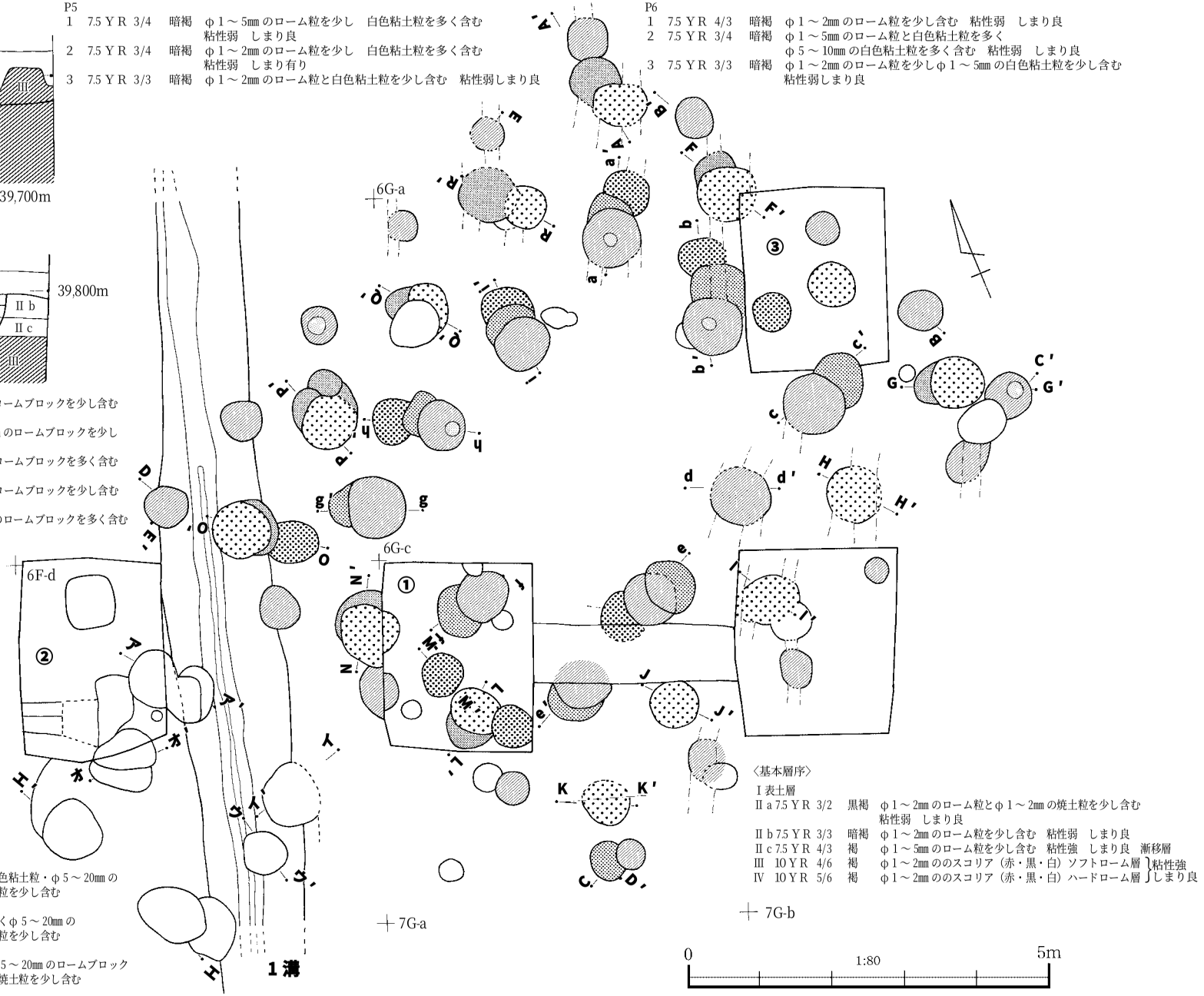
P6
1　7.5ＹＲ 4/3　暗褐　φ１～2㎜のローム粒を少し含む　粘性弱　しまり良
2　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　φ１～5㎜のローム粒と白色粘土粒を多く　φ５～10㎜の白色粘土粒を多く含む　粘性弱　しまり良
3　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　φ１～2㎜のローム粒を少しφ１～5㎜の白色粘土粒を少し含む　粘性弱しまり良



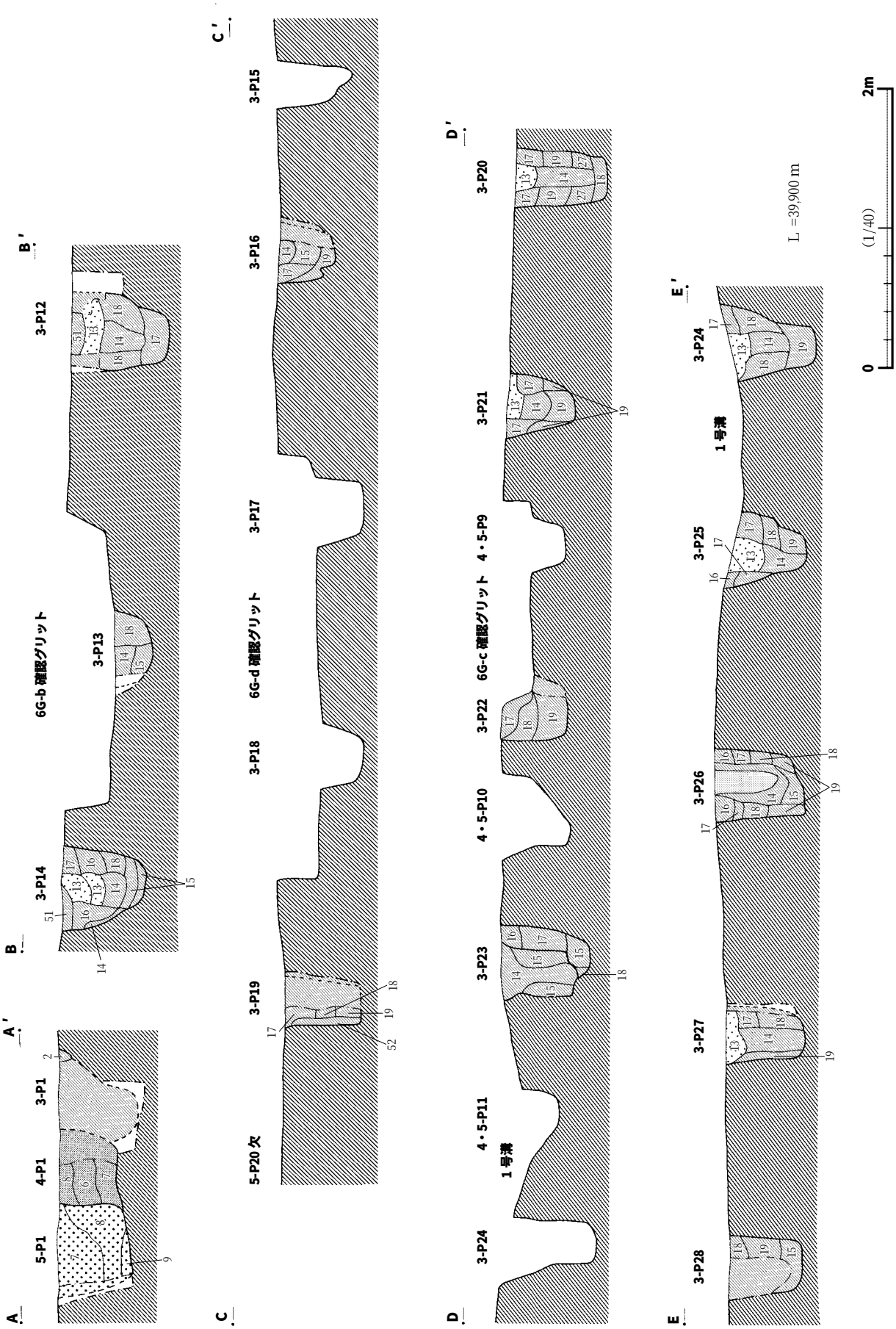
1　7.5ＹＲ 3/3　黒褐　φ１～5㎜のローム粒とφ５～10㎜のロームブロックを少し含む　粘性弱　しまり良
2　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　φ１～5㎜のローム粒を多くφ５～20㎜のロームブロックを少し含む　粘性弱　しまり良
3　7.5ＹＲ 3/4　黒褐　φ１～5㎜のローム粒とφ５～20㎜のロームブロックを多く含む　粘性弱　しまり良
4　7.5ＹＲ 3/3　褐　φ１～5㎜のローム粒とφ５～10㎜のロームブロックを少し含む　粘性弱　しまり良
5　7.5ＹＲ 4/3　暗褐　φ１～5㎜のローム粒っとφ５～20㎜のロームブロックを多く含む　粘性弱　しまり良



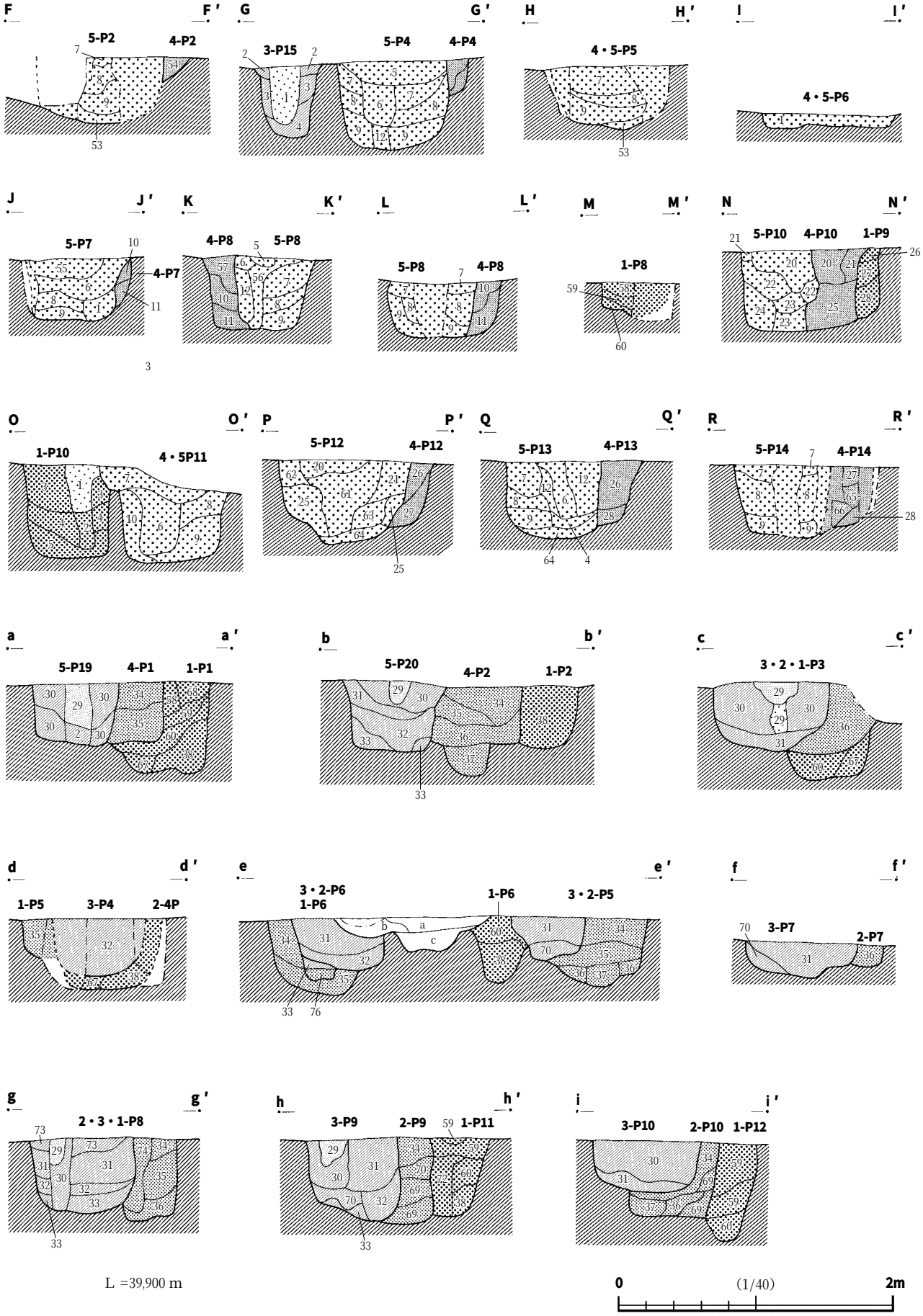
1　7.5ＹＲ 3/3　黒褐　φ１～5㎜のローム粒・φ１～5㎜の白色粘土粒・φ５～20㎜のロームブロックを多くφ１～2㎜の焼土粒を少し含む　粘性弱　しまり良
2　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　φ１～5㎜のローム粒・白色粘土粒を多くφ５～20㎜のロームブロックを多くφ１～2㎜の焼土粒を少し含む　粘性弱　しまり良
3　7.5ＹＲ 3/4　黒褐　φ１～5㎜のローム粒・白色粘土粒・φ５～20㎜のロームブロック白色粘土ブロックをを多くφ１～2㎜の焼土粒を少し含む　粘性弱　しまり良
4　7.5ＹＲ 3/3　褐　φ１～2㎜のローム粒を少し少し含む　粘性弱　しまり良



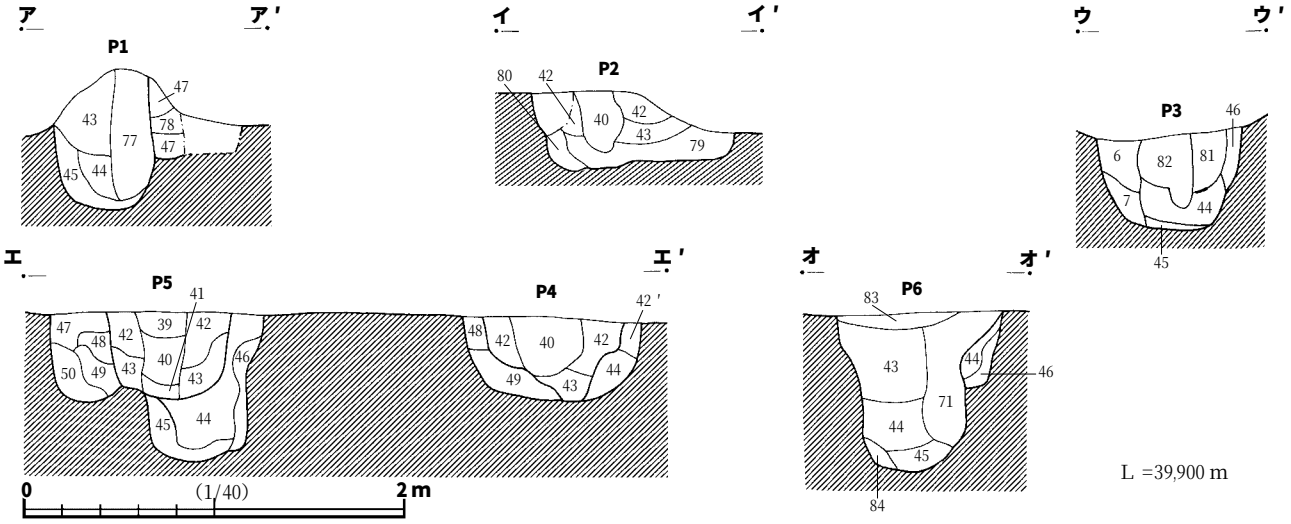
〈基本層序〉
Ⅰ表土層
Ⅱa 7.5ＹＲ 3/2　黒褐　φ１～2㎜のローム粒とφ１～2㎜の焼土粒を少し含む　粘性弱　しまり良
Ⅱb 7.5ＹＲ 3/3　暗褐　φ１～2㎜のローム粒を少し含む　粘性弱　しまり良
Ⅱc 7.5ＹＲ 4/3　褐　φ１～5㎜のローム粒を少し含む　粘性強　しまり良　漸移層
Ⅲ　10ＹＲ 4/6　褐　φ１～2㎜ののスコリア（赤・黒・白）ソフトローム層 ⎫粘性強
Ⅳ　10ＹＲ 5/6　褐　φ１～2㎜ののスコリア（赤・黒・白）ハードローム層 ⎭しまり良



第46図　15号掘立柱建物跡　柱穴土層図（1）



第 47 図　15 号掘立柱建物跡　柱穴土層図（2）



1　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　山砂ブロックを多く含む　柱穴　ローム粒・小ブロックを含む
2　7.5ＹＲ 4/3　褐　ローム小ブロック主体　一見地山　灰褐ブロックを混在
3　10ＹＲ 3/2　黒褐　ローム小ブロック（φ１～3cm）を少々　炭化物を微量含む
4　10ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒少し含む　しまりなし　Ⓐのブロック少々含む
5　7.5ＹＲ 4/3　褐＋3/2　黒褐　ローム小ブロックやや多い　しまり有り
6　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム小ブロック（φ１～2cm）ローム粒少々含む　しまり悪
7　10ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒・小ブロック少々含む　白色粘土ブロック少々含む
8　10ＹＲ 3/4　暗褐　ローム粒・ブロック層より多く含む（10%程）
9　10ＹＲ 2/2　黒褐　山砂小ブロック（φ1cm）を全体に含む
10　10ＹＲ 4/2　灰黄褐　ロームブロック（φ２～5cm）主体
11　10ＹＲ 2/2　黒褐　５～９層に比べ黒く濃い
12　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　全体的に粘性が強い
13　10ＹＲ 6/3　にぶい黄橙　山砂主体　ローム粒少々含む　柱痕　しまり有り
14　10ＹＲ 4/2　灰黄褐　13層土にぶい黄橙色山砂が少なくローム粒が目立つ
15　10ＹＲ 2/3　黒褐　やや粘性がありキメ細かい　ローム粒を含むが目立たない
16　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　山砂粒・ローム粒を少し含む
17　7.5ＹＲ 4/3　褐　Ⓐのブロックが目立つ　ローム粒を少し含む
18　7.5ＹＲ 4/2　灰褐　ロームブロック（φ2cm）を少し含む
19　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　山砂粒が斑文状に散って多く含む　白色土粒も含む
20　7.5ＹＲ 4/2　灰褐　山砂主体　4/3　褐色土ブロック含む　しまり有り
ローム粒・山砂ブロック（φ1cm）を全体に含む
21　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒・山砂小ブロック（φ0.5～1cm）を含む
Ⓐブロック少々含む
22　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック（φ１～3cm）を全体に多く含む
23　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　山砂主体　しまりやや悪
24　7.5ＹＲ 3/1　黒褐＋Ⓐ小ブロック多く含む　他の混合物22層と同じ
25　7.5ＹＲ 3/1　黒褐　24層によく似るがⒶの割合が高い
26　10ＹＲ 4/2　灰黄褐　ハードロームがとても多い
27　10ＹＲ 3/1　黒褐　ロームブロック・山砂粒を5%程含む
28　10ＹＲ 2/2　黒褐　ソフトロームブロック（暗褐）を少々含む
29　7.5ＹＲ 6/3　にぶい褐　山砂のみ　柱痕しまり有り
30　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒・山砂粒＋ローム・山砂小ブロック（φ1cm）含む
31　7.5ＹＲ 4/2　灰黄褐＋4/1　褐灰　山砂小ブロック（φ1cm）
32　7.5ＹＲ 4/2　灰褐　Ⓐブロックがとても多い　山砂ブロックとロームブロック
（φ3cm）目立つ
33　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック（φ１～2cm）主体　暗褐色土ブロックも多く含む
34　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　山砂小ブロック（φ１～1.5cm）が全体的に見られる
ローム粒も含む

15-(1)：1～5，26～28，38，58～60，62，67

15-(2)：34～37，67，69，70，74，76

15-(3)：2，13～18，29～33，51，70，73

15-(4)：5～7，10，11，20，21，25～28，54，57，65，66

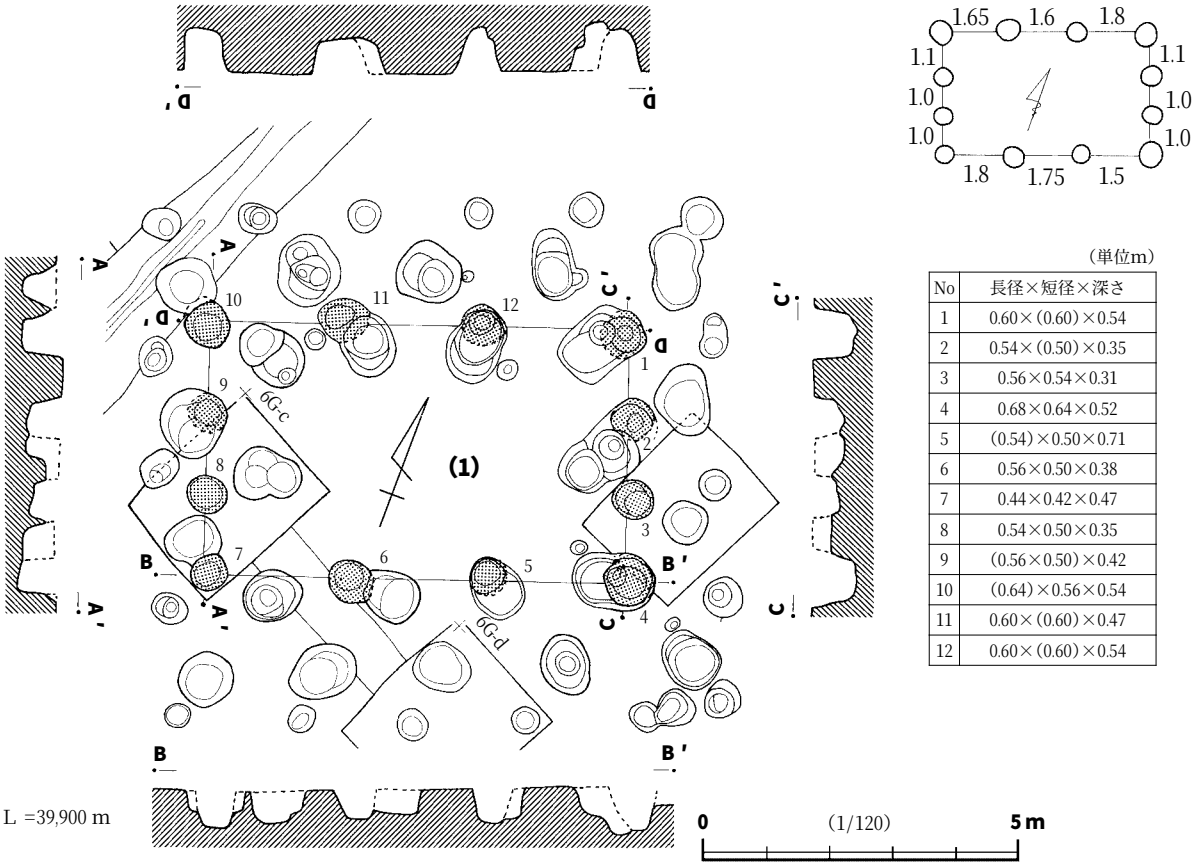
15-(5)：6～9，12，20，22～25，53，55，61～63

山砂（※1・13・29は山砂主体の柱痕の可能性が高い）

20-(1)：47～50，78
20-(2)：42，44～46，71，77，79～84
20-(3)：39～43
20-(4)：土層注なし

35　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　山砂ブロックを少し　ローム粒も含む
36　7.5ＹＲ 3/1　黒褐＋10ＹＲ　3/2　黒褐　山砂ブロックとロームブロック
（φ3cm）が目立つ
37　7.5ＹＲ 3/1　黒褐　ロームブロック（φ3cm）含む
38　10ＹＲ 2/2　黒褐　混入物はあまりないがロームブロックを少し含む
39　7.5ＹＲ 4/2　灰褐　ローム粒・山砂粒・ブロック（φ1cm）を多く含む(10%)しまり有り
40　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　山砂粒多く含む　ブロック（φ2cm）g少し混じる
41　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　山砂・ローム粒を多く含む（30%）39・40層よりしまりなし
42　7.5ＹＲ 4/3　褐　ローム粒とⒶブロック（φ0.5～1cm）を少し含む
43　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒と山砂粒を全体にくまなく含む
44　10ＹＲ 3/1　黒褐　ロームブロック（φ１～2cm）が全体に散在する
45　10ＹＲ 2/3　黒褐　特に目立つ混入物なし　しまり有り
46　10ＹＲ 4/2　黄灰褐　44層よりもロームブロックを多く含む（15%程）しまり悪
47　10ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒・山砂粒を少々含む
48　10ＹＲ 2/2　黒褐　80%程のロームブロック　しまり有
49　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　30%程のロームブロック　48層よりもロームブロック少なく　しまり悪
50　7.5ＹＲ 3/1　黒褐　ローム粒多く含む　とてもしまり有
51　7.5ＹＲ 4/3　褐　ローム粒・Ⓐの粒も少し含む　しまりとても有
52　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック主体　しまりなし
53　10ＹＲ 3/2　黒褐　しまりややなし
54　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム・山砂粒を全体に含む　しまり有り
55　7.5ＹＲ 3/1　黒褐　山砂粒を多く　ローム粒を少し含む
56　7.5ＹＲ 4/2　灰褐　山砂粒・小ブロックが他層よりも目立つ
57　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒・山砂粒が全体に散在
58　10ＹＲ 3/1　黒褐　目立つものなし　キメ細かい　柱痕？
59　10ＹＲ 3/1　黒褐　ローム粒を多く含む　山砂ブロック（φ1cm）がやや目立つ
60　10ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒とローム小ブロック（φ0.5～1cm）を全体に多く含む
61　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒・ブロック（φ１～3cm）を全体に含む　砂っぽい
62　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　山砂粒・ローム粒を少々含む
63　10ＹＲ 3/2　暗褐　山砂ブロックを少々　ローム粒微量に含む　他よりもしまり悪
64　10ＹＲ 2/3　黒褐　粘性有り　しまり有り　ローム粒を微量含む
65　10ＹＲ 4/2　灰黄褐　ソフトロームブロックを少々含む　しまり有り
66　10ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒少々含む
67　2.5ＹＲ 2/1　黒　ローム粒を微量含む　キメ細かい
68　10ＹＲ 2/1　黒　とても濃い黒　ローム粒を微量に含む
69　2.5ＹＲ 3/1　黒褐　ローム粒・ブロック（φ２～3cm）を多く含む
70　7.5ＹＲ 4/2　灰褐　32層によく似るがとてもしまりが良
71　10ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック（φ0.5～1cm）が主体
72　7.5ＹＲ 4/3　褐　他に比べて目立って明るい　柱穴
73　7.5ＹＲ 4/3　褐　山砂粒とⒶブロックがとても多い
74　7.5ＹＲ 4/3　褐　山砂ブロックを少し含む　砂っぽい
75　10ＹＲ 2/1　黒
76　10ＹＲ 2/2　黒褐　ローム粒微量含む　しまりなし
77　2.5ＹＲ 3/2　黒褐　山砂ブロック（40%程）・ローム粒を多く含む
78　5ＹＲ 3/2　暗赤褐　ローム粒含む
79　10ＹＲ 4/3　にぶい黄褐　しまりやや有り　ロームより「固くはないが混じった土
80　10ＹＲ 3/2　黒褐　ロームブロックを含む
81　7.5ＹＲ 3/1　黒褐　ローム粒を含む
82　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック（φ2cm）を多く含む
83　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒少し含む
84　10ＹＲ 6/2　灰黄褐　粘土ブロック
※　Ⓐ層　2.5ＧＹ　3/1　暗オリーブ灰　粘土ブロック

第48図　20号掘立柱建物跡　柱穴土層図



No	長径×短径×深さ
1	0.60×(0.60)×0.54
2	0.54×(0.50)×0.35
3	0.56×0.54×0.31
4	0.68×0.64×0.52
5	(0.54)×0.50×0.71
6	0.56×0.50×0.38
7	0.44×0.42×0.47
8	0.54×0.50×0.35
9	(0.56×0.50)×0.42
10	(0.64)×0.56×0.54
11	0.60×(0.60)×0.47
12	0.60×(0.60)×0.54

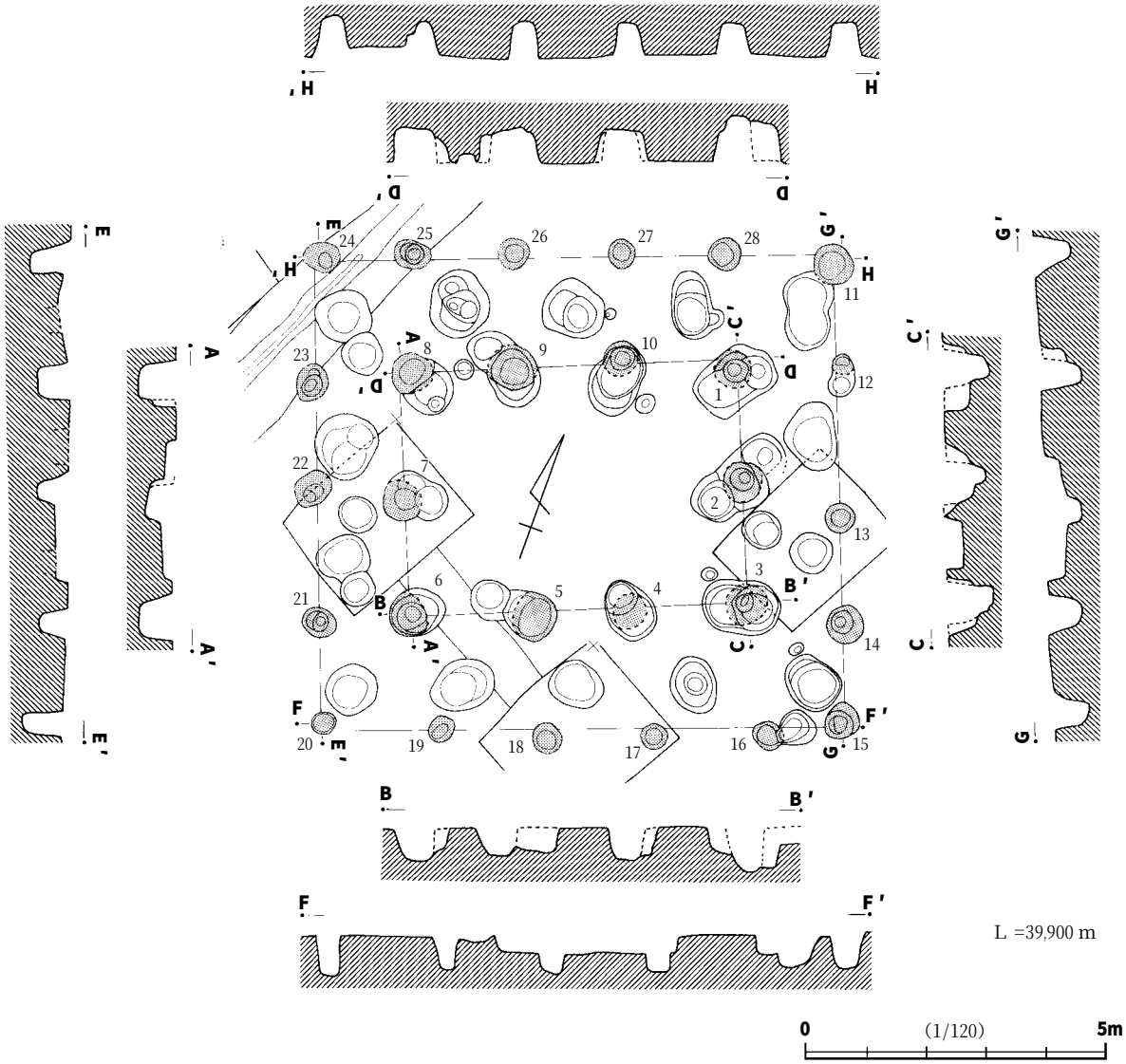
第49図　15号掘立柱建物跡－1

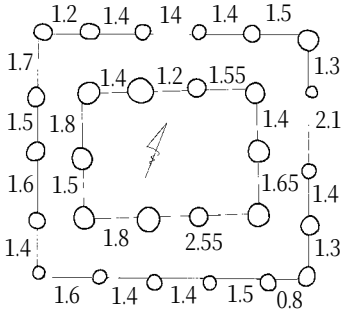
建物１が最も古く，建物３が最も新しい柱穴であることが理解できる。また，15号掘立柱建物跡の建物１の北辺柱穴列と本建物の柱穴１・４の北辺柱穴列の列軸が並ぶ傾向も伺えることから，これらが同時期に併存していた可能性が高いと考えられる。

建物２（第53図下）は，桁行３間・梁行１間の桁行き東西棟の建物である。柱穴の深さが総じて深い。15号掘立柱建物跡の建物２・３の北辺入側柱列と柱穴７の柱穴位置に列軸が並ぶ傾向が伺える。20号掘立柱建物跡の建物３も同様の傾向が伺えることから，15号と20号それぞれの建物２・３が対応して併存していた可能性が高い。

建物３（第54図上）も，建物２と同規模の建物である。建物２よりも柱穴の深さが総じて浅い。

建物４（第54図下）は，柱穴規模が建物１～３に比べ，極端に小さくなっている。さらに，桁行２間・梁行１間の桁行き東西棟という点で建物２・３に準ずるが，図示したような対応関係として積極的に支持できない一面もある。柱穴２や建物２の柱穴１に隣接する小柱穴も覆土的によく似たものであったことから，平面構造的に規則性のある建物ではなかった可能性も考えられる。しかし，柱穴５と７のように建物１～３の柱穴掘削段階で柱穴であることに気付いたものなどは切り合い関係的にな新旧関係を把握することができていないことから，最も新しい建物である根拠に乏しいといえる。ただし，柱穴４から柱穴廃棄に伴う遺物と考えられる第56図-３の完形の灯明皿が出土しており，建物１～３よりも新しい廃棄行為だからこそ残存していたと想定し，最も新しい建物としたい。





（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	(0.54×0.52)×0.59
2	0.56×(0.54)×0.54
3	(0.50×0.50)×0.62
4	(0.40×0.40)×0.40
5	0.62×(0.54)×0.33
6	0.60×(0.54)×0.43
7	(0.54×0.54)×0.24
8	(0.54)×0.50×0.47
9	0.68×(0.60)×0.47
10	(0.50×0.50)×0.46

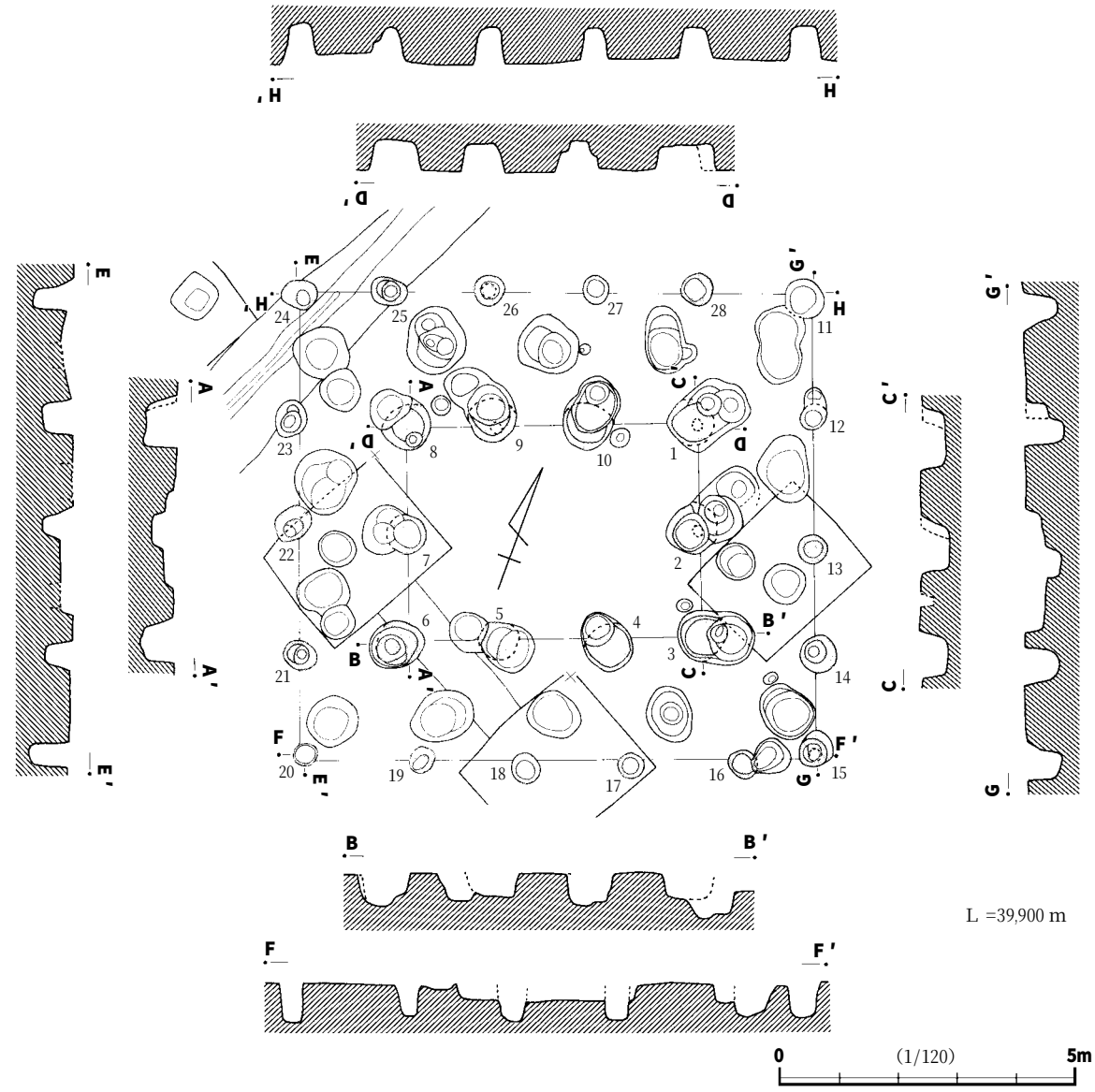
（単位m）

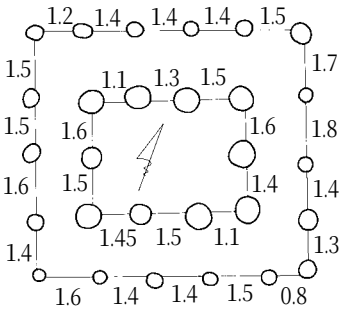
No	長径×短径×深さ
11	0.60×0.54×0.67
12	0.30×(0.30)×0.24
13	0.40×0.40×0.47
14	0.50×0.50×0.47
15	0.50×0.44×0.45
16	0.40×0.36×0.24
17	0.36×0.34×0.49
18	0.40×0.40×0.47
19	0.36×0.32×0.42
20	0.36×0.30×0.59

（単位m）

No	長径×短径×深さ
21	0.48×0.38×0.31
22	0.54×0.42×0.42
23	0.50×0.44×0.47
24	0.50×0.40×0.46
25	0.48×0.38×0.43
26	0.42×0.42×0.45
27	0.40×0.36×0.47
28	0.46×0.46×0.38

第50図　15号掘立柱建物跡－2





（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.68×0.64×0.35
2	(0.74)×0.70×0.38
3	0.74×(0.70)×0.24
4	0.66×(0.60)×0.47
5	(0.58×0.54)×0.35
6	(0.64)×0.60×0.47
7	(0.58)×0.54×0.19
8	0.66×(0.60)×0.45
9	0.66×0.60×0.42
10	0.70×(0.64)×0.35

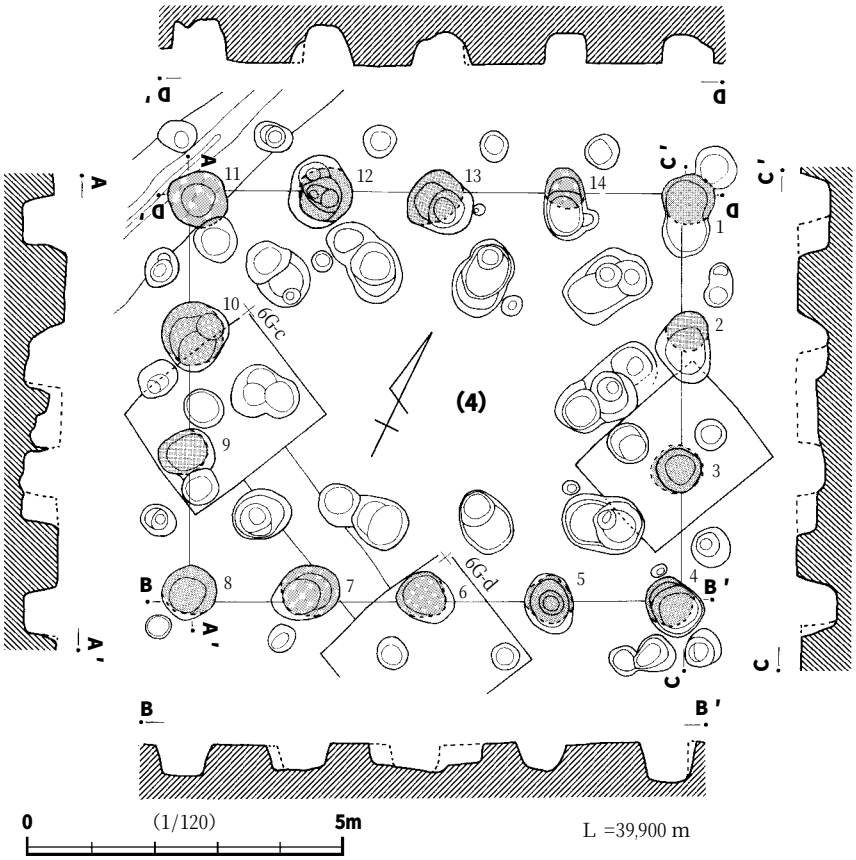
（単位m）

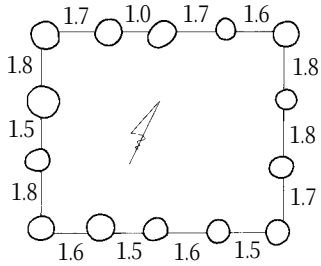
No	長径×短径×深さ
11	0.60×0.54×0.67
12	0.40×(0.34)×0.52
13	0.40×0.40×0.47
14	0.50×0.50×0.47
15	0.50×0.44×0.45
16	0.40×0.36×0.24
17	0.36×0.34×0.49
18	0.40×0.40×0.47
19	0.36×0.32×0.42
20	0.36×0.30×0.59

（単位m）

No	長径×短径×深さ
21	0.48×0.38×0.31
22	0.54×0.42×0.42
23	0.50×0.44×0.47
24	0.50×0.40×0.46
25	0.48×0.38×0.43
26	0.42×0.42×0.45
27	0.40×0.36×0.47
28	0.46×0.46×0.38

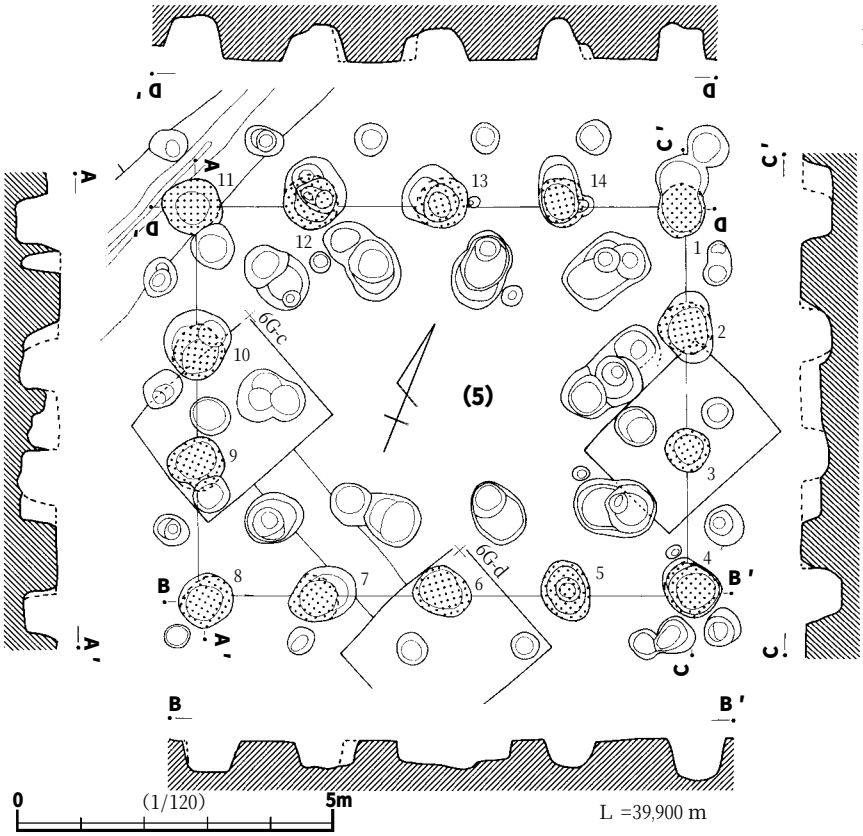
第51図　15号掘立柱建物跡－3

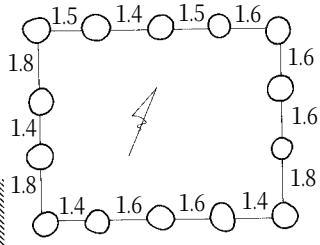




（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.66×(0.60)×0.47
2	(0.52)×0.50×0.40
3	(0.70×0.60)×0.40
4	0.60×(0.60)×0.47
5	0.54×(0.50)×0.33
6	0.52×(0.50)×0.33
7	(0.60)×0.56×0.35
8	0.54×(0.54)×0.40
9	(0.52)×0.46×0.42
10	(0.66×0.66)×0.40
11	0.62×0.56×0.40
12	(0.56×0.54)×0.47
13	0.66×0.48×0.40
14	(0.44)×0.42×0.35

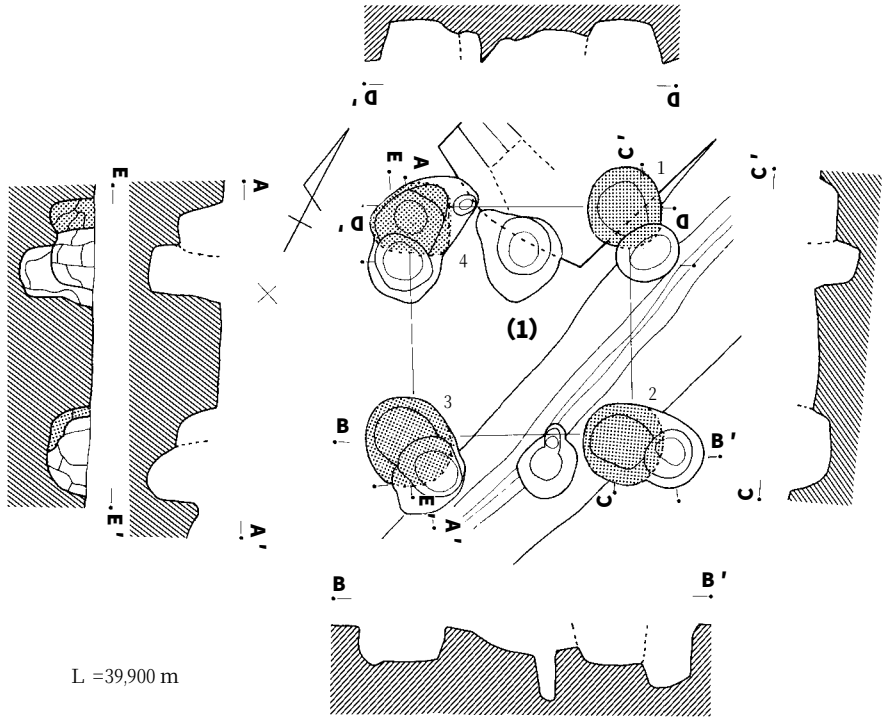


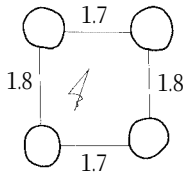


（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	(0.66)×0.60×0.46
2	0.56×(0.56)×0.40
3	0.58×0.52×0.35
4	0.70×0.70×0.52
5	0.80×0.60×0.33
6	0.74×0.66×0.35
7	0.66×(0.66)×0.33
8	0.68×(0.60)×0.40
9	0.70×(0.70)×0.47
10	(0.64×0.64)×0.47
11	0.70×(0.64)×0.54
12	(0.70)×0.64×0.43
13	(0.68)×0.64×0.38
14	0.60×(0.58)×0.47

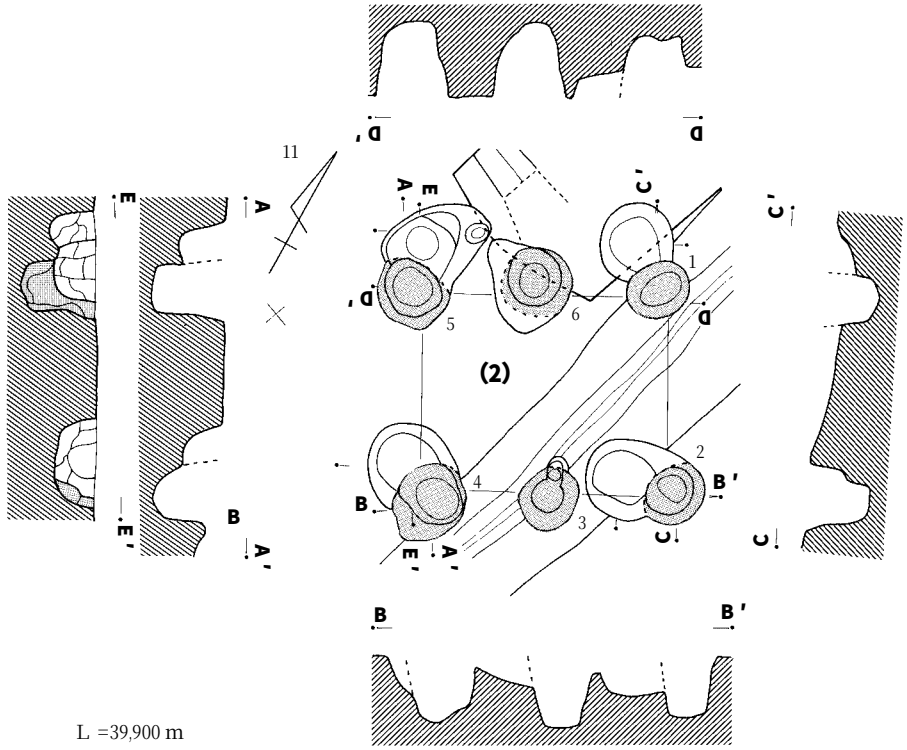
第52図　15号掘立柱建物跡－4・5

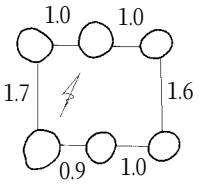




（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.66×0.62×0.16
2	0.66×0.64×0.30
3	0.76×0.68×0.30
4	0.70×0.62×0.34



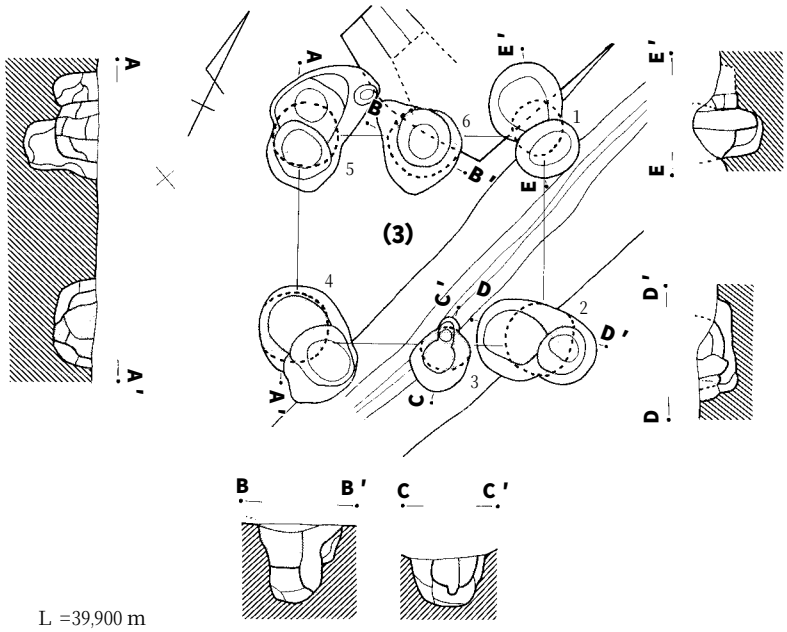


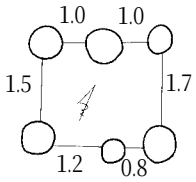
（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.50×0.44×0.46
2	0.50×0.46×0.50
3	0.50×0.46×0.50
4	0.66×0.56×0.50
5	0.56×0.48×0.60
6	0.56×0.56×0.58

0 (1/60) 2m

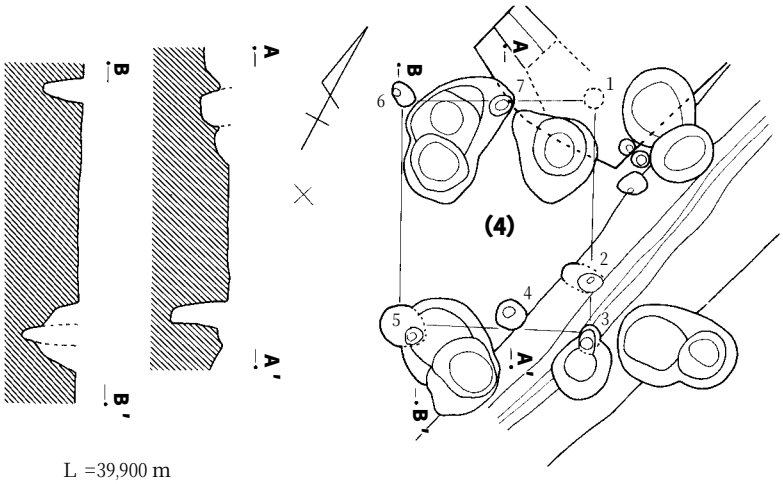
第53図　20号掘立柱建物跡－1・2

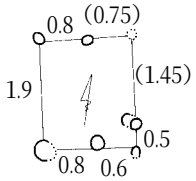




（単位m）

No	長径×短径×深さ
1	0.44×0.40×0.50
2	0.54×0.54×0.20
3	0.40×0.36×0.28
4	0.58×0.56×0.34
5	0.52×0.50×0.36
6	0.60×0.50×0.54



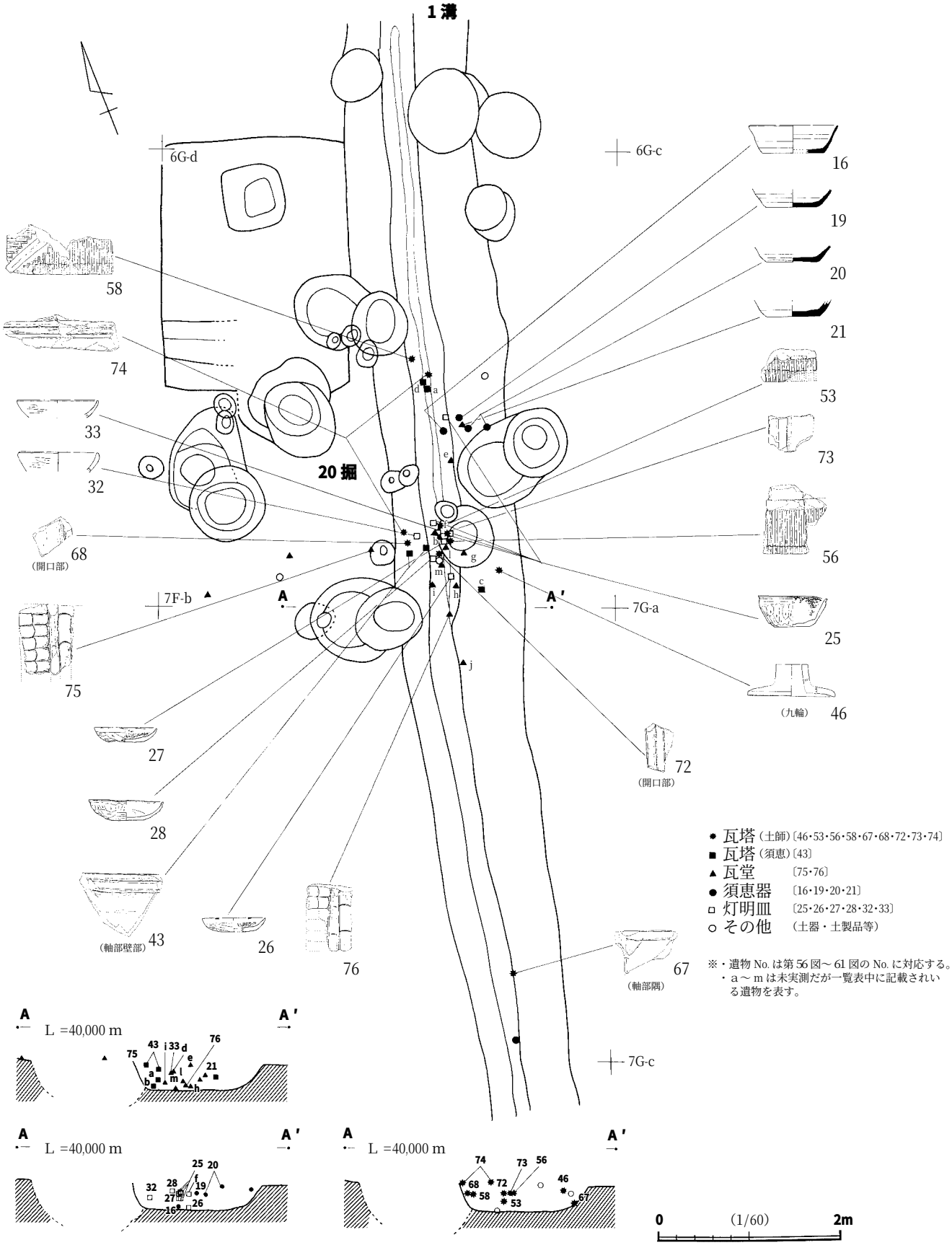


（単位m）

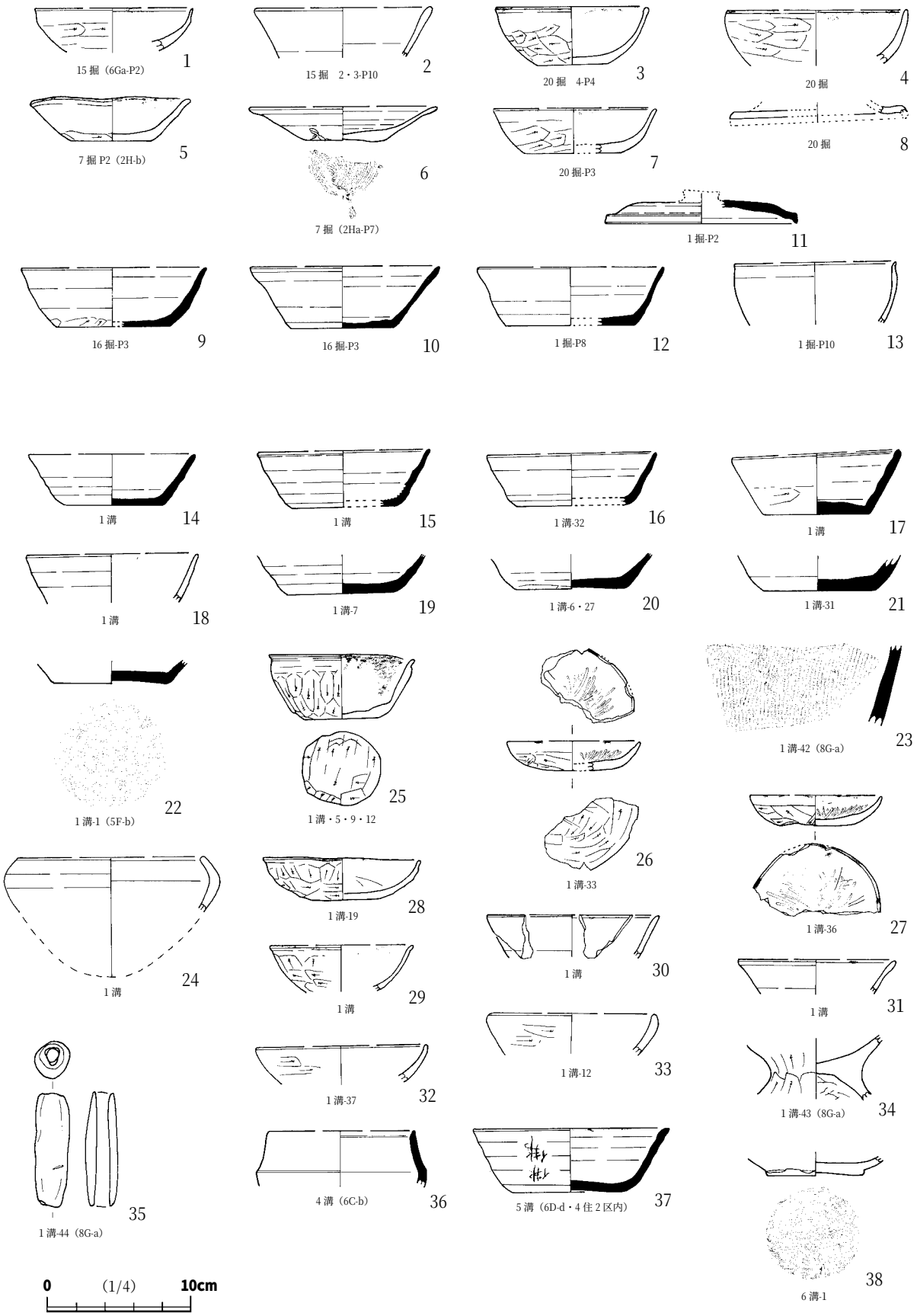
No	長径×短径×深さ
1	—
2	0.34×(0.20)×—
3	(0.24)×0.16×—
4	0.24×0.24×0.42
5	(0.36)×0.34×0.44
6	0.22×0.16×0.34
7	0.20×0.16×0.20

0 (1/60) 2m

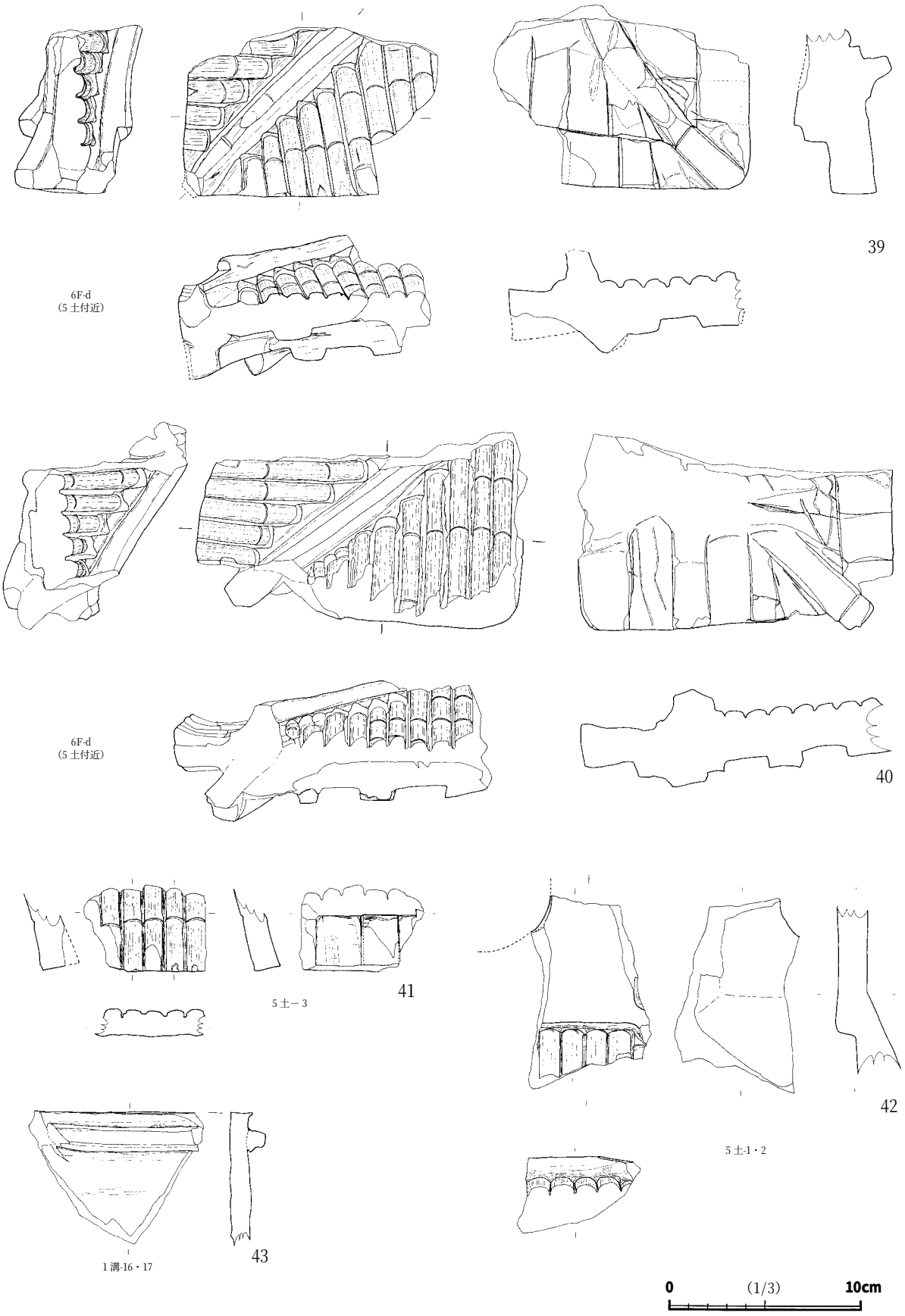
第54図　20号掘立柱建物跡－3・4



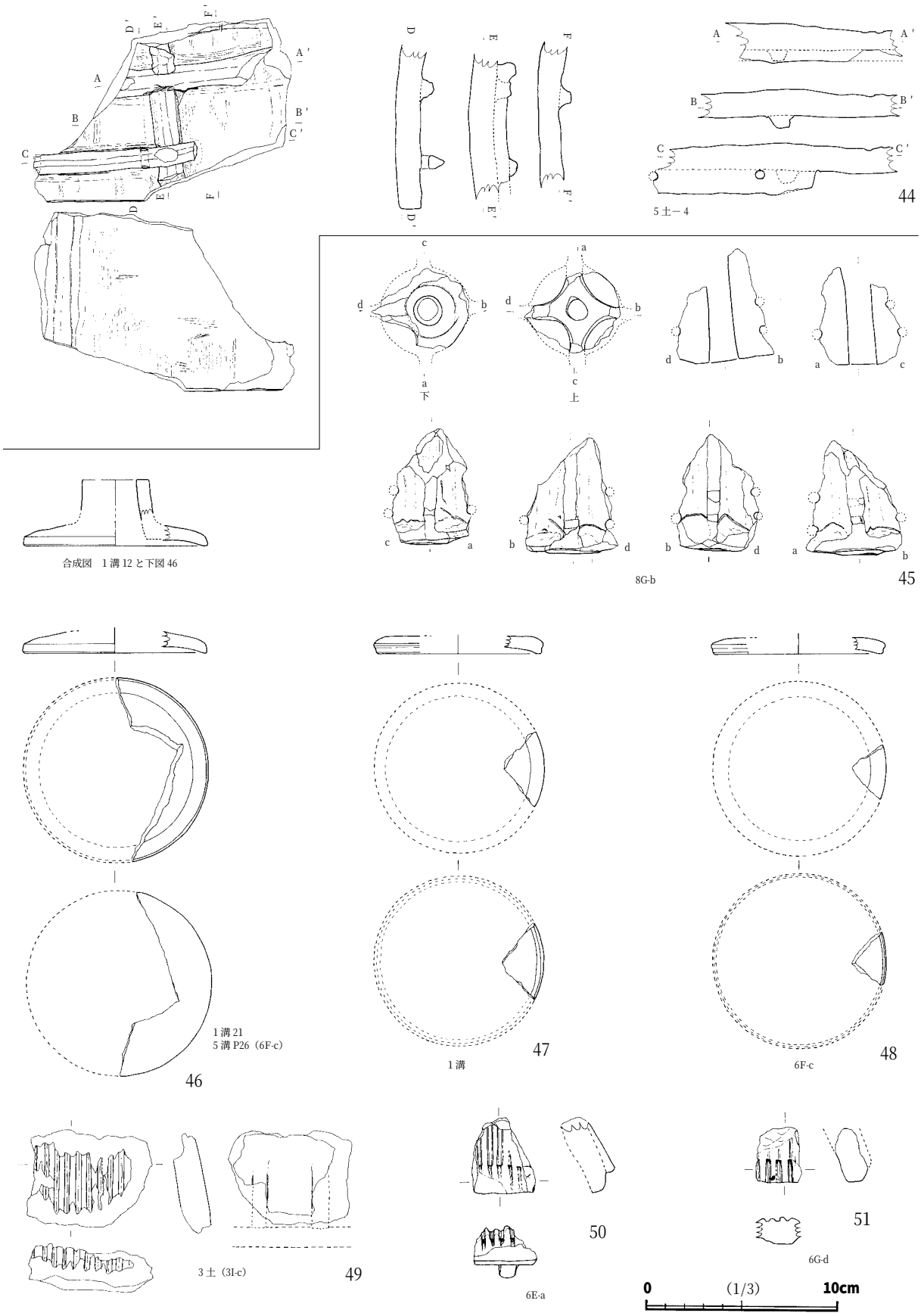
第 55 図　20 号掘立柱建物跡周辺遺物出土状況



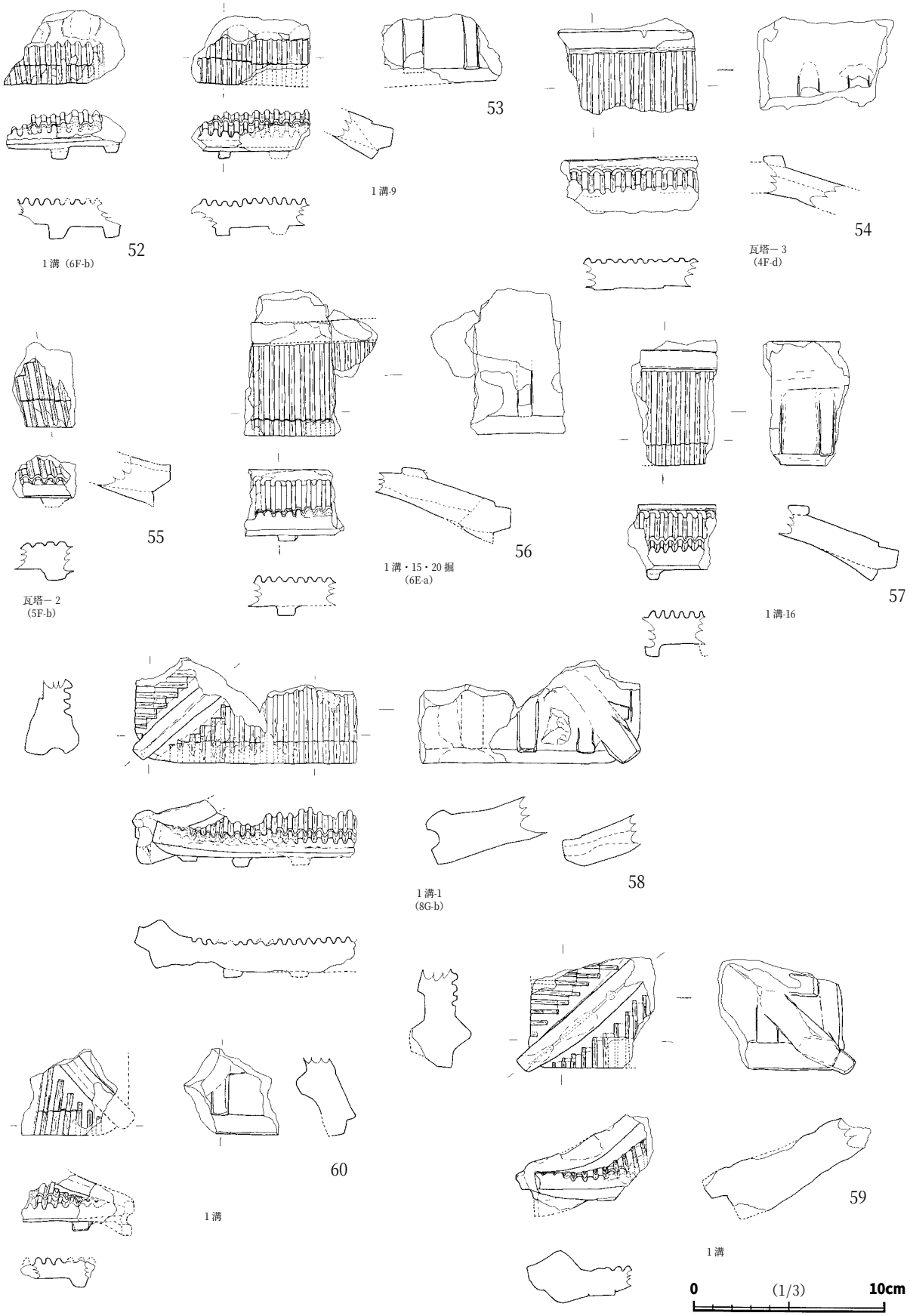
第 56 図　掘立柱建物跡・溝状遺構遺物



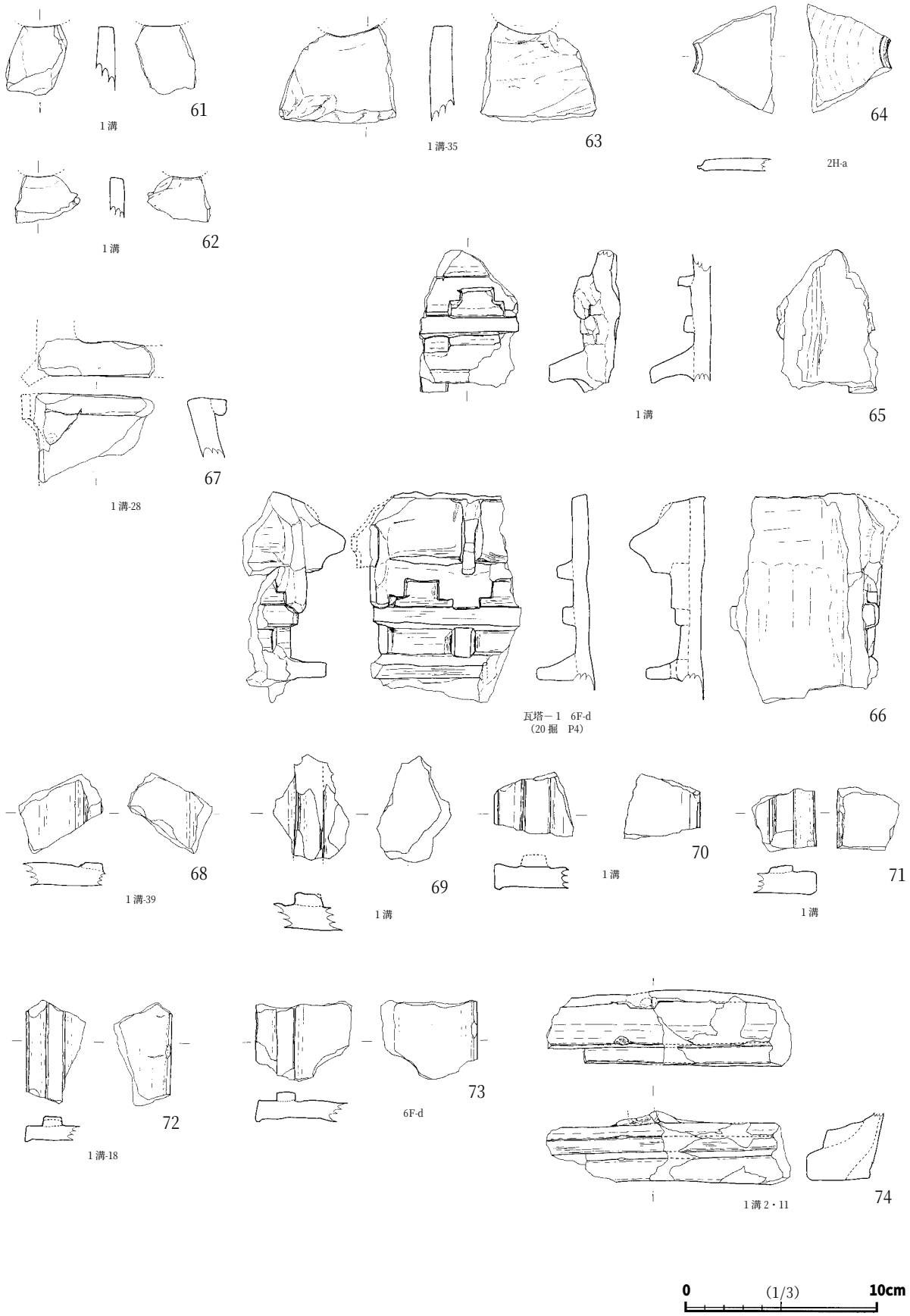
第 57 図　瓦塔（1）


44
5土－4
45
8G-b
合成図　1溝12と下図46
46
1溝21
5溝P26（6F-c）
47
1溝
48
6F-c
49
3土（3I-c）
50
6E-a
51
6G-d
0
(1/3)
10cm

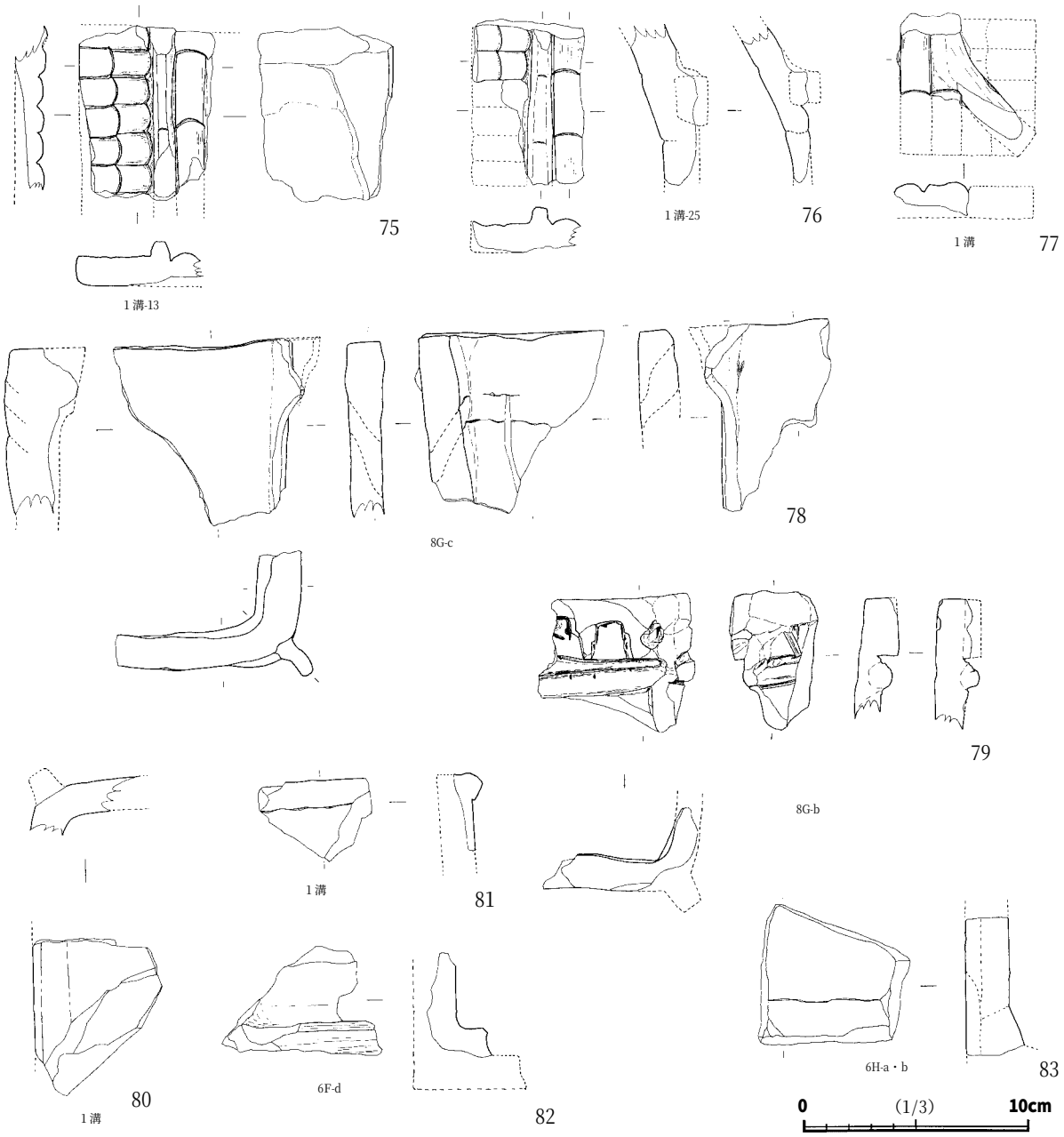
第58図　瓦塔（2）


52
1溝（6F-b）
1溝-9
53
瓦塔－3
（4F-d）
54
瓦塔－2
（5F-b）
55
1溝・15・20掘
（6E-a）
56
1溝-16
57
1溝-1
（8G-b）
58
60
1溝
59
1溝
0
(1/3)
10cm

第59図　瓦塔（3）


61
1溝
62
1溝
1溝-35
63
64
2H-a
1溝
65
67
1溝-28
瓦塔－1　6F-d
（20掘　P4）
66
68
1溝-39
69
1溝
70
1溝
71
1溝
72
1溝-18
73
6F-d
74
1溝2・11
0
(1/3)
10cm

第60図　瓦塔（4）


75
1溝-13
1溝-25
76
1溝
77
78
8G-c
79
8G-b
1溝
81
80
1溝
6F-d
82
6H-a・b
83
0
(1/3)
10cm

第61図　瓦堂

第22表　掘立柱建物跡遺物一覧（第56図）

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏 (灯明皿)	柱穴 覆土中	口径 残高	(11.0) (3.0)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部横のヘラケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好	口縁～ 体部の1/6 残存	6G-a P2	転用 口縁内面に油煙付着
2	土師器 坏	柱穴 覆土中	口径 残高	(12.3) (3.5)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR5/3にぶい黄褐　10YR3/1黒褐色 焼成:良好	口縁～ 体部の1/5 残存	15掘立 3P12	火襷き有り
3	土師器 坏 (灯明皿)	柱穴 覆土中	口径 底径 器高	10.7 4.9 4.1	成形　多方向の静止ヘラケズリ 調整(外面):口縁回転ナデ　体部細かい左右のヘラケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:褐色粘土塊φ4.0～0.3㎜混ざる。 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好	完形	15掘立7 P4の 隣のP	油煙内外面全周に有り 県巡回展出品
4	土師器 坏 (灯明皿)		口径 残高	(12.5) (3.8)	調整(外面):口縁横ナデ　体部一方向のヘラケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:やや不良	1/4　残存	15堀立 7・8・9	転用 口縁に油煙 内面劣化により剥離
5	土師器 坏 (灯明皿)	柱穴 覆土中	口径 底径 器高	11.1 5.5 2.1	成形　底部静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ5回 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色砂粒φ1～0.1㎜多く入る。粘土塊も混ざる。 色調:7.5YR4/2灰褐 焼成:良好	完形	7堀P2 (2H-b)	内外面油煙全周する ゆがみがひどい 県巡回展出品
6	土師器 坏皿	柱穴 覆土中	口径 底径 器高	(13.0) 5.6 2.4	成形　底部回転糸切り 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5YR4/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/3　残存	2Ha 7堀P7 すぐ西	糸切り時の切り残しが 一部ゆ着
7	土師器 坏 (灯明皿)	柱穴 覆土中	口径 底径 器高	(11.4) (6.8) 3.1	成形　底部回転ヘラケズリ 調整(外面):口縁横ナデ　体部横ケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:やや不良	1/3　残存	15堀立 7P3 9P2	内外面油煙付着
8	土師器 蓋?		口径 残高	(12.4) (0.5)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好	破片のみ	15堀立 7・8・9周 辺	
9	須恵器 杯	柱穴 覆土中	口径 底径 器高	(13.0) (8.0) 4.2	成形　底部静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:石英やや多いか 色調:7.5YR4/3褐 焼成:不良(土師のようにザラついている)	1/3　残存	16堀P3	
10	須恵器 杯	柱穴 覆土中	口径 底径 器高	13.2 7.1 4.3	成形　底部回転ヘラ切り後不整方向のヘラケズリ後ナデ 調整(外面):回転ナデ　下端は回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色砂粒とても多く入る 色調:10YR5/1褐灰 焼成:良好	1/2　残存	16堀P3	
11	須恵器 蓋	柱穴 覆土中	口径 残高	(13.3) (1.6)	調整(外面):回転ヘラケズリ後回転ヘラナデ又は口縁ヘラナデ 調整(内面):回転ヘラケズリ後回転ヘラナデ	胎土:黒色粒多く入る　堅緻 色調:10YR6/1褐灰 焼成:良好	1/5 つまみ欠 損	1堀立P2	
12	須恵器 杯	柱穴 覆土中	口径 底径 器高	(12.8) (9.0) 4.1	成形　底部回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端は回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色粒全体に少し入る 色調:10YR5/1褐灰 焼成:良好	1/3　残存	1掘P8	外面に炭化物(油煙)? 付着
13	土師器 碗形坏	柱穴 覆土中	口径 残高	(13.2) (4.3)	調整(外面):口縁ナデ　体部ケズリ後ナデか? 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5YR4/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁の1/4 残存	1掘P10	内面油煙付着 古墳時代後期

第23表　溝状遺構遺物一覧（第56図）

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	須恵器 杯		口径 底径 器高	(11.6) (7.2) 3.6	成形　底部　不整方向の静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:砂粒微かに入る。黒雲母はいる,石英も? 色調:2.5Y7/1灰白 焼成:須恵にしては不良	1/3　残存	1溝	同一個体未接合部分に 油煙有り(土師皿) 外面に口縁部に黒斑有 り,器壁もろく,調整不 明瞭
2	須恵器 杯		口径 底径 器高	(12.0) (7.2) 3.9	成形　底部回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5Y5/2暗灰黄 焼成:須恵にしては不良	1/5　残存	1溝	内側底部剥離
3	須恵器 杯		口径 底径 器高	(11.8) (7.8) 3.6	成形　底部静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ? 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR6/1褐灰 焼成:良好	1/5　残存	1溝	火襷き有り
4	須恵器 杯		口径 底径 器高	11.6 7.3 4.4	成形　底部　回転ヘラケズリ 調整(外面):口縁回転ナデ　下半回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色粒φ1.5～0.1㎜混じる 色調:2.5Y5/1黄灰 焼成:良好	1/2　残存	1溝	外面回転ナデと回転ヘ ラケズリの境は明瞭で はない。 県巡回展出品
5	須恵器 杯		口径 残高	(12.0) (3.4)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:良好	1/5　残存	1溝	転用 内面一部油煙付着
6	須恵器 杯	覆土 上層	底径 残高	7.6 (2.8)	成形　　底部不整方向ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:白色粒φ0.5～3.0㎜,卵も含む 色調:2.5Y6/1黄灰 焼成:須恵にしては不良	底部感存	1溝7	口縁全部欠損
7	須恵器 杯	底面 付近	底径 残高	7.8 (2.7)	成形　底部ヘラ切り後静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色粒φ1㎜,雲母も含む 色調:2.5Y7/1灰白 焼成:須恵にしては不良	底部感存	1溝6・27	口縁全部欠損
8	須恵器 杯		底径 残高	(7.6) (2.5)	成形　底部不整方向静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色粒,砂粒(φ1㎜)雲母含む 色調:2.5Y7/1灰白 焼成:良好	底部の1/2 残存	1溝・31	口縁全部欠損
9	須恵器 杯		底径 残高	8.2 (1.7)	成形　底部不整方向静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色粒,砂粒(φ1㎜)が多い　雲母入る 色調:10YR6/1褐灰 焼成:良好	底部完存	1溝 5F-b-1	口縁全部欠損 底部「キ」の線刻有り

	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
10	須恵器 甕		厚み	0.9	調整(外面):ナデ　平行のタタキ 調整(内面):ナデ	胎土:キメ細かい 色調:10GY5/1緑灰 焼成:良好	胴の一部 （破片）	1溝(42) 8G-a	
11	土師器 鉄鉢型 土器		口径 最大径 残高	(12.8) (15.0) (4.0)	整形　口縁内攣する 調整(外面):ナデ 調整(内面):ナデ	胎土:φ0.8～0.1㎜の白色と褐色の粒,雲母混じる。 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁の一部	1溝	県巡回展出品
12	土師器 坏 （灯明皿）		口径 底径 器高	10.0 5.4 4.5	成形　底部2方向静止ヘラケズリ 調整(外面):口縁回転ナデ　体部下から上方向の細かいヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ1～0.1㎜の白褐の砂粒,φ2～1.5㎜の粘土塊,雲母混じる。 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	ほぼ完形	1溝・5・9 12・35	油煙4方向に有り 県巡回展出品
13	土師器 坏 （灯明皿）		口径 底径 器高	(9.2) (3.0) (2.1)	成形　下整方向のヘラケズリ 調整(外面):口縁回転ナデ　体部横のヘラケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　底部内面ミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/3	1溝・33	内面斑文有り 底部線刻か？ 口縁に油煙少々
14	土師器 坏 （灯明皿）		口径 底径 器高	(9.2) (4.2) 2.2	成形　不整方向のヘラケズリ 調整(外面):口縁回転ナデ　体部横のヘラケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ　底内面ナデ後ミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/2	1溝・36	内外口縁に油煙付着 内底部線刻か？
15	土師器 坏 （灯明皿）		口径 底径 器高	10.9 4.3 3.1	成形　底部不整方向のヘラケズリ 調整(外面):口縁回転ナデ　体部不整方向のヘラケズリ 調整(内面):不整方向のヘラナデ	胎土:φ1～0.1㎜の白褐の砂粒,φ1.5～0.5㎜の粘土塊,雲母混じる。 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好	ほぼ完形	1溝・19	油煙ほぼ4方向の内外 県巡回展出品
16	土師器 坏 （灯明皿）		口径 残高	(10.0) (3.2)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部不整方向のヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁～ 体部1/8	1溝	内外口縁に油煙付着
17	土師器 坏 （灯明皿）		口径 残高	(12.0) (3.0)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	口縁～ 体部1/8	1溝	転用 内外口縁に油煙付着
18	土師器 坏 （灯明皿）		口径 残高	(11.0) (2.4)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	口縁～ 体部1/8	1溝	転用 内外口縁に油煙付着
19	土師器 坏 （灯明皿）		口径 残高	(12.0) (2.5)	調整(外面):回転ナデ　体部横のヘラケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙　7.5YR3/1黒褐 焼成:やや不良	口縁～ 体部1/7	1溝・37	くすべ？ 油煙なし
20	土師器 坏 （灯明皿）		口径 残高	(11.6) (2.9)	調整(外面):回転ナデ　体部横のヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR6/4にぶい橙　7.5YR3/1黒褐 焼成:やや不良	口縁～ 体部1/8	1溝・12	くすべ？ 油煙なし
21	土師器 台付碗		口径 基部径	(4.7) 6.2	調整(外面):ヘラケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	基部のみ	1溝43 8G-a	内面斑文
22	土錘		長さ 最大径 重量	8.0 2.3 43.7	調整(外面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好	完形	1溝44 8G-a	
23	須恵器 短頸壺		口径 残高	(10.0) (3.8)	整形　内面口縁端部に凹線巡る 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:キメ細かい　堅緻 色調:2.5Y5/1黄灰 焼成:良好	口縁の一部	4溝 6C-b	
24	土師器 坏 （灯明皿）		口径 底径 器高	13.7 7.8 4.4	成形　一方向の静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端静止ヘラケズリ5回 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ2.0～0.2㎜の粘土塊,φ0.5～1㎜の白色砂粒 色調:(外)7.5YR5/3にぶい褐　(内)7.5YR4/2灰褐 焼成:良好 雲母微か混じる	完形品	5溝	内面口縁に油煙有り 「佛佛」の墨書有り 県巡回展出品
25	土師器 坏		口径 残高	6.7 (1.4)	成形　底部回転糸切り 調整(外面):ナデ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YRにぶい赤褐 焼成:良好	底部のみ 完存	6溝・1	斑文有り

第24表　瓦塔・瓦堂片一覧

瓦塔（土師質）

図版№	№	遺構名	（取上№等）	地区名	焼成具合	部位	個数	備考	
45	52			8G-b	酸化焔焼成	水煙基部	1	土師質	県巡回展出品№⑤　確認調査時出土
46	28	１号溝状遺構	12		酸化焔焼成	九輪軸部	1	土師質	32の破片と合成復元図を作成
46	32	１号溝状遺構	21		酸化焔焼成	九輪	1	土師質	県巡回展出品№③
46	32	５号溝状遺構	土坑26	6F- c	酸化焔焼成	九輪	1	土師質	県巡回展出品№①　28の九輪軸部破片と合成復元図を作成
47	33	１号溝状遺構			酸化焔焼成	九輪	1	土師質	県巡回展出品№②
48	34			6F- c	酸化焔焼成	九輪	1	土師質	県巡回展出品№④
49	30	３号土坑		3I- c	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	
50	43			6E-a	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑪　端部で瓦表現が１節目のみ
51	44			6G-d	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑫　端部で瓦表現が１節目のみ
52	38	１号溝状遺構		6F- b	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑥　端部で瓦表現が１節目のみ
53	41	１号溝状遺構	9		酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑦　端部で瓦表現が１節目のみ
54	40		瓦塔３	4F-d	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑬　最上層ではない
55	39		瓦塔２	5F-b	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑱　端部で瓦表現が１節目のみ　隅木付近で扇垂木？
56	45	１号溝状遺構	15		酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑲　端部で瓦表現が１節目のみ
56	45	20号掘立柱建物跡			酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑲　端部で瓦表現が１節目のみ
56	45			6E-a	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑲　端部で瓦表現が１節目のみ
57	42	１号溝状遺構	16		酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑯　端部で瓦表現が１節目のみ　確認調査時出土
58	48	１号溝状遺構	1		酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑳　端部・・隅棟部分で瓦表現が１節目のみ
58	48			8G-b	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑧　端部で瓦表現が１節目のみ　確認調査時出土
59	47	１号溝状遺構			酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑰　端部・・隅棟部分で瓦表現が１節目のみ
60	46	１号溝状遺構			酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	県巡回展出品№⑨　端部・・隅棟部分で瓦表現が１節目のみ
61	36	１号溝状遺構			酸化焔焼成	屋蓋部平坦面	1	土師質	県巡回展出品№⑮　軸穴が確認できる
62	37	１号溝状遺構			酸化焔焼成	屋蓋部平坦面	1	土師質	県巡回展出品№⑩　軸穴が確認できる
63	35	１号溝状遺構	35		酸化焔焼成	屋蓋部平坦面	1	土師質	県巡回展出品№⑭　軸穴が確認できる
64	24			2H-a	酸化焔焼成	屋蓋部平坦面	1	土師質	軸穴が確認できる　丁寧にミガキが施される面が上面か？
65	50	１号溝状遺構			酸化焔焼成	初軸・組物部	1	土師質	県巡回展出品№22
66	49	20号掘立柱建物跡	P4　瓦塔１	6F-d	酸化焔焼成	初軸・組物部	1	土師質	県巡回展出品№21　15と接合？
67	14	１号溝状遺構	28		酸化焔焼成	軸部隅肘木	1	土師質	初軸ではない？
68	53	１号溝状遺構	39		酸化焔焼成	開口部	1	土師質	県巡回展出品№23
69	54	１号溝状遺構			酸化焔焼成	開口部	1	土師質	県巡回展出品№27
70	58	１号溝状遺構			酸化焔焼成	？	1	土師質	県巡回展出品№24
71	55	１号溝状遺構			酸化焔焼成	開口部	1	土師質	県巡回展出品№26
72	56	１号溝状遺構	18		酸化焔焼成	開口部	1	土師質	県巡回展出品№28
73	57			6F-d	酸化焔焼成	開口部	1	土師質	県巡回展出品№25
74	51	１号溝状遺構	２・11		酸化焔焼成	基壇部分	2	土師質	県巡回展出品№29
	6	13号掘立柱建物跡	Ｐ８		酸化焔焼成	初軸端部？	1	土師質	
	5	15号掘立柱建物跡	４－Ｐ11		酸化焔焼成	初軸端部？	1	土師質	
	9	１号溝状遺構			酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	二次被熱の可能性あり
	10	１号溝状遺構			酸化焔焼成	初軸端部？	1	土師質	
	11	１号溝状遺構			酸化焔焼成	初軸端部？	1	土師質	
	13	１号溝状遺構			酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	結節による多節の瓦表現なので他の土師質のモノとは別個体か？
	16	１号溝状遺構			酸化焔焼成	組物部？	1	土師質	
	18	１号溝状遺構			酸化焔焼成	軸部壁面	1	土師質	
	19	１号溝状遺構			酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	降棟部分
	20	１号溝状遺構			酸化焔焼成	垂木	1	土師質	
	21	１号溝状遺構		6F- b	酸化焔焼成	初軸隅？	1	土師質	器厚があるので初軸と推定
	22	１号溝状遺構			酸化焔焼成	初軸隅？	1	土師質	器厚があるので初軸と推定
	23	１号溝状遺構			酸化焔焼成	隅棟？？	1	土師質	部位はかなり曖昧
	26	１号溝状遺構			酸化焔焼成	初軸隅？	1	土師質	器厚があるので初軸と推定
	27	１号溝状遺構			酸化焔焼成	垂木？肘木？	1	土師質	
	12	20号掘立柱建物跡	９－Ｐ３		酸化焔焼成	開口部	1	土師質	
	15	20号掘立柱建物跡	P4　瓦塔１	6F-d	酸化焔焼成	組物部？	2	土師質	接合　49と接合？
	25	20号掘立柱建物跡	７－Ｐ６		酸化焔焼成	屋蓋部平坦面	1	土師質	軸穴が確認できる　外面はナデ、内面はケズリ
	59	20号掘立柱建物跡	9		酸化焔焼成		1	土師質	
	4	４号溝状遺構		6D- a	酸化焔焼成	初軸端部？	1	土師質	
	1			6G-c	酸化焔焼成	開口部	1	土師質	
	2			8C-a	酸化焔焼成	組物部？	1	土師質	
	3			6E-b	酸化焔焼成	屋蓋部？	1	土師質	片面は丁寧なミガキが施されている。屋蓋部最上層の露盤か？
	7			1G-c	酸化焔焼成	屋蓋部平坦面	1	土師質	
	8			5G-c	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	2	土師質	接合
	17			7G- d	酸化焔焼成	屋蓋部瓦部分	1	土師質	
	29				酸化焔焼成	垂木？	1	土師質	出土地点不明だが１号溝状遺構の可能性が高い
	31			6F- c	酸化焔焼成	組物部	1	土師質	
	60			7G-a	酸化焔焼成	軸部	1	土師質	67とよく似ている。
							67		

瓦塔（須恵質）

図版№	№	遺構名	（取上№等）	地区名	焼成具合	部位	個数	備考	
39	36		（５土付近）	6F-d	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№39　確認調査時出土
40	37		（５土付近）	6F-d	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№40　確認調査時出土
41	38	５号土坑	3		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№42　端部
42	39	５号土坑	１・２		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№41　最上層露盤部分
43	13	１号溝状遺構	16・17		還元焔焼成	初軸？	1	須恵質	頭貫表現か？
44	40	５号土坑	4		還元焔焼成	軸部・組物部分	1	須恵質	県巡回展出品№43　長押・束・貫表現部分が明瞭
a	11	１号溝状遺構	4		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	垂木部分のみ（瓦部分は剥離欠損）

図版№	№	遺構名	（取上№等）	地区名	焼成具合	部位	個数	備考	
b	12	１号溝状遺構	14		還元焔焼成	軸部隅？？	1	須恵質	剥離が激しく部位の同定は推定
c	14	１号溝状遺構	22		還元焔焼成	軸部隅	1	須恵質	32の破片と合成復元図を作成
d	15	１号溝状遺構	30		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	飛檐隅木表現部分のみ（瓦部分は剥離欠損）
	16	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部	1	須恵質	壁のみ
	17	１号溝状遺構			還元焔焼成	初軸？	1	須恵質	頭貫・間斗束表現か？
	18	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？？	1	須恵質	平坦部分の内面側が剥離したものか？
	19	１号溝状遺構			還元焔焼成	組物？？	1	須恵質	斗供表現か？しかし、表裏の別がある
	20	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	端部
	21	１号溝状遺構			還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
	22	１号溝状遺構			還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
	23	１号溝状遺構			還元焔焼成	組物？？	1	須恵質	県巡回展出品№⑦　端部で瓦表現が１節目のみ
	24	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現のみ　一条分の瓦表現が剥離
	25	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	屋蓋部の内面？薄く剥離したもの？
	26	１号溝状遺構			還元焔焼成	初軸？	1	須恵質	頭貫・間斗束表現か？
	27	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現のみ　一条分の瓦表現が剥離
	28	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	屋蓋部の内面？薄く剥離したもの？
	29	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現のみ　一条分の瓦表現が剥離　他のものよりも反りがきつい
	30	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	軸部の隅か？
	31	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	垂木部分のみ（瓦部分は剥離欠損）
	32	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	端部
	33	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	端部
	34	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	県巡回展出品№⑮　軸穴が確認できる
	35	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	隅棟の細片
	8	５号溝状遺構	土坑26		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№⑭　軸穴が確認できる
	9	９号住居跡			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	端部
	10	９号住居跡			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	端部
	1			3E-c	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	端部　確認調査時出土　貝含むPitから出土
	2			6G-d	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	確認調査時出土
	3			4G-c・d	還元焔焼成	軸部隅	1	須恵質	斗供表現あり
	4			7F-d	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	飛檐隅木表現部分のみ（瓦部分は剥離欠損）
	5			6G- c	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現のみ　一条分の瓦表現が剥離
	6			6H- c	還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
	7		表採		還元焔焼成	軸部隅	1	須恵質	斗供表現あり
							40		

瓦堂

図版№	№	遺構名	（取上№等）	地区名	焼成具合	部位	個数	備考	
75	40	１号溝状遺構	13		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№31
76	39	１号溝状遺構	25		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№30
76	39	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№30
77	38	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	県巡回展出品№32　隅棟に変換する部分
78	46			8G-c	還元焔焼成	軸部隅	1	須恵質	県巡回展出品№33　初軸？斗供表現あり
79	41			8G-b	還元焔焼成	軸部・組物	1	須恵質	県巡回展出品№35　２層？
80	43	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部隅	1	須恵質	県巡回展出品№36
81	45	１号溝状遺構			還元焔焼成	初軸・組物	1	須恵質	県巡回展出品№34
82	44			6F-d	還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	県巡回展出品№37　基壇付近
83	42			6H-a・b	還元焔焼成	軸部	1	須恵質	県巡回展出品№38　基壇付近
e	47	１号溝状遺構	8		還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
f	48	１号溝状遺構	12		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	剥離した瓦表現部分
f	48	１号溝状遺構	12		還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	飛檐隅木の一部のみ
f	48	１号溝状遺構	12		還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	軸部？
g	49	１号溝状遺構	20		還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
h	50	１号溝状遺構	23		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現
i	51	１号溝状遺構	24		還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
j	52	１号溝状遺構	26		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現
k	53	１号溝状遺構	31		還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
l	54	１号溝状遺構	38		還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
m	55	１号溝状遺構	40		還元焔焼成	？	1	須恵質	奥蓋部平坦面の上面部分の剥離か？
	56	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部上端部	1	須恵質	上端部の張出部分のみ
	57	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	58	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	壁？
	59	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	飛檐隅木の先端付近が剥離
	60	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	61	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	壁？
	63	１号溝状遺構			還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
	64	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現
	65	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	66	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	奥蓋部内面？
	67	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現
	68	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	69	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	70	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現？
	71	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部上端部？	1	須恵質	上端部の張出部分のみ
	72	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	73	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	74	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	75	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？

図版№	№	遺構名	（取上№等）	地区名	焼成具合	部位	個数	備考	
	52			8G-b	酸化焔焼成	水煙基部	1	土師質	県巡回展出品№⑤　確認調査時出土
	76	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	77	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	78	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	79	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	80	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	81	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	82	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	83	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	84	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	85	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	86	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	87	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現？
	88	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	89	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現
	90	１号溝状遺構		6F- b	還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
	91	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	壁？
	92	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	壁？
	93	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	壁？
	94	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部分の剥離
	95	１号溝状遺構			還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	壁？
	96	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部分の剥離
	97	１号溝状遺構			還元焔焼成	？	1	須恵質	県巡回展出品№⑩　軸穴が確認できる
	98	１号溝状遺構			還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部分の剥離　降棟か？
	101	20号掘立柱建物跡	15掘９－Ｐ２		還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	101	20号掘立柱建物跡	15掘９－Ｐ２		還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	101	20号掘立柱建物跡	15掘９－Ｐ２		還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	102	20号掘立柱建物跡	15掘９－①		還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	103	20号掘立柱建物跡	15掘９－②		還元焔焼成	斗供	1	須恵質	県巡回展出品№23
	104	20号掘立柱建物跡	15掘９－③		還元焔焼成	？	1	須恵質	県巡回展出品№27
	105	20号掘立柱建物跡	15掘７－Ｐ３		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現
	106	20号掘立柱建物跡	15掘７－Ｐ３		還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	107	20号掘立柱建物跡	15掘７－Ｐ３		還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	瓦表現部分の剥離
	108	20号掘立柱建物跡	15掘７－Ｐ３		還元焔焼成	？	1	須恵質	壁？
	100	５号掘立柱建物跡	Ｐ２		還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現？
	99	５号溝状遺構	P14	6C-d	還元焔焼成	軸部？	1	須恵質	壁？
	19	Ｐ－１		6G- d	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	剥離した瓦表現部分　確認調査時出土
	1			4G-c･d	還元焔焼成	軸部壁部？	1	須恵質	降棟部分
	2			4G-d	還元焔焼成	？	1	須恵質	
	3			4G-b	還元焔焼成	？	1	須恵質	トレンチャー内
	4			4G-b	還元焔焼成	軸部壁部？	1	須恵質	トレンチャー内
	5			4G-b	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	トレンチャー内　剥離した瓦表現部分
	6			4G-b	還元焔焼成	軸部壁部？	1	須恵質	トレンチャー内
	7			5F-a	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	8			5F- b	還元焔焼成	軸部隅？	1	須恵質	
	9			6F- b	還元焔焼成	組物部？	1	須恵質	接合　49と接合？
	10			6F- b	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	11			6G- c	還元焔焼成	軸部壁部？	1	須恵質	
	12			6G- c	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	13			6G- c	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	14			6G- c	還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
	15			6G- c	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現部分
	16			6G- c	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	剥離した瓦表現部分
	17			6G- c	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	剥離した瓦表現部分
	18			6G- c	還元焔焼成	？	1	須恵質	
	20			6G- d	還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離　確認調査時出土
	21			6G- d	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	大棟部分か？　確認調査時出土
	22			6G- d	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	剥離した瓦表現部分　確認調査時出土
	23			6G- d	還元焔焼成	？	1	須恵質	確認調査時出土
	24			6G- d	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面の垂木表現部分　確認調査時出土
	25			6G- d	還元焔焼成	？	1	須恵質	確認調査時出土
	26			6G- d	還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離　確認調査時出土
	27			6G- d	還元焔焼成	？	1	須恵質	確認調査時出土
	28			6H- c	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	剥離した瓦表現部分
	29			7G- b	還元焔焼成	軸部隅？	1	須恵質	67とよく似ている。
	30			7G- d	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	31			7G- b	還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
	32			8G- c	還元焔焼成	軸部隅	1	須恵質	斗供表現あり
	33			8F- a	還元焔焼成	斗供？	1	須恵質	
	34			8F- a	還元焔焼成	？	1	須恵質	出土地点不明だが１号溝状遺構の可能性が高い
	35			8F- a	還元焔焼成	飛檐隅木？	1	須恵質	飛檐隅木の先端部分のみ
	36			8G-b	還元焔焼成	屋蓋部？	1	須恵質	瓦表現部はなく、剥離した内面か？
	37			8G-b	還元焔焼成	屋蓋部	1	須恵質	剥離した瓦表現部分
	62			6G-a	還元焔焼成	組物？	1	須恵質	貼り付けられた長押・束・貫表現部分が剥離
							113		

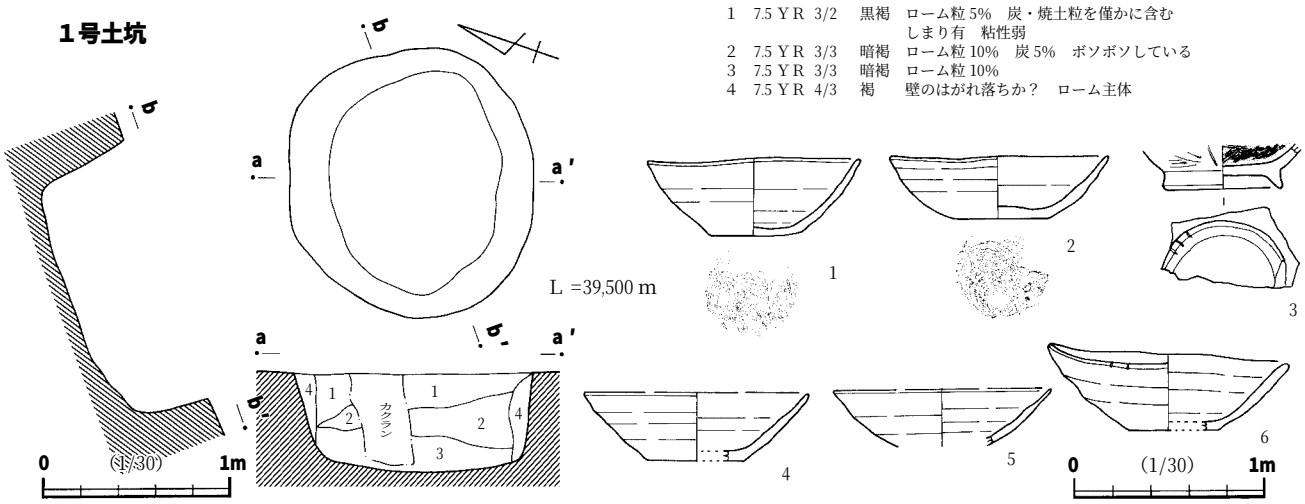
※「№」は管理用の№なので図面・図版などには反映されない。

c　土坑（第62～65図・第25表）

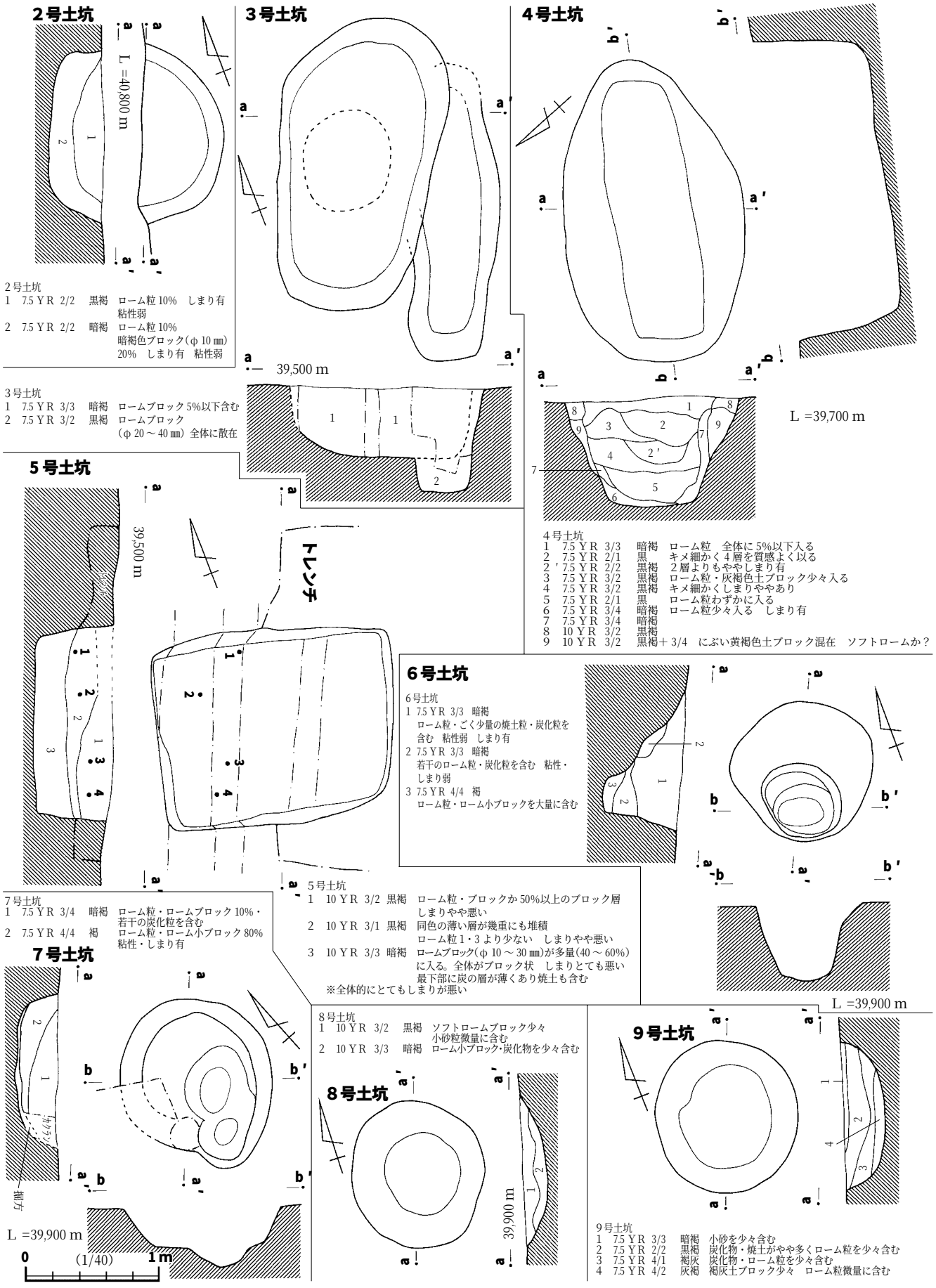
第25表　土坑一覧

遺構番号	旧番号	方位	平面形	掘方断面形状	規模			特徴	時代	図版番号	備考
					長軸	短軸	深さ				
１号土坑	３号土壙	N-41.5°-E	円形	円筒形	1.30	1.42	0.50	単純層位の中、遺物がややまとまって廃棄された状態で出土した。	平安時代（10世紀代）	第62図	
２号土坑	１号土壙	N-23°-E	円形	円筒形	1.32	?	0.40	西半分は攪乱で破壊されていた。	時期不明	第63図	
３号土坑	２号土壙	N-30°-E	長楕円形	半円形	2.23	1.20	0.50	９掘の柱穴４を破壊している。東側に切り合う長方形の土坑を切っており、この土坑内から近世陶磁器片が出土。	近世？	第63図	
４号土坑	４号土壙	N-56°-W	長楕円形	逆台形	2.30	1.38	0.82	上端は長楕円形だが、床面は長方形である。覆土の雰囲気は、全体的にしまりがあり、古代以前のものに感じられるが、遺物の出土がないので時期は不明である。	時期不明	第63図	
５号土坑	５号土壙	N-70°-W	長方形	箱形	1.80	1.46	0.60	覆土のしまりが悪く、最下層に薄い炭層が見られた。覆土中にも焼土・炭化物が混じっており、状況的に炭窯と考えられる。しかし、瓦塔片が多く出土しており、この遺構と直接的な関わりがないと考えられることから南側の未調査区域に瓦塔と関わり合いのある遺構が存在する可能性も考えられる。	近世？	第63図	炭窯　須恵質瓦塔片出土
６号土坑	７号土壙	N-70°-W	円形	半円形	1.08	1.04	0.58	形状的に柱穴のような印象を受ける。検出時も掘立柱建物跡の柱穴と考えたが、対応する遺構はないことから単独の遺構であると考えられる。遺物は少ないが、古代の土師器片が下限遺物として出土している。これらのことから一本柱などを敷設した柱痕の可能性も考えられる。	古代	第63図	
７号土坑	８号土壙	N-42°-E	円形	半円形	1.13	1.12	0.32	底面に柱穴状の凹みが見られる。	時期不明	第63図	
８号土坑	10号土壙	N-18°-E	円形	浅円形	1.10	1.00	0.18	明確に遺構であったが、遺物もなく形状的にも特筆すべき点はない。	時期不明	第63図	
９号土坑	11号土壙	N-22°-E	円形	浅円形	1.14	1.08	0.32	明確に遺構であったが、遺物もなく形状的にも特筆すべき点はない。	時期不明	第63図	
10号土坑	12号土壙	N-0°-E	円形	浅円形	0.92	0.90	0.28	明確に遺構であったが、遺物もなく形状的にも特筆すべき点はない。	時期不明	第64図	
11号土坑	13号土壙	N-68°-E	楕円形	逆台形	0.90	0.70	0.28	単純な土坑だが、遺物が出土した。周辺に対応するような遺構はなく、１号土坑と性格的に近似するか。	平安時代（10世紀代）	第64図	
12号土坑	14号土壙	N-52°-E	方形	箱形	2.72	2.58	0.50	底面中央部に焼土塊が検出された。当初は平面規模から小型の住居跡と考えていたが、カマド・柱穴・壁溝などの住居に付随する施設が全く検出されなかったことから土坑として扱った。攪乱が多く入るが、遺物の下限は古代と考えられる。	古代？	第64図	底面中央に焼土塊
13号土坑	15号土壙	N-47°-E	長方形	箱形	2.18	1.56	0.38	切り合い関係は12土に切られており、古い遺構となる。遺物の状況は12土とほぼ同じである。中央に浅い穴が検出され、上層と明らかに異なる埋土であった。	古代？	第64図	
14号土坑	16号土壙	N-14°-E	隅丸長方形	逆台形	1.52	0.80	0.42	形状的に５溝内の土坑列とよく似た形状と覆土であった。５溝は、15掘方向へはのびていないことから、この土坑は５溝内土坑が北方向へ屈曲したものとも考えられる。	古代？	第64図	５溝内の土坑列と形状的に近似。
15号土坑	17号土壙	N-20.5°-E	楕円形	半円形	1.04	0.82	0.42	明確に遺構であったが、遺物もなく形状的にも特筆すべき点はない。	時期不明	第64図	
16号土坑	18号土壙	N-63°-W	隅丸方形	逆台形	1.80	1.56	0.66	明確に遺構であったが、遺物もなく形状的にも特筆すべき点はない。	時期不明	第65図	
17号土坑	19号土壙	N-63°-W	円形	半円形	1.00	0.98	0.28	明確に遺構であったが、遺物もなく形状的にも特筆すべき点はない。	時期不明	第65図	
18号土坑	20号土壙	N-21°-E	円形	浅円形	2.16	2.06	0.12	明確に遺構であったが、遺物もなく形状的にも特筆すべき点はない。	時期不明	第65図	
19号土坑	21号土壙	N-25°-E	隅丸長方形	箱形	1.80	1.52	0.30	覆土のしまりが悪く、最下層に薄い炭層が見られた。覆土中にも焼土・炭化物が混じっており、状況的に炭窯と考えられる。	近世？	第65図	炭窯

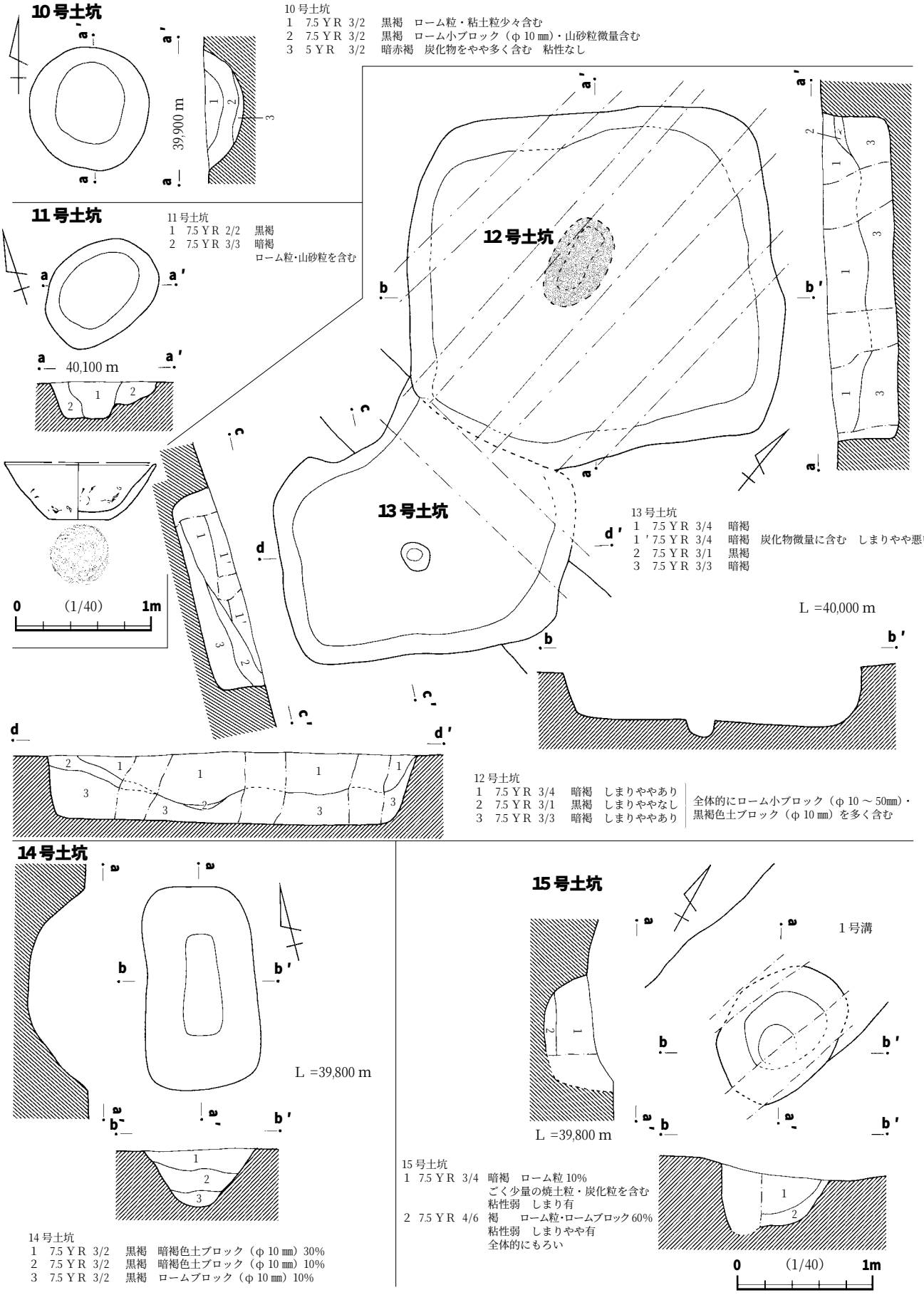
※深さは検出面からの深さ。
※方位は長軸と南北軸に対しての値。



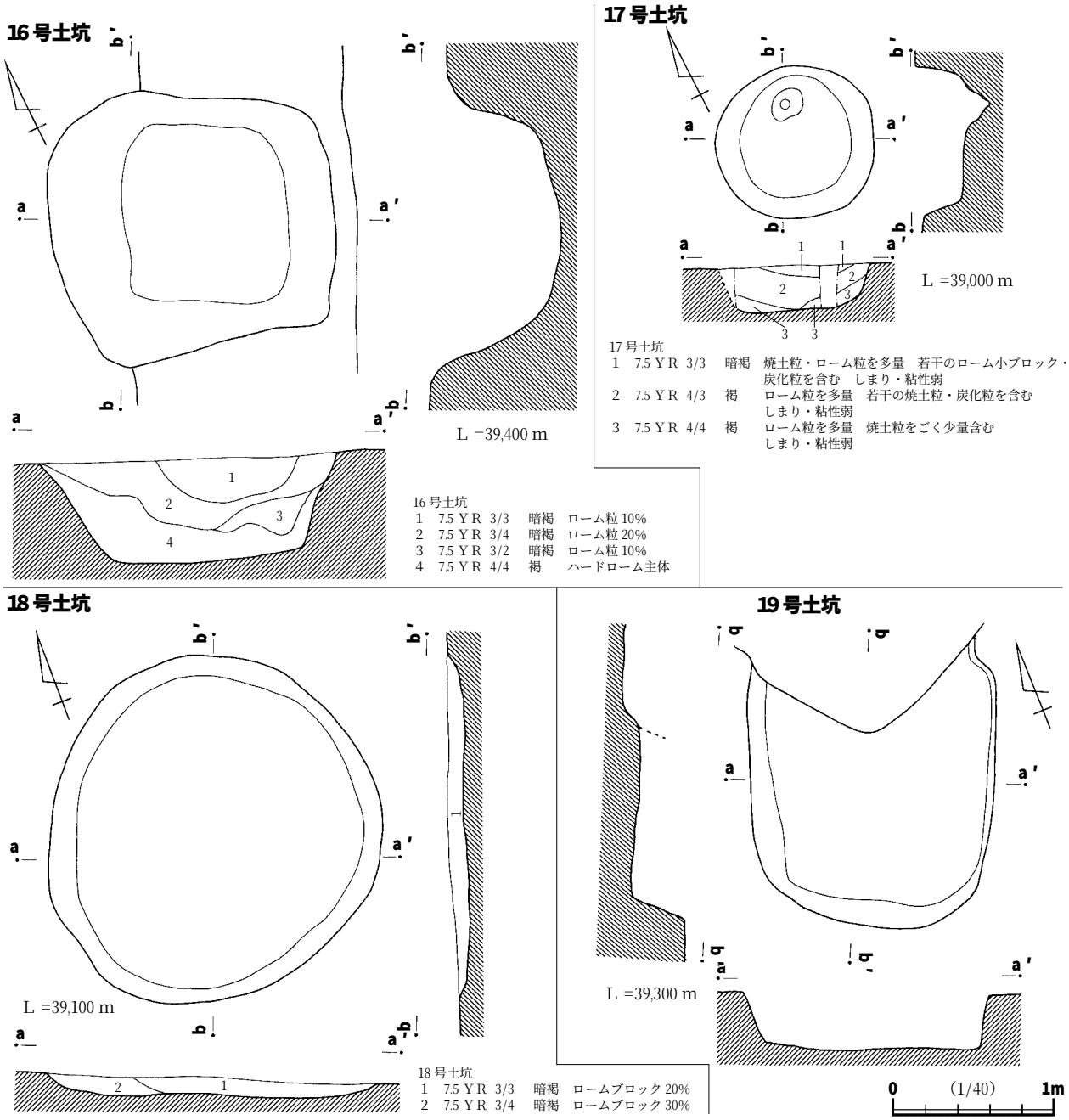
第 62 図　１号土坑及び遺物


2号土坑
L =40,800 m
2号土坑
1　7.5ＹＲ 2/2　黒褐　ローム粒 10%　しまり有　粘性弱
2　7.5ＹＲ 2/2　暗褐　ローム粒 10%　暗褐色ブロック(φ 10 ㎜) 20%　しまり有　粘性弱
3号土坑
39,500 m
3号土坑
1　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック 5%以下含む
2　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ロームブロック (φ 20 ～ 40 ㎜) 全体に散在
4号土坑
L =39,700 m
4号土坑
1　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒　全体に 5%以下入る
2　7.5ＹＲ 2/1　黒　キメ細かく 4 層を質感よく以る
2 ′ 7.5ＹＲ 2/2　黒褐　2 層よりもややしまり有
3　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒・灰褐色土ブロック少々入る
4　7.5ＹＲ 3/2　黒褐　キメ細かくしまりややあり
5　7.5ＹＲ 2/1　黒　ローム粒わずかに入る
6　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　ローム粒少々入る　しまり有
7　7.5ＹＲ 3/4　暗褐
8　10ＹＲ 3/2　黒褐
9　10ＹＲ 3/2　黒褐＋ 3/4　にぶい黄褐色土ブロック混在　ソフトロームか？
5号土坑
39,500 m
トレンチ
5号土坑
1　10ＹＲ 3/2　黒褐　ローム粒・ブロックか 50%以上のブロック層　しまりやや悪い
2　10ＹＲ 3/1　黒褐　同色の薄い層が幾重にも堆積　ローム粒 1・3 より少ない　しまりやや悪い
3　10ＹＲ 3/3　暗褐　ロームブロック(φ 10 ～ 30 ㎜)が多量(40 ～ 60%)に入る。全体がブロック状　しまりとても悪い　最下部に炭の層が薄くあり焼土も含む
※全体的にとてもしまりが悪い
6号土坑
6号土坑
1　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　ローム粒・ごく少量の焼土粒・炭化粒を含む　粘性弱　しまり有
2　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　若干のローム粒・炭化粒を含む　粘性・しまり弱
3　7.5ＹＲ 4/4　褐　ローム粒・ローム小ブロックを大量に含む
7号土坑
7号土坑
1　7.5ＹＲ 3/4　暗褐　ローム粒・ロームブロック 10%・若干の炭化粒を含む
2　7.5ＹＲ 4/4　褐　ローム粒・ローム小ブロック 80%　粘性・しまり有
L =39,900 m
0　(1/40)　1 m
8号土坑
8号土坑
1　10ＹＲ 3/2　黒褐　ソフトロームブロック少々　小砂粒微量に含む
2　10ＹＲ 3/3　暗褐　ローム小ブロック・炭化物を少々含む
39,900 m
9号土坑
L =39,900 m
9号土坑
1　7.5ＹＲ 3/3　暗褐　小砂を少々含む
2　7.5ＹＲ 2/2　黒褐　炭化物・焼土がやや多くローム粒を少々含む
3　7.5ＹＲ 4/1　褐灰　炭化物・ローム粒を少々含む
4　7.5ＹＲ 4/2　灰褐　褐灰土ブロック少々　ローム粒微量に含む

第 63 図　2～9 号土坑



第 64 図　10 ～ 15 号土坑



第65図　16～19号土坑

土坑出土遺物について（第62・64図，第26表）

遺物を出土した土坑は，1・3・5・6・11・12号土坑である。その内，6・12号土坑は細片だったため図化していない。3号土坑は近世磁器の細片が出土した。図を掲載した1・11号土坑出土の遺物は，全て10世紀代に比定されるものばかりである。

5号土坑は，検出状況から近世以降の炭窯であった可能性が高い。しかし，第57図-41・42・第58図-44の須恵質瓦塔片が出土しており，土坑周辺の攪乱中からも同様の遺物が出土している。出土状況から攪乱中に含まれていたと判断できるものが多く，土坑の南側から攪乱によって拡散したと想像されることから，未調査区域に別の遺構が存在している可能性を示唆していると思われる。

第26表　土坑遺物一覧

1号土坑

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	一括	口径 底径 器高	11.4 4.9 4.1	成形　底部回転糸切り 整形　ナデ調整 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ5mm の褐色ブロック少し入る 色調:2.5YR4/4にぶい赤褐 焼成:良好	2/3　残存	3H-a～d 3H-c	ヌタ(水引き)
2	土師器 坏	一括	口径 底径 器高	(11.6) 5.0 (3.3)	成形　底部回転糸切り 整形　ナデ調整 調整(外面):回転ナデ　部分的に不整方向ナデも有り 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ2～1mm の褐色粒少々入る 色調:2.5YR5/6明赤褐 焼成:良好	1/2　残存	3土	
3	土師器 高台付坏	一括	底径 残高	(6.4) (2.3)	成形　底部回転ヘラケズリ 調整(外面):高台直上ヘラケズリ 調整(内面):ミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:良好 彩色:黒色処理　N1.5/0黒	底部のみ 1/2残存	3土	削り出し高台 高台底部に工具痕有り
4	土師器 坏	一括	口径 底径 残高	(12.0) (5.0) (3.7)	成形　底部静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	1/5　残存	3土	
5	土師器 坏	一括	口径 残高	(11.6) (3.1)	整形　ナデ調整 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ2～1.0mm の褐色粒少々入る 色調:2.5YR4/6赤褐 焼成:良好	1/4　残存 底部欠損	3土	
6	土師器 坏	一括	口径 底径 残高	(12.9) (5.0) (4.7)	成形　底部静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/6赤褐 焼成:良好	1/3　残存	3土	復元だがゆがみがひどい。 口縁に工具痕有り 他より厚い

11号土坑

	器種・種類	位置・層位	法量(cm・g)		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏		口径 底径 器高	(12.3) 4.5 4.2	成形　底部回転糸切り後に不整方向のケズリ 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/3にぶい赤褐 焼成:やや不良	2/3	13土	調整不足の凹凸目立つ

d　溝状遺構（第66～71図）

1号溝状遺構：調査区のほぼ中央部を，北北東から南南西に縦断している。肩部の幅は最大で1.8m程，最小で0.8m程である。底部は丸底を呈し，北端からしばらくは0.3m程の幅で，中程で0.7m程となり，15号掘立柱建物跡付近で再び0.3m程に狭まっている。掘削深度は，北端から南端までほぼ同程度の深さを保っており，旧地形に際だった凹凸などがなかったと推測できるが，調査前現況においてその存在を認知できる地形は残っていなかった。

8・12号住居跡と15・16号土坑，12・15・20号掘立柱建物跡よりも新しい遺構である。第20図の8号住居跡セクション図にもあるとおり，層位的に際だった特徴はみられない。しかし，所々覆土中に硬化面が観察され，人間の往来を想定できる道のような用途が考えられる。遺物は縄文時代から平安時代までの遺物が出土しているが，底面上でまとまった出土はなかった。20号掘立柱建物跡付近で瓦塔・瓦堂・灯明皿などの多くの仏教関連遺物が覆土中に包含されていたが，掘立柱建物跡の柱穴が埋没後，ある程度の時の経過（掘立柱建物跡が存在していたという記憶がない程の期間）が存在した後に溝状遺構が掘削され，周囲にその掘削廃土が残存し，溝状遺構が風化して行く過程において覆土中に紛れたものと予想される。以上のような傾向からは具体的な時期比定はできないが，平安時代以降につくられた遺構である可能性が高い。

2号溝状遺構：調査区の西側に途中で曲がりつつ縦断している。肩部の幅は最大で1m程だが，0.8m前後の規模を保ったまま南端まで続く。南端近くは大規模な攪乱を受けており，正確な掘削深度は不明だが，北端よりも深度は浅いようである。底部は角丸逆台形状の部分が多いが丸底の部分もある。

この遺構も7～11・16・17号掘立柱建物跡よりも新しい遺構であり，まとまった遺物はないが1号溝状遺構とよく似た遺物の出土傾向が伺えた。1号溝状遺構よりも掘方は浅いが，硬化面が多くあったことから道としての機能を有していたものと推定される。1・2号掘立柱建物跡やその他の遺構と直接的な関係を見出すことはできないが，調査区に西隣する現道と並行していることから旧道の可能

性も考えらる。中世以降の遺構と考えられ，1号溝状遺構との関係から中世でも古い時期の所産である可能性もあろう。

３号溝状遺構：調査区南側に東西方向にやや弧を描くように横断している。肩部幅は１m前後を保ち，掘方は浅く，覆土が薄く硬化面が顕著である。４・５号溝状遺構と並行している。

４号住居跡，12・13号土坑，15・19号掘立柱建物跡よりも新しい遺構である。特に15号掘立柱建物跡の北東角の柱穴上で固く踏み締めた硬化面を形成しており，この遺構よりも新しい遺構であることがわかる。

４号溝状遺構：３号溝状遺構の南側に並行している。肩部幅は，西端からしばらくは１m前後を保つが，4号住居跡西側あたりから1.7m前後まで広がる。掘削深度も西端では0.6m程あったものが，しだいに浅くなり，14号土坑手前になると0.15m程となる。底面付近に硬化面があり，断面形状は西端でＶ字に近くしだいに浅丸状になる。１号溝状遺構・14号土坑よりも西側で終息するようである。３号溝状遺構のように15号掘立柱建物跡の柱穴上に硬化面を形成することもなく終息していることから，１号溝状遺構または掘立柱建物跡を意識した遺構の可能性もあろう。覆土中に硬化面が確認できることから道として利用されていたと考えられる。

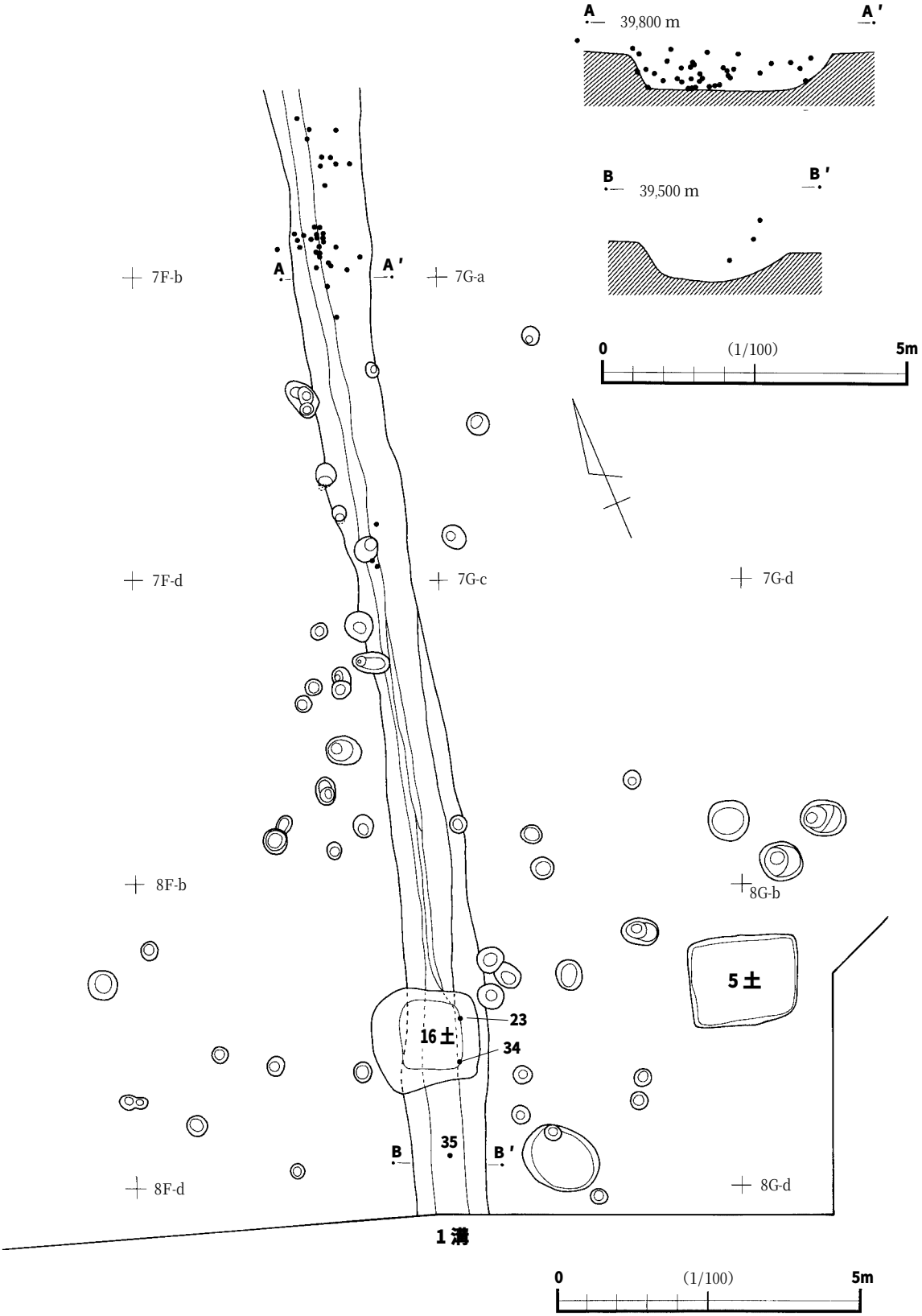
５号溝状遺構：溝状ではあるが，中に土坑列が穿たれており，道のような用途はないと思われる。溝状の凹みとしての幅は，1m前後で土坑の上端に左右される場合もあるが，平均的に1.2m程である。西から１～28までの土坑が検出され，4号住居跡内の土坑は住居跡覆土中であったため認識できずに掘削してしまった。４号住居跡内の削平した土坑は２基と推定され，総計では30基の土坑列であったと考えられる。３～５号溝状遺構は，全て調査区の西側に続いていることが確認できるが，現地形では凹凸などは視認できない。

第56図-37の「佛佛」の墨書土器（須恵器杯）は，住居跡内の土坑に包含されていたものと予想されるが，住居跡覆土除去中に一括土器として取り上げてしまったものである。細片でなく残存具合もよいことから，土坑埋没時に廃棄された遺物であると考えられる。この土器は８世紀中頃に比定され，他に包含される遺物に新しいものが含まれないことから，この遺構の廃絶時期が８世紀後半頃と予測できる。14号土坑は形状的，覆土の状況が５号溝状遺構内土坑とよく似ていることから溝状遺構に伴う土坑であったと考えられる。

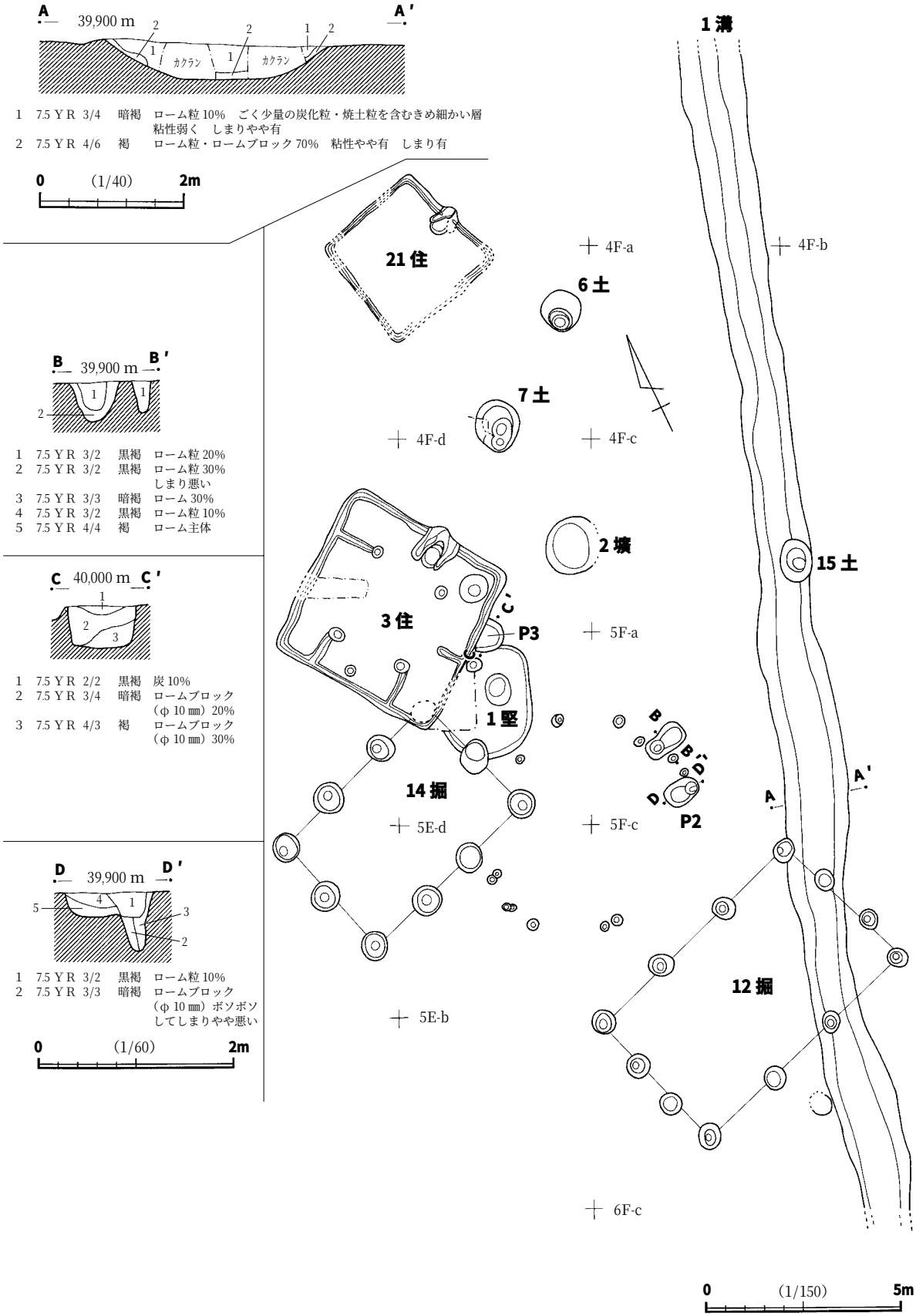
この土坑列は，20号掘立柱建物跡の手前で収束するが，確認調査時に溝内土坑28を破壊してしまっていたため，20号掘立柱建物跡の柱穴との切り合い関係を押さえることはできなかった。このことから掘立柱建物跡を意識して掘削を停止させた可能性も否定できない。４号溝状遺構が14号土坑手前で終息していることもこれを追認しているともいえる。これらの状況から４・５号溝状遺構は奈良時代の所産で，15号掘立柱建物跡とも有機的に係わる遺構であった可能性も考えられる。

６号溝状遺構：調査区の北辺に位置する。遺構の半分が調査区域外なので幅などは不明である。

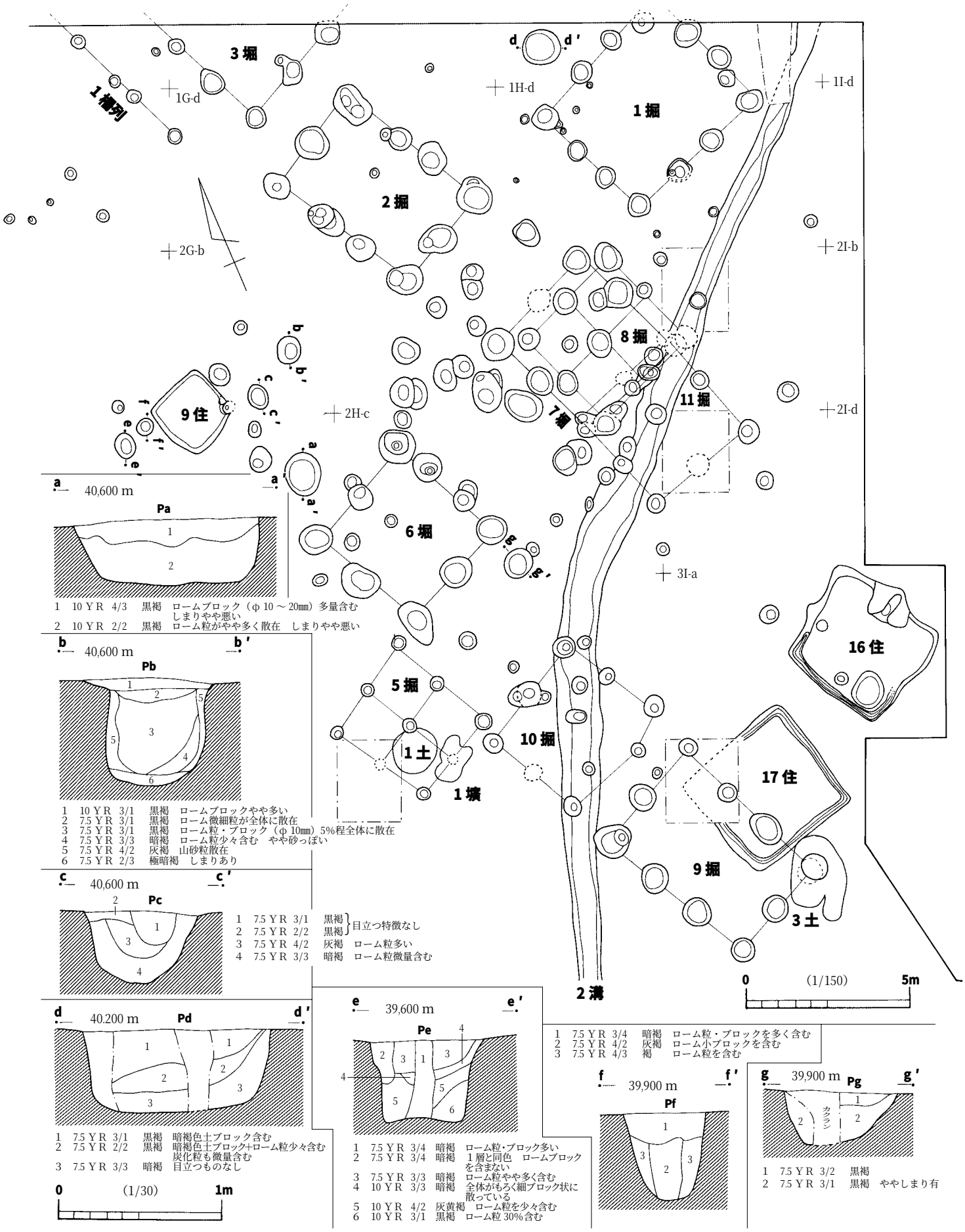
現況で農道がこの遺構に併走しており，この農道の旧道であった可能性が高い。覆土は，比較的しまりもあり新しい埋土とは考えにくく，出土遺物も古代以前のもので構成されることから，古くからの道であった可能性が高い。



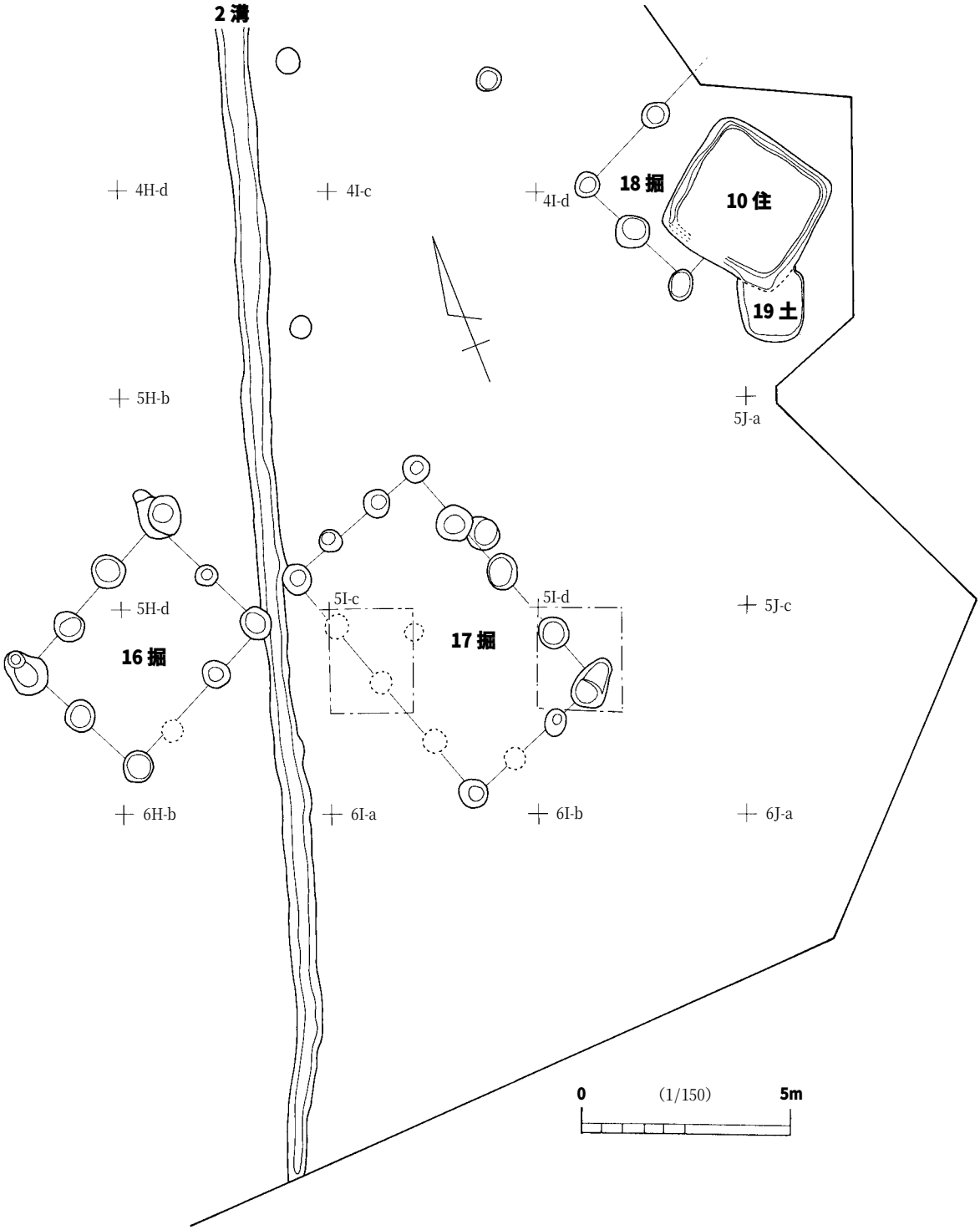
第66図　1号溝状遺構及び周辺遺構群（1）



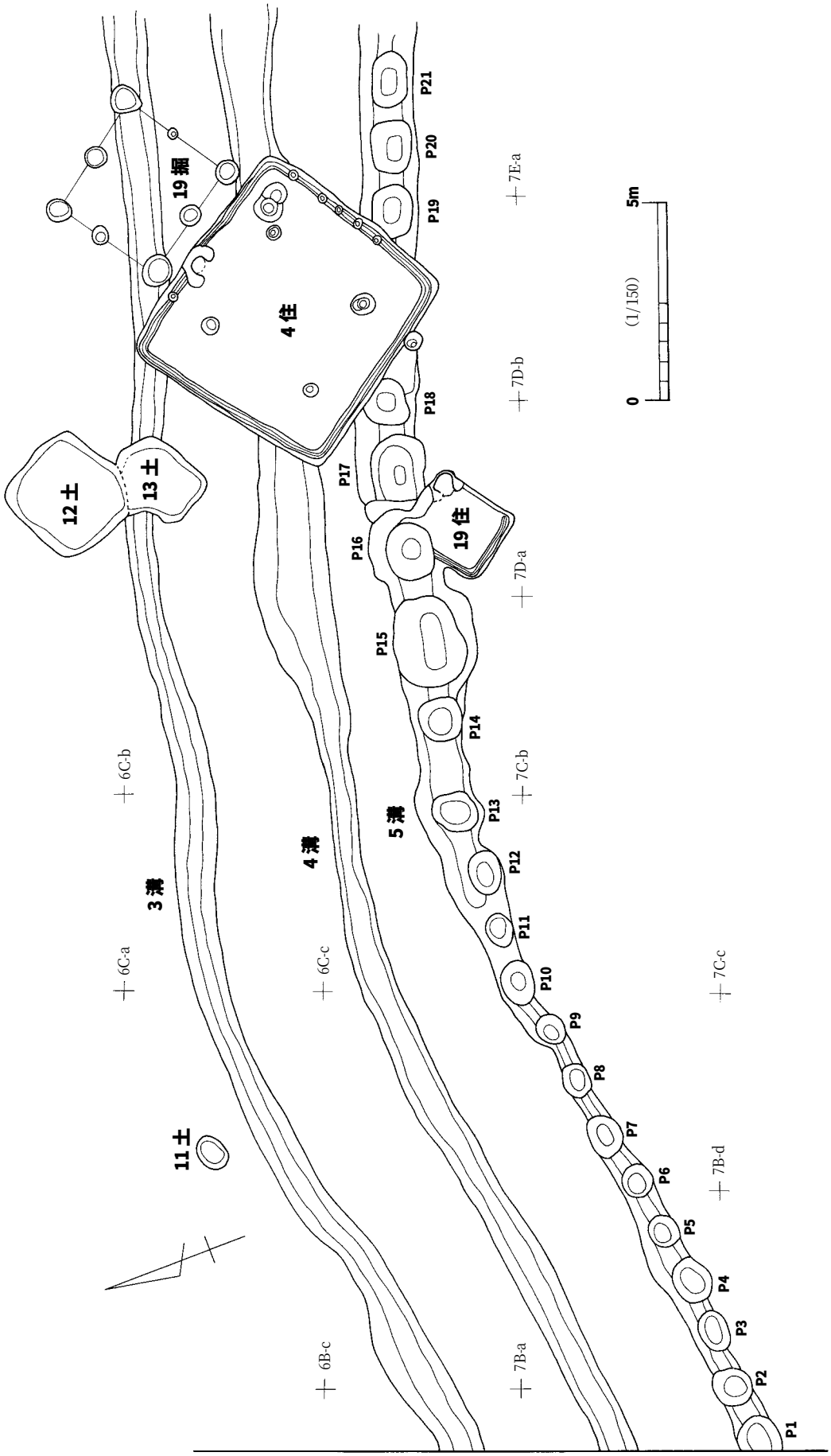
第 67 図　1 号溝状遺構及び周辺遺構群（2）



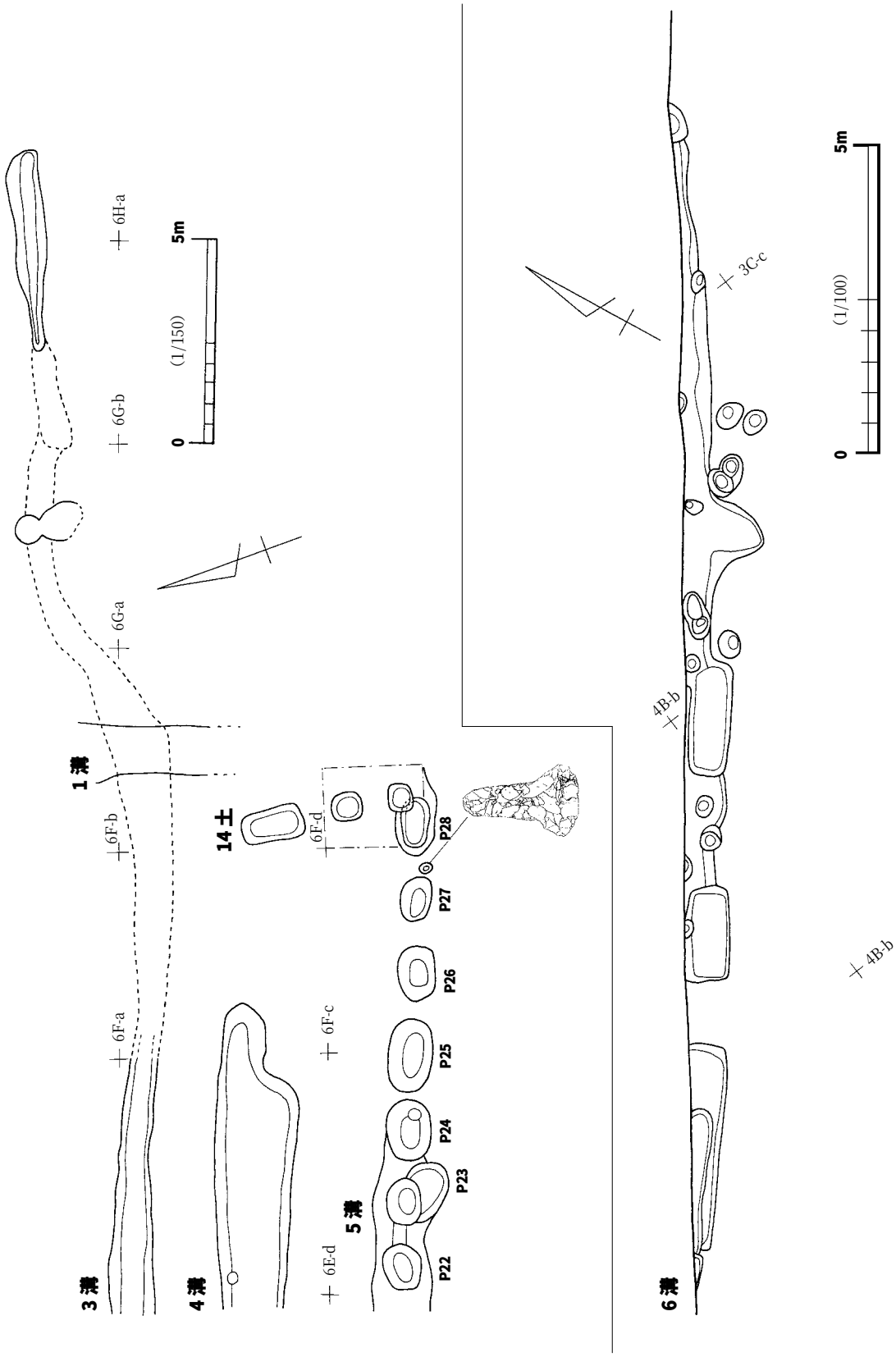
第68図　2号溝状遺構及び周辺遺構群（1）



第 69 図　２号溝状遺構及び周辺遺構群（2）



第 70 図　3～5 号溝状遺構及び周辺遺構群（1）



第71図　3～5号溝状遺構及び周辺遺構群（2）・6号溝状遺構

e　柱穴・柱穴群（第66～68図）

柱穴：第67・68図に土層図が掲載されているものが該当する。第67図のＢ～Ｄの土層図のある柱穴から遺物は出土しなかった。周辺の柱穴群・１号竪穴状遺構・２号土壙などとよく似た覆土であったことから縄文時代の柱穴である可能性も考えられる。第68図の柱穴ａ～ｇは，形状や覆土の状況から掘立柱建物跡などの建物に伴う柱穴であったと考えられる。しかし，周囲の攪乱の影響もあり，対応する柱穴を認識できなかったことから単独の遺構として扱うこととなった。遺物は細片しか出土せず，古代の範疇に含まれるものばかりであった。攪乱の影響もあり遺物が柱穴に付随するものなのかの確証はなく，細片だったので図も掲載していない。

柱穴群：第66図の１号溝状遺構周辺に拡散する柱穴群は，規模的に小規模なものが多い。第13図の阿玉台式期の遺物分布傾向や周囲に古墳時代以降の遺構・遺物量もないことから，縄文時代の遺構に伴う柱穴群であったとも考えられる。第67図の円を描くような柱穴群は，縄文時代の竪穴住居跡壁柱穴にも見間違うが，柱穴からの出土遺物や炉などの住居跡に付随する施設が全く検出されなかったことから時期が不明の柱穴群であるといえる。しかし，小規模な穴で，阿玉台式期の遺構や遺物が周囲から多く発見されていることから，縄文時代の遺構と考えるのが妥当であろう。

f 貝充填柱穴（第72図）

この遺構は，貝が柱穴中に充填されている遺構である。周囲に掘立柱建物跡や貝層を伴う縄文時代の住居跡といった柱穴を有する遺構がなく，単独で検出されるのが特徴である。

本遺跡では３基の柱穴が近接せずに異なった地点で検出されている。貝は，柱穴一坏に充填されて出土しており，貝を充填するために掘った穴といった印象を受ける。

貝充填柱穴１：この柱穴は，径34㎝程，深さ30㎝の規模であった。確認調査時に確認され，瓦塔片と土師器細片が柱穴覆土中から一緒に出土した。瓦塔は一覧表須恵質瓦塔の№１（３Ｅ-ｃ）が相当する。実測図は掲載していないが，20号掘立柱建物跡周辺で集中的に出土した瓦塔片と同じ個体と考えられる。この遺構周辺で瓦塔の出土はないことから，貝を充填するときに偶然入ったとするよりも意図的に混ぜたと考えた方が妥当と思われる。ただし，共伴した土師器は細片であり，特殊性の臭う破片でないものを意図的に混ぜるといった理由も理解しがたいものもある。その場合は柱穴掘削時に周囲に散乱していた破片が偶然混入したとも考えられる。いずれにしてもこの柱穴が８世紀後半以降に形成された遺構であることは間違いない。また，第27表の貝組成一覧にもあるオオタニシとイシガイ科（マツカサガイ？）といった淡水性の貝は，縄文時代の貝組成としては一般的ではないこともあり，この点からも新しい時代の遺構とするのが妥当であろう。また，ハマグリは小型のものも含み大きさにばらつきがみられ，縄文時代のものに比べかなり大型のものもあるようである。シオフキも全般にやや大きめのものが多かった。

貝充填柱穴２：この柱穴は４Ｅ-ａ区・３号住居跡の北辺を切り込むように検出された。径と深さ共に30㎝ 程の規模であった。貝は検出時は完掘後の柱穴径より広い範囲に拡散していた。柱穴の掘方上部は広口だったのでであろうか。貝組成はイボキサゴ・ウミニナ・シオフキ・カガミガイ・ハマグリで構成されていた。貝充填柱穴１とは直線で７ｍ程離れており３Ｅ-ｄ区でも遺構は検出されなかったが貝ブロックが出土したことから，これら全て同じグループの遺構として捉えられるかもしれない。

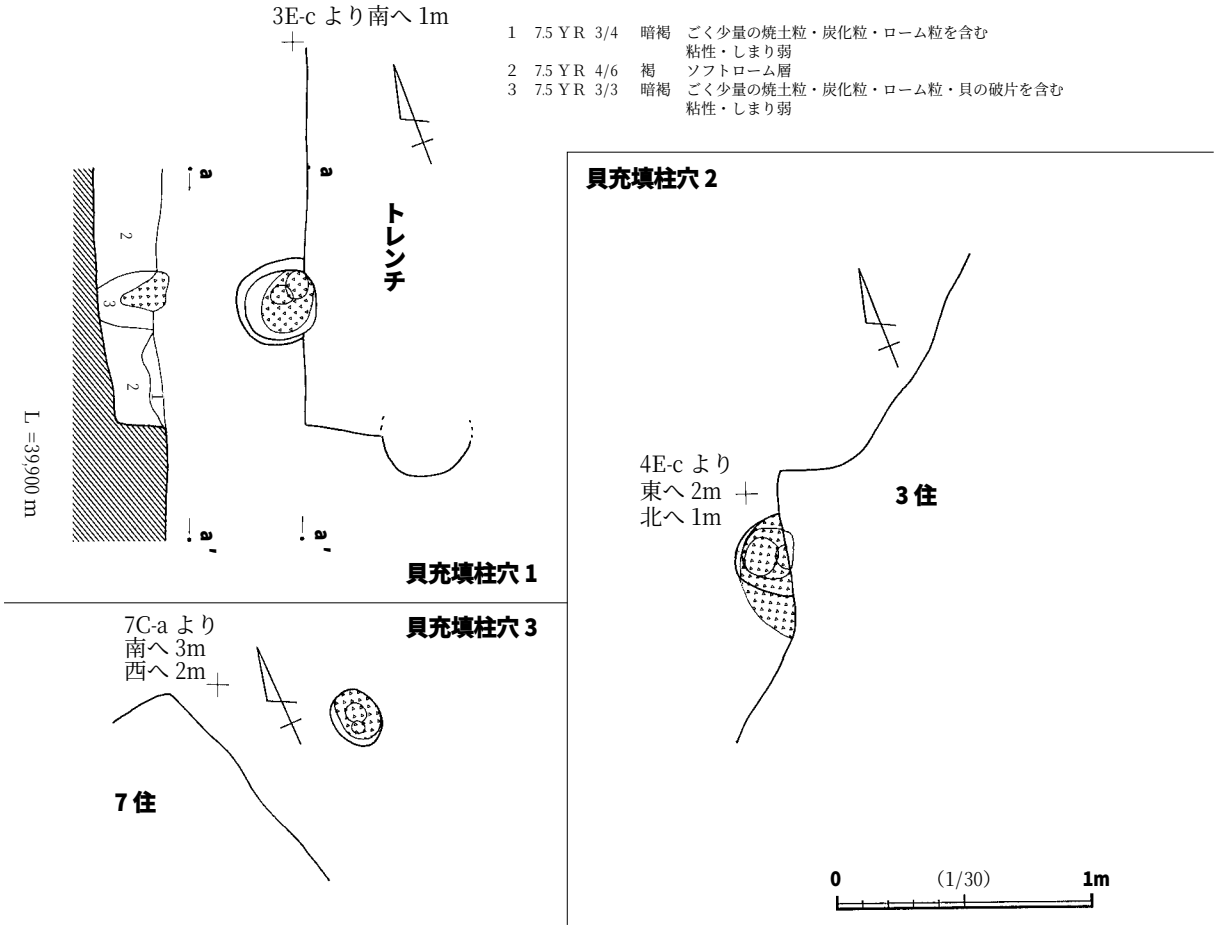
貝充填柱穴３：この柱穴は，７B- ａ区・７号住居跡の北東角近くで検出された。径20㎝前後，深さ15㎝ほどの規模であった。貝組成は，イボキサゴ・ハマグリで構成されていた。周囲に同様の遺構はなく単独であった。

これら全てに時期比定できる遺物が出土したわけではないが，状況から貝充填柱穴１と同時期の所産と考えた方が無難であろう。

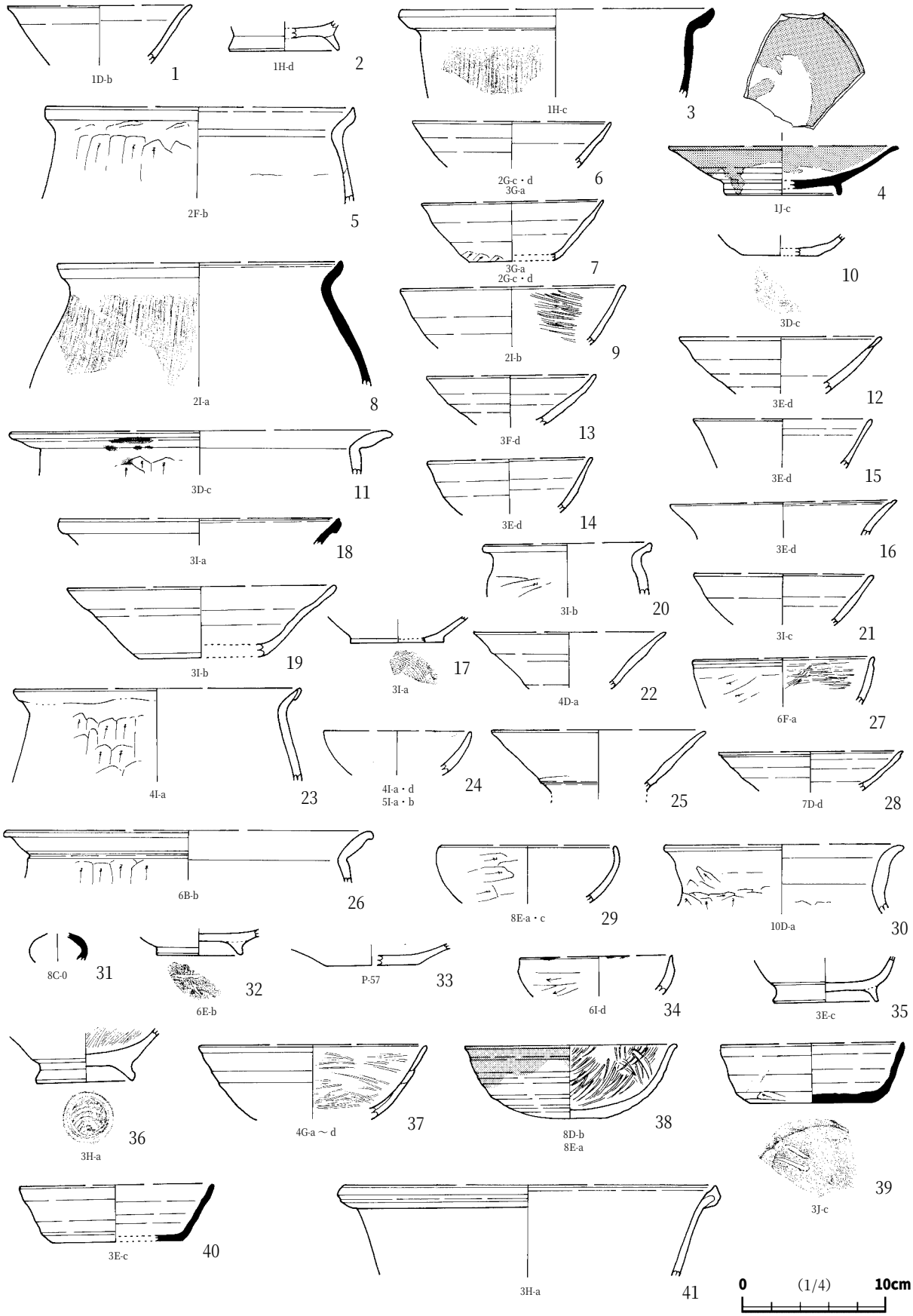
第27表　出土貝類組成一覧

遺構名	地区名	イボキサゴ	オオタニシ	ウミニナ	イシガイ科		シオフキ		マテガイ		カガミガイ		ハマグリ		備考
					右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
貝充填柱穴１	3E-c	破片	10		89	72	13	10		1			3	2	
貝充填柱穴１	3E-c	38					13	8			3		5	4	確認調査時
	3E- d	18						2				1	3	1	確認調査時
貝充填柱穴２	4E-a	74		1			2	5			5	3		1	ヤマトシジミ？１
貝充填柱穴３	7B-b	22											2	3	
	8B-b													1	
合　　計		152	10	1	89	72	28	25	0	1	8	4	13	12	

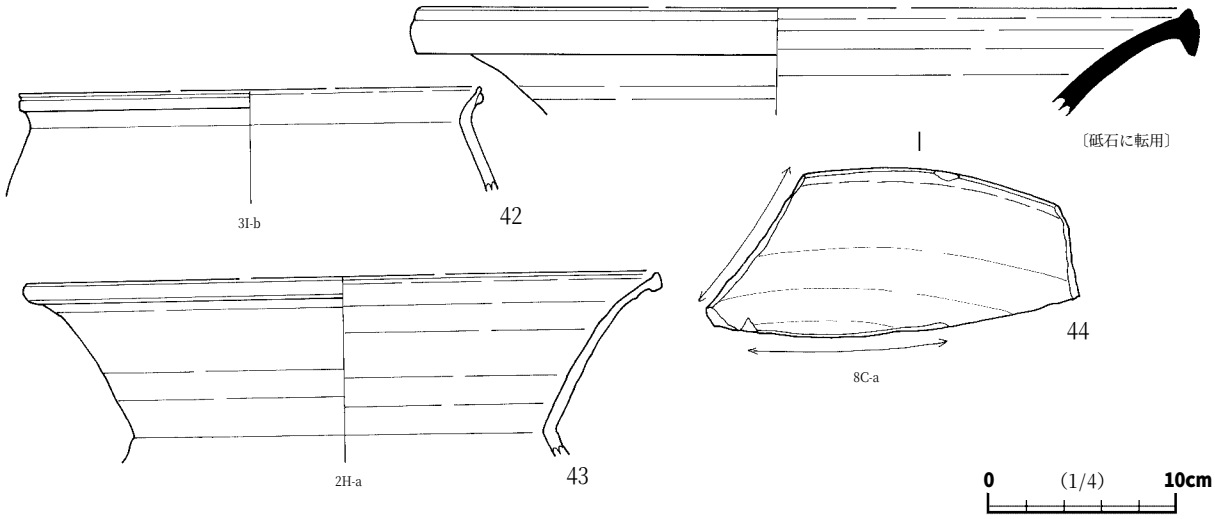
※ハマグリ　殻長　小形（35～40mm）から大形（60～70mm）まで混在
※シオフキ　殻長　34～53mm　平均46.25mm（貝埋填柱の確認調査時分）



第72図　貝充填柱穴


1D-b 1
1H-d 2
1H-c 3
1J-c 4
2F-b 5
2G-c・d 3G-a 6
3G-a 2G-c・d 7
3D-c 10
2I-a 8
2I-b 9
3E-d 12
3D-c 11
3F-d 13
3E-d 15
3E-d 14
3E-d 16
3I-a 18
3I-b 20
3I-c 21
3I-b 19
3I-a 17
4D-a 22
6F-a 27
4I-a 23
4I-a・d 5I-a・b 24
25
7D-d 28
6B-b 26
8E-a・c 29
10D-a 30
8C-0 31
6E-b 32
P-57 33
6I-d 34
3E-c 35
3H-a 36
4G-a～d 37
8D-b 8E-a 38
3J-c 39
3E-c 40
3H-a 41
0 (1/4) 10cm

第73図　遺構外遺物（1）



第74図　遺構外遺物（2）

5　遺構外出土遺物（第73・74図　第28表）

これらは，精査段階で地区一括遺物として取り上げた遺物である。

縄文時代を除き，古墳時代以降の遺物で際だって古いものはなく，8世紀後半から10世紀の遺物が主体であることがわかる。古墳時代後期の遺物は，攪乱によって住居跡周辺しか拡散しておらず，調査区全体の傾向としては片寄る傾向があったことから29を除いて掲載しなかった。

須恵器は，3・８・18・31・39・40・44が相当する。３・８は叩き甕であるが，胎土の質感は土師器に近い。18も土師器にのような質感だが，41や43のような燻べ系の雰囲気が強い。31は小壺の胴部とと考えられる。断面の質感は須恵器そのものだが，小壺の割に外面の調整が精緻なナデを施しており，薄く釉がかかり光沢感がある。21号住居跡の５の須恵器小壺（第35図21住-5）とよく似ている。39は，８世紀代後半に比定できる口縁が直線的に立ち上がる箱形の杯で，火襷の痕跡が顕著である。底部はヘラケズリ（静止か回転かは不明）後に調整をナデ消し，「二」字状の線刻を行っている。線刻方向と順序は，漢字の「二」とは逆遣いで，短辺を右から左に切り，返しで長辺をまた右から左へと抜けている。換言するとアラビア数字の「11」を書く筆順と同じである。40も箱形の杯で39と形状的に良く似るが，胎土の質感が土師器に近い。底部付近まで回転ナデ調整を施し，底部は回転ヘラケズリのままである。時期的には８世紀後半である。44は大甕の口縁部だが，破片端部を砥石として再利用している。口縁部の形状から古墳時代後期の甕のように思われるが，出土位置は，同期の遺構とはかけ離れていることから後世の破片再利用であると思われる。

灰釉陶器は，4の高台付皿のみである。灰釉は内面で約1/2，外面で1/３程付着し，高台を持って刷毛塗りした感が伺える。高台は後付高台で，底部を回転ヘラケズリしている。これらの状況から猿投窯編年のⅤ期第２小期・黒笹90号窯式期のものと推定される。灰釉は劣化が激しく刷毛塗りであると断定できない可能性もあり，次期の折戸53号窯式にも似る点もある。本遺跡出土の灰釉陶器は，遺構出土分も合わせても10点程度で，図示できたのは12住の９・10（第32図），19住の５（第34図），20住の13（第34図）しかなく，12住の10の皿も黒笹90号窯式と思われ，9世紀後半のものが多い。

土師器は，無高台坏（１・６・７・10・12～15・19・21・28）・高台付坏（２・22・25・32・35・

第28表　遺構外遺物一覧

	器種・種類	調査区	法量（cm・g）		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	1D-b	口径 残高	(13.0) (4.2)	調整(外面):回転ナデ　口縁部と体部の差は不明瞭 調整(内面):回転ナデ　口縁部と体部の差は不明瞭 内面に黒斑がある。	胎土:石英が目立つ。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好	口縁部 1/5残存	1I-d	内面に斑文あり。
2	土師器 台付坏	1H-d	底径 基部径 高台高 残高	(7.8) (7.0) 1.2 (2.1)	成形:体部と高台部は別成形後に接合 整形:高台部内体部底面は高台貼り付け後回転ヘラケズリを未調整 調整(外面):回転ナデ　ヘラの痕跡残存 調整(内面):回転ナデ　ヘラの痕跡残存 高台部は内外面ともナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:2.5YR5/6明赤褐色 焼成:良好	高台部・底部1/4残存	1H-d	
3	須恵器 甕	1I-c	口径 残高	(22.0) (6.3)	成形:口縁端部は折り返し成形 調整(外面):口縁部・頸部ヨコナデ　胴部縦方向タタキ 調整(内面):ナデ　宛て具か指頭圧痕による凹みが一部にあり	胎土:石英・角閃石が目立つ。白色粒少々入る。 色調:7.5YR6/4にぶい橙色 焼成:不良(須恵器にしては)	口縁部 1/8残存	1I-c	外面に斑文あり。
4	灰釉陶器 台付皿	1J-c (確認調査)	口径 底径 基部径 高台高 器高	(16.2) (8.4) (8.2) 0.8 3.4	灰釉は内面は約1/2,外面は1/3程度付着。　高台部を持ち、刷毛塗り。内面と外面の釉の付着端は、器形を水平にしてほぼ同じ高さ。 調整(外面):回転ヘラケズリの後に回転ナデ 調整(内面):回転ナデ　丁寧に荒目を潰している。 高台は後付高台	胎土:φ0.3～0.1cmの白色粒が全体に散在するが、目立つほどではない。 色調:2.5Y7.2灰黄色 焼成:良好・堅緻 灰釉は劣化が激しく、不明瞭な部分もある。	1/4　残存	1J-c (ｶｸﾆﾝ)	黒笹90～折戸53
5	土師器 甕	2F-b	口径 残高	(21.7) (6.7)	成形:口縁端部は上方に積み上げるようにおさめる。また、内側に粘土紐端を内側に折り返している 調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部縦位のケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし。 色調:2.5YR4/6赤褐色 焼成:良好	口縁部 1/4残存	2F-b	内面に斑文あり。
6	土師器 坏	2G-c・d 3G-a	口径 残高	(14.0) (3.3)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:褐色粒が多く入る。 色調:2.5YR5/6明赤褐色 焼成:良好	口縁部 1/8残存	2G-c・d 3G-a	褐色粒はスコリアか？
7	土師器 坏	2G-c・d 3G-a	口径 底径 器高	(12.4) (6.2) 4.2	調整(外面):口縁部から体部下端まで回転ナデ　下端はケズリ　底部は回転糸切り 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色粒微量はいる。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好	口縁部 1/5残存	2G-c・d 3G-a	
8	須恵器 甕	2I-a (確認調査)	口径 残高	(20.0) (8.8)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部縦位のタタキ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部ナデ、一部に指頭圧痕	胎土:目立つ混入物なし。 色調:断面は明褐色　[表面]10YR3/1黒褐色 焼成:良好 クスベ処理	口縁部 1/5残存	2I-aｶｸﾆﾝ	
9	土師器 坏	2I-b	口径 残高	(16.0) (4.3)	調整(外面):回転ナデ　口縁部と体部の差はない 調整(内面):細かい横位のミガキ	胎土:白色粒が入る。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好 彩色:内面黒色処理　7.5YR3/1黒褐色 内面を黒色処理している。また、処理時に何かを塗布している様子。(漆?)	口縁部 1/8残存	2I-b	内黒 外面斑文あり
10	カワラケ？	3D-c	底径 残高	(5.6) (1.6)	成形:底部回転糸切り痕 調整(外面):体部ナデ　底部回転糸切り 調整(内面):ナデ	胎土:φ0.2～0.3cmの褐色粒入る。 色調:7.5YR6/3にぶい褐色 焼成:良好(やや軟質の感がある。)	底部　1/3 残存	3D-c	褐色粒はスコリアか？
11	土師器 甕	3D-c	口径 残高	(27.0) (3.1)	調整(外面):口縁部ヨコナデ　体部縦位のケズリ 調整(内面):口縁部ヨコナデ　体部ナデ 口縁部は外傾が強い。 外面に焼土化した山砂が付着。	胎土:目立つ混入物なし。 色調:5YR6/6橙色 焼成:良好	口縁部 1/6残存	3D-c	
12	土師器 坏	3E-d	口径 残高	(14.3) (4.0)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ 口縁部が体部よりも薄く仕上げられ、外面が弱く外反するような雰囲気を持つ。	胎土:φ0.1～0.3cmの褐色粒入る。 色調:2.5YR4/6赤褐色 焼成:良好 外面は丁寧に仕上げられており、彩色ではないが何か塗布されている感がある。	1/4残存	3E-c	褐色粒はスコリアか？
13	土師器 坏	3E-d	口径 残高	(12.0) (3.4)	調整(外面):回転ナデ　口縁部と体部の差はない 調整(内面):回転ナデ 器厚が厚く感じる。	胎土:目立つ混入物なし。 色調:2.5YR4/6赤褐色 焼成:良好 外面は丁寧に仕上げられており、彩色ではないが何か塗布されている感がある。	1/6残存	3E-d	
14	土師器 坏	3E-d	口径 残高	(11.7) (3.9)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ 口縁部が体部よりも薄く仕上げられ、外面が弱く外反するような雰囲気を持つ。	胎土:目立つ混入物なし。 色調:5YR5/4にぶい赤褐色 焼成:良好 内外面とも丁寧に仕上げられており、彩色ではないが何か塗布されている感がある。	口縁部 1/5残存	3E-d	内面に斑文あり。
15	土師器 坏	3E-d	口径 残高	(12.6) (3.4)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ 口縁部は弱く外反する。やや内外面共に表面の劣化が強い。	胎土:φ0.2cmの褐色粒入る。 色調:5YR5/6明赤褐色 焼成:やや不良	口縁部 1/6残存	3E-d	内面が少し劣化している。
16	土師器 甕	3E-d	口径 残高	(16.0) (2.5)	整形　口縁内側に沈線 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:白色粒入る 色調:7.5YR6/4にぶい橙 焼成:良好	口縁部 1/5残存	3E-d	
17	土師器 坏	3I-a	底径 残高	(6.4) (1.8)	成形　底部回転糸切り 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:良好	底部の1/5 残存	3I-a	
18	須恵器 甕	3I-a	口径 残高	(19.8) (1.8)	整形　口縁貼り付け 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ 調整(内面)	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR4/1褐灰 焼成:良好	口縁部 1/8残存	3I-a	くすべ？
19	土師器 坏	3I-b	口径 底径 器高	(19.0) (8.4) 5.0	整形　水引き？ 調整(外面):回転ナデ　下端ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5YR5/6明赤褐 焼成:良好	1/5　残存	3I-b	15住遺物か？
20	土師器 甕	3I-b	口径 残高	(11.6) (3.8)	調整(外面):回転ナデ　肩部横ケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:良好	口縁部 1/10残存	9・10住付近 3I-b	

	器種・種類	調査区	法量（cm・g）		手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
21	土師器 坏	3I-c	口径 残高	(12.6) (3.5)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:やや不良	1/8　残存	3I-c	16住遺物か？
22	土師器 坏	4D-a	口径 残高	(13.6) (4.1)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/6明赤褐 焼成:良好	1/6　残存	4D-a	
23	土師器 甕	4I-a	口径 残高	(20.4) (6.6)	整形　口縁折り返し 調整(外面):口縁回転ナデ　体部縦のヘラケズリ 調整(内面):口縁回転ナデ	胎土:スコリアφ1mm少し入る 色調:10YR6/3にぶい黄橙 焼成:良好	口縁部 1/8残存	4I-a	
24	土師器 灯明皿	4I-a～d 5I-a・b	口径 残高	(12.0) (3.3)	調整(外面):ナデ後ヘラケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:やや不良	口縁部 1/10残存	4I-a～d 5I-a・b	内外面に油煙付着
25	土師器 台付坏	6B-b	口径 基部径 残高	(15.2) (7.8) (4.3)	整形　基部直上に隆線1条 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:スコリア少し入る 色調:5YR4/6赤褐 焼成:良好	1/5　残存	6B-b	高台部欠損
26	土師器 甕	6B-b	口径 残高	(26.0) (3.6)	調整(外面):回転ナデ　体部縦のヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:2.5YR5/6明赤褐 焼成:良好	口縁部 1/6残存	6B-b	
27	土師器 坏 （灯明皿？）	6F-a	口径 残高	(11.8) (3.3)	調整(外面):口縁回転ナデ　体部横・斜のヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ後ミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6にぶい橙 焼成:良好	口縁部 1/4残存	6F-a	
28	土師器 坏	7D-d	口径 残高	(13.0) (2.8)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR5/3にぶい黄褐 焼成:やや不良	口縁部 1/6残存	7D-d	
29	土師器 坏	8E-a・c	口径 残高	(12.3) (4.0)	調整(外面):口縁ナデ　体部ヘラケズリ後ナデ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10R4/4赤褐 焼成:良好 彩色:内外赤彩	1/10　残存	8E-a・c	古墳後期古手
30	土師器 甕	10D-a	口径 残高	(17.0) (4.9)	調整(外面):口縁横ナデ　体部へかけて横・斜・縦のケズリ 調整(内面):口縁横ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4赤褐 焼成:良好	口縁部 1/5残存	10D-a	
31	須恵器 水滴	表採(8C)	最大径 残高	(4.2) (2.4)	調整(外面):ケズリ後丁寧なナデ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:N4/0灰 焼成:良好	体部1/3 残存	表採	
32	土師器 台付坏	6E-b	底径 基部径 高台高 残高	(6.9) (7.0) 0.6 (1.9)	調整(外面):ナデ 調整(内面):劣化激しく不明	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR6/6橙 焼成:不良	底部 1/4のみ残存	6E-b	底部に刻書
33	土師器 坏	P-57	底径 残高	(6.6) (1.5)	成形　底部回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端回転ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/4にぶい赤褐 焼成:良好	底部1/4 残存	P57	内面油煙付着線刻有り 内外面斑文有り
34	土師器 灯明皿	6I-d	口径 残高	(11.2) (2.8)	調整(外面):口縁ナデ　体部ケズリ 調整(内面):ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR6/3にぶい黄褐 焼成:良好	底部1/4 残存	6I-d	上段型坏 口縁部に油煙
35	土師器 台付坏	3E-c	底径 基部径 高台高 残高	(7.4) (7.2) 1.2 (3.2)	成形　底部回転ヘラケズリ 整形　付け高台 調整(外面):体部,台部ナデ 調整(内面):ミガキ又は丁寧なナデ	胎土:小石少々入る 色調:5YR6/6橙 焼成:やや不良	底部2/5 残存	3E-c	内面劣化激しく剥離
36	土師器 台付坏	3H-a	底径 基部径 高台高 残高	6.6 6.4 1.4 (3.8)	成形　底部回転糸切り 整形　付け高台後にナデ 調整(外面):ナデ 調整(内面):ミガキ(右回転)	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR5/3にぶい赤褐 焼成:良好 彩色:内黒　10YR2/1黒	底部のみ	3H-a	
37	土師器 坏	4G-a～d	口径 残高	(16.0) (5.2)	成形　薄い 整形　体部に2条の凹線 調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ後ヘラミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:5YR7/6橙 焼成:良好	1/5　残存	4Ga～d	他の土器とは色調的にきわ立って異なる。 非在地
38	土師器	8C-d-1	口径 底径 器高	15.0 4.0 5.2	整形　平底だが底部は小さい 調整(外面):回転ナデ　底部回転ケズリ 調整(内面):回転ナデ後ヘラミガキ	胎土:目立つ混入物なし 色調:(外)7.5YR5/2灰褐 焼成:良好 彩色:内側全体～外口縁部に黒色処理　7.5YR1.7/1黒	2/3　残存	8C-d-1	
39	須恵器 杯	3J-c	口径 底径 器高	(12.8) (8.4) 4.2	成形　底部静止ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR6/2灰黄褐 焼成:良好	1/3　残存	3J-c	火襷き痕後 底部に線刻 永田不入？ （確認調査）
40	須恵器 杯	3E-c	口径 底径 器高	(13.5) (9.6) 4.0	成形　回転ヘラケズリ 調整(外面):回転ナデ　下端ヘラケズリ 調整(内面):回転ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:10YR5/3にぶい黄褐 焼成:須恵にしては不良	1/5　残存	3E-c	外面黒っぽく質感は土師 内側は斑文

	器種・種類	調査区	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
41	土師器 長頸壺	3H-a	口径 (26.2) 残高 (6.4)	整形　口縁外へ折り返し 調整(外面):横ナデ 調整(内面):横ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR3/1黒褐 焼成:やや不良	口 縁 部1/5 残存	3H-a	内側劣化激しい くすべ
42	土師器 甕	3I-b	口径 (24.4) 残高 (5.5)	調整(外面):口縁横ナデ　体部縦ケズリ 調整(内面):口縁横ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:7.5YR5/4にぶい褐 焼成:良好	口縁のみ 1/6残存	3I	
43	土師器 長頸壺	3H-a	口径 (33.6) 頸部径 (22.4) 残高 (9.6)	調整(外面):横ナデ 調整(内面):横ナデ	胎土:目立つ混入物なし 色調:(外)7.5YR4/1褐灰　(内)7.5YR5/1褐灰 焼成:良好	口縁のみ 1/6残存	P-E	くすべ
44	須恵器 甕	8C-a	口径 (44.4) 残高 (5.7)	調整(外面):回転ナデ 調整(内面):回転ナデ	胎土:φ8mm の小石含む。混和材少ない。 色調:2.5Y5/1黄灰 焼成:良好　堅緻	口縁のみ 1/6残存	8C-a (16住？)	破損部を砥石として再利用

36)・碗（碗型坏？ 9・37・38)・灯明皿（24・27・33・34)・甕（5・11・17・20・23・26・30・41～43）がある。無高台坏は，15の通称ロクロ土師器以外は，みな10世紀代のものである。高台付坏は，32がケズリ出しの高台で，2・35と36は貼付の高台である。35は剥離がひどく調整が不明瞭だが，内面にヨコミガキをし，外面は回転ナデ調整を行っている。胎土的に在地のものではない。36は内面が所謂「内黒」化しており放射状に細かいミガキが施されている。碗の9と38も「内黒」である。9は未分析だが漆塗りの可能性が高い。38は吸炭で口縁部外面まで黒色化し，内面は丁寧に磨かれている。灯明皿は，無高台坏の転用品（33）も含まれるが，明瞭な油煙が着くものは灯明皿とした。灯明皿は破片のものが多いが，おおむね径は10cm 前後と思われる。また，27と34は口縁端部をヨコナデするが，体部外面を不定方向の細かいケズリを施しており，普通の坏の調整とは趣を異にするので判別がたやすい遺物である。これらは，第56図-25の灯明皿と，調整技法・色調・胎土の含有物などの点で極めて近似しており，在地産の土器ではないことがわかる。因みに，27は６Ｆ-ａ区で出土しており，20号掘立柱建物跡に近い。甕は，5・20のように摘み上げるよな素口縁のものと11・26のような比較的口縁部の外傾がきついものと41～43のように端部が外面に折り返される須恵器の甕様のものに大別できる。口縁部が素口縁である20は，外面が磨かれているような光沢感のあるナデが部分的にみられる。12住の6（第32図）の甕とよく似ている。須恵器折り返し口縁様のものは，すべて燻べ系の土器である。胴部調整が不明なため土師器としたが，叩きであったなら須恵器に分類する可能性もある。製作技法的には須恵器の系統を引いているものと考えられる。

土師器の無高台坏の出土地区の傾向からすると調査区北東部に集中する傾向がみられ，竪穴住居跡はないものの，掘立柱建物跡の中に10世紀代のものが含まれている可能性も考えた方がよかろう。また，同方位の調査区域外にその時期の遺構群が展開しているとも考えられる。４の灰釉陶器も１Ｊｃ区出土であり北東方向の調査区域外へも遺構群が展開していると予想される。

灯明皿は，図示していない分も含め掘立柱建物跡の検出された範囲周辺に集中する傾向がある。竪穴住居跡から出土したものは，破片も含めて全くないことは，本遺跡の竪穴住居跡で灯明皿を使用することはなかったことを示唆しているのであろうか。

Ⅵ　まとめ

今回の調査では，縄文時代中期・阿玉台式期の集落跡と古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が検出された。阿玉台式期の遺構・遺物が検出された遺跡は，千葉市内で約100箇所ほど確認されており，蕨立遺跡・根崎遺跡・荒屋敷貝塚・東寺山南貝塚・有吉北貝塚などの遺跡でややまとまった遺構が検出されているものの，遺構が検出された遺跡の割合は少ないといえる。この点で，今回の調査で一定の成果を積みあげることができたといえる。成果中の注目点として，第10図-45（図版35-45）の黒曜石の凸型掻器の出土が挙げられる。この掻器は，横型石匙のように撥状に開く刃部を有し，握り部の断面が1.2㎝ 程の厚みを保持しつつ舌状にのびる平面形状をなす。端部は細かく丁寧に整形されており，握り部の形状を明確な整形意図を持って造作したものと推測できる。特に目立つ点は，握り部の厚さで，全長が5.6㎝ 程であるのに厚みが1.2㎝ もあり，本遺跡出土の石斧の厚みに匹敵するほどの重量感がある。使用痕分析は実施していないが，両面とも握り部と刃部の境（基部）付近から握り部にかけて顕著に摩耗した使用痕（握ることよる摩滅？）がみられる。握ってみた場合の指の架かり具合から裏面の方が広く指と接触することから，俯瞰図面の左が表面で右が裏面と判断した。この黒曜石の産地だが，視認観察から栃木県高原山産と推定している。このような形状の石器が千葉で出土することは極めて珍しいといえる。市域では，平成15年度に調査を実施した台畑遺跡（原町）で長さ2.8㎝，厚さ1.0㎝ の黒曜石製の石器（掻器の未製品？掻器の再利用？）が出土しているだけである。これらの石器は，形状的に東北地方南部の頁岩製の掻器と類似点があるとの指摘もある。第10図-46の石鏃（阿玉台式期の２号竪穴状遺構から出土）も刃部頂を指先で摘み上げるような形状が，東北地方南部によく見られる石鏃の特徴と一致しており，阿玉台式期に東北地方南部から栃木県を経由して伝播してきた石器群である可能性も考えられよう。

次に，奈良・平安時代までの遺構の変遷についてまとめておく。集落として古墳時代後期の遺構も検出されたが，7世紀初頭から８世紀後半まで竪穴住居跡の造営は停止しており，集落として断続していたようである。掘立柱建物跡の中に７世紀代から８世紀中頃までのものが含まれているかもしれないが，集落として本格的に機能しはじめるのは８世紀後半以降で，最盛期は９世紀代と考えられる。９・10世紀代の住居跡を細分化した場合，12号住居跡（前半）→11・15・16〔旧〕号住居跡（中頃）→14号住居跡（中頃～後半）→13・19号住居跡（後半）→17号住居跡（末～10世紀前半）→16〔新〕号住居跡・20～22号住居跡の変遷となる。掘立柱建物跡は，出土遺物が少ないため時期比定できるものが限定される。１号掘立柱建物跡が８世紀後半，16号掘立柱建物跡が８世紀末～９世紀初頭，15号掘立柱建物跡-（2）・（3）の四面廂建物が９世紀中頃までに成立していたようなので，（1）が古くは８世紀後半頃まで遡る可能性があると想定できる。（4）・（5）も９世紀中頃以降で９世紀後半までの期間継続していたものと推測する。９号掘立柱建物跡は９世紀後半の住居跡である17号住居跡に切られる関係なので，1～３・６・10号掘立柱建物跡との位置や軸方位の関係から８世紀後半から９世紀前半頃の遺構と考えている。これらのことから，15号掘立柱建物跡周辺の建物群が８世紀後半から９世紀末頃までの建物群で，1号掘立柱建物跡周辺の建物群も８世紀後半から継続する建物群と考えられる。これらのことから，住居跡と建物跡は併存していたと推定でき，仏教関連遺物との関わりなどから，所謂「村落内寺院」を包含する集落であると考えられる。

a　仏教関連遺物について（第56～61図・第75・76図）

本遺跡で出土した仏教関連遺物は，瓦塔・瓦堂・灯明皿・鉄鉢形土器・「佛佛」と記された墨書土器などが挙げられる。

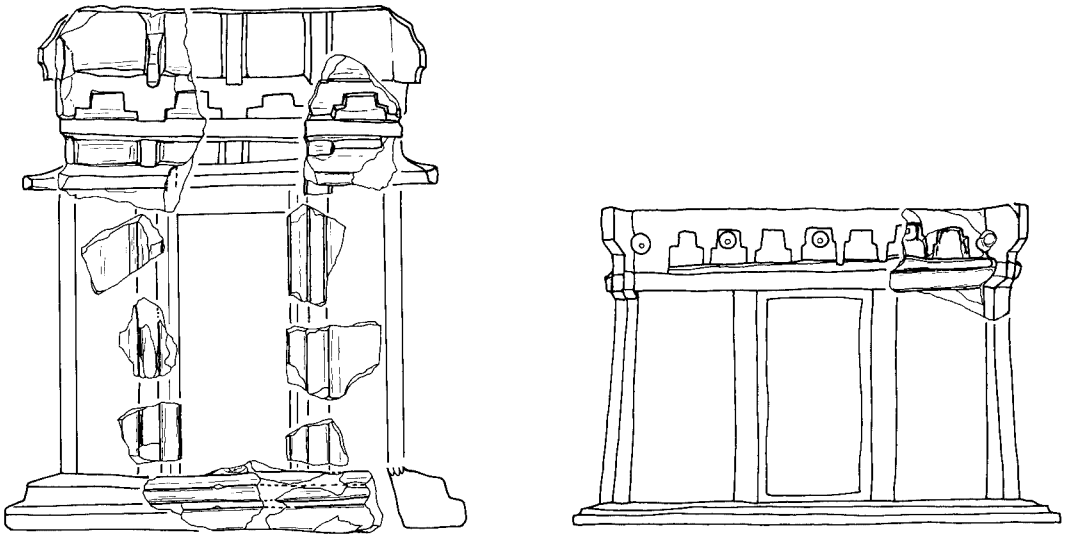
灯明皿は土師質のものが主体で，ロクロ調整後に手持ちのヘラケズリで体部の微調整を施すものが多く，須恵器の杯を転用したものも少量含まれている。土師器灯明皿は，掘立柱建物跡群内からの出土が主なので建物に伴う遺物と推定できるが，柱穴からの単独または周辺包含層内からの出土ばかりで，須恵器などとの対比関係が明瞭な資料を得ることができなかった。因みに，「佛佛」と記された墨書土器は８世紀後半の須恵器杯で，口縁部に油煙痕が付着することから灯明皿に転用されたものと考えられ，15・20号掘立柱建物跡の造営開始期頃の遺物と考えられる。

鉄鉢形土器は土師器の細片だが，内傾する口縁部と体部の形状から鉄鉢形土器と判断した。周囲から同一個体片の出土はなく，器形の完全な復元はできなかった。

瓦塔･瓦堂は，総計220点の破片が出土している。その内訳は，酸化焔焼成（土師質）の瓦塔片が67点，還元焔焼成（須恵質）の瓦塔片が40点，還元焔焼成の瓦堂片が113点である。図化したものを除くと細片ばかりで第75図の塔・堂の初軸部分を除き全体像を復元するには至らなかった。

還元焔焼成瓦塔の屋蓋部（第57図-39・40）は，8世紀後半頃に比定される池田分類の大仏類型の範疇に入り，時期的に15・20号掘立柱建物跡の造営開始時期の遺物と考えられる。15・20号掘立柱建物跡周辺と５号土坑周辺にやや偏る傾向があり，屋蓋部と軸部組物部は５号土坑内から出土しており，調査区の南側に安置施設などが展開する可能性も考えられる。第24表の瓦塔（須恵質）- １の破片が，３Ｅ-ｃ区の貝充填柱穴１の覆土から出土している。この遺構が９世紀代初頭以降のもので，意図的に含ませたようなので，貝を充填する行為に祭祀性を付与できるかもしれない。

還元焔焼成瓦堂は，屋蓋部（第61図-75～77）に入母屋式屋根の降棟表現から瓦堂と判明した。焼成



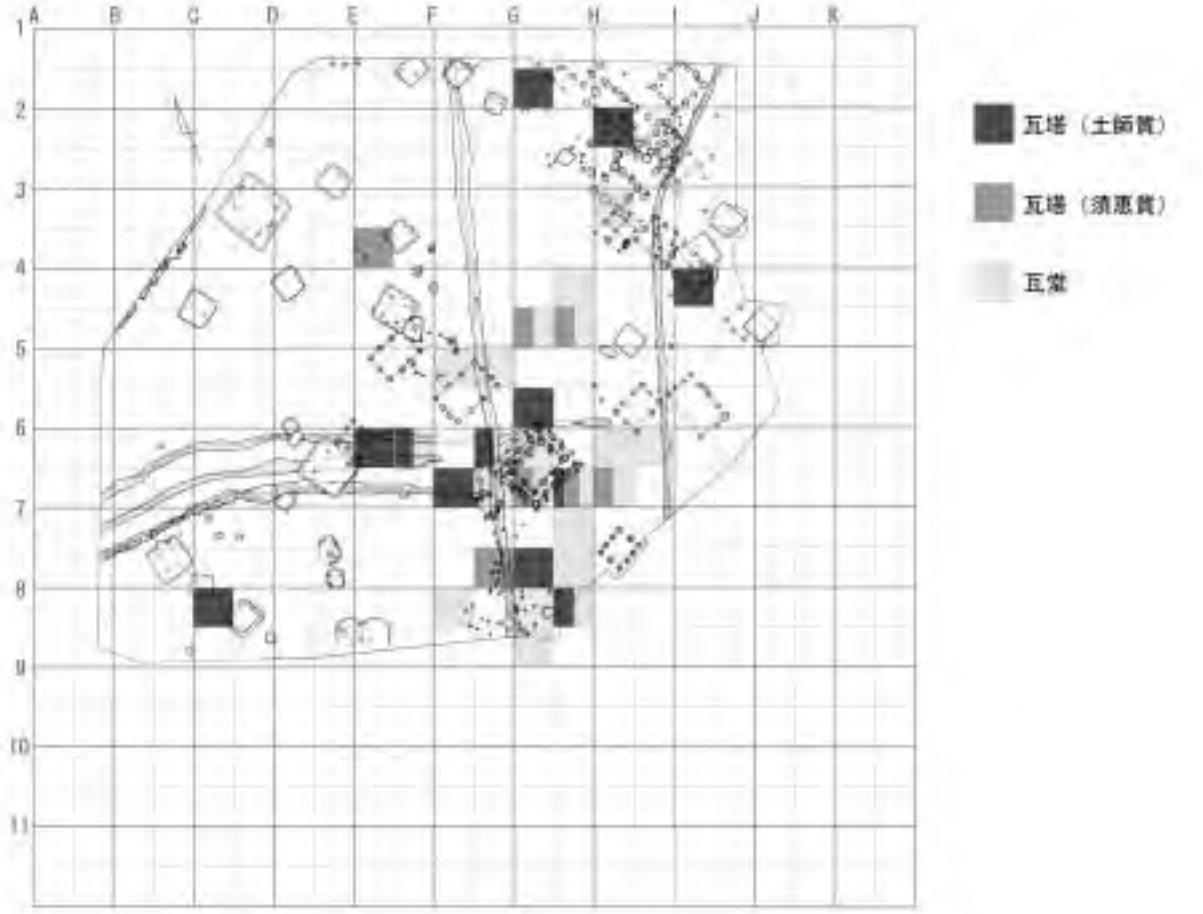
瓦塔初軸　　瓦堂初軸

第75図　瓦塔・瓦堂復元図

が瓦塔に比べ軟質で，脆い傾向がある。軸部破片の表現が簡素なものと組物が顕著に表現されるものがあるが，胎土や調整的に同一個体と考えられることから複層構造の建物表現と考えられる。組物の斗供間に円形の刺突が穿たれるのが特徴である。５号掘立柱建物跡の柱穴２から破片が出土し，その他の破片も還元焔焼成瓦塔との供伴が不明なので時期は確定できないが，9世紀以降と考えられる。

酸化焔焼成瓦塔の屋蓋部は，8世紀末から９世紀初頭頃に比定される池田分類の東山類型の範疇に入る。第24表の№24（２H-ｃ区）・７（１G-ｃ区）・43（３号土坑・３Ｉ-ｃ区）などは，他の破片の分布域から離れて出土しているが，№43（第58図-49）は他の屋蓋部破片と同一個体と考えられ，瓦塔が破砕された後に移動したものと推測される。他の破片も15・20号掘立柱建物跡周辺を中心に分布しており，この遺構が安置施設と推定できよう。13号掘立柱建物跡の柱穴８から破片が出土しており，この遺構が，9世紀前半以降に造営された可能性を示唆している。

第76図にあるように瓦塔・瓦堂が出土した範囲は意外と広いが，15・20号掘立柱建物跡周辺に集中する傾向にある。特に建物を破壊している１号溝状遺構からの出土が多い。破片は，遺物の廃棄時に破砕された可能性もあるが，多くが細片で攪乱による細片化と考えられる。北東部の掘立柱建物跡群周辺にも僅かに出土しているが，15・20号掘立柱建物跡周辺の個体と同一であることから，破砕後の移動であり，北東部の建物群内に安置施設があったとは考えにくい。



第 76 図　瓦塔・瓦堂分布範囲

第29表　瓦塔・瓦堂図化分計測値一覧

図版№	部　位	計測値(単位:cm)	特　　徴	手　　法
39	屋蓋部	瓦継ぎ目長さ, 2.5前後, 瓦幅, 1.1 地垂木長4.5前後, 飛檐垂木長2.5前後, 垂木幅2.0前後, 垂木間幅2.0～2.2	隅棟・稚児棟表現あり 瓦当面と垂木端部に赤彩？	幅広工具押し引きB手法・ヘラ削り出しB手法
40	屋蓋部	瓦継ぎ目長さ, 2.5～3.2, 瓦幅1.1 地垂木長4.5前後, 飛檐垂木長2.5前後, 垂木幅2.0前後, 垂木間幅2.0～2.2	隅棟表現あり(稚児棟部分欠損) 瓦当面と垂木端部に赤彩？	幅広工具押し引きB手法・ヘラ削り出しB手法
41	屋蓋部	瓦継ぎ目長さ, 2.5前後, 瓦幅1.1 地垂木長4.5前後, 飛檐垂木長2.5前後, 垂木幅2.0前後, 垂木間幅2.2		幅広工具押し引きB手法・ヘラ削り出しB手法
42	屋蓋部	瓦継ぎ目長さ, 2.5前後, 瓦幅, 1.1		幅広工具押し引きB手法
43	初軸？	突帯幅1.3, 高さ1.0	突帯は, 頭貫の表現か？	幅広工具押し引きB手法・ヘラ削り出しB手法
44	軸部・組物部分	突帯幅1.0～1.3, 高さ0.7～1.2	開口部上端の平坦面残存 貫抜穴痕が開口部両端上部の突帯にあり	幅広工具押し引きB手法
45	水煙基部	軸部下端径1.4, 上端1.0	径約0.3cm の穴が各面に２箇所以上ある 軸部は菜箸のような棒に粘土を巻きつつ芯軸を形成し, 煙部成形後に棒を引き抜いたものと推測される(上部ほど細くなっている) 下面には浅い沈線状にスタンプ様の円がみられる 下部に各煙部間におある円形貼り付け部を沈線で模式化してから貼り付けていることが看取できる	
46	九輪軸部	軸部推定径2.2, 復元高3.4, 輪部推定径9.4 (破片３片の接合及び推定復元による数値)	輪部端は下方に若干つままれるように丸くおさめられる 軸部上端の平坦面は, ナデで調整	
47	九輪	輪部推定径8.8	輪部端は下方に内傾気味に若干つままれるように丸くおさめられる 内傾する端部に凹線状の凹みが廻る	
48	九輪	輪部推定径9.0	輪部端は下方に内傾気味に若干つままれるように丸くおさめられる 内傾する端部に凹線状の凹みが廻る	
49	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約0.8, 垂木間幅約2.3	瓦当面欠損	幅狭工具押し引きB手法？・ヘラ削り出しC1手法？
50	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約0.8 軒先先端から継ぎ目まで約1.4		幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
51	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後 軒先先端から継ぎ目まで約1.0		幅狭工具押し引きB手法
52	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約1.0, 垂木間幅約2.0～2.3　　軒先先端から継ぎ目まで約1.0	上面と下面は板状の粘土で二段重ねに成形され, 下面側の板状粘土上に指頭による凹凸を施し, 上面の板状粘土の接合を補強している様子が看取できる(写真図版21の52に接合状況の接写あり)	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
53	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約0.8～1.0, 垂木間幅約2.0 軒先先端から継ぎ目まで1.0～1.2	上面と下面は板状の粘土で二段重ねに成形され, 下面側の板状粘土上に指頭による凹凸を施し, 上面の板状粘土の接合を補強している様子が看取できる(写真図版21の53に接合状況の接写あり)	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
54	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後 上部平坦面の突帯(天井梁又は柱盤の表か？)の約1.0, 上部突帯から軒先先端からの継ぎ目までの長さ3.0前後 垂木間幅1.6前後	上面と下面は板状の粘土で二段重ねに成形	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
55	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約1.2 軒先先端から継ぎ目まで約1.4		幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
56	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後 上部平坦面の突帯幅約1.2 上部突帯から軒先先端からの継ぎ目までの長さ3.8前後, 軒先先端から継ぎ目まで約0.8 垂木幅1.0前後, 垂木長3.0前後	断面から, 上面・下面用の板状粘土を貼り付け, 下面の垂木表現を表出される部分にさらに板又は棒状の粘土を貼り, 削り出すことで整形している様子が看取できる また, 先端部分も上面・下面用の板状粘土の直交するように幅狭の板状粘土を先端に接合している可能性もある。	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
57	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後 上部平坦面の突帯幅約1.2 上部突帯から軒先先端からの継ぎ目までの長さ3.8前後, 軒先先端から継ぎ目まで約1.0 垂木幅1.0前後, 垂木長3.0前後, 垂木間幅2.0	下面の垂木表現を表出される部分にさらに板又は棒状の粘土を貼り, 削り出すことで整形している様子が看取できる	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
58	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約0.8～1.0, 垂木間幅約2.0 軒先先端から継ぎ目まで1.0～1.2 隅棟幅1.0前後	隅棟に明瞭な稚児棟表現はないが, 鬼瓦表現を凹部で表現？ 軒先端部に上下面の板状粘土の接合痕が明瞭に残る	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
59	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約0.8～1.0 軒先先端から継ぎ目まで1.4前後？ 隅棟幅1.1～1.4	隅棟に明瞭な稚児棟表現はないが, 鬼瓦表現を凹部で表現？ 隅棟からのびる屋根表現が, 細かく不規則に施されているようにも看取できるが, 整形していないためのようにもかんじられる	幅狭工具押し引きB手法又はC手法・ヘラ削り出しC2手法？
60	屋蓋部	瓦幅, 0.7前後, 垂木幅約1.0, 垂木間幅約2.0 軒先先端から継ぎ目まで1.0～1.2 隅棟幅1.0前後	隅棟先端は欠損	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
61	屋蓋部平坦面	軸部穿孔推定径4.0前後	屋蓋部の上部突帯の内側平坦面で, 軸部の円形穿孔部端面は平坦化されるが, 円形はかなり歪と想定される	幅狭工具押し引きB手法又はC手法・ヘラ削り出しC2手法？
62	屋蓋部平坦面	軸部穿孔推定径4.0前後	屋蓋部の上部突帯の内側平坦面で, 軸部の円形穿孔部端面は平坦化されるが, 円形はかなり歪と想定される	幅狭工具押し引きB手法・ヘラ削り出しC2手法？
63	屋蓋部平坦面	軸部穿孔推定径4.0前後	屋蓋部の上部突帯の内側平坦面で, 軸部の円形穿孔部端面は平坦化されるが, 円形はかなり歪と想定される	
64	屋蓋部平坦面	軸部穿孔推定径2.5前後	屋蓋部の上部突帯の内側平坦面で, 軸部の円形穿孔部端面は断面三角形状で, 丁寧に円を刳りぬいている 調整も他のに比べ, ロクロ整形様に丁寧に施している	
65	初軸・組物部	組物表現の突帯の幅1.0～1.2前後 裳階板葺き屋根幅2.0前後, 厚み1.0前後 大斗間・間斗束間2.8～3.0前後	組物表現(大斗・肘木・台輪・裳階・間斗束)がこまかい	
66	初軸・組物部	組物表現の突帯の幅1.0～1.2前後 雲肘木表現幅1.0前後 裳階板葺き屋根幅2.0前後, 厚み1.0前後 大斗間・間斗束間3.0～3.2前後, 肘木間1.8	組物表現(雲肘木・大斗・肘木・台輪・裳階・間斗束)がこまかい 隅部分	
67	軸部隅肘木	組物表現の突帯の幅1.0～1.2前後	飛檐隅木？初軸ではない	
68	開口部	突帯幅1.2～1.5前後	突帯は方立か内法貫の表現か？	
69	開口部	突帯幅1.2～1.5前後	突帯は方立か内法貫の表現か？	
70	開口部	突帯幅1.2～1.5前後	突帯は方立か内法貫の表現か？	
71	開口部	突帯幅1.2～1.5前後	突帯は方立か内法貫の表現か？	
72	開口部	突帯幅1.2～1.5前後	突帯は方立か内法貫の表現か？	
73	開口部	突帯幅1.2～1.5前後	突帯は方立か内法貫の表現か？	
74	基壇部分	基壇高さ3.0	壇になるのは, 地長押の表現か？	
75	屋蓋部	降棟幅1.0前後, 降棟の外側瓦幅1.0～1.2, 長さ1.5前後, 降棟内側の瓦幅1.2前後, 継ぎ目間2.8前後	降棟表現なので入母屋造	
76	屋蓋部	降棟幅1.0前後, 降棟の外側瓦幅1.0～1.2, 長さ1.5前後, 降棟内側の瓦幅1.2前後, 継ぎ目間2.8前後	降棟表現なので入母屋造	
77	屋蓋部	隅棟幅1.0前後, 降棟の外側瓦幅1.0～1.2, 降棟内側の瓦幅1.2前後, 継ぎ目間2.8前後	降棟・隅棟表現なので入母屋造	
78	軸部隅		組物表現は簡素で, 隅の雲肘木らしき表現のみ	
79	軸部・組物	組物表現の突帯の幅1.6前後 大斗間1.0前後, 肘木間の穿孔径約1.0	突帯の上端は丸味を帯びる 斗供(大斗・肘木)間に円形の刺突はいる 組物表現がこまかいので初軸であろうか？	
80	軸部隅		組物表現は簡素で, 隅の雲肘木らしき表現の残欠がみられる	
81	初軸・組物	突帯幅1.2前後	突帯端部は丸味を帯びる	
82	軸部？基壇部？		軸部隅にも思えるが, 基壇部地長押表現の可能性が高い	
83	軸部	厚み2.0	下部が厚くなる	

※手法の記述は,　池田1999-1 の記述に準じている。

b　市内出土の瓦塔・瓦堂について（第77・78図，第29表）

千葉市域で瓦塔が出土している遺跡は，千葉寺跡・生実城跡・黒ハギ遺跡・葭山遺跡・谷津遺跡・越川戸遺跡の６遺跡と昭和の森遺跡群内（辰ヶ台遺跡？）の１地点がある。報告書などで図面などが公開されているものは，千葉寺跡・生実城跡・葭山遺跡・谷津遺跡・越川戸遺跡の５遺跡の資料がある。本項では，谷津遺跡例以外の図面を集成し，一部再実測して掲載している。なお，黒ハギ遺跡は未整理で報告書刊行まで至っておらず，昭和の森遺跡群内のものは辰ヶ台遺跡の調査時に採集された遺物のようだが，辰ヶ台遺跡の報告書刊行時に未掲載のままであったものである。以上のことを踏まえ，遺物の概略と出土時の状況などについて判る範囲で整理を行うことにする。

千葉寺跡出土瓦塔（1-１・２）：この遺物は，県立千葉高校で保管・管理されている資料である。千葉寺跡の発掘調査は過去に５回行われており，瓦塔がどの調査時の遺物かは不明である。『千葉市史』（以下，市史）によれば「旧境内の東北隅」の第三号堀坑から出土したと記されている。市史では，写真のみの掲載であったが，『千葉県の歴史・資料編考古３（奈良・平安時代）』において，二片の屋蓋部の図面が掲載された（第77図の図面は，本書より一部改変の上，転載させていただいた）。

これらの部位は屋蓋部である。丸瓦（幅約1.5㎝で，継ぎ目部分に幅約２㎝）は，棒状粘土を貼り付けて瓦の継ぎ目（継ぎ目間の長さ約2.8～３㎝，先端から２列目が約２㎝，先端が1.8㎝）を表出させている。平瓦（幅約２　㎝，継ぎ目部分の幅約1.6㎝）は，丸瓦間に平坦面をつくり継ぎ目を施している（継ぎ目の幅は，丸瓦に対応している）。軒裏表現は，地垂木と飛檐垂木をヘラによる削り出しによって表現し，垂木ごとの幅は約2.8㎝，飛檐垂木の長さは約1.5㎝である。垂木自体の幅は約１㎝で飛檐垂木の方がやや幅が広い感がある。瓦当面表現はない。なお，焼成具合は還元焔焼成である。これらの特徴は，池田敏宏氏の研究（池田・1999・2000）によると勝呂類型に相当すると考えられる。

生実城跡出土瓦塔（2-１・２）：３次調査（平成４年度）のＢ区の井戸と６次調査（平成８・９年度）の第１号堀で出土した２点の資料がある。両方とも中世遺構の覆土中出土の遺物であり，奈良・平安

第30表　市域出土瓦塔・瓦堂一覧

図面№	遺　跡　名	焼成具合	部　位	屋蓋部類型	出土状況	備　　考
1-1	千葉寺跡	還元焔焼成	屋蓋部	勝呂類型	第三堀坑	県立千葉高校保管　糸原(1998)
1-2	千葉寺跡	還元焔焼成	屋蓋部	勝呂類型	第三堀坑	県立千葉高校保管　糸原(1998)
2-1	生実城跡	酸化焔焼成	初軸軸部		第１号堀№17	菊池(2001)
2-2	生実城跡	還元焔焼成	屋蓋部	大仏類型	３Ｂ区１号井戸	長原(2002)所収分を再実測
3-1	黒ハギ遺跡	還元焔焼成	初軸・基壇部		Ｃ１区SX-2206	未報告
3-2	黒ハギ遺跡	還元焔焼成	屋蓋部	大仏類型？	Ｉ区SX-6	未報告
4-1	昭和の森遺跡群内出土	還元焔焼成	九輪		表採	未報告　辰ヶ台遺跡か？　「大」他の刻書あり
4-2	昭和の森遺跡群内出土	還元焔焼成	屋蓋部	萩の原類型	表採	未報告　辰ヶ台遺跡か？
4-3	昭和の森遺跡群内出土	還元焔焼成	屋蓋部	萩の原類型	表採	未報告　辰ヶ台遺跡か？
4-4	昭和の森遺跡群内出土	還元焔焼成	屋蓋部	大仏類型	表採	未報告　辰ヶ台遺跡か？
5-1	葭山遺跡	酸化焔焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-2	葭山遺跡	酸化焔焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-3	葭山遺跡	酸化焔焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-4	葭山遺跡	酸化焔焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
5-5	葭山遺跡	酸化焔焼成	屋蓋部	東山類型	遺構外出土遺物	山下他(1996)所収分を再実測
	谷津遺跡	酸化焔焼成	瓦塔・瓦堂全部位(不完全)	上西原類型	001・090・010号住居跡 001号掘立柱建物跡他	相京他(1986)
	越川戸遺跡	還元焔焼成 酸化焔焼成	瓦塔 水煙・九輪 屋蓋部・軸部 基壇部他 瓦堂 屋蓋部・軸部	(還元焔) 大仏類型 (酸化焔) 東山類型	１号溝状遺構 15・20号掘立柱建物跡他	本報告書掲載

※　備考の文献は，文末に記載。
※　屋蓋部類型は，池田(1999-1)に準じている。

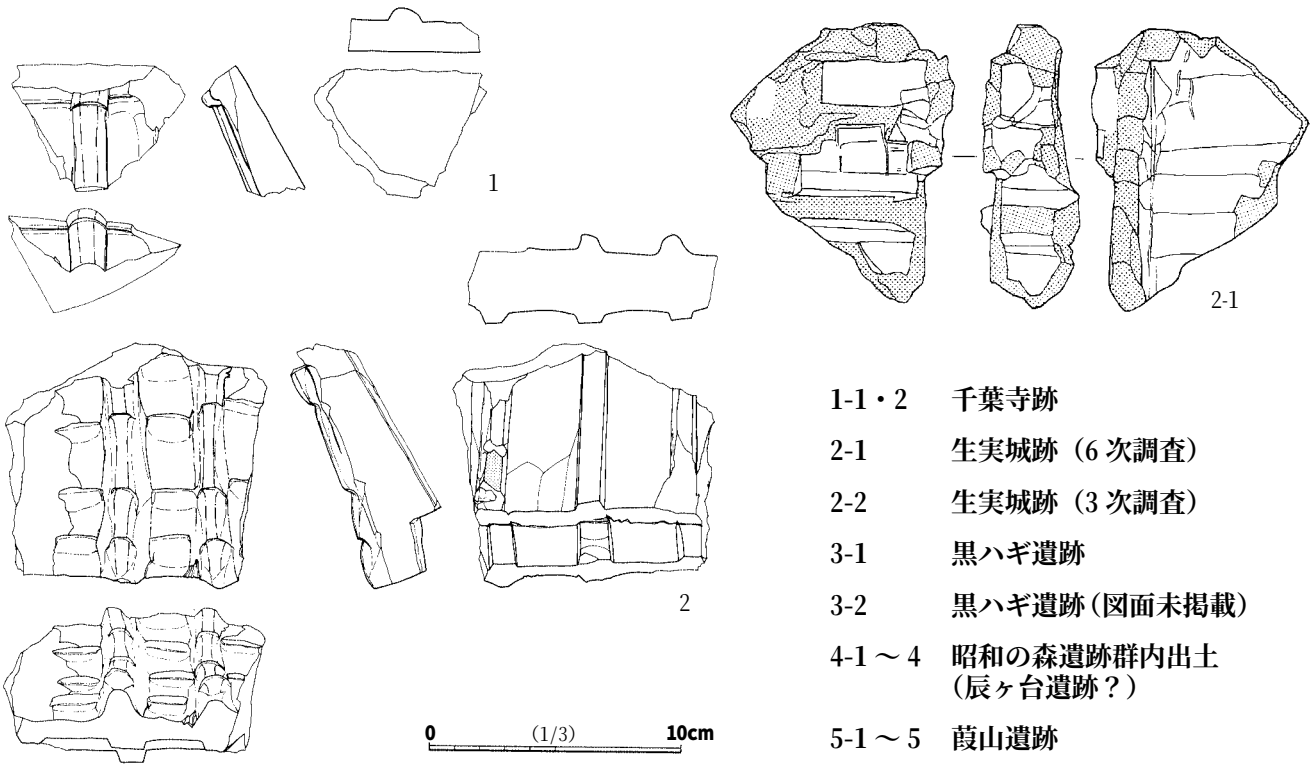
時代の遺構に伴うものではないが，周囲にその時期の遺構が存在していた可能性が考えられる。

2-2（３次調査）の部位は屋蓋部である。焼成具合は還元焔焼成で，赤色スコリア状の小石を含む堅緻で密な胎土である。隅木と瓦表現の関係から扇垂木を表現をしている可能性がある。上面は，丸瓦（幅約１㎝）表現のみで，瓦の継ぎ目（継ぎ目間の長さは，先端が約１㎝，先端から２・３番目が約1.5㎝，それ以降が約２㎝）は全て揃えて表現している。下面は，1本の垂木が残存しており，先端の飛檐垂木と地垂木の表現がなされている。飛檐垂木の幅は約１㎝，長さは約2.2㎝である。地垂木の先端は約1.5㎝で，しだいに細くなり先端から約６㎝のところで幅0.7㎝となり収まる。垂木間の幅は不明である。これらは，ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はない。これらの特徴は，池田氏の幅広工具押し引きＢ手法・ヘラ削り出しＢ手法に近い特徴である。

2-1（６次調査）の部位は軸部の上端隅部分である。焼成具合は酸化焔焼成で，組物（斗供）を表現している。越川戸遺跡出土の第60図-65・66と同じ様な残存部位であり，雰囲気もよく似ている。

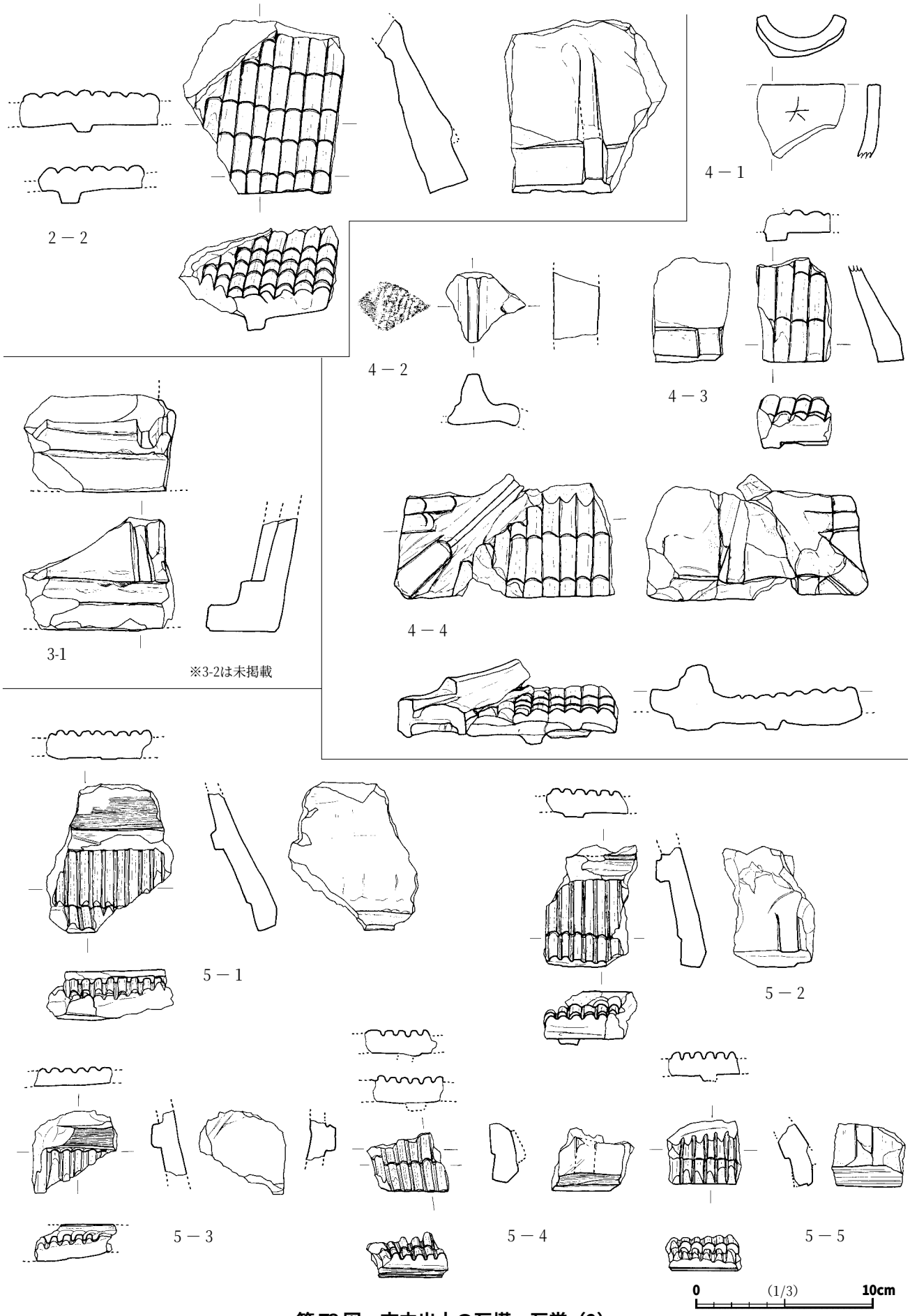
黒ハギ遺跡出土瓦塔（３-１・２）：平成12年度調査のＳＸ-2206（中世の遺構。谷頭上端部を利用した道状遺構や区画状の凹みの複合体遺構で地山のハードローム層まで造成していた。）で出土した資料である（３-１）。部位は，初軸の基壇及び開口部（戸口）と考えられる。焼成具合は還元焔焼成で，極めて堅緻で緻密な胎土を有する。基底部の幅は4.6㎝で地長押，開口部の柱間に板扉をつるための枠も表現されている。柱間は約５㎝である。柱表現の断面形は，長辺幅1.5㎝・短辺幅0.6㎝の台形状を呈しており，図面左側の柱が隅柱のようなので一辺三間の柱間が想定できる。

図化できなかった例（３-２）がもう一点，黒ハギ遺跡から出土している。本寿寺の南隣にあたる平成９年度調査区（Ｉ区）のＳＸ-６から一括遺物として取り上げられたものである。部位は，屋蓋部で



1-1・2　千葉寺跡
2-1　生実城跡（6 次調査）
2-2　生実城跡（3 次調査）
3-1　黒ハギ遺跡
3-2　黒ハギ遺跡（図面未掲載）
4-1 ～ 4　昭和の森遺跡群内出土（辰ヶ台遺跡？）
5-1 ～ 5　葭山遺跡

第 77 図　市内出土の瓦塔・瓦堂（1）



第78図　市内出土の瓦塔・瓦堂（2）

隅木も含まれている。焼成具合は還元焔焼成で，昭和の森遺跡群出土の瓦塔片（４-４）と胎土がよく似ている。上面は，丸瓦（幅約１㎝）表現のみで，瓦の継ぎ目間の長さは約2.5㎝前後である。丸瓦上端部が剥離により欠損する部分が多く，継ぎ目の長さはおよその値である。先端部は欠損しており，下面の垂木表現も残存しない。これらの特徴は，池田氏の幅広工具押し引きＢ手法に近い特徴である。

昭和の森遺跡群内出土瓦塔（４-１～４）：これらは，千葉市教育委員会によって昭和55年に実施された昭和の森遺跡群内の「市町村の森」造成に伴う発掘調査で出土した遺物のようである。現在の辰ヶ台遺跡の遺跡範囲北端部分にあたり，円墳周溝が検出された調査区（昭和61年度調査の第Ⅲ地点の２・３トレンチに西隣する地点）から出土したという記述が残る。調査時には「小食土廃寺と辰ヶ台遺跡の中間地点あたり」という認識であったようである。

４-１は九輪の破片である。焼成具合は還元焔焼成だが，軟質で表面の摩耗が激しい。筒部の推定内径は約3.2㎝，厚みは約0.8㎝で，下部縁辺部は残存していない。全体にはロクロ整形を施し，上端平坦部は摩耗により成形痕は不明である。破片ほぼ中央部に「大」と判読できる刻書がみられる。また，不明瞭だが，破片左端に刻書のような0.3㎝ 程の刻みのようなものが二本みられる。表面の摩耗などにより判別しにくい小さなキズだったので図面には表現されていない。さらに，この刻みの上部に管状工具による円形の押圧の一部らしき凹みも確認した。

４-２は屋蓋部の隅木部分の破片である。焼成具合は還元焔焼成である。図面左側に斜位にのびる屋根表現の一部が残存し，下面に布目痕がみられる。屋蓋部の４-４のものと胎土的にとても近似する。

４-３は屋蓋部の破片である。焼成具合は還元焔焼成である。上面は，丸瓦（幅約１㎝）表現のみで，瓦の継ぎ目（継ぎ目間の長さは，先端が約2.3～2.6㎝，先端から２番目が約2.8～3.1㎝）はある程度意識して揃えるようにしているようにもみえるが不揃いである。下面は，1本の飛檐垂木が残存しており，地垂木部分は剥離していて残存しない。飛檐垂木の幅は約1.1㎝，長さは1.5㎝ である。垂木間の幅は不明である。これらは，ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はないが，瓦と飛檐垂木部分の端面を赤彩しているようである。これらの特徴は，池田氏の幅広工具押し引きＢ手法・ヘラ削り出しＡ手法に近い特徴である。

４-４は屋蓋部で三つの破片が接合したものである。焼成具合は還元焔焼成である。隅木と瓦表現の関係から平行垂木を表現をしているようである。上面は，丸瓦（幅約１㎝）表現と隅木上の稚児棟を表現している。瓦の継ぎ目（継ぎ目間の長さは，先端が約１㎝，先端から２番目が約2.5㎝，それ以降は部分的に欠損しており不明）は全て揃えて表現している。下面は，飛檐・地垂木の表現が二本分完存し，二本分飛檐垂木が欠損した状態で残存している。飛檐垂木の幅は約0.8～１㎝，長さは約1.2㎝である。地垂木の先端は１㎝で，しだいに細くなり先端から約1.7～２㎝のところで幅0.7㎝となり収まる。垂木間の幅は約３～3.5㎝ である。これらは，ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はなく，赤彩も施されない。これらの特徴は，池田氏の幅広工具押し引きＢ手法・ヘラ削り出しＢ手法に近い特徴である。

これらの他に屋蓋部・九輪の細片が９点出土しており，全て還元焔焼成のものである。九輪の細片は４-１のものと胎土の質感は同じであり，他の細片は４-４の屋蓋部とよく似ている。

因みに，４-３と４-４の屋蓋部の破片は別個体である可能性がある。還元焔焼成である点は同じであ

るが，瓦の継ぎ目表現が不揃いか揃うかという点と瓦当面の赤彩が施されるかという点で明瞭な差がみられる。また，胎土の質感も４-３の方が軟質で脆い印象が強く，４-４の方が須恵器の質感に近い。下面の垂木表現の削り出し方も４-３の方がメリハリがあり，４-４の方が粗く削りだしている感が強い。

葭山遺跡出土瓦塔（５-１～５）：これらは，「土気南遺跡群Ⅷ」報告書中の葭山遺跡（第57図-15～19・Ｐ472）に掲載されたものの中で，軸部上端の破片（報告書第57図-20）を除いて再録し，断面図・見通し図・下面図などを追加したものである。

瓦塔片は，昭和58年度に実施された調査の第二次調査区の南半でやや集中して出土している。瓦塔が集中していた範囲内にある４号土壙で「寺」・「佛」，第一次調査区の１号住居跡で「果寺」といった寺の存在を示唆する墨書土器が出土しており，未調査区域に瓦塔を伴う寺堂が存在している可能性が指摘されている。瓦塔片は細片を含め14点出土しており，調整具合や胎土から全て同一個体である可能性が高い。

５-１～５全て屋蓋部の破片で，焼成具合は酸化焔焼成のものばかりである。瓦表現は軒先先端から一節目の結節（継ぎ目の長さ約1.3・1.6㎝）を施すだけで，瓦ごとの幅は約0.7㎝である。一節目の長さに1.6㎝のものと1.3㎝のものとにわかれるが，胎土・調整的に差違はないことから単純に階層の差であろうか。屋蓋部上部の柱盤もしくは高欄の地覆にあたる突体部分の幅は，約1.2～1.3㎝を測るが，その内辺の長さは不明である。突帯部分の内側は細かいハケメを施した後に中心付近にナデ調整を施している（５-１）。下面には，垂木が一軒構成で施される。垂木幅は約１㎝・長さが３㎝前後で垂木間の幅は2.5㎝以上３㎝未満である。これらは，ヘラによる削り出しによって表出される。瓦当面表現はなく，赤彩も施されない。これらの特徴は，池田氏の幅狭工具押し引きＡ手法・ヘラ削り出しＣ１手法に近い特徴である。

谷津遺跡出土瓦塔・瓦堂：千葉急行線（現京成千原線）の建設に伴い，1979年に財団法人千葉県文化財センター（以下，県セ）によって調査された地点から出土した資料である。谷津遺跡は，5世紀終わりごろから10世紀まで継続して集落が営まれる集落遺跡で，1976年の千葉市教育委員会の調査範囲（以下，市調査区）が集落の中心と考えられている。その中で鋳銅工房跡と目される遺構が検出され，印・錫杖などの鋳型と坩堝が出土した点でも注目される遺跡である。県セ調査区は，市調査区の北東側に位置し，集落の東側縁辺部と考えられる。その中の001号住居跡覆土中（埋まりかけの住居跡の凹み）から瓦塔の初軸と瓦堂の堂部などが出土した。また，隣接する001号掘立柱建物跡の内側及び南側からも屋蓋部や上層の軸部片が拡散して出土しており，建物が安置施設と推定されている。これらは，整形技法・厚さ・色調・胎土などによって細分化されている。塔は，屋蓋部五層・軸部四段分の部位を分別し，四層構造の五重塔に復元されている。しかし，伏盤から上部の九輪や水煙・竜車・宝珠といった部位は，出土しなかったことから推定であった。報告書では，塔・堂の屋蓋部の破片が６点掲載されているが，軸部の破片や復元された詳細な初軸の展開図面がないのが残念である。

瓦表現は軒先先端から一節目の結節（継ぎ目の長さ約1.5・2.3㎝ 前後）を施すだけで，瓦ごとの幅は約0.7㎝である。一節目の長さが1.5㎝のものと2.3㎝のものとにわかれるが，単純な階層の差であろうか。下面の垂木は一軒構成で表現され，垂木幅は約１～1.5㎝，垂木間の幅は1.5㎝ 前後，垂木長は2.5～３㎝前後である。瓦当面表現はなく，赤彩の有無は不明である。これらの特徴は，池田氏の幅狭

工具押し引きＡ手法・ヘラ削り出しＣ２手法に近い特徴である。

池田氏による屋蓋部編年に則って時期比定すると、千葉寺跡例が勝呂類型（幅狭棒状粘土貼り付け手法・ヘラ削り出しＡ手法）で８世紀第２四半期頃。生実城跡例（２-２）・黒ハギ遺跡例（３-２）・昭和の森遺跡群内例（４-４）・越川戸遺跡例（第57図-39～41）が大仏類型（幅広工具押し引きＢ手法・ヘラ削り出しＢ手法）で８世紀後葉～９世紀初頭。昭和の森遺跡群内例（４-２・３）が萩の原類型（幅広工具押し引きＢ手法・ヘラ削り出しＡ手法）で９世紀初頭前後。葭山遺跡例（全て）・越川戸遺跡（第58図-49～51・第59図-52～59）が東山類型（幅狭工具押し引きＡ手法・ヘラ削り出しＣ１手法）で８世紀末～９世紀前葉。谷津遺跡例が上野原類型（幅狭工具押し引きＡ手法・ヘラ削り出しＣ２手法）で９世紀中葉）となる。類型的には、大仏類型が出土した遺跡が最多で分布範囲も広く、千葉寺跡例を除けば、瓦塔の出土傾向が増加する時期の例が最も多いようである。しかし、谷津遺跡と越川戸遺跡の例以外は、古代の遺構に伴わず包含層や後世の遺構覆土中一括などの例が多く、出土したというだけで多角的な検証が行えない例ばかりである。そんな中、８世紀第２四半期に創建されたとされる千葉寺で、その創建時期と時期的に重なる勝呂類型が出土していることは、千葉寺跡の寺院形成史を考える上で重要であり、瓦塔が伽藍を有する寺院にも供給された可能性を考慮する点でも重要である。

現在市域で出土が確認されている遺跡の分布は、中央区南東部と緑区に集中しており、市域の北半からの出土が知られていない。現状では分布傾向に明確な意味を持たせることはできないが、奈良・平安時代の集落分布の多寡などの検討と古代の郷域との整合性などを踏まえた上で、このような遺物が出土する遺跡の位置付けがなされるべきであろう。

〈主要参考文献〉

相京邦彦他　1986　『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群』（財）千葉県文化財センター

池田　敏宏　1999-1　「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討－関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に－」『研究紀要』第７号（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1999-2　「仏堂施設における瓦塔出土状況について（素描）－土浦市・根鹿北遺跡出土瓦塔をめぐって－」『土浦市立博物館紀要』第９号　土浦市立博物館

1999-3　「東国の瓦塔出土遺跡」『第13回企画展 仏堂のある風景－古代のムラと仏教信仰』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

2000　「瓦塔」『古代仏教系遺物集成・関東－考古学の新たなる開拓をめざして－』考古学から古代を考える会

2002　「陶製仏殿についての若干の考察－編年・系譜・概念定義の検討－」『研究紀要』第10号（財）とちぎ県生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

糸原　清　1998　「千葉寺跡」『千葉県の歴史・資料編考古３（奈良・平安時代）』財団法人千葉県史料研究財団

甲斐　博幸　1998　『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 小谷遺跡』（財）君津郡市文化財センター

2002　「木更津市小谷遺跡の景観－奈良時代小型堂塔出土遺跡の検討」『研究紀要』Ⅸ（財）君津郡市文化財センター

川尻　秋生　2001　「第２編 第５節 民間仏教の広がり」『千葉県の歴史』通史編 古代２（県史２）

菊地　健一　2001　『千葉市生実城跡』（財）千葉市文化財調査協会

笹生　衛　1998　「古代集落と仏教信仰－千葉県内の事例を中心に－」『第３回特別展 仏の住まう空間－古代霞ヶ浦の仏教信仰－』上高津貝塚ふるさと歴史広場

須田　勉　1991　「村落内寺院について」（シンポジウム平安前期の村落とその仏教〈記録集〉）『千葉県立房総風土記の丘年報14－平成２年度－』千葉県立房総風土記の丘

善端　直　1994　「北陸の古代瓦塔」『文化財学論集』文化財論集刊行会

武田　宗久　1974　「第四項 千葉寺と古墳 １千葉寺」『千葉市史』千葉市史編纂委員会

寺門　義範　1989　『千葉市辰ヶ台・住吉・東住吉遺跡－昭和の森遺跡群昭和60・61年度調査報告書』（財）千葉市文化財調査協会

長原　亘他　2002　『千葉市生実城跡－昭和63年度・平成３～６年度調査－』（財）千葉市文化財調査協会

藤本　剛　2003　「『日本霊異記』における仏教施設と在地仏教」『史学』第72巻第１号

山下亮介他　1996　『土気南遺跡群Ⅷ』（葭山遺跡）財団法人千葉市文化財調査協会

写　真　図　版

遺跡周辺の航空写真（西から）

調査区　航空写真（西南から）

図版２

全景①（南から）

全景②（南西から）

１号住居跡

２号住居跡

１号竪穴状遺構

１号竪穴状遺構　遺物出土状況①

１号竪穴状遺構　遺物出土状況（上部）②

１号竪穴状遺構　遺物出土状況（下部）③

２号竪穴状遺構

２号竪穴状遺構　遺物出土状況

３号竪穴状遺構

３号竪穴状遺構　遺物出土状況

１号土壙

２号土壙

２号土壙　遺物出土状況①

２号土壙　遺物出土状況②

図版４

３号住居跡

３号住居跡カマド

３号住居跡　遺物出土状況①

３号住居跡・カマド　遺物出土状況①

３号住居跡・カマド　遺物出土状況②

３号住居跡・カマド　遺物出土状況③

３号住居跡・カマド　遺物出土状況④

３号住居跡・カマド周辺　遺物出土状況⑤

４号住居跡

４号住居跡カマド

５号住居跡

５号住居跡カマド

５号住居跡作業風景

６号住居跡

６号住居跡カマド

７号住居跡

図版６

７号住居跡　遺物出土状況①

７号住居跡　遺物出土状況②

７号住居跡　遺物出土状況③

７号住居跡（貯蔵穴）遺物出土状況④

７号住居跡（柱穴４）遺物出土状況⑤

８号住居跡

９号住居跡

10号住居跡

11号住居跡

11号住居内旧住居壁溝

11号住居跡カマド

12号住居跡

１号溝状遺構・12住居跡・8・8′住居跡土層図

12号住居跡カマド

12号住居跡　遺物出土状況

13号住居跡

図版８

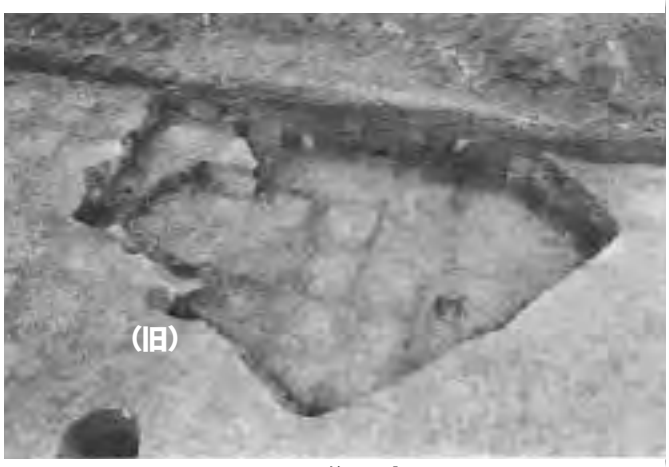
13号住居跡カマド

13号住居跡　遺物出土状況

14号住居跡

14号住居跡カマド

15号住居跡　遺物出土状況



16号住居跡

16号住居跡カマド

16号住居跡旧カマド

16号住居跡　遺物出土状況

17号住居跡

18号住居跡

19号住居跡

19号住居跡カマド

20号住居跡

21号住居跡

21号住居跡カマド

図版10

22号住居跡

22号住居跡カマド

１号掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡

３号掘立柱建物跡

柵列・３号掘立柱建物跡

４号掘立柱建物跡

５号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡

7・8号掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡

10号掘立柱建物跡

11号掘立柱建物跡

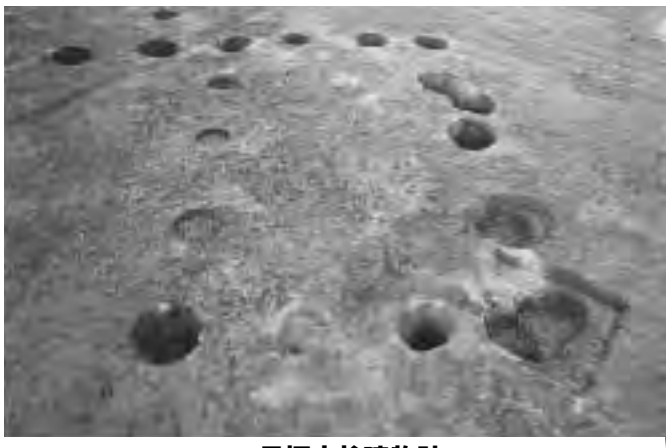
12号掘立柱建物跡

13号掘立柱建物跡

14号掘立柱建物跡

図版12

16号掘立柱建物跡



17号掘立柱建物跡

18号掘立柱建物跡

15号掘立柱建物跡

調査区　航空写真（北から）

15号掘立柱建物跡　柱穴セクション（a-a′）

同　（b-b′）

同　（c-c′）

同　（d-d′）

同　（e-e′の東端）

同　（e-e′の中央部）

同　（e-e′の西端）

同　（f-f′）

図版14

15号掘立柱建物跡　柱穴セクション　（g-g′）

同　（h-h′）

同　（i-i′）

同　（K-K′）

同　（L-L′）

同　（N-N′）

同　（P-P′）

同　（Q-Q′）

15号掘立柱建物跡　柱穴セクション（O-O′）

同　（O-O′の東半分）

同　（O-O′の西半分）

同　（R-R′）

同　（A-A′の南半分）

同　（A-A′）

同　（F-F′）

20号掘立柱建物跡

図版16

20号掘立柱建物跡　柱穴セクション　（I-I′のP5）

同　（I-I′のP4）

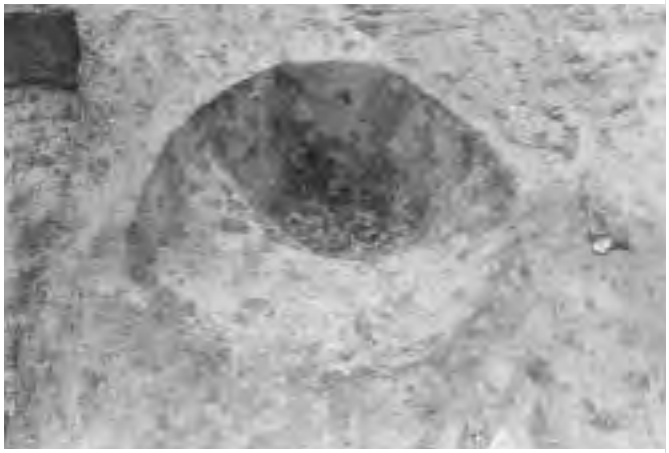
１号土坑

２号土坑

３号土坑

４号土坑

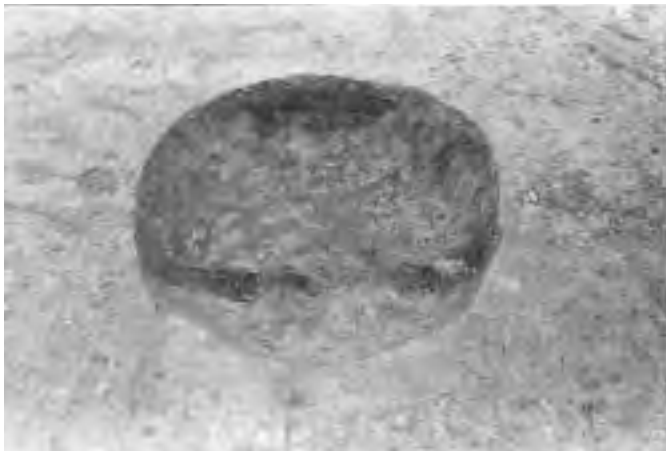
５号土坑



６号土坑

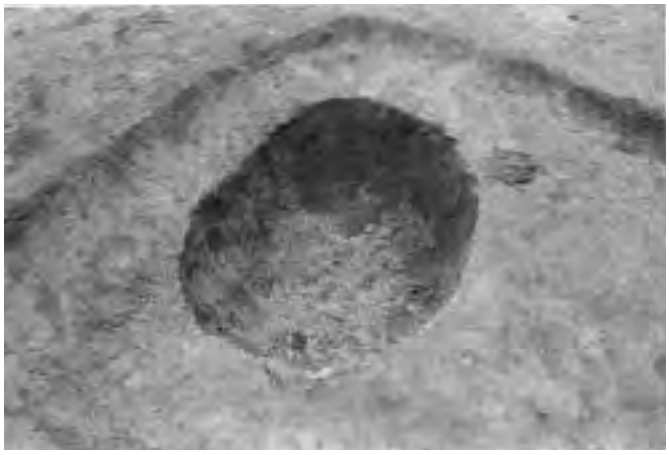
7号土坑

8号土坑



9号土坑

10号土坑



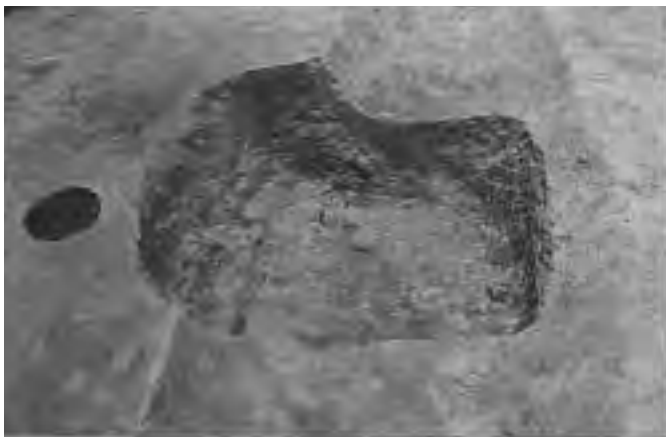
11号土坑

12・13号土坑

14号土坑

15号土坑

図版18



16号土坑

17号土坑

18号土坑

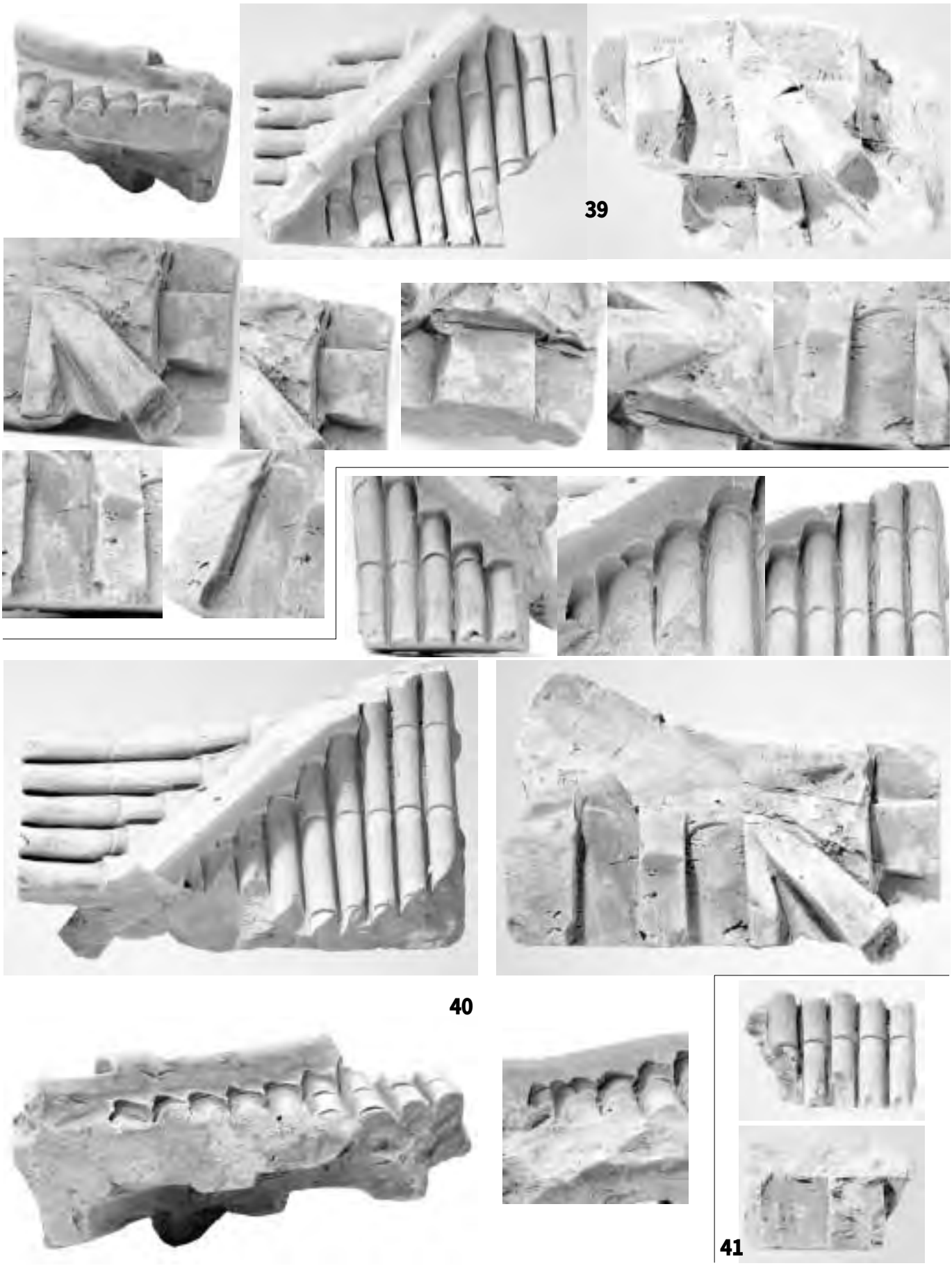
１号溝状遺構

１号溝状遺構・柱穴群

３～５号溝状遺構①

３～５号溝状遺構②

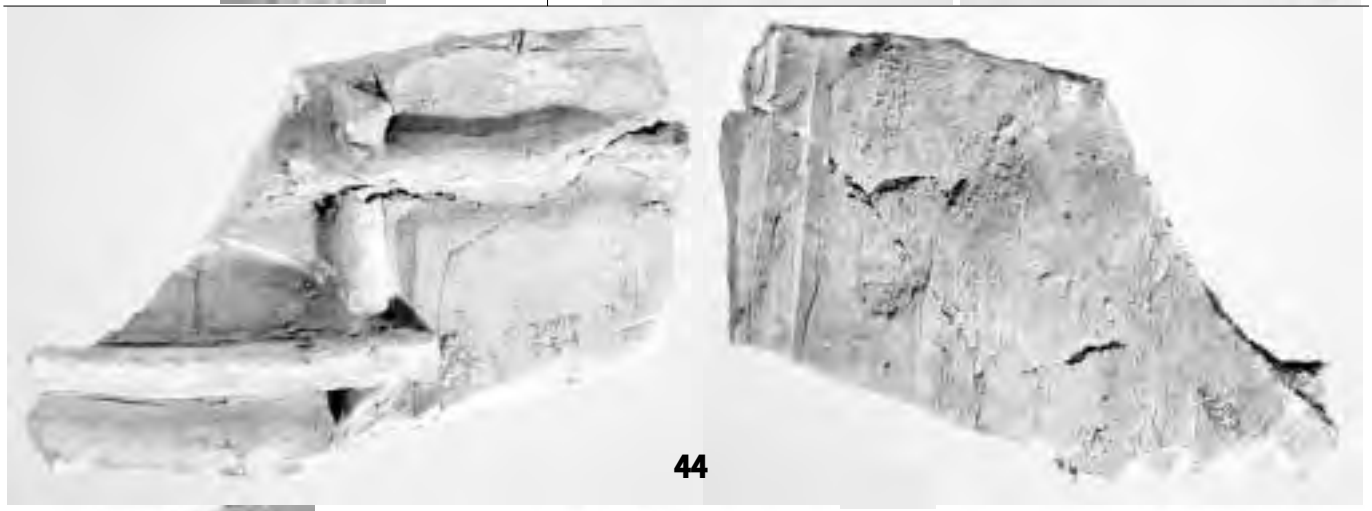
貝充填柱穴


39
40
41

図版20

43

42



44

46

45

50

51

52

55

53

54

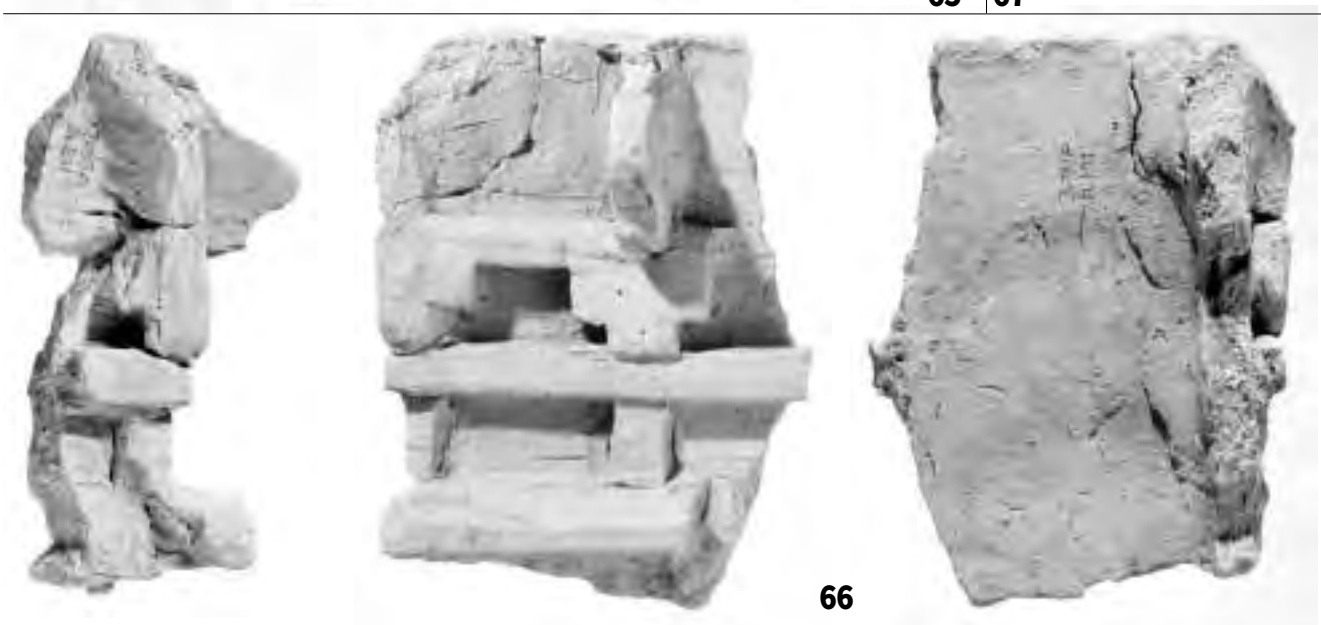
図版22

63

64

65

67


66

68

69

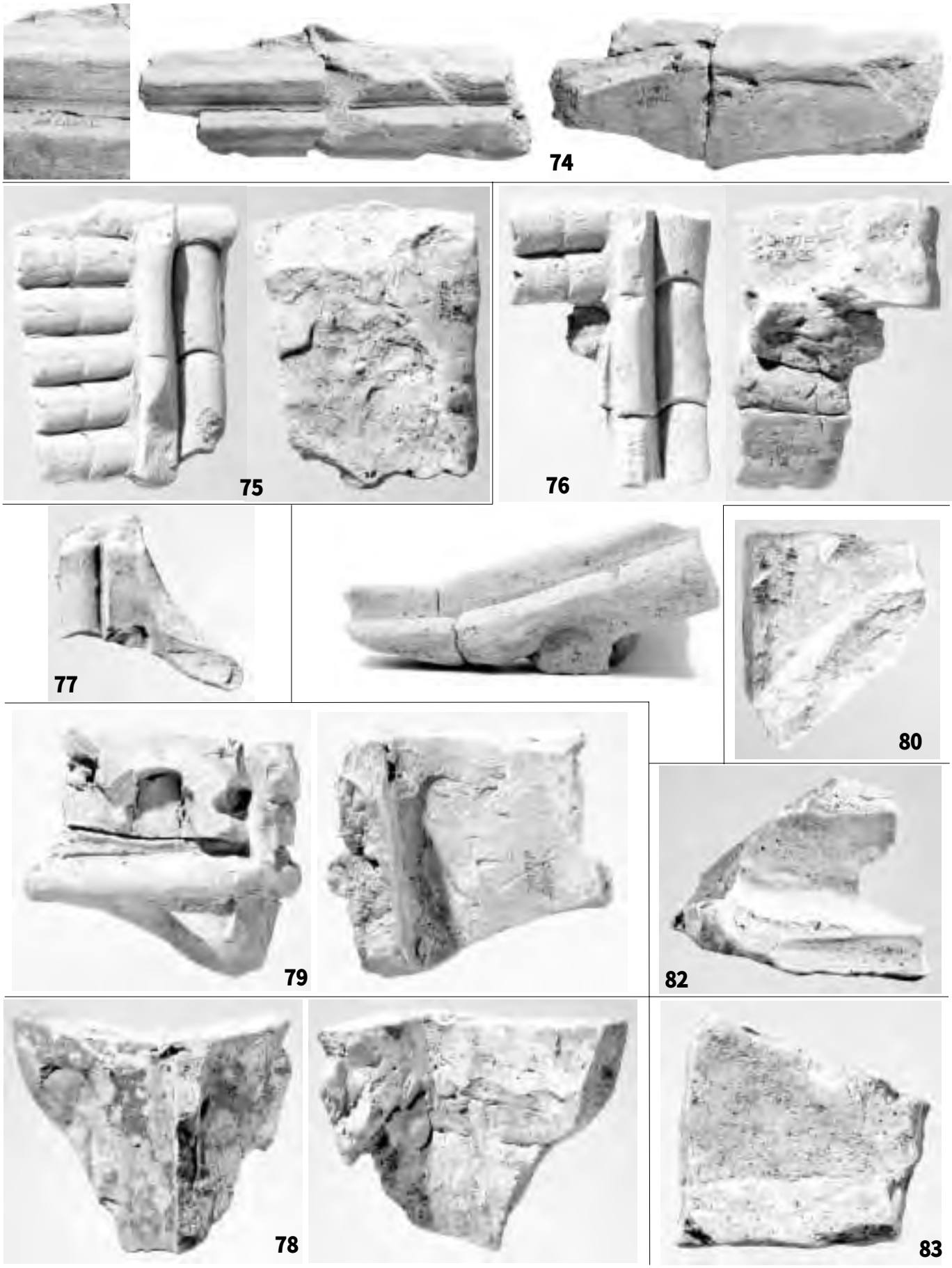
70

71

72

73

図版24



1

7

8

9

6

14

15

16

2

3

4

5

17

10

11

12

3住

13

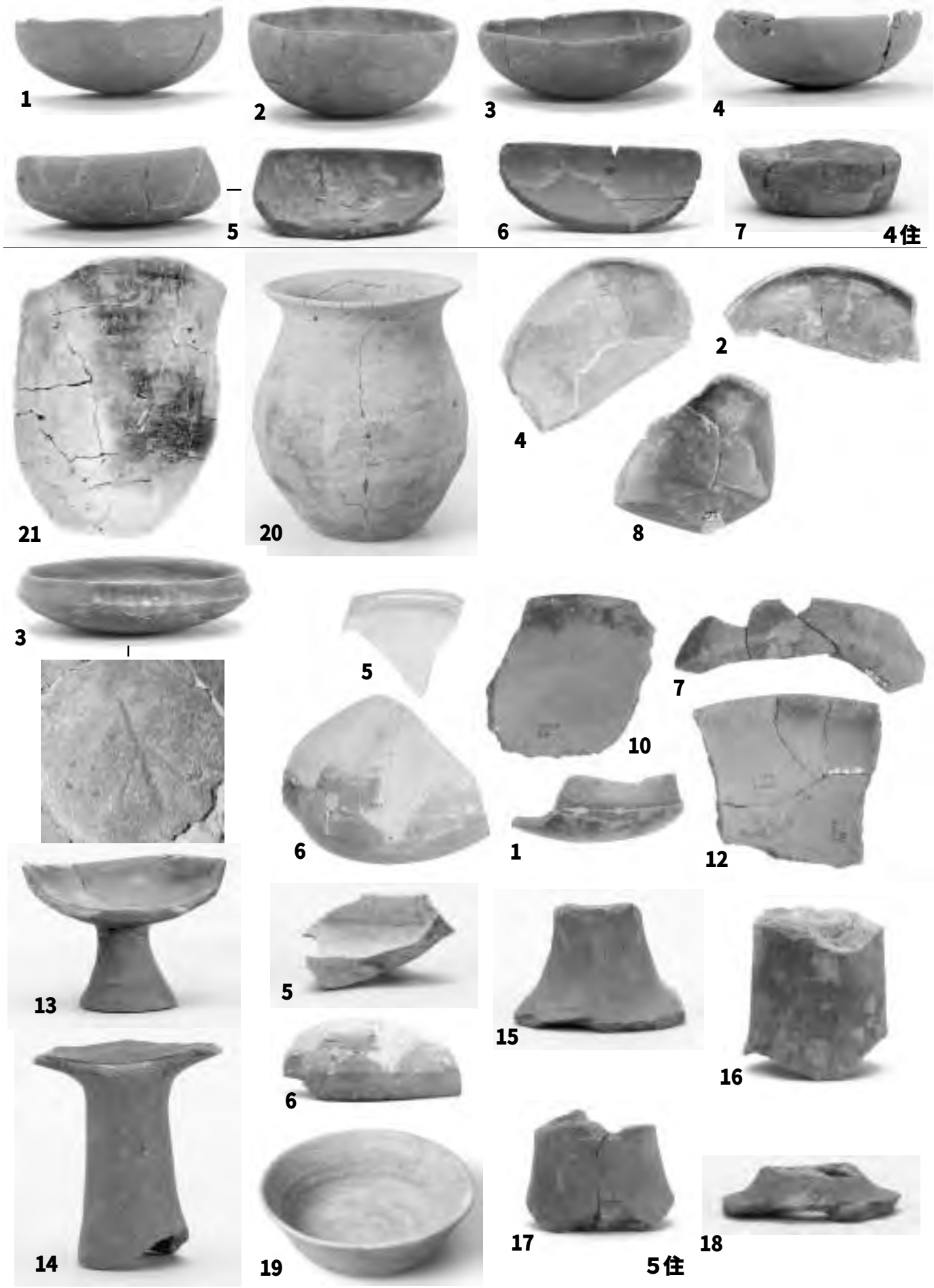
8

10

7

4住

図版26

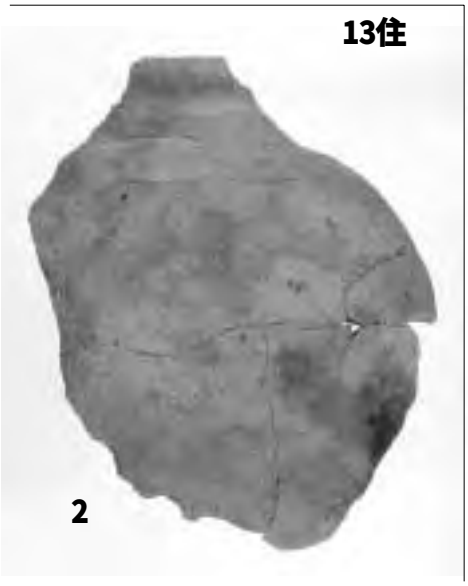


9住

図版28

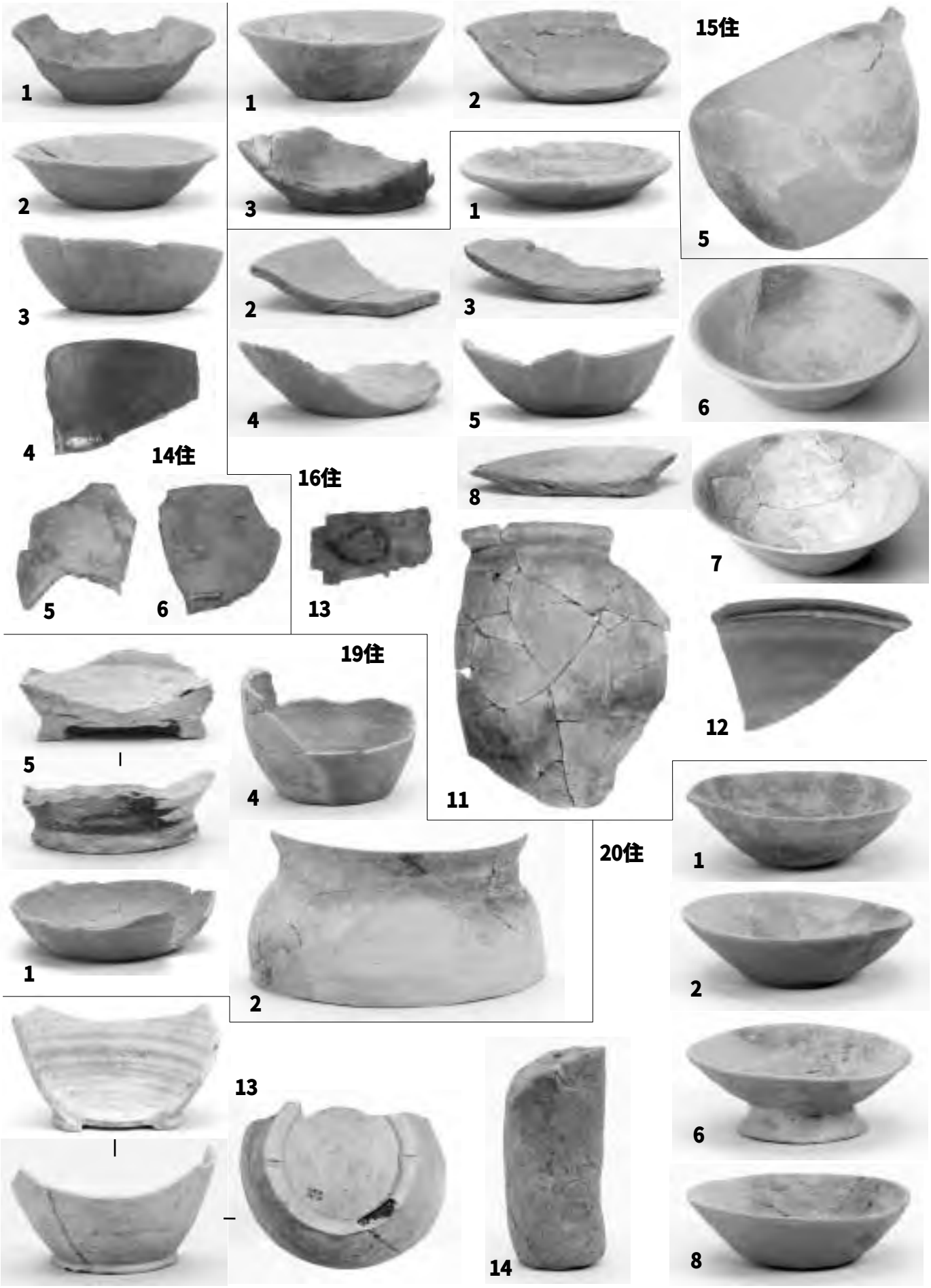
10住

13住

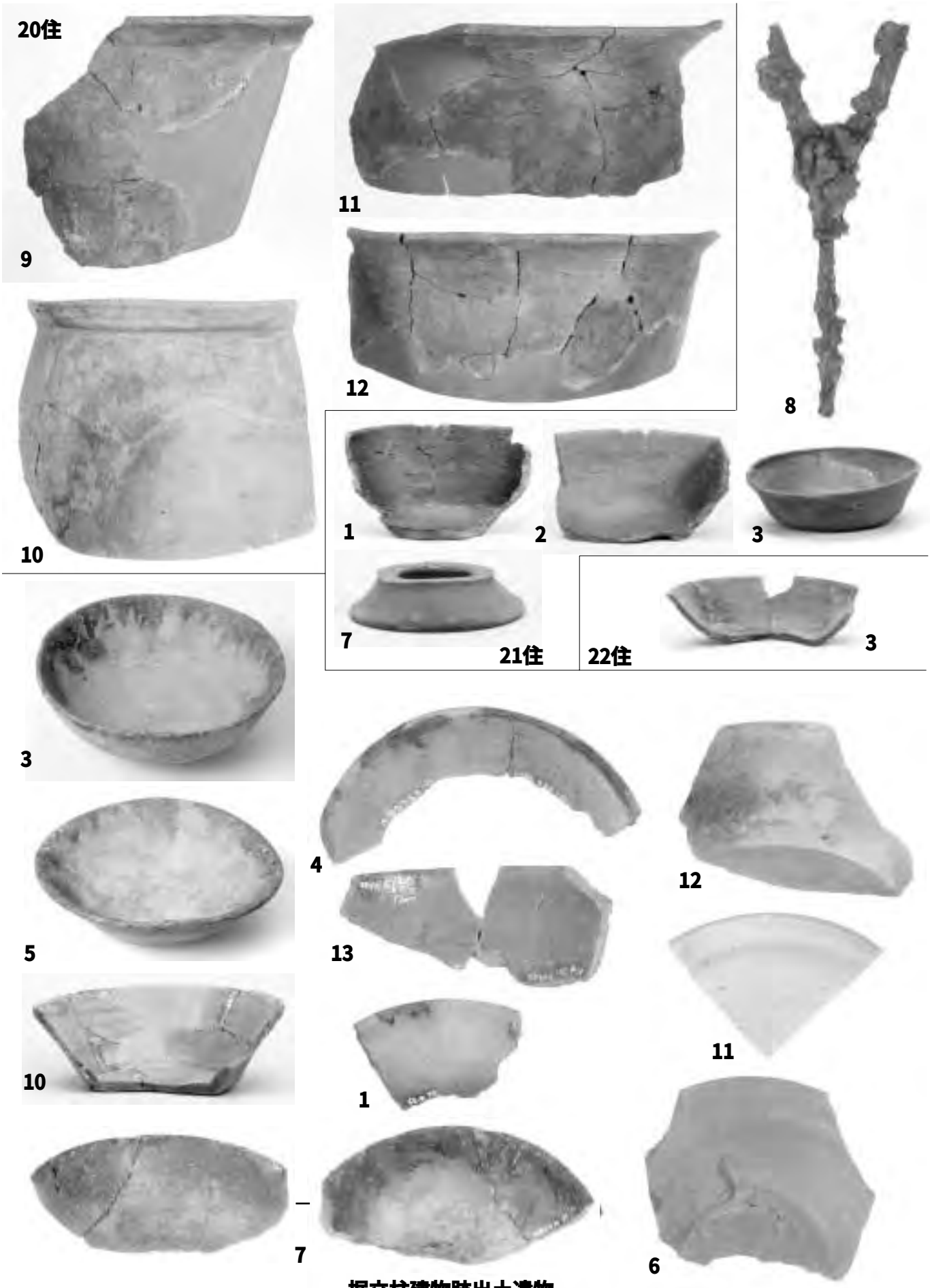


11住

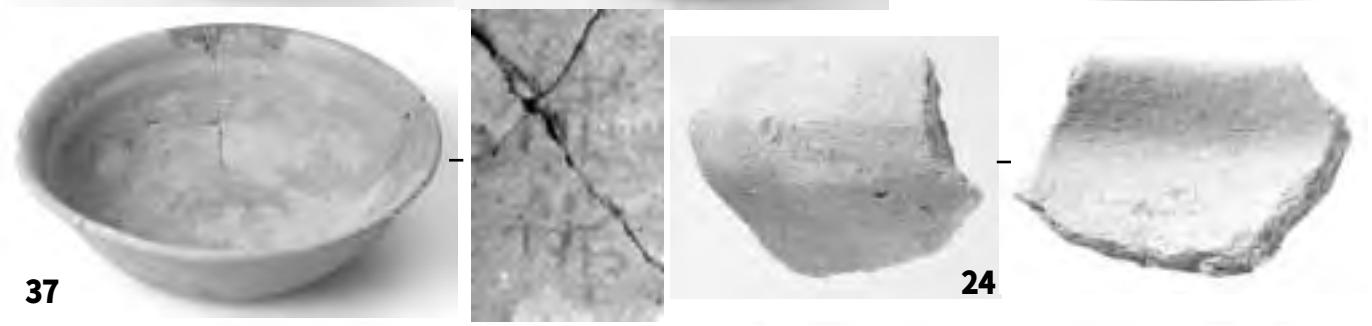
12住

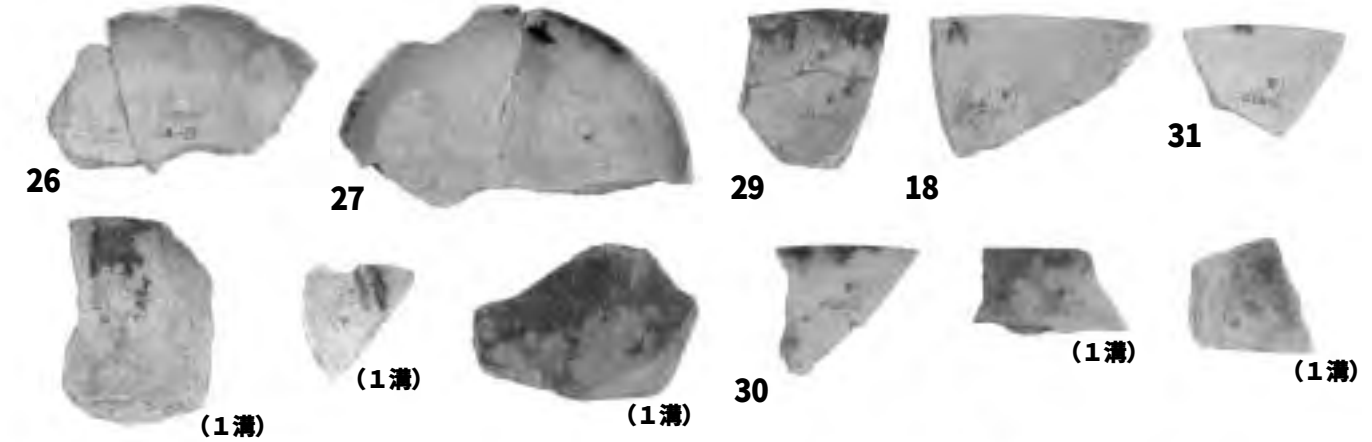

1
2
3
4
14住
5
6
16住
1
2
3
4
5
13
15住
1
2
3
5
6
7
8
11
12
19住
5
4
1
2
20住
1
2
6
8
13
14

図版30



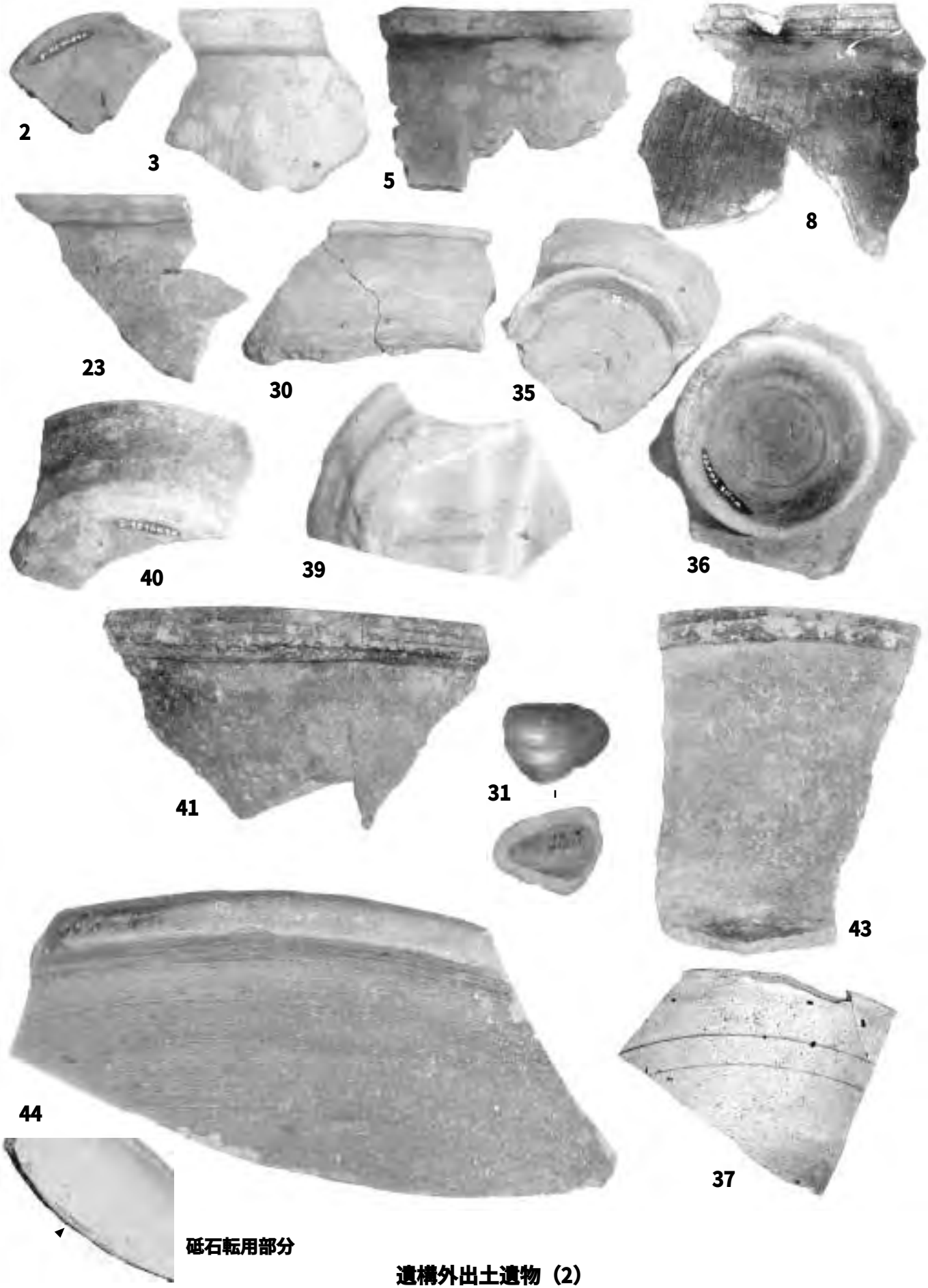
掘立柱建物跡出土遺物



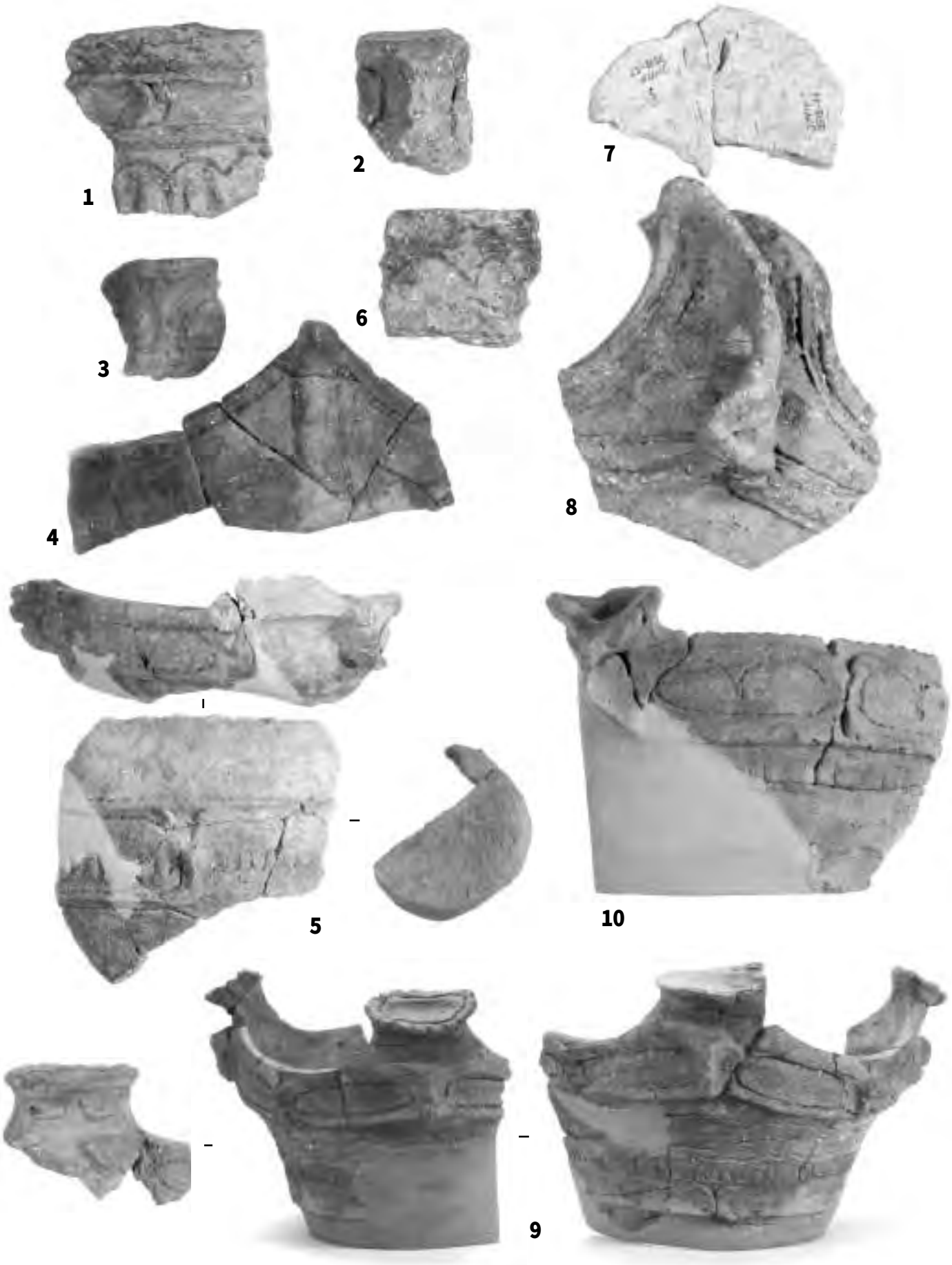


溝状遺構出土遺物

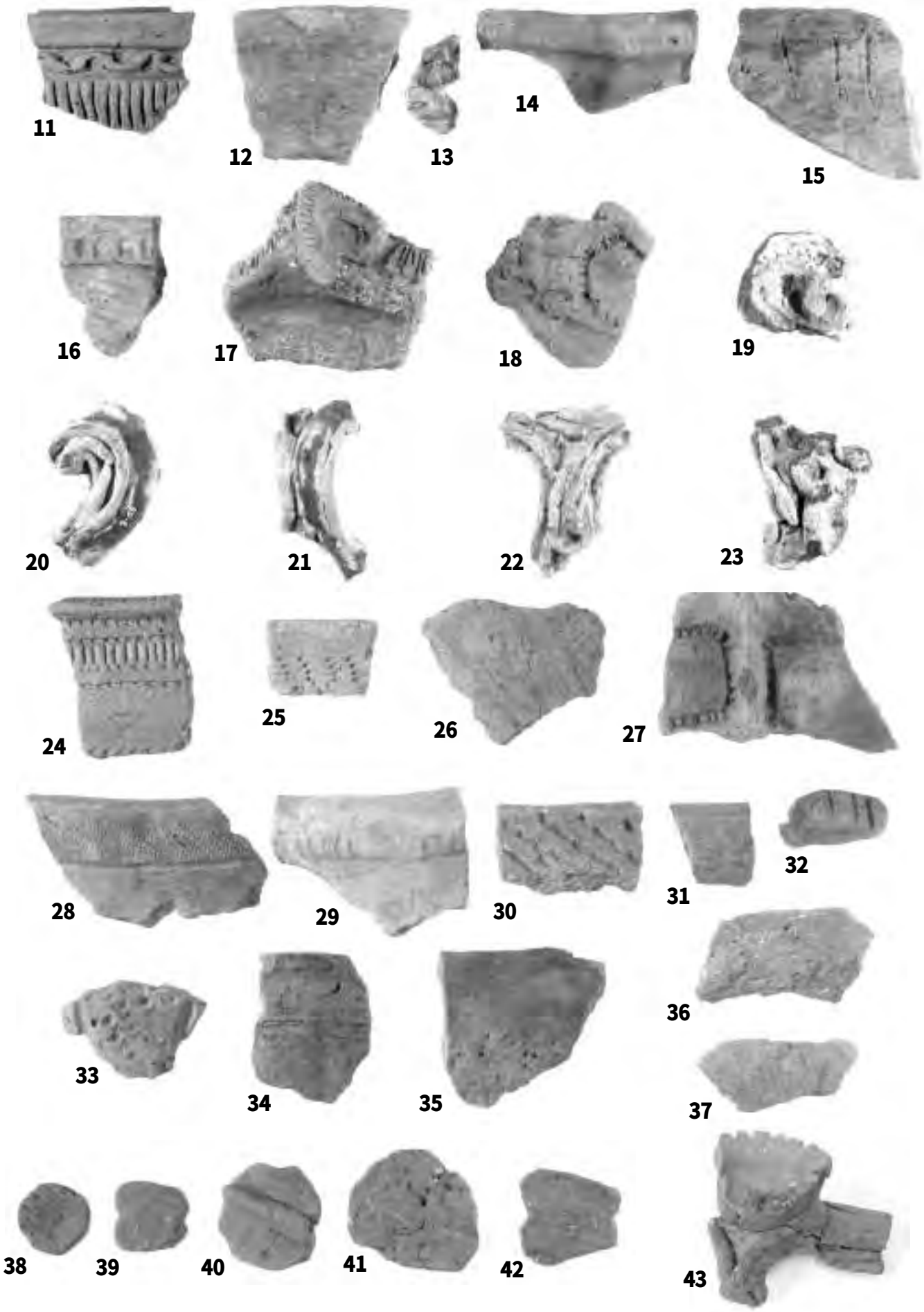
遺構外出土遺物（1）



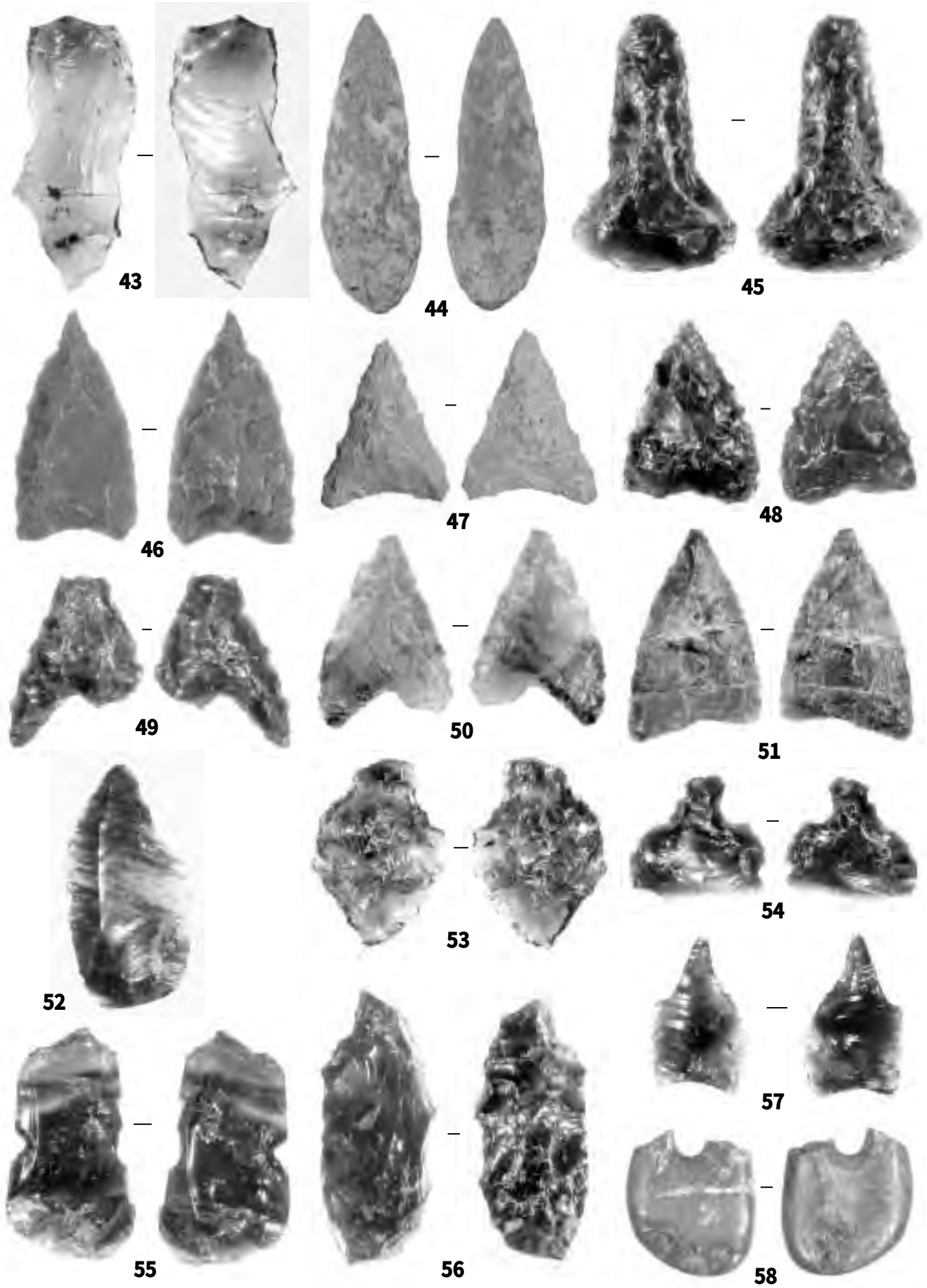
遺構外出土遺物（2）



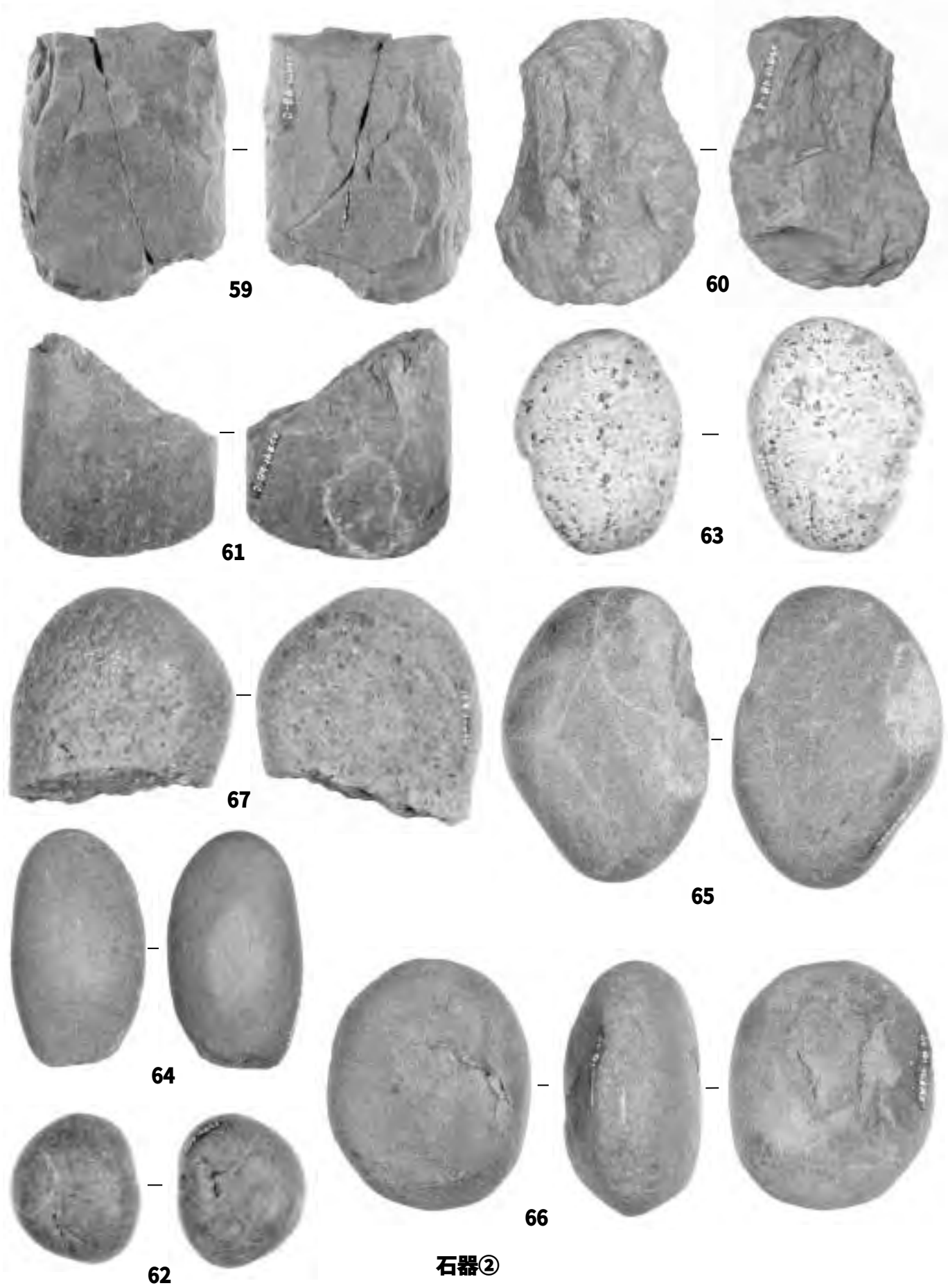
縄文時代遺物①［土器］


11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

縄文時代遺物②［土器］



石器①



石器②

報告書抄録

ふ り が な	ちばし　こしかわといせき
書　　名	千葉市　越川戸遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	長原　亘
編 集 機 関	財団法人　千葉市教育振興財団　埋蔵文化財センター
所　在　地	〒260-0814　千葉市中央区南生実1210　TEL 043-266-5433
発行年月日	西暦2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		経緯度		調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
越川戸遺跡（こしかわとい せき）	千葉市緑区（ちばしみどりく） 平山町1584番地（ひらやまちょう）	12104	緑76	35° 34′ 21″	140° 11′ 03″	20020401～ 20020626	4,900㎡	市による斎園建設事業に関わる運動場整備に伴う発掘調査
				（旧座標系）				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
越川戸遺跡	集落跡	旧石器時代			スクレーパー	
		縄文時代(中～後期)	竪穴住居跡	２軒	縄文土器	阿玉台式期の遺物・遺構がややまとまって出土。
			竪穴状遺構	３基	石鏃・石匙・掻器	
			土壙	２基	尖頭器・尖頭掻器	
					石錐・打製石斧	
					磨製石斧・石製垂飾	
					敲石・磨石	
		古墳時代（後期）	竪穴住居跡	５軒	土師器・須恵器	
					鉄製品・土製品	
		奈良時代	竪穴住居跡	２軒	土師器・須恵器	仏教関連遺物（瓦塔・瓦堂・鉄鉢形土器・灯明皿・「佛佛」墨書土器など）が出土。 15・20号掘立柱建物跡を中心に、集落内に古代仏教に関係する施設が多く検出された。
		平安時代	竪穴住居跡	12軒	灰釉陶器・鉄製品	
			土坑	２基	土製品	
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡	20棟		
			土坑	４基		
			溝状遺構	３条		
			貝埋振填柱穴	３基		
		近世	土坑	３基		
		時期不明	土坑	10基		
			溝状遺構	３条		

千葉市越川戸遺跡
平成16年３月31日発行

編集・発行　千葉市教育委員会
千葉市中央区問屋町１－３５
財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町１２１０
TEL　０４３－２６６－５４３３
印　　刷　株式会社太陽堂印刷所
千葉市中央区末広１－４－２６
TEL　０４３－２２２－１１２２